

---

# NecRomance 2

しらの こう

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

N e c R o m a n c e 2

### 【Nコード】

N 9 3 7 0 L

### 【作者名】

しらの こう

### 【あらすじ】

夏休み、如月イズミは自身の秘密を知り、一人の死せる少女と出会った。

少女の名はダーシエンカ・オルリック。

少年と少女は互いが互いの為に戦い、その身に迫った危機を退けた。

柵を断ち切り、平穏な生活を取り戻したはずだった。

しかし柵とは生きていく上で生まれるもの。

今二人に、新たな柵がまわりつこうとしていた……。

その柵は、二人を強く、深く、結びつける……。

※※※

読んでくださる方は一作目から読んでいただけると助かります。  
というか、二作目から入るとほとんど内容がわかりません（汗）

## プロローグ

如月幸也は薄暗い森の中を駆けていた。

頼りになる光は、鬱蒼と生い茂る木々の間から差し込む月明かりしかない。だがそれは常人にとつての話だ。

幸也は足元もおぼつかないような森の中を、全力で駆けている。なんてことはない。幸也には視えているのだから。

「ちっ！ 相変わらずしつこいな、婆さん」

幸也は足を止め、眼前にそびえ立つ大樹を見上げた。

樹齢六百年はあろうかという巨大な檜の木。およそ人がいるとは思えないほどの高さに、

幸也は視線を注ぎ続ける。

人影など見当たらない。それでも、幸也は確かに人の存在を察知していた。

自身のエーテルを振りまき、周囲の状況を把握するという方法で。「婆さん、いい加減見逃してくれないかな。僕も暇じゃないんだよ、明日も“表”の仕事が入ってるし」

幸也は肩をすくめながら、大樹に向かって苦笑する。

「フン、見逃せるはずもなからう。貴様はネクロマンサーに情けをかけるという禁を犯した。よって極刑……いいや、違うか。私はハナからお前が気に食わん。だから殺す」

大樹の上から声が響く。婆さん、といわれた割にその声は凜としており、みずみずしいものだった。

「……はあ。僕は何度婆さんに殺されればいいんでしょうかね？」

まあ、いいや。ヴェルナルごときの戦闘じゃ、フラストレーションしか生まれなかったからね。お相手しましょう、アクロマ機関

“総帥”様」

幸也はニヤリと笑い、恭しく頭を下げた。

「相変わらず殺しても殺し足りんヤツだ」

総帥と呼ばれた者の憎々しげな声と同時に、周囲に無数の光弾が出現する。

「穿て！ 聖なる弾丸！」  
ホーリーバレット

総帥は声を張り上げる。その叫びに、眠っていた鳥たちが木々からバタバタと音を立てて飛び立った。

そのざわめきとともに、周囲に浮かんでいた光弾が一斉に幸也めがけて飛来する。

幸也は数を数えるのすら憚られる光弾に溜息を洩らすと、キツと表情を引き締め、声を上げた。

「来たれ！ 聖騎士！」  
パラディン

幸也が叫ぶと同時に、光弾が幸也に全方向から着弾する。

爆音が鳴り響き、砂埃が巻き起こった。

「フン、やはりこれくらいでは殺せぬか」

退屈そうな総帥の声が闇に響く。

「当然」

続いて、幸也の声。

涼やかな風が吹き、立ち込めた砂埃をかき消していく。

砂埃が消えるとそこには、幸也が立っていた。先ほどと変わらぬ位置、変わらぬ姿勢で。

だが決定的に違うのは、幸也の周りの地面が綺麗に抉り取られているということ。そして何より、幸也の横に、巨大な楯を両腕に携えた光輝く騎士が立っているということ。

「召喚術とは小生意気な」

総帥の楽しげな声が木々のざわめきとともに響いた。

「なに、ほんの手すさびですよ」

幸也は微笑する。

このやり取りを他の魔術師が聞いていたら腰を抜かすだろう。酷い場合は気を失うかもしれない。

それほどまでに、二人の応酬は凄絶だった。その軽薄な会話とはまるで釣り合わないほどに。

それでも。

「……馬鹿みたい」

暗闇には緊張感のない第三の声が響いた。

声の元には、幸也と総帥のやり取りを少し離れたところから眺めている雪の姿があった。

雪は退屈そうに溜息を吐きだし、近くにあった木に寄り掛かる。

再び森に爆音が響き始めるが、雪は気にも留めなかった。

「だいたい、なんであの二人はいい歳して恥ずかしげもなく技名みたいなのを叫ぶんですか。イメージの補強が必要なほどレベルの低い魔術師じゃあるまいし。しかも叫ぶたびに技名違うし……」

顔をしかめながら、雪はブツブツと呟き始める。

呟き続ける間に、何十回爆音が響き渡ったことか。

「おい、雪。終わったぞ？」

ブツブツとつぶやき続ける雪を、自分の世界から引きずり出すかのように、声が上がった。

雪は呟きを止め、間近に迫った声の主を目に留める。

「ああ、終わりましたか。それで、主人はどうになりましたか？」

総帥”」

雪は姿勢を正し、声の主——総帥に向き直る。

そこには、ゆるくウェーブの掛った金髪を風に揺らす、年のころは十代前半ばかりの少女が立っていた。

月明かりに照らされる少女の肌は透き通りそうなほどで、名工の白磁もさもありなん、という様相をなしていた。

「ああ、あっちで死んでるよ。“いつも通り”ね」

そんな儚げにも見える少女——総帥は悪びれる様子もなく雪に告げる。

「……まあ、そうでしょうね。それで総帥、私も殺しますか？ 禁を犯したのは私も一緒ですが」

「なにを言ってるんだ、雪。私はアイツが気に食わないから殺したんだよ？ なんて愛する雪を殺さなきゃいけないのかね」

総帥は可笑しそうに口元をおさえ、クスクスと笑う。

「ありがとうございます。で、どうなされるおつもりですか？ イズミのこと」

雪は一抹の不安を込めた表情で総帥を見つめる。

「うーん、正直な話、捨ておいても構わないのだけれど……雪の子供ならこの目で確かめてみたいしな……そうだね、私が直接再審判してこよう」

総帥は人差し指を顎にあて、考え込むようなそぶりを取る。本当に素振りだけで、実際は答えを用意していたのだろう。そんな表情だった。

「そう、ですか」

総帥の言葉を受け、雪の表情があからさまに曇る。

「まあまあ、そんなに心配しないで。雪の子供なんだから私だって甘く見ちゃうかもよ？」

総帥は雪の顔を覗き込みながらクスクスと笑い、踵を返した。

そして数歩進んだところでフイと立ち止まり、振り返る。

「まあ、もつとも？ 父親似だったら即殺だけどね」

総帥は言葉とは裏腹に快活な笑みを向けると、暗闇の中に消えていった。

「……そっくりですよ。びっくりするぐらい。優しい所なんか特に、ね」

雪は総帥が消えていった方向に切なげな視線を投げかけ、呟いた。

## 第1章 物語の始まりは、転校生とともに

夏休み明け。登校初日。二期の開始を告げるホームルーム。

これだけのキーワードが並べば、いやがおうにも学生の心は沈むはずだ。マリアナ海溝並に。

だというのに、夏休み明け、登校初日、二期の開始を告げるホームルームの時間。

私立神代学園高等学校、一年六組の教室は俄かに活気づいていた。それもこれも。

「はじめましての人も、夏期講習のときに知り合いになった人も、これからよろしく願います」

黒板の前でぺこりと頭を下げた亜麻色の髪の少女――ダーシエンカ・オルリックが巻き起こした現象だった。

ダーシエンカは夏休みとは異なり、きちんと神代学園の制服に身を包んでいる。

教室の一席からその美しい少女の姿を眺めていた少年――如月イズミは複雑な面持ちだった。

頭をあげてこちらを見たダーシエンカと視線を絡ませたイズミは、咄嗟にぎこちない笑みを浮かべる。

「それじゃあダーシエンカさんは一番後ろ、如月くんの後ろの席に座って下さい」

担任の教師が、ダーシエンカに空いている一席を指し示す。

その指示に従い、クラス中から向けられる視線を気に留める様子もなく、ダーシエンカは自分の席に腰をおろした。

「あの人だろ？ お前らが言ってた美少女って」

「チクショー、こんなことなら俺も夏期講習に出れば良かった！」

「如月君と一緒に暮らしてるんでしょ？ すごいよね、それって」

「なんつーか、如月を、殺したい。ものっそい殺したい」



教室中から漏れ聞こえるクラスメイト達の言葉に、イズミは溜息とともに肩を落とす。

もつとも、そのほとんどのセリフは夏期講習に参加していなかった生徒たちから漏らされているもので、参加していた生徒たちは落ち着いていた。

付け加えるならば、口々に吐かれたイズミへの物騒な発言や羨むような発言も夏期講習組から数えれば二度目なので、精神的ショックは幾分かマシだった。

それでもイズミの心労は絶えない。

約一名を除いたクラスメイト達は知らないのだ。

イズミとダーシェンカが両親のいない家で二人きりで暮らしている、ということは。

そんなことを知られた日には、騒ぎは今の比ではないだろう。

それを知っている約一名には、きっちり釘を刺しておいたから大丈夫だろう、たぶん。

そんなことを考えながら、イズミは約一名に視線を向けた。

視線を向けるとその約一名と視線がぶつかった。絡み合う視線の先にはイズミの、腐れ縁とも言い換えられる親友――佐倉朋和の姿があった。佐倉は日に焼けた顔に含みのある笑みを浮かべ、それをイズミに向けている。

（絶対に、ロクでもないことを考えてる……）

佐倉の表情を見たイズミは、げんなりと肩を落とした。

「どうしたんだ？ 浮かない顔して」

「あ、いや、大丈夫だよ。ちょっと考え事してただけだから」

背後から掛けられたダーシェンカの声に振り返り、イズミは苦笑する。

ダーシェンカは首を傾げながらも「なら、いいのだが」と引き下がった。

そうこうしているうちにホームルームは終わり、ダーシェンカの

周りにはあつという間に女子の人ばかりが出来ていた。

夏期講習中にダーシエンカと面識をもったクラスメイトを紹介することで、より一層近づきやすくなっているのだろう。イズミの気のせいでなければ他のクラスの人も混じっていた。

本当ならすぐさまこの居心地の悪い場を離れたいイズミではあったが、ダーシエンカのことがなんとなく心配で、席に着いたままボンヤリとしていた。自分が後ろで繰り広げられる会話に巻き込まれないことを祈りつつ。

「よう、イズミ。さすがだな、ダーシエンカちゃんは」

ダーシエンカの周りにできた人だかりに苦笑を浮かべながら、佐倉がイズミに歩み寄る。

「まあ、夏期講習というワンクッションを経てもコレと考えると……恐ろしいね」

「だよな。そんなことより、だ」

佐倉はニヤリと笑い、イズミの首にがっしりと腕を回す。

「今朝学校に来る途中にはきちんと聞けなかったがよ……どうなんだよ？ お前とダーシエンカちゃんの関係は」

佐倉から浴びせられた、半ば以上予想していた質問に、イズミは深い溜息を吐きだした。

「どうもこうもないよ。というか何を言おうが信じる気、無いんだろ？」

呆れたような視線を向けるイズミに気分を害した様子もなく、佐倉は力強く「うむ」と頷いていた。

「ダーシエンカちゃんのお前に対する態度はどこかしら別格だからな。特別な関係じゃない、そう考える方がおかしい」

佐倉はイズミに回していた腕を解き、組み直すとしきりに頷いた。そんな佐倉にイズミは乾いた笑いを返すことしか出来なかった。イズミとダーシエンカが特別な関係、というのはあながちどころか、全く嘘ではないのだから。

比喩でも何でもなく、本当に、魂で結ばれた関係。

もっとも、それが世間一般でいう恋人関係とイコールでないというのもまた事実なのだが。

イズミとダーシエンカの日常は、プロポーズ以上の約束を交わした夏祭りの以後も、それ以前とまったく代わり映えしなかった。

「ま、心配はいらんだろうが、一応気をつけろよ？　ダーシエンカちゃんに悪い虫が付かないように、さ」

佐倉はイズミの耳元でいやらしい笑みを浮かべながら囁き、自分の席に戻っていった。

佐倉が席に着くと同時に始業を告げるチャイムが鳴り響く。

「……相変わらず妙なことだけ律儀なヤツ」

イズミはチャイム着席を守る佐倉に視線をやりながら、一限目で使う数学の教科書を机から引っ張り出した。

ダーシエンカの正式な生徒としての登校初日は何事もなく終了した。ダーシエンカを一目見ようとクラスに押し寄せていた者達も昼休み前にはほとんどいなくなり、午後は落ち着いて生活できた。

そして放課後。イズミ達は何故か神代学園の中等部にやってきていた。

神代学園は一つの敷地に中学・高校・大学の校舎が併設されており、そのどれかに属していれば校舎間の行き来は比較的自由だった。もっとも、行き来するような人間は教師以外には滅多にいないのだが。

それでもイズミは佐倉に連れられ、中等部の中庭にやってきた。気のせいではなければ、イズミ達の他にも高等部の連中がいる。

ここで何かイベントでもあるのだろうか。

そんな考えがイズミの頭をよぎった。

「……なあ、佐倉。なんで中等部に來てるんだ？　僕ら」

イズミは横に並ぶ佐倉に怪訝な視線を浴びせる。

ダーシエンカも、イズミの隣から不思議そうな視線を佐倉に向けていた。

そんな視線を軽いため息で受け流した佐倉は、肩をすくめる。

「いやね、どうやら中等部にも美少女転校生がいるらしくて、その見物に、な」

「……馬鹿じゃないの？　そういうことなら僕たちは帰る」

イズミは佐倉にありったけのジト目をぶつけ、踵を返そうとした。そのイズミの腕を、佐倉ががっしりと掴む。

「なんだよ？　見物ならひとりで、」

「そんな恥ずかしいマネできるか！」

「恥ずかしいという自覚があるなら今すぐその行為を辞めるべきだと進言させてもらおうよ、

友として」

すがりつく佐倉に、イズミは摂氏零度の視線を容赦なく浴びせる。「いや、その、なんか並はずれて美人らしいので、一度はそのご尊顔を御拝見したいと思ひまして、その、つまりなんだ」

佐倉が何か言いかけたそのとき、中庭がザワついた。

叫び声などがあがることこそないが、中庭に集っていた者達の視線が、一か所に集中しているのがハッキリと見てとれる。

あまたの視線が集まるその場所に、思わず視線を向けてしまったイズミは、息を呑んだ。

視線の終着点には、数人の女生徒がいた。ちょうど校舎から出てきたところらしく、周囲から向けられる視線に戸惑いながらも、楽しそうに談笑している。

その中に、間違いなくあれが件の美少女だ、という女生徒がいた。イズミはその女生徒に視線を向けたまま言葉を失った。

見惚れる、というのとは少し違う。どちらかと言えば面喰らったのだ。

美少女とは言っても、所詮は中学生。せいぜいどこぞのタレントに似ているとかの類だとタカを括っていた。

だが実物はまるで違う。余りに異質だった。何かの模造品の美しさなどではなく、その少女にしかないと思わせるような美しさがあ

った。

肩のあたりで切りそろえられた、緩くウェーブの掛った金色の髪。未踏の雪原のように白く透き通るような肌。そして、希代の人形師が作ったのではないかとさえ感じさせるほどに整った顔立ち。

何より印象深かったのは、深淵すらも感じさせるような、エメラルドグリーンの瞳だった。

「……大丈夫、か？」

呆然としているイズミに、ダーシエンカが遠慮がちに声をかける。

「え？ あ、うん。ちょっとびっくりしてただけだから」

「そうか。もう目的は達したのだから、帰らないか？ 私はお腹が減った」

「うん、そうだね。とっとと帰ろう……って？ 佐倉？」

イズミは自分の脇で自分以上に呆けている友の名を呼んだ。

それでもしばらく、佐倉が白昼夢から目醒めることはなかった。

そうこうしているうちに女生徒の一団はイズミ達の前を通り過ぎていく。

美少女にさして残心のなかったイズミは気付かなかったが、その美少女は確かにイズミに視線を向けていた。

＊ ＊ ＊

神代学園を抜けてすぐの街路には、学園の生徒達が行きかっていた。その中に、先ほどの女生徒の一団も見受けられた。

中庭のときと変わらず、楽しげに談笑している。

「先ほど中庭で見かけた高校生、綺麗な顔をしていましたね」  
人形のように整った顔を僅かに綻ばせながら、件の美少女は呟いた。

「ああ、高等部の。確かにあの人話題になってたわよね、夏休み中」  
周りにいた女生徒の一人が、思い出するような素振りを見せながら答える。

「ダーシェンカ、って名前らしいよ？ 夏休み中にクラスの男子が騒いでたから、馬鹿みたいに」

「ああ、そういえば。まあ、男子なんてみんなそんなもんなんじゃないの？ さっきだってクレアさんを見に高校生が集まってたじゃない。まったく、高校生にもなってみつともない」

自分の周りで始まった他愛のない世間話をクレアと呼ばれた少女は、はにかむような微笑を浮かべながら聞いていた。

「あの……私が綺麗な顔といったのはダーシェンカさんの横にいた男の先輩のことなんです」

クレアは頬を赤らめ、申し訳なさそうに肩を縮こまらせた。

「え？ ああ、確かに綺麗な顔した先輩がいたかも。私はダーシェンカ先輩のことしか見てなかったからはっきり覚えてないけど」

「たぶん、その人は如月先輩だね。何気に有名人なのよ。二つの理由で」

何やら情報通らしい女生徒が、得意げに語り出す。

その語られた内容を、クレアは相変わらず微笑を浮かべながら聞いていた。

「……すみません。私、こちらなので」

クレアは別れ道で立ち止まり、左の道を指さす。

「ああ、そうなんだ。じゃあクレアさん。また明日、学校でね」

女生徒たちは笑顔でクレアに手を振ると、もう一方の道へ進んでいった。

その様子を見届けたクレアは微笑をサッと消し、再び歩き始める。

そして周囲の者には聞こえないような声量で呟いた。

「……ま、私からしたら人間の大半が子供なんだがね。さて、雪の息子にどうやってちょっかいを仕掛けるか。ま、外見は雪似だったから合格として、はてさて中身はどうなのやら……」

クレアの顔には、その可愛らしさからは想像もつかないような冷笑が浮かんでいた。

＊ ＊ ＊

放心状態から抜けきらない佐倉と別れたイズミ達は、夕食の準備のために家からほど近いスーパーを訪れていた。

イズミがかごを片手に歩き、ダーシエンカがその横に並ぶ。それはイズミ達の何気ない習慣と化していた。

二人が並び歩く光景はスーパーの常連や店員には『可愛いらしい若夫婦』として通っていたのだが、イズミ達はそれを知らない。

「なあ、イズミ。もうちょっと肉買わないか？」

「もうちょっとって、五百グラムの牛肉片手に言うセリフじゃないと思うよ？ ゼツタイ」

切なげな視線を向けるダーシエンカに、イズミはため息交じりに苦笑する。

ダーシエンカはイズミの返答に口を尖らせながらも渋々と牛肉を棚に戻した。

「……まあ、今日はダーシエンカの登校祝いってことで、特別だよ？」

イズミは苦笑しながらもダーシエンカが戻した牛肉をかごに入れてやる。

「おお！ ありがとう、イズミ」

ダーシエンカは沈んでいた顔を輝かせ、イズミを見た。

そんなダーシエンカを「ハイハイ」と適当に受け流し、イズミは散策を再開する。

だがその実、ダーシエンカの笑顔にどうしようもなく安堵していた。

神社での一件のあと、二人の関係はどこかぎこちなかった。今まで通りに生活しながらも、こうして軽口をたたき合うようなこともなかった。

それでもなんとか感覚を掴み、このような雰囲気を取り戻した。軽口を叩き合うだけの、なんてことない、それでもイズミとダー

シェンカにとってはとても大切な、そんな雰囲気。

「当面の食料は確保したから、帰ろうか。ダーシェンカ、くれぐれも食べ過ぎるなよ？」

イズミは野菜やら肉やら飲料やらで重くなったかごを見やり、言う。

「わ、分かってるさ。でも……」

「でももへったくれも、」

「イズミが作る料理はおいしいのだから仕方ない」

ダーシェンカのその一言にイズミは口に出そうとした言葉を飲み込んだ。

そのまま無言でレジに向かう。胸中で「卑怯だ」と呟きながら。

「うん。やはりイズミの作る料理はおいしいな」

ダーシェンカは頬を綻ばせながらイズミに茶碗を突き出す。

夕食、四度目のおかわり。

イズミは呆れたように頭を振りながらも、その茶碗にごはんを大盛りによそってやる。

「まあ、作る側としては嬉しいことこの上ないんだけど……たまに、そんだけ食って大丈夫なのかと思うよ。ほんとにさ」

イズミはダーシェンカに茶碗を渡しながら苦笑う。

そんなイズミの前にはすでに食器はなく、湯気の立ち上る湯呑茶碗だけが置かれていた。

「私のことなら心配無用だぞ？ ……それより、イズミこそ大丈夫なのか？ 体の方は」

ダーシェンカは茶碗を置き、イズミを心配そうに見つめた。

「それだって心配いらないさ。体の痣は消えてないけど、押したってもう痛くないし。それに眼の方も可視領域を抑えてるから負担もないよ」

「なら……いいのだが」

「そう、いいんだよ。さ、分かったら早く食べて。食器片付けちゃ



いたいから」

イズミは微笑みながら言うと、湯吞をぐっと飲み干し、台所に向かった。

イズミは水を張ったタライに浸されたフライパンやら食器やらを見下ろし、腕をまくって洗い物を開始する。

まくられた腕にはいくつかの痣が残っていたが、ダーシエンカに告げた通り痛みはもう引いているので問題なかった。

それでも、その痣を見るたびにイズミは不安に駆られる。

もう一度襲われるんじゃないか、と。襲われることは恐ろしいのには恐ろしいのだが、心構えはある程度出来ている。

イズミの不安はむしろ、そのときにダーシエンカに負担を掛けずに済むだろうか、ということだった。

ダーシエンカが無茶をしてエーテルをすり減らそうが、何度だって蘇生させる覚悟がイズミにはある。

だがそれではダーシエンカの心に負担がかかる。

(やっぱり、もっと強くならなきゃな……ダーシエンカを守ってあげられるくらい)

イズミは何食わぬ顔で食器を洗いながら静かに、しかし力強く自分の中に誓いを立てた。

「イズミ、ごちそうさまでした」

「ああ、お粗末様でした」

いつの間にか背後にいたダーシエンカから食器を受け取り、イズミは受け取ったものをタライに入れて洗い始める。

ダーシエンカはそれを確認すると、リビングに向かって踵を返した。

「なあ、イズミ？」

数歩進んだ所でダーシエンカが不意に立ち止まる。

「ん、なに？」

「……いや、やっぱりなんでもない」

ダーシエンカはヒラヒラと手を振り、リビングに消えていった。

「……どうしたんだ？　いったい」

そんなダーシェンカの後ろ姿を見ながら、イズミは小さく首を傾げた。

翌朝、イズミが目を覚ましてまず思ったことは「これは夢なのだろうか」ということだった。

夢の中でこれは夢だと気付いていることを明晰夢というらしいが、きつとコレもそうなのだろう。そう思い、イズミは自分の頬を思い切りつねってみた。

「痛いっ！」

イズミの頬に激痛が走る。自分でつねっておいてなんだが、もっと優しくつねるべきだったと、イズミは激しく後悔した。

同時に思い知る。

この夢のような状況が夢ではない、と。

「んう？　どうしたというのだ？」

眠っていたダーシェンカがイズミの声に目をしばたかせながら身じろぐ。

ダーシェンカの顔は、イズミの真正面に位置していた。距離にして十数センチ程度しか離れていない。

「ぬぁ！？」

イズミはダーシェンカと目が合った瞬間に素っ頓狂な叫びをあげて跳ね起きた。

そしてすぐさま状況を確認する。

（そう、何事においても大切なのは状況把握だ。夏休み中に思い知ったじゃないか）

イズミは顔を赤らめながらも、周囲をゆっくりと見渡した。

なんてことはない。見慣れた自分の部屋だ。

自分の体はベッドの上にあり、ベッドのすぐ脇にはダーシェンカの蒲団が敷かれている。

男女が同じ部屋で寝るということは異常ではあったが、夏休みから

の習慣だからそこに問題はない。

問題があるとすれば。

「なんでダーシェンカが僕のベッドで寝てるのさ!？」

ベッド脇の蒲団で寝ているハズの、純白のネグリジェを纏った可愛らしい少女が、イズミのすぐ脇で寝ていたということだった。

「ん? ああ……すまない。寝惚けていたらしい」

ダーシェンカは気だるげに体を起こし、イズミに向き直る。

その顔がまたイズミの真正面に迫り、イズミは一層顔を赤らめた。寝起きのダーシェンカはまどろみから覚めきっていないらしく、そのとろんとした瞳はどことなく扇情的で、純朴な青少年には致死量の毒だった。

「と、とにかく仕度しようか。準備遅れると佐倉がうるさいし」

イズミはダーシェンカから目を逸らし、逃げるようにベッドを降りる。

「じゃあ僕は朝ごはんの準備するから、ダーシェンカは先に顔とか洗っちゃいなよ」

「……私が寝惚けるワケないだろ、馬鹿」

口早に言い切るなり部屋を出ていったイズミに唇を尖らせながら呟き、ダーシェンカは深いため息を一つ吐いて立ち上がる。

「私は……どうしたらいいんだろうな」

ダーシェンカは切なげに呟き、顔をピシャリと叩いた。

「とにかく、いつも通り振る舞えばいいんだ」

ダーシェンカはしきりに頷きながら自分に言い聞かせ、イズミの指示通りに洗面所に向かうことにした。

「はあ……まだドキドキしてるよ。ダーシェンカが寝惚けるなんて、今までなかったのになあ。こういうことがあるならやっぱり部屋を別々に……いや、でもやっぱり防御の観点から言ったら」

イズミはどこか上の空な様子でブツブツと呟きながら、朝食の準備に取り掛かっていた。

上の空のままでもいつも通りに目玉焼きを半熟で仕上げ、キュウリやトマトを無意識のままトッピングしていく。

その様は、習慣の恐ろしさと素晴らしさを同時に物語っていた。それをテーブルに並び終えたとき、ダーシエンカがリビングに入ってきた。

すっかり身支度を整えたらしいダーシエンカは、すでに制服に身を包んでいる。

「イズミ、私は待っているからお前も支度を済ませてしまえ」

ダーシエンカは言いながら席に着いた。

イズミは「そうさせてもらう」と頷き、支度に取り掛かる。

冷たい水で顔を洗い、気持を切り換えようと試みる。

しかし、頭の中から今朝のダーシエンカのとりんとした扇情的な瞳が消え去ることはなかった。

ボンヤリした思考のままイズミは支度を済ませ、朝食の席に着く。

「いただきます」

イズミが席に着くと同時に、ダーシエンカが待っていましたたとばかりに声を上げる。

イズミもそれに習い、朝食を口に運び続けた。

ダーシエンカが二杯完食する間にイズミはなんとか一杯を食い終わり、三杯目に進もうとするダーシエンカを押しとどめ、朝食を強制終了する。

朝食終了からしばらくしてやってきた佐倉とともに、イズミ達は学校に向かった。

通学路には神代学園の生徒や近隣の中学生などが行き来しており、賑やかだった。

「しっかしよう、恐ろしかったなあ、昨日の中学生の美しさときたら」

佐倉は昨日の光景を思い出しているのか、その視線は宙を彷徨っている。

イズミはそんな佐倉の呟きに大した反応を示すことなく黙々と歩き続ける。

経験上、知っているのだ。佐倉がこの手の話をしているときは口を挟まない方がいいと。

この場合、否定しようが肯定しようが佐倉のテンションは上がり、良く分からない方向に話を持っていく傾向がある。

だから、とるべき行動はおのずと放置に至る訳だ。

「あ、そういや今さらだけどさ、学校生活は大丈夫？ 勉強とか、さ」

イズミは自分の世界に浸りはじめた佐倉を無視し、並び歩くダーシエンカに視線を向ける。

本当に今さらな質問ではあるが、問うのを忘れていたのだから仕方がない。

夏休みの最終日、唐突に幸也から電話があり「ダーシエンカちゃんの戸籍“作って” 神代学園への編入手続き済ませておいたから」とだけ告げられて電話を切られたせいで、いちいち細かいことを確認している暇がなかったのだ。

本当にあの日は大変だった。夏休み中に起きたゴタゴタのせいで宿題が残りに残っていたというだけでも修羅場だったのに、その上で一方的なあの電話だ。

折り返しても幸也が電話に出ることはなかったし、それから連絡が付いていない。

もっとも、音信不通はそう珍しい事でもないのでイズミは気にも留めなかった。生活費もいつも通り振り込まれているし。

「勉強か？ それなら問題ない。もしイズミが勤勉な学生でなかったら危なかったが、今のところ苦はない。まあ、これからは私の努力次第だな」

心配そうに見つめるイズミに、ダーシエンカは微笑を向けた。

イズミが勤勉な学生、というのはおそらく最初の知識共有で得たモノのなかに学識なども含まれていた、ということを目指しているの

だろう。

「そう、なら良かった。あ、あとは委員会とかもあるんだけど、もし組む予定の人がいなかったら僕と組まない？　その方が何かと都合がいいでしょ」

「そうだな。私もイズミと組むのが一番落ち着く」

ダーシエンカはコクリと頷き、微笑する。

「……なあ、お二人さん。俺という存在を忘れて二人の世界ですか、コンチクショーム」

自分の世界からいつの間にか帰還していたらしい佐倉が、イズミとダーシエンカにジト目をぶつけていた。

「佐倉だって僕らの存在を忘れて滔々と美少女転校生とやらについて語っていたじゃないか」

「アレはイズミに向かって……って、そうですな。もう一人の美少女転校生とイチチャついでるイズミくんには他の女など眼中に入っていないのですな」

『っ！　イチチャついてるって……』

イズミとダーシエンカが同時に声を上げ、すぐさま互いの顔を見合わせる。

見合わせるとすぐ、二人とも気まずそうに顔を俯けた。

「ああ、ハイハイ。朝からどうも御馳走様です」

佐倉は呆れたように肩をすくめると、歩調を速めた。

「おい、どうしたんだ？　佐倉」

イズミは佐倉の不可解な行動に眉をひそめる。

「邪魔者は消え去るのみ……ってのは冗談で、ちよっとやること思いついたんで先に学校行ってるわ」

佐倉は振り返りながら手を振ると、小走りで前方の人混みの中に消えていった。

イズミとダーシエンカは佐倉の行動に首を傾げながらも、そのまま他愛もない会話を交わしながら、学園への道を歩いた。

そして、教室に着いて初めて知ることとなった。

佐倉が言った“やること”というものを。

イズミがいつも通りに教室に足を踏み入れると、奇妙なざわめきが起こった。

イズミとダーシェンカは若干不審には思ったものの、さして気に留めることもなくクラスメイトに挨拶をしながら自分の席に着いた。だがどうもおかしい。いつもならスムーズに交わされる挨拶はどこかぎこちなかったし、

気のせいでも何でもなくチクチク刺すような視線がイズミに集まっていた。

「なあ、なんかおかしくない？」

不審に思ったイズミは近くにいた友人に尋ねてみるが、返ってきた答えは。

「自分の胸に手を当ててよく考えてごらん」

という、よく分からない言葉と、引き攣った満面の笑みだった。

イズミはその答えに首を傾げたモノの、考えても何も出てきそうにないので思考することをやめ、鞆から教科書類を引っ張り出し始めた。

そんなときに、背後から飛んでもない言葉がイズミの耳に飛び込んできた。

「ダーシェンカさんがイズミくんの許嫁っていう話は、ホントなの？」

『ハイ！？』

女子の一人がダーシェンカにおずおずと尋ねた言葉に、イズミとダーシェンカが同時に素っ頓狂な声をあげた。

「え？ あ、いやだって佐倉くんがそう言って……って如月くん？」

佐倉という単語を聞いた瞬間にイズミは勢いよく立ちあがる。あまりの勢いに、椅子がガタンと音を立てた。

問いを投げかけた女子がそんなイズミに怪訝な視線を向ける。

「その佐倉くんはどこかな？ 教室に姿が見えないけど」

イズミはとても“穏やかな”笑みを女子に向けた。

「えっと……そのうち戻ってくるんじゃないかな？」

そんなイズミに気圧されたのか、ぎこちない笑みを返す。

「ダーシェンカ、佐倉の質の悪いイタズラをどう思う？」

「どう思うって……イズミと私は許嫁ではないが……私は、別に、なんとも」

照れくさそうに顔を俯けるダーシェンカに教室中がざわめいた。

「朝からなんとも満腹なのは俺だけか……？」

「いいえ、私も満腹よ。なんというかストロベリーね、うん」

「ああ……もうなんというか、如月の野郎はアレだな。車裂きの刑に処したい」

「いや、俺はむしろノコギリ引きか水牢攻めに……」

教室から漏れ聞こえてくるおぞましい処刑方法の数々に、イズミの背筋に悪寒が走った。

だがその悪寒を補って余りある感情がイズミの中にはあった。

静かな、凧のような、殺意。

（佐倉のヤツ……殺す）

イズミは教室に姿を見せない親友のことを思いながら静かに誓うのであった。

もっとも、許嫁と言われて悪い気はしないというのも事実ではあったのだが、口にしたら火に油を注ぎそうなので口にはしなかったが。

その後、すぐに佐倉は現われたのだが、イズミは何一つ手を出すことが出来なかった。加えて言うならば、一日中手を出すことが敵わなかった。

なぜなら。

「おっと、もし俺に手を出してみろよ？ 二人っきりで暮らしてるってバラすからな」

と耳元で囁かれてしまったからだ。



そんな佐倉のしたたかな立ち回りで、イズミは心の中でのたうちまわる殺意と戦いながら一日を過ごした。

まあ、クラスメイト達も『許嫁』などという前時代的な言葉を真に受けているはずもなく、さしたる影響はなかったのだが、それでもイズミとダーシエンカが同じ委員会に決まったときは凄まじい殺気がクラス中の男子からイズミに集中したのはまた別の話である。

そして今。

イズミは再びクラス中の男子から殺意を向けられる、ばかりか投石を受けかねない状況に直面していた。

それは、ダーシエンカとともに参加した体育祭実行委員の集まり。イズミはなんの気なしに活動する期間が短いこの委員会を選んだのだが、なんとも運が悪かった。

いや、良すぎたというべきか。

体育祭実行委員とは言ってしまえば九月の終りに神代学園中高合同で行われる大規模なクラスマッチを取り仕切る委員会なのだが、まさかこのような偶然がおころうとは、イズミは予想だになかった。

「中等部の体育祭実行委員長を務めさせていただきます、中等部三年クレア・プリンスフィールドです。この学園に来て日が浅いどころか無いに等しい私ですが、精一杯務めさせていただきますのでよろしく願います」

大教室に集まった多くの生徒の前に、クレア・プリンスフィールドはきはきと言い、頭を下げた。艶やかな金色の髪がふわりと揺れ、甘い匂いが広がったような錯覚が起こる。

イズミはその様子を大教室の一席から、ではなく、何故か真横で眺めていた。

ダーシエンカと組んでいるイズミをやっかんだ男子生徒達の悪ふざけでイズミは一年の実行委員代表に選ばれてクレアの真横という好ポジションにいるのだから、なんとも皮肉な話だった。

「えっと……一年代表の如月イズミ、です。よろしくお願いします」  
イズミは出来るだけ教室にいる人々（主に男子）を見ないように、視線を宙に彷徨わせながら言い、頭をさげた。

頭を上げる瞬間に見えた、一年どころか全学年の男子が自分を睨みつけていた光景は錯覚であって欲しいと、イズミは心の底から願った。

そして高等部二年、三年の実行委員代表の挨拶が終わり、やっかみのもう一つの原因となる人の挨拶に移る。

教室中の視線がその人に集まっていた。

あまたの視線の先には、腰まで伸びた艶やかな黒髪を一つに結んだ、綺麗、というよりは凛々しい顔立ちの少女がいた。

異性の情報に疎いイズミでも、その少女のことは知っていた。

神代学園生徒会会長・来栖千澄<sup>くるすちすみ</sup>。

高校一年の時より生徒会副会長を務め、二年にあがった今年は周囲の期待通りに会長に就任。

また、薙刀部の部長も務めており、多くの大会でかなり優秀な成績をおさめているという。

品行方正・眉目秀麗・才色兼備などの言葉は彼女のためにあると  
いって憚らない生徒も多かった。

イズミ達一年は知らなかったのだが、体育祭実行委員は生徒会主  
導のもとで活動するらしい。

知っていれば間違いなくイズミがこの委員会に参加することはな  
かっただろう。正確に言うならば参加できるはずもなかっただろう、  
なのだが。

「生徒会長の来栖千澄です。三年生にとっては今年の体育祭が最後  
となる訳ですが、それが良き思い出となるように、またそのほかの  
学年にとっても良き思い出となるように精一杯頑張らせていただき  
ますので、何卒ご協力のほどをよろしく願います」

来栖は堅い表情で宣言すると、深々と頭を下げた。

同時に、部屋中から拍手が起こる。

述べた内容は当たり障りのないものであったにも関わらずこの反応というのが、来栖という人となりを表しているのだろう。

来栖は頭を上げ、先ほどの固い表情とはうって違って照れくさそうにはにこんでいた。

イズミはなんとなく、来栖の人気の理由が分かった気がした。

かくしてイズミは学園きっての美少女が集う委員会に参加することとなり、再びクラスでささやかな迫害を受けることとなった。

「はい、如月君。コレ、クラスマツチの種目一覧表ね。とりあえず今日はコレを各学年の委員に配って解散だから」

「あ、はい。ありがとうございます」

来栖の朗らかな笑顔とともに差し出されたプリントを受け取り、イズミはぎこちない笑みを返す。

そのぎこちなさは学園きっての有名人を目の前にした困惑であると同時に、小さな違和感から現われたものだった。

(どうして……名前を?)

イズミは他の委員にプリントを配りだした来栖に視線をやりながら心中に呟いた。

来栖がイズミの名前を知っている、などということは当然のことだ。イズミはついさっき自己紹介したばかりなのだから。

そうではなく、来栖が自分の名前を呼んだことにイズミは違和感を感じたのだ。

観察している限り、他の委員は名前を呼ばれていない。

自分だけが名前を呼ばれた。

たったそれだけのことがイズミの頭の中に違和感を生み出していた。

(……まあ、大したことじゃないか)

イズミは来栖から視線を外し、一年の委員たちが座っている机に向かった。

「はい、コレ。明日の朝のホームルームの時間にでも軽く触れて、各々が参加する種目についてはロングホームルームの時間を利用し

てください。それで今日はもうこれで解散です」

イズミはプリントを配布しながら、先ほど生徒会長から受けた説明をそのまま口にする。

プリントを受け取った生徒たちは気だるげな返事をしながら、大教室から出ていった。

イズミはそんな生徒たちを見送り、渡されたプリントを食い入るように見つめているダーシェンカに視線を移す。

「ほら、僕たちも帰ろう。というか……何をそんなに見つめてるの？」

「いや、知識では知っていても、スポーツをやるなど初めてだから……上手く力の加減が出来るか心配で」

ダーシェンカはプリントに視線を落としたまま、深刻そうに呟いた。

「そんなのだいじょう……あ」

大丈夫、と言おうとしたイズミは思わず口をつぐんだ。

大丈夫だとは思うのだが、とてつもない不安があるのもまた事実。人死に出ることはさすがに無いだろうが、ダーシェンカが少しでも力の加減を誤ったらちよつとした悲劇が起こりかねない。

そのことに思い至ったイズミは苦笑を浮かべ、言った。

「いや、やっぱり大丈夫だよ。力の加減とかなら僕と一緒に練習すればいいから」

「そう、だな。ありがとう、イズミ。日常生活のコツなら掴んだんだが……スポーツはいまいち分からないから」

ダーシェンカはプリントから視線を外し、困ったような笑みをイズミに向けた。

「まあ、頑張ろう」

イズミは微苦笑をダーシェンカに返す。

そして心の底から安堵していた。

クラスマッチに格闘技の類がなくて本当によかった、と。

「じゃあ帰ろうか、イズミ」

ダーシエンカはプリントをカバンに入れて立ち上がり、歩きだす。イズミも後に続く。

「それじゃ、先に失礼します」  
大教室を出る際、イズミは中に残っていた来栖とクレアに一礼する。

来栖は微笑みながら手を振り、クレアはペコリとお辞儀を返した。それを確認したイズミは扉を閉め、帰路についた。

＊ ＊ ＊

「あの子が……そうなんですか？」

イズミの気配が扉の外から消えたことを確認した来栖は浮かべていた微笑みを消し去り、真剣な表情を隣に佇むクレアに向けた。

見る者によっては圧倒されかねない来栖の表情にも、クレアは全く気負う様子を見せなかった。ばかりか苦笑を浮かべ、肩をすくめてさえ見せた。

「ああ、そうだとも。アレが禁忌にして消し去られるべき存在のネクロマンサーさ」

「そうは……見えませんでしたか？」

「その人間の本质なんて関係ないだろ？ それに今は人畜無害でも、いつ核弾頭に変貌するか分からないんだ。危ない芽は早めに摘んでおくべきだ」

「でもやっぱり……」

来栖は言いよどみながら戸惑うような表情を浮かべる。

それを見たクレアは一切の感情の籠らない、冷徹な瞳を来栖に向けた。

「やっぱり？ もとよりお前に選択権はないハズだが？ お前が如月イズミを殺したくないというならそれでも構わん。まあ、代わりには？ お前の大切な家族はどうなるか知らないがな」

クレアは愛らしい顔には似つかわしくない、いやむしろ愛らしいからこそ際立つ冷笑を口元に湛えながら言い放つ。

来栖はクレアの表情に足が震えだしそうになるのを必死に抑え付けた。それでも、体中に鳥肌が立つのだけは止められなかった。

「……分かって、います」

来栖は苦虫をつぶしたような表情を浮かべながら言葉を絞り出し、歩きだした。

「私はこれで失礼します。クレア様」

「ああ、心配無用だろうが道中気をつけろよ？ 何やらこの国の安全神話はどうの昔に滅んでいるらしいからな」

クレアはクックと喉を鳴らし、愉快そうに言う。

「ああ、それから」

クレアは思い出したような声を上げる。

その声に来栖は立ち止まり、クレアを見つめた。

「学校でクレア“様”はやめて下さいね？ 来栖先輩」

そう言ったクレアの声は先ほどの威圧的なものとは打って変わって、気持ち悪いほどに甘ったるいモノに変わっていた。顔にも、天使のように優しい微笑が浮かんでいた。

いや、むしろ悪魔と呼んだ方がふさわしかろう。きっと悪魔とは、人をそそのかすときには天使よりも優しい笑顔と言葉で近づいてくるのだ。だから簡単に騙される。

常人ではたどり着けぬ頂に辿り着いた偉大な魔術師が、メフィストフェレスにそそのかされたように。

「分かりまし……分かった」

「分かって頂けて幸いですわ。来栖先輩、それではまた明日学校で」  
クレアは微笑み、来栖を追い越して大教室から出ていった。

そんなクレアを呆然と見送り、来栖は窓から差し込む夕日に視線を向けた。

赤い、血の色のような夕焼け。

いつもなら美しいと思える夕焼けも、今の来栖にとっては忌々し

ものの以外の何物でもなかった。

(きっと私は……地獄に落ちる)

最後は天国に上った偉大な魔術師と自分を比べた来栖は、顔を苦しげに歪めた。

＊ ＊ ＊

人には向き不向きがある、というのは生きていれば自ずと分かってくるのだが、自分がここまで遊び事には向かないなどは、ダーシエンカは夢にも思わなかった。

ダーシエンカにとって、遊びの記憶など無いに等しかった。

物心つくかつかないかの頃には他の子供と同じように遊んだりしていた記憶があるのだが、家族を失ってから向こうの記憶は心や体に痛みの伴うモノしかない。

それを辛いと思ったことはなかった。自分が心の底から望んでいたことだし、今だってそのことについて微塵も後悔していない。

そのおかげで家族の仇を取ることが出来たし、もう味わうことがないと覚悟していた温かな生活も手に入れられた。

幸せでないハズがない。

だがそれでも、ダーシエンカは現状には多大な後悔を感じ始めていた。

「……やっぱり、私はリレーにだけ出た方がいいんじゃないかな」

ダーシエンカは顔を苦しげに歪め、視線を地面に落した。

視線の先には、腹を抱えながら小刻みにプルプルと体を震わせるイズミの姿があった。

二人は家の近所にある市民体育館に来ていた。申請書を書けば、無料で誰でも利用できるというなかなかありがたい場所。

とは言っても個人や少人数で利用する者はほとんどなく、団体の利用が入っていない日曜の早朝である今は、ダーシエンカとイズミ以外に人影はなかった。

何故そんな所に来ているかと言えば。

「で、でもやっぱり高校生活を送るうえでコレを放置するのはマズイ、よ」

イズミは腹をおさえながらも何とか体を起こし、ダーシェンカを見つめた。

イズミの額には、運動では吹きだすことのない脂汗がびっしりとにじんでいた。

そう、運動ではないのだ。何せダーシェンカとイズミが体育館に来てから五分と経っていないのだから。

イズミとダーシェンカは軽くバスケットのパス練習を始めた段階に過ぎなかった。

そのパス練習でイズミがダーシェンカのパスを数回受け損ねた、たったそれだけのことがイズミの脂汗の理由だった。

「だ、だが！ 男の、さらには多少なりとも戦闘の訓練を受けたイズミでさえ私のパスが取れないのだ……女子にそんなモノを受け取れるハズがない」

「たしかにそうだけど、だからってリレーに逃げるのはダメだよ。これから体育の授業で球技もいろいろとあるだろうし……まあ、格闘技系は全力で力を抜いてやればいいとしてね」

イズミは苦笑をダーシェンカに向けた。

体育祭で選択できる種目はバレー・バスケ・サッカーの三種目が基本。それにクラスの代表者男女二名ずつが出るリレーが加わる。

リレーに出れば他の種目に出なくてもいいということを知ったダーシェンカは、真っ先にリレーに立候補しようとしたのだが、それはイズミが全力で阻止した。

リレーに立候補すること自体は反対ではなかったのだが、他の種目に出ないというのがダーシェンカにとって良くないと思ったのだ。イズミはダーシェンカにちょっとした、極々一般的な楽しみを、挑戦する前から放棄するようなことはして欲しくなかった。

だから今こうして、体を張ってダーシェンカのパスを受けようと



している。

まあ、受け損ねて散々な目に遭っているのだが、当初よりは数万倍マシになっていた。

最初のダーシェンカのパスなど、軽いチェストパスが弾丸並の速さでイズミに襲いかかっていた。

イズミが夏の経験を経ていなかったら、避けられずにモロに喰らい、骨の何本かを持っていかれていただろう。

それほどまでに凶悪なパスだった。

そして反省を踏まえた二度目のパスは弱すぎて使い物にならなかった。素でそういうパスをする者もいる、というようなレベルではあったが、そこで甘んじるほどイズミの覚悟は生半可なものではなかった。

だからこうして練習を続けている。

「だいたい、だいぶマシになったよ？ たぶんコートの端から端に届く程度のレベルだし」

イズミは少しだけ痺れる手をさすりながらダーシェンカに告げた。五分程度でこの程度まで成長しているのだから、ダーシェンカが言うほど悲観するレベルでは全くない、というのがイズミの見立てだった。

シュートやらドリブルやらと問題は残っているが、そちらはさして問題ではないだろう。

よっぼどなミスをしない限り他者に被害が及ぶことはない。

「だ、だがもし万が一……」

「大丈夫だって。僕だって訓練を積んでなんとかしたんだから、ダーシェンカだってなんとかできるよ」

不安げに顔を俯けるダーシェンカに、イズミは励ますように明るく声を掛ける。

「そうだと、いいのだが……」

それでもダーシェンカの表情が優れることはなかった。ばかりか顔を俯け、思案に耽りだしてしまふ。

イズミはそんなダーシエンカに溜息をひとつ漏らし苦笑する。

考えてみればおかしな話だ。イズミにとっては、夏に起きた“異常”を乗り切る方がよほど大変だったというのに、ダーシエンカは“日常”を過ごすことに多大な苦労を覚えている。

クラスメイト達との何気ない会話、他愛もないスポーツの練習、特に気の張る必要のないイズミとの生活。

その一つ一つにダーシエンカが戸惑いを覚えているということなど、イズミはとくに察知していた。それでもその戸惑いが、これからのダーシエンカにとって大切なものとなる以上、無理に排する気は毛頭なかった。

イズミはダーシエンカに、クラスメイトと普通に会話して欲しかったし、なんなら何かしらの部活動などに参加してもらってもいいとも考えていた。

今はダーシエンカにとって負担にしかなくても、これから一緒に生きていく以上、日常を知ることが必要不可欠なのだから。

「ま、とにかく頑張ろうよ。せっかくあの父さんが学園生活っていう、マトモなプレゼントをくれたんだからさ」

イズミはコートに転がったボールを拾いあげ、ダーシエンカに向かって軽く放る。

戸惑いながらもしっかりとキャッチしたダーシエンカは、ボールに視線を落とした。

「ああ……頑張って、みる」

そう言うときダーシエンカは適度な強さのパスをイズミに出した。

## 第2章 物語（ニチジョウ）の崩壊は、意外な所から（1）

結果から言ってしまうえば、イズミが思っていた以上にダーシエンカの日常への順応はスムーズだった。

クラスメイトとの交流も柔らかな物腰でこなし、学業においてもどちらかと言えば優良な成績を修めているイズミを軽々と凌駕していた。

イズミにとっては喜ばしいことこの上ないことではあったのだが、ものの数日でここまで顕著に学業で差を付けられるというのも複雑と言えば複雑ではあった。

それでも。

「……本当に、良かった」

イズミは微笑を浮かべながらダーシエンカの姿を見つめていた。

イズミの視線の先には、ポニーテールに結いあげた髪を振り乱しながらコートの上を駆けるダーシエンカの姿があった。

今現在、イズミのクラスは体育の授業中で、体育館の二面あるコートに男女で半面ずつ利用し、バスケットボールに興じていた。

先ほどまでコートの上で駆けずり回っていたイズミは、自分の出番を終えると、自分のチームのことなどそっちのけで、ダーシエンカのプレイを見守っていた。

はたから見れば恥ずかしい、あるいはバカっぽい光景ではあるのだが、イズミからして見れば気がでない心持でダーシエンカを見つめていたのだ。

下手を打てば病院送りになるものが出かねないのだから。

「なあに愛しき人に見惚れてるんだよ、イズミ」

そんなイズミの気も知らずに、やはり一人の少年がいやらしい笑みを浮かべながらイズミの横に立った。

「ああ、そうだよ。愛しい人を見ることに何か問題でも？ 佐倉」

イズミはめんどくさそうに佐倉に一瞥をくれ、似合わないセリフ

を平然と口にした。

これも日に日に募るクラスメイト達のからかいをあしらうために、イズミが身につけたスキルの一つだった。

もつとも、愛しい人、というのは心の底からの気持ちではあったのだが、そこは逆にクラスメイト達には冗談と受け取られているらしい。

「いや、何も問題はないと思うが……ガン見はさすがにどうかと思うぞ?」

「ガン見、って……僕そんなに食い入るように見つめてた?」

少しだけ驚いたように目を見開くイズミに、佐倉はコクリと首を縦に振った。

「そっか。まあ、もう心配はなさそうだから大丈夫か」

イズミは佐倉の心配するような態度をさして気に留める様子もなく答える。

ダーシエンカが見事なワンハンドスリーポイントシュートを決めるところを見たイズミは満足げに頷き、コートの中でへばっているクラスメイトに交代を申し出て、コートに戻っていく。

そんなイズミを見やり、佐倉は首を微かに傾げた。

「アイツって、あんなに体力底なしだったっけか?」

体育の授業が終わると同時に、ダーシエンカがイズミのもとへと駆けよってきた。

イズミの周りには他の男子もいたのだが、ダーシエンカはそんなこと気にも留めなかった。また他の男子もダーシエンカの態度には慣れたもので、またかとはばかりの微苦笑をイズミに向けていた。その微苦笑の成分には微量の殺意が込められているのだが、イズミはあえて気にしなかった。

「イズミ! ちゃんと出来たぞ! シュートも決めたし、ドリブルもキチンと出来た! それに何より、怪我人を出さなかった!」

ダーシエンカはイズミに駆け寄りながら満面の笑みを浮かべる。

その口調は本当に嬉しそうで、イズミに抱きつかんばかりの勢いが込められていた。

「ああ、ちゃんと見てたよ。やっぱりダーシエンカは凄いじゃないか」

「そんなことはない！　すべてはイズミの特訓のおかげだ」

ダーシエンカはより一層輝かしい笑顔をイズミに向ける。

イズミはその笑顔に心の底から神への賛辞を述べたくなったのだが、すぐに思い直す。

（しま、った……）

イズミはダーシエンカに向けた柔らかな笑みはそのままに、周囲の男子の様子を横目に伺った。

そこには案の定。

「イズミの……特訓？」

「どうせ、二人きり、だよな……？」

「万死に値する」

「いやまて、イズミという名の女の子との特訓で、クサレ如月とは無関係という線も」

「いや、ないから。ショックのあまり妄想に走るのはやめような」

「つまり我々のとる行動は一つ。心の中でイズミに向かって怨嗟の言葉を幾千万言つぶやくことだ」

ダーシエンカには聞き取れないように巧妙に声量を抑えつつ、惜しめない笑顔と殺意をイズミに向けているクラスメイトたちの姿があった。

その中には佐倉の姿も含まれている。

イズミは連中が、ダーシエンカの「怪我人を出さなかった」という不可解な発言を気に留めていないことにひとまず胸を撫で下ろす。

「まあ、こなせて何よりだよ。それで、ちゃんと楽しめた？」

「ああ、勿論だ。私はこういう遊びをしたことがないから新鮮だな。

それにスポーツとは意外に頭を使うのだな。高い空間把握能力が必要となるとみたな、うん」

ダーシェンカは何やらプレイ中のことを思い返しているのか、しきりに頷きながら思案に耽りだした。

空間把握能力という物騒な単語が若干気にかかったものの、ダーシェンカがスポーツをおおむね楽しんでいてくれることを確認したイズミは、微笑を浮かべた。

周囲から突き刺さる殺気立った視線は極力意識しないように心掛けながら。

「でも本当にすごかったよ、ダーシェンカちゃん。本当にバスケしたことないの？」

イズミにひとしきり敵意を向け満足したのか、クラスメイトの一人がダーシェンカに声を掛ける。

「ああ。スポーツらしいスポーツは何一つしたことがない……強いと言えばフェンシングもどきならばやったことはある」

ダーシェンカの何気ない一言に周囲はよく分からないざわつきを見せた。

おそらくはフェンシングなどという馴染みのないスポーツをこなしたことがあるダーシェンカに驚きを見せたのだろうか。

（そういえば良家の令嬢ってというのが“設定”だったっけ）

イズミはダーシェンカに次々と質問を浴びせるクラスメイト達に、我知らず苦笑を向けた。

事実ダーシェンカは良家の令嬢ではあるのだが、それとは別に幸也が用意した今現在のダーシェンカ・オルリックという少女に対する設定も存在していた。

普通に生活を送る上ではそんな設定を活用する必要もないのだが、クラスメイト達の頭の中ではおそらく、良家の令嬢とフェンシングが綺麗に結び付いたのだろう。

（まあ……フェンシング“もどき”ってのもきつと、スポーツのフェンシングより危なかった、って意味でもどきなんだろうけど）

ダーシェンカの凄まじいナイフ捌きを思い出したイズミは苦笑をより深める。

そんな会話を交わしながら、イズミ達は自分たちの教室に戻った。

体育の後に必ずといっていいほど襲ってくる睡魔に打ち勝ったイズミは、残りの授業を黙々と優等生の模範的な態度で消化した。ダーシェンカについては言わずもがな、だ。

そして放課後。

イズミとダーシェンカは委員会の仕事に勤しんでいた。

とは言うものの、実際に委員会の仕事となる試合の組み合わせなどはとうに決定されており、今のイズミ達の仕事は放課後に残って体育祭の競技の練習をしているクラスの見回りという、あってもなくても同じような仕事だった。

そういう理由もあり、イズミはさしたる注意を払うこともなく校内をブラついていた。

ダーシェンカと見まわる予定だったが、ダーシェンカが他の女子から誘いを受けているのを見かけたイズミは、ダーシェンカを彼女たちに預けてみることにした。

（さすがに、ずっと一緒にいるのは不自然だからね）

離れる間際に若干渋るような視線を向けたダーシェンカを思い出し、イズミは苦笑う。あのときのダーシェンカはまるで、親離れできていない女の子だった。

「あら如月先輩。今日はお一人なんですか？」

背後から上がった上品な声に、イズミはゆっくりと振り返った。

そこには、学園きっての美しき少女二人が肩を並べて佇んでいた。来栖とクレアのツーショットという、普通の男子なら手をすり合わせて拝みかねないような、ありがたいものだった。

もつとも、イズミがそのようなものに関心があるはずもなく。

「こんにちは。会長にクレアさん」

イズミはさして声音を変えすることもなく挨拶を述べる。

「こんにちは、如月君。マジメなのね、他の男子は皆帰るかクラスの練習に参加してるわよ？」

何やら分厚い書類を抱えた来栖が、優しげな笑みをイズミに向ける。

「いえ、どうせ今日はクラスの練習ないんで。それに、帰ろうにもダーシエンカがまだ帰ってきてないんで」

「フフ、本当に仲がよろしいんですね、先輩達。中等部でも話題になってるんですよ？」

「話題って……まあ、ダーシエンカは目を引くだろうからね」

「いえ、如月先輩も有名ですよ？ 私の友人が言うには『可愛らしい先輩』として人気らしいですよ」

クレアは口元に手をあてながらクスクスといたずらに笑う。

「可愛らしいって……言われたことないけどなあ。そういえば、お二人も見まわりですか？」

「いや、私たちは先ほどまで事務方の作業をこなしていたのよ。まあ、そっちも今日一日で片がついたから、実行委員としての仕事はキミ達には特に残っていないかな。当日までは」

来栖は手にしていた分厚い書類を叩きながら肩をすくめた。

「そうなんですか。お疲れ様です」

「なに、これが生徒会の仕事だからね。今回はクレアが手伝ってくれてだいぶ楽だったし」

「何をおっしゃるんですか。八割方は先輩が片付けられてたじゃないですか」

来栖の言葉にクレアはからかうような笑みを浮かべて応じた。

（そういえば、クレアさんも転校したてなのに、だいぶ馴染んでるんだな）

イズミは二人のやり取りを見ながら、なんとなく胸中に呟いた。

ダーシエンカもクレアに負けず劣らず学園生活に馴染んではいるが、どこことなく受け身な接し方だった。

今はまだそれで十分なのかもしれないが、このままでいけばイズ



ミとしか接点がなくなるのではないかとさえ思えるほどとなると、気がかりではある。

だからこそ、今日のようにイズミと離れて行動するのも重要なことだった。

（出来れば……ちゃんと友達を作って欲しいんだけどなあ）

イズミは来栖と楽しげに会話を交わすクレアを見やりながら、心の中でひとりごちた。

「それじゃあ如月くん、私たちはこの辺で失礼するわね。気をつけて帰るのよ」

「そうですよ、可愛いらしいお二人は狙われてしまいますからね」  
クレアはクスクスとほほ笑む。

「可愛い、って……まあ、お二人も気をつけて下さいね。僕らより先輩達の方が心配ですよ」

イズミは冗談でも何でもなく述べた。  
なんと言ってもダーシエンカは、一般規格内のモノに対してならまったく心配する必要がないのだから。

「フフ、ご忠告痛み入ります。それではまた明日」  
クレアは軽く頭を下げると、そのまま来栖とともに廊下を進んでいった。

イズミはそんな二人を見送り、あてのない校内散策を再開することにする。

校内を適当に散策していると、同じようにやることもなく適当に歩いていたらしいダーシエンカ達とはち合わせた。

イズミの心配とは裏腹に、ダーシエンカは楽しそうに女子たちと会話をかわしていた。

「ねえ、如月君。このあとダーシエンカさん借りていいかな？　ちよつと街をぶらつくだけだから」

ダーシエンカと会話していた女子の一人が、ダーシエンカの腕を掴みながらイズミを見上げた。

「別に構わないよ？　というか、一言くれれば僕の許可は必要ない

と思うんだけど」

「だよね！？ ほらダーシェンカちゃん、旦那さまの許可も出たことだし軽く遊んで行こう！」

「イ、イズミがいいというなら私は構わないのだが……」

ダーシェンカはブンブンと振り回される自分の腕に微笑を浮かべる。

「ああ、楽しんできなよ。僕なら“大丈夫”だからさ」

イズミは暗に魔術師の襲撃などは心配しなくていいことを伝え、軽く手を振ってその場から離れた。

その足で教室に向かい、自分の荷物を持って学校を後にする。

まだ日は長いとはいえ、周囲は夕日に照らされて真っ赤に染まっていた。

どこことなく郷愁漂う景色の中を、イズミはさしたる感慨もなく歩いていく。もっとも、郷里を離れていないものに懐かしむものなど無いのだから、当然と言えば当然であった。

（そう言えば……一人で帰るのは、というより一人で行動するのは久しぶりだなあ）

イズミは空を飛ぶカラスに視線を向けながら、思う。

夏休みから向こう、一人で行動していた記憶はほとんどない。よく考えてみれば、ダーシェンカがイズミに依存していたというだけでなく、イズミもダーシェンカに依存した生活を送っているのかもしれない。

証拠に、隣にダーシェンカがいない今のイズミはどこことなく物足りなさ、不安を感じていた。

ネクロマンサーとして覚醒した以上、狙われることはまずないというのが幸也やダーシェンカの意見ではあるのだが、同時に二人は「だからと言って油断していいわけでも、これまでと同じ生活が送れるとも思っていない」と釘を刺してきた。

事実、イズミの祖父は覚醒してからも命を狙われていたらしいの

だから、イズミもまったくもって油断は出来ない。

では幸也はどうなのかと言えば、幸也の持つ力を目の当たりにしたイズミは「父さんを狙うやつがいたら天才か狂人だ」と納得しているから特に疑問はない。

はつきりと言われた訳ではないが、父には力があり、祖父にはなかったのだろうとイズミは結論付けている。

祖父と自分のどちらの力が上なのかと比べる術がない以上、イズミが安心していい理由はどこにもない。

けれども、父や祖父とイズミの間には、大きな違いがある。

イズミはリビングデッドという“力”を覚醒後も保持している。

普通ならば覚醒と同時に切り捨てられるものであるというのに。

これは保険の一つとしても捉えられるのだが、イズミにそんな気は毛頭なかった。

ただ純粹にダーシエンカとともに在りたいから一緒にいるに過ぎない。

だから。

（襲われたとしても、自分だけで対処しなきゃ……父さんたちと同じように）

イズミは自分の中に確かにある不安に向かい、静かに宣言する。

襲われなければいいな、という弱気な願望も密かに抱きつつ。

宣言するだけでなく、イズミは久しぶりに自分の中にある力を紐解いてみることにした。

使わずにいて、いざというときに発動できないのでは冗談にもならない。

イズミは歩きながら目を閉じ、巨大な門をイメージする。禍々しい彫刻の施された、ロダンの地獄の門に近しい姿をした門。

その扉を開き、膨大な量のエーテルをひねり出す。

同時に、目を開く。訓練前のイズミならば真っ暗闇の中、良くても靄の掛った視界の中に居たのだろうが、今は違った。ハッキリと周囲の景色が見えている。

靄がかかるともなく、ありのままの“視覚”が捉える光景が広がっている。

イズミはそのことを確認し、状況を第二段階へ移行する。

エーテルの可視領域を上げ、自分が周りに振りまいたエーテルを確認する。

確認し、力の在り方を変質させる。周囲に振りまいたエーテルを一点に収束させ球体状にまとめあげていく。その球体は捉え難い流れを形作り、蠢き続け、最終的には野球ボール大に収束していく。

「シッ！」

イズミは短く息を吐き、その球体を破裂させた。

淡く輝く青色の光が夕焼けの中に飛び散る。とは言っても、エーテルを見ることができない人間にはいかようにも映らない。いつもと変わらぬ景色が広がっているだけだ。

例えその破裂の中心にいたとしても、何の影響もない。

イズミがしたのはあくまでエーテルの形を変質させるだけのもので、媒体がなければなんの効果も発揮されない。

ヴェルナールを葬ったときは、ヴェルナールの肉体を媒体にいまの流れを行ったのだ。

（とりあえず、腕は鈍ってないみたいだな）

イズミは一連の動作を滞りなく行えたことに胸を撫で下ろした。だがイズミは気付いていなかった。自分自身の注意力が鈍りきっていたことに。

すれ違った通行人と、イズミの体がぶつかった。

衝撃はないに等しく、イズミは「すみません」と軽く頭を下げてそのまま歩み去ろうとした。

「……え？」

それでもイズミの足は動かなかった。

腹部に異常な熱を感じたのだ。そう遠くない日、夏休みに受けたものにとってもよく似た熱。普通に生きていく上では決して体験することのない、限りなく痛みに近い、熱。

イズミは恐る恐る、熱の走る腹部に視線を向けた。

予想通り、熱を伴った赤い液体がドクドクとめどなく溢れ出ていた。

「どう、して……？」

イズミは視界が白けていくのを感じながら、呆然と眩き、地面に突っ伏した。

アスファルトの熱を感じながら、イズミの意識は視界と同様に白い靄の中に溶けていった。

地面に倒れ意識を失ったイズミの傍らに、一人の少女が歩み寄った。

周囲には少女の他に人影はなく、不気味なほどの静けさだった。辺りから人の気配や車の走る音は聞こえてくるというのに、イズミと少女の周りにだけ騒音がないように感じられた。

「あらあら、ちゃんと警告はしましたのに……狙われるって」

少女――クレア・ブリンズフィールドは、俯せに倒れているイズミに柔らかな微笑を向けた。

その表情だけ見れば、茶会の誘いを受ける淑女のようにも見受けられる。

もっとも、その表情が血を流しながら倒れている少年に向けられているというのでは、不気味という言葉以外に浮かぶものがない。

「エーテルを飛散させられたときは少し焦ったが……偶然に過ぎなかったということか」

クレアは微笑を消し去り、路傍の石に向けるモノの方がまだ暖かいのではないかとさえ思える視線をイズミに向けた。

数瞬だけ視線を向けると、クレアは退屈そうに鼻を鳴らしてポケットから携帯を取り出した。

「フン、一番“簡単な”段階は失格か。まあいい。その方がこのあとは盛り上がるだろう」

クレアはさしたる表情を浮かべることもなく眩き、119のダイ

ヤルを押した。

ニコール目で電話がオペレーターらしき女性と繋がる。

クレアはそのことに「本当に世の中便利になったものだ」と場違いな感慨を抱きかけたのだが、すぐに頭を切り替えた。

「あ、あの！ ひ、人が血を流して倒れてるんです！ え？ あ、はい。呼吸とかはしっかりしてるんですけど、呼んでも返事がなくて……ええ、はい。神代学園の近くの、ええ、はい、ちょうどその辺りです。あ、はい。分かりました」

クレアは表情を一切変えることなく、声音だけを変えて状況を説明した。

クレアは一通りの会話をし終わると、携帯を再びポケットに戻した。

なにやら応急処置の説明などもされた気がするのだが、そんなことはクレアにとってはどうでもいいことだった。

（これで死ぬならそこまでの男、ってことだ）

クレアはイズミに一瞥をくると愉しそうに唇の端を歪めながら踵を返した。

「ま、死ぬなよ。もし死なれたら私が雪に殺されてしまうからな」  
クレアは片手をヒラヒラと振りながら、聞こえているはずのないイズミに言葉を投げた。

そしてその小さな影は、一度も振り返ることなく、夕暮れの街並みに消えていった。

＊ ＊ ＊

はじめに感じたのは、体中から噴き出している冷たい汗とへばりつく服の感覚だった。

イズミはそのうっとおしさに顔を歪め、体をよじる。同時に腹部に衝撃が走り、イズミはより一層顔を歪めた。

イズミはその衝撃に瞼を薄く開き、ソレが衝撃ではなく痛みだと

いうことに気付いた。

「……ここは、どこ？」

イズミは顔を動かし、辺りをうかがった。

白を基調とした天井や壁、置かれている棚などは上品な木製で統一されている。

一見すれば、上等な寝室ともとれたが、イズミはその考えをすぐに否定した。

自分の腕に、見慣れたなくなとも見慣れてしまったチューブが繋がっていたから。

「病院だ」

部屋の中から聞きなれた声が上がる。

イズミはその方向に視線を向けようとするのだが、体が思うように動かず声の主を捉えられない。

そんなイズミを察してか、声の主がズイとイズミの顔を覗き込んだ。

「ダー、シェンカ」

イズミは声の主――ダーシェンカの表情に言葉を詰まらせた。

先ほどの一言にはなんの感情も宿っていなかったが、いまイズミに向けられている表情は、切実なものだった。

口はきつく結ばれ、瞳には涙が浮かんでいた。

「ご、ごめん」

その表情に気圧されたイズミは、訳も分からず謝罪の言葉を述べる。

何を謝っているのかなどいうことはイズミ自身もよく分からなかったのだが、それ以外に言葉が浮かばなかった。

「……謝るのは私の方だ。私がイズミのそばを離れてなければこんなことにはならなかった」

ダーシェンカは悔しそうに口を歪ませ、絞り出すように言葉を発した。

イズミはダーシェンカが何を言っているのか分からなかった。が、

すぐに自分の身に起きたことを思い出した。

（刺された、のか）

イズミは痛みのはしる腹部に一瞥をくれる。

すぐに、ダーシエンカに掛けるべき言葉を発した。

「……謝るなら、僕のそばにいなかったことよりも、この状況を自分のせいにしてしていることを謝ってほしいな」

イズミは微笑をダーシエンカに向ける。痛みのせいでどこかぎこちないカタチになってしまったが、それが今のイズミにとって精一杯だった。

「う……言われるとは思っていたのだが、でもやっぱり」

「でも、じゃない。悪いのはダーシエンカじゃなくて刺したヤツだろ？ ……というかコレはあれか、通り魔ってやつなのかな」

イズミは今更ながらに我が身を襲った不幸をかんがみ、眉根を寄せた。

魔術師に狙われることを想定しながらも、一般の危機を想定しない自分の皮肉さが、こんな状況においても、イズミにとってはおかしなことだった。

夏休みには魔術師に襲われ、夏休み明けには通り魔に刺される。

（あ、“魔”繋がりが）

などという下らない言葉がイズミの脳裏に浮かんた。

「警察の方ではそういう方向で調査を進めると言っていた。事情を聞きたいそうのだが……呼んでも大丈夫か？ 病室の外で待ってるんだ」

平時と変わらぬイズミに、ダーシエンカは呆れたように溜息を吐きだした。

「あ、うん。大丈夫、だけど」

「なら呼んでくる。それからイズミは三日ほど入院らしいから、私はイズミの着替えを取ってくるな」

ダーシエンカは病室に来てから初めて微笑み、病室から出ていった。



ダーシエンカと入れ違いに、三人の人間が入って来た。

一人は白衣に身を包んだ女性の医者で、残りの二人はスーツに身を包んだ男女だった。考えるまでもなく、警察の人間なのだろう。

「具合はどう？ 怪我について詳しいことはあとで説明するけど、とりあえず命に別状はないから安心して」

医者はイズミの顔を覗き込みながら朗らかに笑った。

年齢は二十代後半から三十代前半といったところで、肩にかかる艶やかな黒髪と、円らかな瞳が印象的だった。

「あ、はい、大丈夫です」

つぶらな瞳をまともに見てしまったイズミはぎこちない返事をする。

そんなイズミの様子に医者は微笑むと「私は少し席をはずしますね」と言って病室から出ていった。

立ち替わりに、スーツを纏った男女がイズミのベッドの傍らに立つ。

男の方は優しいげな童顔で、女の方は対照的に切れ長の目をしていてとても綺麗なのだが、

どこことなく冷やかな印象を持つ顔立ちだった。

女性の方が手短に自分達が警察のものであることを証明し、質問を口にした。

「如月イズミくん、さっそくで申し訳ないんだけど事件当時の状況を聞かせてもらえるかしら。犯人の特徴とか」

「特徴……ですか？ よくは覚えてないんですが、背は高かったと思います。僕の頭がちょうど肩のあたりだったのです」

イズミはあの時の状況を“必死”に思い出し、口にした。

不自然なまでに、あのときの状況について覚えていなかったのだ。ぶつかった相手の顔はおろか、性別さえ定かではない。

身長から考えれば男なのだろうが、長身の女性がいけない訳ではない。むしろ、ぶつかった衝撃自体は女性とぶつかったような感覚に近かった。

「顔とかは、覚えてるかな？　あとは性別とか」

男性刑事がいたわるような声で問う。

「……実は、あんまり覚えてないんですよ。ぶつかったと思ったら刺されてて、そのあとすぐに気を失っちゃったんで。お役に立ってず申し訳ありません」

イズミが首を微かに曲げて謝ると、男性刑事は大げさに手を振った。

「そ、そんな！　気にしないでいいんだよ！　あんなことがあったんだ。しょうがないよ」

「まあ、そうね。あなたが謝ることじゃないわ。悪いのは刺したゲス野郎なんだから」

女性刑事は口元を微かに緩ませる。これがこの人なりの笑顔なのだろう。

言葉はともかく顔の印象よりは優しい人なのかもしれない。

簡単な質問を二三聞いたあと、刑事さん達はメモ帳に連絡先を書き記し「また詳しいことを聞きに来るけど、何か思い出したことがあったら連絡ちょうだいね」と言って足早に病室を出ていった。

イズミはその後ろ姿を見送りながら、こういう事件って続く可能性があるから大変なんだろうな、などという自分の状況と切り離した考えを浮かべていた。

刑事さん達の姿が見えなくなると、先ほどの女医さんが入れ違いに病室に入ってくる。事情聴取の間は病室の外に待機していたのだろう。

「さて、怪我についての詳しいコトを説明しようと思うんだけど……体の方は平気？　休みたいなら説明は明日にまわしてもいいんだけど」

女医さんはベッド脇の椅子に大儀そうに腰掛け、口を開いた。

イズミは首を縦に振り、話の先を促す。

女医さんはイズミの反応を見ると、簡単に今現在のイズミの状況を説明した。

怪我の細かい説明をされてもいまいちよく分からなかったのだが、要約してしまえば命に別状はないということだった。

刺された深さも大したものではなく、内臓にも一切傷がついていなかったというのが大きな理由らしいのだが、体を刺されたらどこかしら内臓は傷つくのではないかという考えのイズミにはイマイチ要領を得ない話だった。

だからイズミはボンヤリと女医さんの話を聞いていたのだが、すぐに気を引き締めなければならぬ質問が浴びせられた。

「それから、肩とお腹に比較的新しい銃創みたいなのが見られたんだけど……あれは、何？」

とりあえず警察には黙っておいたんだけど、場合によっては、ね」女医さんの円らかな瞳が陰しくなり、イズミを射抜いた。

なんと答えればいいのかすぐには思いつかなかった。銃弾ではなく水晶玉に撃ち抜かれたなどとは無論言えるはずもなく、かといって適当な誤魔化しの言葉も思い浮かばなかった。

安全神話が崩壊しつつあるとはいえ、その他の国家と比べたらまだ安全な日本だ。善良な一般市民が銃弾を二発も叩き込まれたとあつては大変なニュースになる。

だから女医さんは疑っているのだろう。イズミが見た目とは裏腹に善良な市民などではなく、危ない橋を渡っている類の人間なのではないか、と。

「えつとですね……この傷は別に後ろめたいモノではなくてですね、その、なんというか、深い事情がありました」

黙るのはよくないと判断したイズミは、喋りはじめてはみるものの、喋れば喋るほど泥沼に沈んでいくのが自分でも痛いほどよく分かった。

「フッフ、分かってるわよ。キミの身元は確かだし、さっきご両親に銃創について連絡したら心配ないって言われたしね。少しからかっただけよ」

険しかった顔を急にほころばせ、女医さんは優しく微笑んだ。

そのさまに一瞬イズミは言葉を失った。

一体どこの世界に不可解な銃創について追及しないまっとうな医者があるのかと、そして何より、両親と知り合いということが衝撃だった。

確かに幸也は医者の世界では有名人なのだろうが、女医さんの口ぶりからするにもっと親しい印象を受ける。

「あの……父さんたちと知り合い、なんですか？」

「ええ、私が研修医だった頃にお世話になって、その頃からお付き合いさせてもらってるわ。本当なら医者としてその銃創について深く追求するべきなんでしょうけど、幸也さんと雪さんが問題ないと仰るなら問題ないわ」

「問題ない、って……」

「フフ、これでも私はあなたのご両親が何者かを知ってるのよ？昔ちよっとあってね。だからその怪我の理由も薄ボンヤリとは分かるのよ。だから詳しくは聞かないわ」

楽しげに話す女医さんに、イズミは生返事を返すのが精いっぱいだった。

「まあ、そんな訳だから細かいことは心配しなくて大丈夫よ。あと、これからイズミくんがご両親不在の折りに“不可解な”怪我をした場合は、私が専属になると思うからよろしくね。私の名前は松崎あかねです。ま、気軽に松さんとも呼んでくださいな」

「は、はあ……よろしく願います。松、さん」

松崎はイズミの返事に満足げな笑みで頷き、ゆっくりと立ち上がった。

「それからね、あの女の子、ダーシェンカちゃん、だっけか？ちゃんと見ててあげるのよ？　なんか思いつめた表情で病室を出ていったから」

松崎はどこか遠いところを見るような目つきで言うと、病室から出ていく。

「思いつめてた、か……」

松崎の気配が消えたことを感じたイズミは、ポツリと呟いた。

今回の件が一般の事件であれ魔術関連のものであれ、ダーシエンカが責任を感じる必要は全くないのだ。

イズミは何も手段の一つとしてダーシエンカを手元に置いている訳ではない。ばかりか、

手元に置いているという感覚すらないのだから。

イズミはただ、ダーシエンカに日常を楽しんでもらいたいのだけなのだ。リビングデッドとしてなどではなく、普通の少女として。

けれども、ダーシエンカにはイズミを守るだけの力がある。魔術的にはイズミの方が優れてるとはいえ、実戦ではダーシエンカが勝っているのは厳然たる事実。

だからイズミが傷ついたことに負い目を感じてしまうのだろう。

自分がいたらこんなことには、と。

ましてや今回は偶然にも、ダーシエンカが遊んでいるすきにこのような事態になったのだ。実直なダーシエンカが責任を感じずにいられるはずがない。

(なんでよりにもよってこんなときに……)

イズミは痛む傷口を見やりながら嘆息を吐いた。

自分が刺されたことよりも、ダーシエンカのことを気がかりでなかった。せっかく普通の生活に馴染み始めていたというのに、これではもとのカタチに戻ってしまう。

「ともかく、犯人が捕まればダーシエンカも楽になるのかな……」

イズミは窓の向こうに視線を向けた。

どうやらこの病室は高い所に位置しているらしく、街を見下ろすことができた。

イズミは人家の明りからまばらに輝く星明かりに視線を移した。感じる必要のない責任を感じているであろう、愛しい少女のことを思いやりながら。

＊ ＊ ＊

ダーシェンカは日の落ち切った薄暗い住宅街を、ボンヤリとした足取りで歩いていった。

イズミの着替えが詰まったボストンバックを片手にぶら下げ、病院を目指す。

急いで届けようと思えばものの数分で届けられるのだが、そうする気にはなれなかった。

どんな顔でイズミと接すればいいのか分からなくなってしまったのだ。

イズミは気にするな、と言った。ダーシェンカも出来ることならイズミの言うとおりに、気にしたくはなかった。気にすればするほどイズミに心配をかけるのは分かりきっていることなのだから。

（かと言って、割り切れるものではないよな……）

ダーシェンカはぶら下げたボストンバックを見やりながら嘆息を吐いた。

自分がイズミの傍を偶然離れたときに起きた不幸な事故。少なくともイズミはそう考えているだろう。

イズミの魂を狙っての犯行なら、イズミはとうにこの世に存在していないはずだ。だが幸いにも、イズミは生きている。

そのことから考えれば、本当に稀な“一般規格内の”不幸が偶然イズミに降りかかったと片付けられる。

無論、そうやって片付けてしまえるほどダーシェンカの頭は平和ボケしていなかったが。

魔術師の襲撃、という線を消し去る気は毛頭ない。ばかりか、警察では調べ得ないその方面を自身で調査しようとする考えていた。

だがそこには大きな問題が存在する。

学生生活を送りながらする調査など、たかが知れているのだ。仮に手がかりを掴めたとしても、ダーシェンカが学校に行っている間にその手がかりは役に立たなくなってしまう。

それは魔術的な痕跡を辿る、ということの繊細さの証明だった。

ダーシエンカとしては、学生生活など投げうって調査に取り掛かりたかったのだが、それをイズミが望んでいないとなると、どうしようもなかった。

犯人を“一般規格内の”モノと仮定して調査するという考えも浮かぶには浮かんだけれど、そんなことをしても警察の組織力と比べたらなんの役にも立たないだろうということで却下した。

「今の私に、何ができるといふのだ……」

ダーシエンカは前方の丘の上にそびえる大きな建物に視線を移しながら呟いた。

その建物の中には、ダーシエンカにとって最も大切な人がいる。どうしようもなく弱気なくせに、ここぞというときは為すべきことをきちんと為す頼りがいのある少年。そして何よりも、少しおかしな表現かもしれないが、強靱な優しさを持っている。

そんな少年――如月イズミに、ダーシエンカ・オルリックがしてあげられることは何なのか。

考えてはみるものの、答えは浮かんでこなかった。

ダーシエンカとしては四六時中イズミのそばにいて、その警護に努めたいのだが、普通の少女としての生活を与えられた今はそれが出来るワケもなく、ましてやイズミがダーシエンカに普通の生活を送って欲しいと願っている以上、それを無下に扱えるはずもなかった。

だが、それでも。ダーシエンカはすでに普通の少女という在り方は出来ないのだ。そのように在ろうとすることは出来ても、そうなることは出来ない。

人として死に、リビングデッドとして蘇った以上、普通のカタチに納まるにはダーシエンカという少女のカタチはあまりに歪だった。

「私に、出来ること……」

ダーシエンカはもう一度自問する。

相変わらず答えは浮かんで来てくれない。短絡的な答えならば幾

通るか浮かんで来る。

犯人を捕える、イズミのそばに常に控える。また、その答えから枝葉のように派生する答えも浮かびはする。

だがそのどれもが正解とは考え難かった。正解、などというものはどこにも存在してはくれないのだろうが。

結局ダーシエンカに出来ることは、自問を続けながら病院への道を進むことだけだった。

＊ ＊ ＊

翌朝、ダーシエンカは物足りない気持ちとともに目覚めた。

いつもいるはずの人がそこにいない。少し離れているだけだというのに、こうも寂しく感じられるのは、想い人が病院という物理的な距離とは別の隔たりを持った場所にいるからなのだろう。

ダーシエンカはそのような物思いに耽り、イズミのベッドを見やりながら深いため息を吐いた。

病院で寝泊り出来ないものかと尋ねてはみたが、担当医に「そこまで重症じゃないから大丈夫よ」と朗らかな笑みで断られてしまった。

それでも病院の外に張り込んでいようとダーシエンカは考えたのだが、今度はイズミに「そんなことはしないでよ？」と先手を打たれてしまい、渋々家に戻ってきたのだ。

以前のイズミ相手ならば、気付かれずに張り込むことも出来たかもしれないが、今のイズミ相手となると厳しいものがあった。イズミにはエーテルを利用した精密なレーダーがあるのだから。

ダーシエンカは、張り込んでいることをイズミに気付かれてしまうことが怖かった。それはなんとなく、イズミを傷つけることと同義な気がしたのだ。

「……はあ」

ダーシエンカは再び深いため息を吐き出し、ようやくイズミのベ



ツドから視線を引きはがす。

そのままボンヤリとした表情で、リビングへと足を進めた。なんとなく静寂に耐えられず、テレビをつけてみるものの、流れてきたニュースとはある街で男子高校生が通り魔に刺されるという事件について。

ダーシエンカは顔をしかめてテレビの電源を消した。

いつもならイズミの用意してくれる白飯を三杯はたいらげるダーシエンカなのだが、どうにも食欲が湧かず、のっそりとした動作で制服に着替え、佐倉が迎えに来るのを待った。

（イズミは佐倉に自分が刺されたことを伝えたいが……他の人達は知っているのだろうか）

なんとなく時計を眺めながら、ダーシエンカは呟く。

テレビから流れているニュースは、被害者の情報についてはいろいろと伏せられているが、現地で情報統制などをすることは不可能だろう。

昨日までは当然のように在った日常が、今日は失われているということも、十分考えられた。

それは勿論、ダーシエンカにとっての日常、ではなく、イズミにとっての日常。

ダーシエンカにとっては日常などいかにほどの価値もなかった。ダーシエンカにとって大切なのは、イズミが望む、イズミが居る日常なのだから。

そんな物思いに耽っているうちに、インターホンが鳴り響く。

ダーシエンカはその音に物思いを断ち切り、極力昨日までと変わらない表情、足取りで、玄関の扉を開いた。

「よう、ダーシエンカちゃん。今回はイズミのヤローが散々な目に遭っちゃったな」

扉の外には、昨日までと変わらぬ佇まいの佐倉がいた。

言葉の中身こそイズミのことを気遣うものではあるものの、その顔には快活な笑みが浮かんでいた。

ダーシエンカはその笑顔に一瞬言葉を失った。

この人は何を笑っていられるのか、と。

そんなダーシエンカの気色を感じ取ったのか、佐倉は両手をブン振りながら後ずさった。

「ち、違うぞ、ダーシエンカちゃん！ これは別にイズミに対して『ざまあみろ』とか思ってるのか、そういうんじゃない、イズミに頼まれたんだよ！」

「たの、まれた？」

ダーシエンカは目を見開き、首を傾げる。

「ああ、そうだよ。『できるだけダーシエンカに心配をかけないよな態度でいてくれ』ってよ。こっちは本気で心配したのにそんなこと言われたんだぜ？ まあ、いきなり惚氣られたって意味では、確かにイズミに対して『ざまあみろ』って気持ちがあるかもな」

佐倉は肩をすくめ、苦笑を浮かべた。

「そう、だったのか」

ダーシエンカは佐倉の言葉に、顔を俯けた。

結局自分は、イズミに心配をかけてしまっている。こんな状況なら、自分がイズミの助けとならなければならないのに。

リビングデッドとしてイズミの助けになれないだけでなく、普通の少女としてもイズミに迷惑をかけてしまっている。

そのことがどうしようもなく、ダーシエンカにとっては歯がゆかった。

「どうしたんだ？ ダーシエンカちゃんが気にすることじゃないだろう？ イズミはとりあえず無事だったんだから。まずはそのことを喜ばなきゃな」

佐倉はダーシエンカの肩を軽く叩き、踵を返して歩き始めた。

ダーシエンカも家の鍵を慌てながら閉め、佐倉のあとに続いた。家から学校までの道すがら、佐倉から他愛もない話を振られ、ダーシエンカもそれに応じていたのだが、学校に辿り着いた頃には、何を話していたのかも覚えていなかった。

神代学園の目と鼻の先で事件があったということもあり、学園の門には警察官や学園の教師などが並び立っていた。その誰もが真剣な表情を浮かべているのだが、肝心の生徒たちはその見慣れない光景に少しはしゃいでいるようだった。

怯える過ぎるよりはマシなのかもしれないが、それでも、自分は襲われることはないだろうと考えているような生徒達の表情が、ダーシエンカを憤らせた。

残念なことに、イズミもどちらかと言えばそちら側の人間なのが。いや、少し違う。自分よりも周りの人間を心配してしまう、より重症な部類の人間だ。

「まあ……慣れてないことにはハシャいじまうよな」

ダーシエンカの隣を歩いていた佐倉が、どこか感慨深げに呟いた。その言葉に、ダーシエンカは少なからず驚きを覚えた。おおかた佐倉も、周囲の生徒と同じように浮足立っていると想像、というより半ば確信していたから。

「まあ、俺も前に“少し”あってね。周りのヤツが浮足立ってるのを見ると、複雑なんだ」

ダーシエンカの視線に気づいた佐倉は、照れくさそうに頬を掻く。「そう、なのか……」

ダーシエンカはなんとなく深く触れない方がいいと思い、それだけ言うとは黙って教室へと向かった。

教室も、昨日起こった通り魔事件のことで持ちきりだったのだが、被害者が同じクラスのイズミということも関係しているのか、その表情は他の生徒たちよりも不安そうだった。

案の定、教室にダーシエンカと佐倉が入ると、矢継ぎ早に質問が浴びせられた。

そのほとんどがイズミの安否やダーシエンカのことを気にするもので、ダーシエンカはなんと答えるべきか戸惑っていたのだが、それらの質問を佐倉が上手く捌いてくれた。

佐倉が質問に答えると、教室中に安堵の溜息が広がる。

みんなどこからかイズミのことを知り、心配してくれていたのだろう。イズミだけでなく、ダーシエンカのことまで。

そのことがダーシエンカにとってはどうしようもなく嬉しく、また不思議な感覚だった。

イズミ以外の人間に気遣われるなどという想像は、ダーシエンカの中にはなかったのだから。

（これが、“日常”を生きるということなのだろうか……）

ダーシエンカはそんな感慨を抱きながら、クラスメイト達に「大丈夫だから」ということを伝えた。

ダーシエンカが言葉を選びながら現状を説明し終わると、チャイムとともに三十代半ばの温和そうな顔をした担任が教室に入ってきた。

それを合図に、ダーシエンカの周りに集まっていた生徒たちは各々の席に戻っていく。

「はい、急いで席に着いて。今日はいろいろと話さなきゃならないことがあるから」

担任は教卓を生徒の名簿でパンパンと叩きながら声を張り上げる。いつもならのろくさと移動する生徒達も、今日ばかりは迅速に動いていた。

皆予想がついているのだろう。担任の教師の口から告げられることが。

「ええ……皆さんテレビや新聞などで観たかもしれませんが、うちの学校の近くで通り魔事件が起きました。そして、皆さんと同じクラスの如月イズミくんがその被害者です」

担任はするように話を切り出し、先ほどダーシエンカがクラスメイト達に語った内容と同じものをそのあとに続けた。

ダーシエンカから聞いていただけあって、微かなざわめきが起こることもなかった。

「あと、しばらくは放課後の校内での活動は禁止。言うまでもないと思うが、寄り道も禁止だ。それから、体育祭も無期限延期が決定

した」

担任はさしたる感情を込めることもなく語る。

語られる内容は半ば予想していたものではあったのだが、体育祭の無期限延期は微かなざわめきを起こした。

「本校の生徒が被害を受けたのに、祭りとな名のつくものを行う訳にはいかないだろ？　なに、犯人が捕まればすぐに行えるさ。如月が参加できるかは厳しいが、如月自身は体育祭が早急に開催されるのを望んでいたよ。まったく、あれほど肝の据わったヤツだとは思わなんだ」

担任は苦笑を浮かべながら肩をすくめた。

それから通常通りのホームルームを行い、担任は教室から去っていった。

ダーシェンカは担任の背中を何とはなしに見送り、眼前の席を見やった。

普段ならばイズミが座っている席。

そこにイズミがいない、ただそれだけのことがダーシェンカを不安にさせた。風邪などで休んだだけならば話は違ったのだろうが、通り魔に刺されてという異常な理由での欠席。

加えて魔術師の襲撃などという可能性を考慮しだすと、ダーシェンカは気が気でなかった。

＊ ＊ ＊

ほとんどの生徒達が朝のホームルームを行っている最中、二人のイレギュラーが神代学園高等部の生徒会室にいた。

一人は、この部屋の主たる来栖千澄。もう一人は、本来この場に  
いる筈がない中等部の生徒、クレア・ブリンズフィールドだった。  
来栖は焦燥しきった顔でパイプ椅子に腰掛け、両腕を長机につ  
いている。

対照的にクレアは、涼しげな表情で壁に寄り掛かっていた。口元

には、どこか淫靡さを感じさせる微笑みが浮かんでいる。

両者の間には、険悪な空気と静寂が漂っていた。

「これはどういうことだ！」

来栖は静寂を振り払うように、思い切りテーブルを叩きつけた。

それでもクレアは眉一つ動かさず、涼しい顔で壁に寄り掛かり続ける。

来栖はそんなクレアを思い切り睨めつけ、言葉を続けた。

立場も能力も、クレアの方が圧倒的に優れているのだが、この場——学校という、日常の範疇でならば、来栖もありったけの怒りをクレアにぶちまけることが出来た。

だから、相手への恐怖などということは頭の片隅に追いやり、思うがままに感情を吐き出す。

「なぜ如月くんに手を出した！ 私が信用ならなかったのか？ それとも気まぐれにか！？ どちらにせよ、日常に影響が出てしまった……！」

来栖は叫び、頭をクシャクシャと掻いた。

この不可解な言動が人に聞かれる心配が来栖の中にないわけではなかったが、目の前にいる天使のような悪魔が手を打っていないはずがないと考え、声量は抑えなかった。

「質問に答えるなら、ですね。あなたを信用していない訳ではなく、ただ単に暇つぶしと実務を兼ねて如月先輩を刺しただけです」

クレアは壁に預けていた体をヒョイと起こし、愉しそうに微笑んだ。実力差から考えれば、格下と呼ぶのすら憚られる来栖の言動に気分を害した様子もなく。

それは、クレアの美点と悪癖を兼ねた振る舞いだった。

「暇つぶし、というのは来栖先輩が如月先輩の隙を突いてサクツと殺してしまうよりは、警戒を煽って多少の戦闘を起こす方が面白いという意味で、実務とは審判者として試す必要があったということですよ。建前上、ね」

クレアは“日常”の皮を被りながら、淡々と“異常”を語る。

「そうだろうとは、思っていた……」

クレアの言葉に、来栖は顔を深くうつむけた。

「そんなに悲観することもないでしょうに。如月先輩の試験の結果は散々。要は如月イズミは隙だらけということが判明したんです。来栖先輩ならサクッとやれるでしょう？ 卓越した“霊視”を持つあなたなら」

「この一件で如月くんは多少なりとも警戒を強めているはずだ……仕事がやりにくくなったことに違いはない。もとより分が悪いのだ……覚醒したネクロマンサーに“普通の”人間が挑むなど」

来栖は苦々しげに顔を歪め、歯噛みした。

「でも、他に道はないでしょう？ 大切な家族を助ける道は」

クレアは顔を歪める来栖を愉しげに眺め、高慢な口調で言い放つ。その言葉に、来栖は顔をキッとあげてクレアをねめつけるが、返す言葉など浮かんできてくれはしなかった。

「分かって、いる」

意とは反して、来栖は服従の言葉を吐き出す。

「それなら結構です。では、私はそろそろ中等部に戻りますね？ 失礼します、来栖先輩」

クレアはワザとらしくスカートの裾を持ち上げて一礼し、部屋から出ていった。

クレアの背中を見送った来栖は、色がなくなるほどに拳をキツく握りしめる。

覚悟は決まっていたはずだった。一番大切なものと、そうでないモノを天秤に掛けるといごく単純な判断。単純なだけに、揺らない。

そう思っていたのに、いや、思いこもうとしていたのに、その判断は揺らぎ始めていた。

（私が如月くんを殺せば、兄さんは助かる。だけど……そんな私を兄さんはどう思うだろうか）

来栖は自身に問うてみるも、その答えは考えるまでもなかった。

答えが明確だからこそ、来栖は苦しんでいるのだから。  
それでも。

「兄さんがいないと、私は……」

来栖はこぼれ落ちそうになる涙を堪えながら、震える声で呟いた。



## 第2章 物語（ニチジョウ）の崩壊は、意外な所から（2）

イズミのいない一日は、ダーシエンカが予想していたより、スムーズに過ぎていった。

時折感じる物足りなさや不安などはどうしようもなかったが、困るような出来事は一つも起こらなかった。

いつの間にか、ダーシエンカもそれだけ“日常”に馴染めていたということの証明だった。

それもこれも、イズミが適度な距離感を保ちながらダーシエンカと学園生活を送ってくれていたからなのだろう。

そんなことを思いやりながら、ダーシエンカは鞆に荷物を詰め込み、家に帰る準備をしていた。正確にはイズミの病院へ寄る準備、なのだが。

「ダーシエンカさん、今日は一人で帰るの？ だったら私たちと一緒に帰らない？」

黙々と荷物を詰めていたダーシエンカに、一人のクラスメイトが声を掛けた。

ダーシエンカは荷物を詰める手を止め、声の主に視線を向けた。

そこには、今日一日何かとダーシエンカのことを気にかけてくれた女子が三人立っていた。

「誘いはありがたいんだが、イズミの病院に寄らなきゃいけないんだ。方向が同じなら途中までなら大丈夫だけど」

「ああ、確かイズミくんが入院してるのって丘の上にある病院だよね？ あそこは私たちと反対方向だから……」

「そうか。でも誘ってくれてありがとう。イズミが退院したらそのときは一緒に帰ってくれ」

申し訳なさそうに言いよどむクラスメイト達に、ダーシエンカは微笑んだ。

「分かった、それじゃあまた明日。ダーシエンカさんも気を付けて

ね？ 通り魔が潜んでるかもしれないんだから」

「あ、いや、私ならだいじょ……そうだな。気をつけるよ」

ダーシエンカは言いかけたことを途中でとめ、苦笑を浮かべる。よもや自分が人外の者だから大丈夫などとは言えるはずもない。

（人外、などと言ったらイズミにまた怒られそうだな……）

ふとそんな考えがダーシエンカの脳裏をよぎり、苦笑が自嘲を帯びたものになる。

そんなダーシエンカに首を傾げながらも、クラスメイト達は別れを告げて去っていった。

「さて、と。私も行くとするか」

ダーシエンカはイズミに渡す予定のプリント類を詰め込んだことを確認し、教室をあとにした。

いつもなら校庭などから部活を行っている生徒達の声が響いてくるのだが、今日はそれがなかった。放課後の活動が禁止されているから当然と言えば当然なのだが、どうにも違和感を持ってしまう。人気のないグラウンドの脇を通り抜け、ダーシエンカは黙々と歩く。周囲からは事件に怯えた様子もない生徒達の楽しげな掛け合いが聞こえてくるのだが、耳には入っても、頭には入ってこなかった。

頭にあるのはやはり、イズミと通り魔のことばかり。

このまま通り魔事件が続けば、それはやはり一般規格の犯罪者という可能性が濃くなる。

反対にこれでパタリと事件が止まってしまえば、魔術師の仕業という線も出てくる。

とは言え、どちらに転んだとしても通り魔が“日常”と“異常”のどちらに位置する存在だと断定出来るワケではない。

つまりは、座して待っていても解決の糸口など見えてこないのだ。（やはりこちらから動くべきなのか……？）

ダーシエンカはあごに手を当てて深く考え込む。

歩きながら悩むその様は周囲の視線を集めていたのだが、そのことにダーシエンカが気付くはずもなく、そのまま足を進めた。

そしてその、少し不機嫌にも見えるような表情のまま、ダーシェンカはイズミの病室に辿りついた。

イズミの病室は、事件の被害者という特別な事情も相まって、一介の高校生には多少不釣り合いな個人部屋だった。

病院に運ばれたときはベッドの空きの都合からこの部屋になっていたのだが、結局この部屋に落ち着いたのだ。

そんな部屋で、イズミは呑気にテレビを眺めていた。

先ほどまでは定期的にエーテルを張り巡らせていたのだが、そんなことはダーシェンカに対しておくびにも出さなかった。

しかし、眉根を寄せながら部屋に入ってきたダーシェンカに、イズミはポカンと口を開けた。

ダーシェンカの表情はまるで、難解な殺人事件に立ち向かう偏屈な老警部に近いものすら、イズミに感じさせた。

「学校で……何かあったの？」

そんな表情に、イズミは呆然と呟く。

「え？ あ、いや何もなかったぞ。いつも通りだった」

ダーシェンカはイズミの病室に辿り着いたことすら気付いていなかった様子で、少しだけ肩をビクつかせた。

イズミはそんなダーシェンカの姿に首を傾げる。

「すごく、悩んでるみたいだったけど？」

「いや、悩んでいたわけではない。少し考え事を……」

「おおかた、事件の犯人をどうしようって考えてたんでしょ？」

口ごもるダーシェンカに、イズミは肩をすくめて苦笑した。

「いや、そんなことは、決して……」

「いいよ、隠さなくて。ダーシェンカにそういうことを考えるな、っていうのは無理な話だとは思ってたから。だけどさ」

「だけど？」

「だけど……無理はしないで。相手が魔術師だっていうのなら、僕がまた襲われる可能性が高いだろ？ それをダーシェンカ一人で解決しようなんてことは考えないで欲しいんだ。それはあくまで僕の

問題なんだし」

「だが……イズミの問題は私の問題でもある」

「まあ、そうだよね。エーテルを共有してるんだし……だからさ、この問題に取り組むなら二人で取り組もう。あくまで魔術関係なら、って話だけど」

イズミは照れ臭そうに頬を掻きながら呟いた。

イズミはイズミなりに考えていたのだ。自分がどのように行動すればダーシェンカの負担を軽くできるのか。

一日中ベッドの上で考え抜いて出てきた答えが、たったいまダーシェンカに告げたもの。

魔術という“異常”を遠ざけるのではなく、しっかりと受け止め、二人の問題として捉えるという方法。

ダーシェンカに普通に生きて欲しいという願いはあるものの、こういう状況でも普通を求めるのは逆に酷というもの。

ダーシェンカというカタチが、普通の少女と呼ぶにはあまりに歪なように、イズミというカタチも、普通と呼ぶにはあまりに歪なのだから。

だから、そのカタチに適した在り方をしようとイズミは決めたのだ。

「というわけで、僕が退院するまではおとなしくしててね」

イズミの言葉にどこか呆けた表情を浮かべたダーシェンカに、念を押すようにイズミは微笑んだ。

「わ、分かった」

ダーシェンカは少しだけ言いよどみながらも、しっかりと頷く。

その頬は、ほんのりと赤く染まっているようだった。

二人が何か言葉を交わすでもなく見つめ合っていると、病室のドアが不意にノックされた。

イズミが「ハイ」と声を上げると、ドアがゆっくりと開かれた。

「あー、ごめんね。二人きりのところにお邪魔しちゃって」

わずかに開かれた扉の隙間から松崎が申し訳なさそうに顔を覗か

せる。

「邪魔も何もないですよ、松さん」

イズミはわずかな隙間から滑り込むように病室へと入ってきた松崎に苦笑を向ける。

苦笑を向けられた松崎は「ならいいんだけどね」と肩をすくめながらベッドの傍らに立った。

「それで、怪我は特に異常ない？」

松崎は表情を引き締め、イズミに問う。

午前中も同じことを聞かれたイズミは、そのときと同じように「特に問題ない」と答えた。

イズミの返答に松崎は満足そうに頷いたのだが、その表情はどこか優れなかった。

それを感じ取ったダーシエンカが、松崎に問う。ダーシエンカも昨日のうちに松崎が両親の関係者だということを知り、松崎に対して一定の信頼を置いていた。

「何か、あるんですか？」

「何か、って訳じゃないんだけど……」

ダーシエンカの問いに松崎は言いよどむ。

話すわけにはいかないというよりも、どこから話したものかと思案するような様子だった。

少し思案したのち、松崎が口を開く。

「イズミくんの怪我のことなんだけど……どうにも奇妙だね」

奇妙という言葉に、イズミとダーシエンカが同時に首を傾げる。

「怪我自体は軽いものだし、順調に回復してるんだけど……だからこそ引つかかるのよね。まるで早く回復するように細心の注意を払いながら刺したみたいだし、何よりイズミくんが気を失った、ってトコが引つかかるのよ」

松崎はあごに手をあて、眉根を寄せながら呟いた。

医者としての推察というよりも、何か他の立ち位置から物事を見ているような物言いだった。どこかしら“異常”を臭わせるような、

そんな物言い。

「僕が気を失ったことの、どこがおかしいんですか？」

「うーん。イズミくんの出血は、気を失うほどの量じゃなかったのよね……血を見たショックで気を失うにしても、イズミくんはそういうのに耐性が付いてるみたいだから、奇妙でしょ？ 一応何かしらの薬品が使われている可能性も調べてみたんだけど……そっちも完全にシロ」

松崎は完全にお手上げだとばかりに肩をすくめる。

「つまりは……ただの通り魔じゃない、と？」

ダーシエンカは表情を引き締め、鋭い視線を松崎に向けた。

松崎はその視線にたじろぐこともなく「おそらく」と応じる。

「まあ、私はソッチ方面は明るくないから、一般的に見て奇妙ってだけの話よ？ ひょっとしたらイズミくんが血を見て気を失っただけ、って可能性もあるんだから」

松崎は真剣な表情を崩して、からかうような笑みをイズミに向ける。

「それも……大いにありうる気がします」

イズミは言いながら、苦笑う他なかった。

「まあ、判断はあなた達に任せるわ。あ、それからイズミくんは明日にも退院できるわよ。検査は全部済んでるから今日退院でもいいんだけど……どうする？」

「きょう退院できるなら退院しますよ。ダーシエンカを一人にしとくのは不安ですから」

松崎の心配するような視線をよそに、イズミはなんてことないように即答した。

その言葉に、松崎もダーシエンカも呆然とする。

夏の出来事を詳しく知らない松崎は、イズミの見かけとは駆け離れた精神力に。ダーシエンカは『心配』という単語に意識を持ってかいていた。

そんな二人をよそに、イズミはベッドを降りて身支度を整え始め

る。身支度とは言っても、少ない荷物を鞆に入れるだけの作業なのだが。

「あの、退院の手続きとかって……」

身支度を整えたイズミは、呆然としている松崎に問うた。

「あ、ああ！ 手続きね！ それなら私がやっとくから大丈夫よ。身支度が済んだんなら家に帰って大丈夫。怪我のことで、気をつけることは午前中に話した通りだから忘れないでね？」

松崎は意識をどこかに飛ばしていたのか、肩をビクつかせてイズミの質問に応じた。

イズミはそんな松崎に怪訝な視線を向けたものの、それ以上とくに何かを聞けるような感じでもなかったのでダーシエンカに視線を移す。

「あ、荷物なら私が持つぞ？」

イズミの視線に気付いたダーシエンカは、イズミが持っているカバンに手を伸ばした。

「これくらいなら大丈夫だよ、ダーシエンカ」

イズミは手でダーシエンカを制し、微笑む。

ダーシエンカは少しだけ心配そうな視線を見せたものの、イズミが無理をしているわけではないと悟ったのか、おとなしく引き下がった。

「あの、もう僕らは帰っても大丈夫なんですか？」

「ん？ ああ、もう帰っていいわよ。なんかあったらすぐに電話しなさいね。私はイズミくんの保護者みたいなものでもあるんだから準備を整え終えたイズミに、松崎は優しく言った。

「はい。それじゃあ失礼します」

イズミは傷が痛まない程度に頭を下げると、ダーシエンカとともに病室を出ていった。

松崎は笑顔で手を振りながら二人を見送る。

「……フウ。とりあえず指示通りにしましたよ、雪さん」

松崎は閉じられた扉を見やり、溜息を吐きだしながらひとりごち

た。

松崎は、何が起きているかなど詳しくは知らなかったし、知ろうとも思わなかった。

勤務先の近所で通り魔事件が起こり、その被害者が搬送され、自分がその治療をする。あとは適当にその処置後の経過を看ていけば、通常通りの業務が終了、したハズだった。

だが、一本の電話がそれを変えた。

昔お世話になった人からの電話。被害者が恩人の息子ということにも驚かされたが、それ以上に、その人物の言葉が松崎を困惑させた。

『うちの息子が何か事件に巻き込まれるかもしれないから、そのときは手回しをよろしく』

事件が起きてから入った連絡ではあったが、その口ぶりは事件を予見したものだった。

松崎が雪に、イズミが既に事件に巻き込まれていることを告げると『じゃあさりげなく魔術絡みだと匂わせて』という言葉が返ってきたのだから、いよいよもって松崎は困惑した。

伝えたいのなら自分でハッキリと伝えればいいじゃないですか、と言ってみたものの、告げられる状況じゃないと言われてしまっただけは仕方なかった。

とはいえ、昔その“魔術絡み”でお世話になった恩人の頼みを断れるはずもなく、松崎は雪の指示通りに動いた。

その指示がどのような意味を為すのかなど、日常を生きる松崎には推測することも出来なかったが、雪の指示に過ちがあるとは到底思えなかったので、迷うこともなかった。

だが、願わくば。

「すべてが丸く収まりますように……」

松崎は、初々しいようで所帯じみている若い二人の姿を思い浮かべながら、ひっそりと呟くのだった。



＊ ＊ ＊

「……ただいま」

来栖は靴を脱ぎながら、帰ってくるはずもない挨拶を発した。

そこは年季の入った二階建てアパートの一室で、来栖が生まれてからずっと暮らしている家だった。

玄関にはたった今来栖が脱いだローファーと、男物のスニーカーが一足ずつ並んでいる。

来栖はスニーカーに切なげな一瞥をくれ、リビングに向かった。決して広いとは言えないリビングの片隅には、小さな仏壇が備えられていた。

来栖は仏壇の前に腰掛け、仏壇に供えられた写真を見つめる。

そこには、今は亡き来栖の両親、来栖と兄の四人が写っていた。

来栖が幼稚園に入ってからすぐに撮った写真で、父と母の間に学ランを着た当時中学生の兄がおり、その肩に来栖が乗っていた。

来栖がまだ何も知らず、幸せだった頃の写真。

来栖はしばらくの間無言でその写真を見つめ、立ちあがった。

立ち上がり、寝室として使っている和室のふすまをゆっくりと開く。

そこには、来栖のもっとも愛する人――兄、来栖久弥が眠っていた。いや、正確には眠ってなどいない。死んでいるのだ。

少なくとも常識の範疇では。

呼吸もしていないし、心臓の鼓動も停まっているのだから。それも、五年もの間。

それでも久弥の肉体が腐ることはない。ましてや、髪の毛や爪が伸びることすらない。

緩くウェーブのかかった、日本人にしては色素の薄い髪は艶をおびていたし、病的なまでに美しい白い肌も、どんな人間と比べても遜色がなかった。

久弥の時間は五年前から止まったままなのだ。

異形の者を討伐する退魔師として名を馳せていた久弥が、任務に失敗した、五年前のあの日から。

「……ただいま」

来栖は久弥が眠る蒲団の傍らに座り、囁くように言った。

久弥が反応を示すことはない。それでも来栖は語り続ける。

「兄さん、私はやります。私は、兄さんに嫌われることよりも、兄さんを失うことの方が怖いんです。だから如月くんを……殺します。それしか兄さんを助ける方法はないから」

「分かっています。兄さんがそんなことを絶対に許さないってことなど。でも、私はやっぱりダメなんです。兄さんがいないと、生きている気がしない」

来栖は呟き、久弥の頬に手を伸ばす。

あと少しで頬に手が触れるというとき、何かの障壁が来栖の手を阻んだ。

あと少し、ほんの少しの所で来栖の手は久弥の頬に届かない。

その障壁は、明確な拒絶を示すわけでもなく、ただ静かに存在を主張する。

討伐に失敗した日に兄をここまで運んでくれた仲間の話によると、久弥のいる空間と来栖達のいる空間では、次元がズレているということだった。

魔術にそれほど明るくない来栖にはきちんと理解できなかったが、その障壁が久弥を封じているような形を成してらしい。

こんなにも近くににいるのに、触れることすら叶わない。

五年間。来栖がそのことをもどかしいと思わない日は、一日たりともなかった。

久弥が死んでいたら、来栖も迷うことなく後を追っていただろう。目覚めるかどうか分からない昏睡の中に久弥がいたなら、いつまでも目覚めるのを待ただろう。

だが、実情はどれも当てはまらなかった。

生きているのか、死んでいるのかも分からない。術式を解除しよ

うにも、誰一人として解除できるものはいなかった。

そこに現れたのが誘惑する者、メフィストフェレス——クレア・ブリンズフィールドだった。

ある日突然来栖のアパートに尋ねてきたクレアは、前置きもなしに「キミのお兄さんを救ってあげよう」と告げた。

来栖は、自分よりも明らかに年下に見える少女の傲慢な口調に戸惑ったものの、その言葉に潜む威厳を本能で感じ取った。

だから来栖は黙って頷き、クレアを久弥の眠る部屋へと通した。

久弥を目にしたクレアは、与えられた玩具を楽しそうに眺める子供のような表情を浮かべた。

「……ほう。極東の島国にもこんな洒落た芸当をする者がいたのか」  
クレアは声を弾ませながら呟くと、久弥の頬に手を伸ばす。

そしてあろうことか、来栖がどんなに触れたくても触れられなかった久弥の頬に触れたのだ。

その光景に、来栖は言葉を失う他なかった。

「これで信じてもらえるかな？ 私がキミの兄を救える者だと」

言葉を失っている来栖に、クレアは優しく微笑んだ。救い主のように辛辣に、悪魔のように優しく。

来栖がそれに抗えるはずがなかった。来栖は、全ての神経を首を縦に振ることに使うだけで精一杯だったのだから。

たとえこのときの来栖が、クレアのもたらす悪魔の取引を予見できたとしても、断ることなど敵わなかっただろう。

あとの話は簡単だった。

イズミの暗殺という条件を提示され、それが成功した暁に久弥に掛けられた魔術を解くという取引。

久弥が退魔師として名を馳せていたとはいえ、来栖は魔術の世界にそれほど明るくなかった。それでも、覚醒したネクロマンサーが、凡百の魔術師とは一線を画した存在であることは理解していた。

覚醒したてのネクロマンサー相手とはいえ、そんな存在の暗殺など、一介の魔術師ならまず引き受けない。ましてや、“普通の”少

女である来栖ならなおさらだ。

だが来栖はクレアの取引を迷うことなく受けた。

人一人どころか、異形の者すら殺したことの無い普通の少女が、だ。

それでも、来栖に勝機がない訳ではなかった。

普通の少女として生きてきた来栖の中には、一つの大きな“異常”が内包されていたのだ。

如月家にネクロマンサーの素質が代々受け継がれてきたように、来栖家にも受け継がれてきた“異常”があった。

それは、優れた魔術師と比較してなお超絶と断言できる、卓越した霊視能力。

魔術師にとっての視力とはすなわち、どれほど密度の薄いエーテルまでを可視できるかということである。限りなくゼロに近い濃度のエーテルまでも可視できればそれは、一流の眼という証となる。

だが、来栖家の者の瞳は次元が違った。来栖家の者が持つ瞳は、エーテルの濃度でなく、エーテルの流れを読み取ることができたのだ。

無論、一流の魔術師ならエーテル濃度の分布から流れを読み取ることができる。だがそれはあくまで事後的なもの。エーテルの行く先——未来を視ることなど叶わない。

だが来栖家の者にはそれが出来た。エーテルがこの先、どのように流れ、どのように収束するのか理解できた。

一流の魔術師が一通りの足跡から物事を予想するのだとすれば、来栖家の人間は一步目の足跡でその後の出来事を予想するのだ。

一流の魔術師の眼の延長線上にあるが為に、固有名称がつくことはなかったが、魔眼と言って遜色ない代物が、来栖の瞳だった。

「私は、やるよ……」

来栖は呟き、普段は抑えているエーテルの可視領域を最大限まで引き上げた。

瞬間、来栖の世界に眩い光が放たれる。それは、普通の人間は決

して目に出ることが出来ない、魔性の光。

来栖はその光を眺め、自分の能力が健在であることを確かめた。  
なんの訓練も積んでいない来栖でもエーテルの流れが、手に取るように分かる。

部屋を漂うエーテルは穏やかで、なんの変化も訪れないということを告げていた。

その流れに大きな変化があるとすれば、魔術師同士の争いが起こるとき。

来栖は久弥の顔を見つめながら、エーテルの急流を直視する覚悟を固めていった。

＊ ＊ ＊

イズミは、猛烈にお腹が痛かった。

傷口が開いた、とかそういうモノではなく、内臓の類が精神的に痛くなる、そういうモノ。

イズミが立っているキッチンには、焦げ臭い煙が充満していた。

「も、もういいよ。ダーシエンカ。あ、あとは僕がやるから……」

イズミは額に脂汗を浮かべ、ぎこちない笑みをダーシエンカに向ける。

イズミの視線の先には、黒と白のチェックのエプロンを身につけたダーシエンカが立っていた。

ダーシエンカの手には長皿が握られており、その上には魚“だった”モノが物悲しそうに存在を主張していた。それはもはや魚というより、火にくべればよく燃えそうな物質と化していたのだが。

「す、すまない……」

ダーシエンカは申し訳なさそうに顔を俯け、魚だったモノに視線を落とす。

イズミはそんなダーシエンカに、愛おしげな苦笑を向けた。

時間は三十分ほどさかのぼる。

病院から帰ったイズミは、夕食の準備に取り掛かろうとした。怪我をしているとはいえ、

二か所に銃創を負ったまま戦った経験を持つイズミにとって、料理程度はなんの苦でもなかった。

しかし、ダーシエンカはそれを良しとしなかった。

怪我人に料理させて自分がそれを食べるだけというのは耐えられない、とダーシエンカは思ったのだ。

思った結果、ダーシエンカは。

「私が料理する」

と、言った。確かに言った。少なくともイズミの耳にはそう響いた。

イズミはダーシエンカと出会ってこのかた、ダーシエンカが料理する所など見たことがなかった。それに、過去の状況をかんがみる限り、料理の経験があるとも思えなかった。

ダーシエンカはイズミから受けた“知識”の中に料理のスキルも含まれているから問題ないと主張した。

が、知識だけで出来るほど料理というのは甘くない。レシピがあれば誰でもその料理を作れるというものでないのと同様に。

イズミとしては、ダーシエンカが料理に挑戦するというのは悪くないことではあったのだが、間の悪いことに、冷蔵庫の中には焼き魚を作る材料しか入っていなかった。それも切り身ではなく、そのままの姿のサンマが二匹。

調理実習のほとんどが簡単な卵料理から始まるのを考えれば、決して初心者向けの料理とは言えない。

それでも、脇で見ながら指導すれば形にはなるだろうと考え、イズミはゴーサインを出した。

そして、現在に至る。

順調に調理されていたかに思われたサンマは、最後の最後で消し炭となり、ダーシエンカは意気消沈となり、イズミは額に脂汗を浮かべていた。

失敗の原因は、少し目を離している間に、という単純なもの。

「まあ、僕も目を離したのが悪いんだし、ダーシエンカのせいじゃないよ」

イズミは微笑み、ダーシエンカの手から長皿を受け取る。

心の中で謝罪の言葉を精一杯述べながら、魚だったモノをゴミ箱に投下する。あそこまで炭化してしまえば、悪臭を発する心配はないだろう。少なくとも次のゴミの日までは。

「あ、いや、その……もうちょっとこんがり焼いた方がおいしいかな、と火を強めてしまったんだ」

ダーシエンカはチラチラと申し訳なさそうに見ながら呟く。

（なるほど……どうりであり得ないはずのこんな事態になるはずだ）

イズミは苦笑いながら胸中に呟いた。

イズミが目離れたのはものの五分程度。その間にこうなるにはそれなりのナニかが必要だとは思っていたがやはり、と言ったところか。

如月家の魚焼きグリルは雪が様々な魚を調理するせいか、マックスの火力が異常に高い特別製なのだ。

「まあ、失敗しちゃったものは仕方ないよ。次は頑張ろう」

イズミは長皿を流しに入れ、改めて夕食の準備に取り掛かった。

とはいっても、お湯を沸かして容器に注ぐだけという——それこそ初心者に優しい——ごく簡易な作業なのだが。

＊ ＊ ＊

日もすっかり暮れきった宵闇の街を、クレアは目的もなくぶらついていた。

まだ暑さ残る九月といえど、半ばを過ぎてしまえば夜はだいぶ涼しくなっていた。

クレアとすれ違う人々も、額に汗を滲ませることもなく涼しげな表情で歩いている。

（まったく……人間というのは恐ろしいな）

クレアは道に立ち並ぶ雑居ビルを眺めながら、ふとそんなことを思いやった。

クレアがまっとうな人間として生きていた頃は、ビルなどというものは存在しなかった。

高いものと言えば、敵の侵入を見張るための塔ぐらいしかなかったような気がする。

それを思えば、ここ“数百年”の人間の進歩というのは恐ろしいものがある。

それこそ、魔術という異常すらも軽く凌ぎかねないほどに。

（文明が道を造ったのか、道が文明を創ったのか……などはどうでもいい問答か）

クレアは自分の感傷を一笑に付し、歩調を速めた。

なんとなく散歩に出てはみたものの、人混みの中はやはり落ち着きかなかった。

個々の会話が混じり合って出来る喧騒が、クレアにとってどうしようもなく耳障りだった。

久方振りの喧騒というのも勿論あるのだろう。だがそれだけでなく、周りにいる“人類”

が、すでに自分の知る“人類”でないことがクレアにとって何よりも辛かった。

人類は様々な道具を生み出し、在り方すらも変わってしまった。

誰でも遠く離れた人間とも会話ができるようになり、見知らぬ人間とも架空の空間を通して意思の疎通が出来るようになった。

それは人々の繋がりをより強固なものとし、同時に繋がりから疎外された“周辺”を生み出した。

周辺の者とは、新しい手段で意志の疎通をすることが出来ない者だが、その者達はそのことを苦とは思わないだろう。これまでしてきたことを、死ぬまでのほんの短い間だけ続けられただけなのだから。変わる必要などないのだ。



だがクレアは、そのことがどうしようもなく哀しかった。

疎外される者に、自分を見出してしまうから。止めどなく流れ続ける“日常”に、為す術もなく置いていかれる自分。

異常の最奥に身を置く者が何を世迷い言を、と魔術師は嗤うだろう。

だがクレアは、異常の中にありながらどうしようもなく日常を愛しているのだ。決して触れることが出来なくとも。

そう、ちょうどどこかの兄妹のように。

異常を極めたが故に日常とは決して相容れることが出来ない。今のように、ほんのひと時なら、日常を過ごしていると錯覚することができる。だが、長くは無理だ。自分の“異常”を突き付けられずにはいられない。

そんな自分の境遇を自嘲的に思いやり、クレアは立ち止まる。

道行く人たちは少しだけ視線をクレアに向け、足を止めることもなく進んでいく。

クレアはおもむろに夜空を見上げた。

夏の、それも街中の夜空に、星は少ない。

「お前だけは、変わってくれるなよ」

クレアは切なそうに目を細め、優しく呟いた。

お前という言葉が夜空を指すのか、他の何かを指すのかは、クレアにしか分からない。

クレアは視線を元に戻し、宵闇の街を再び歩き出す。

その背中だけは、日常を生きる少女のものだった。

＊ ＊ ＊

退院してから初めての登校の道すがら、イズミは自分に視線がチラチラと向けられているのを感じていた。

家を出てからすぐはそんな視線を感じることもなかったのだが、高校の近くになると状況が変わった。人の口に戸は立てられ

ぬというが、まさかここまで露骨に情報が漏れているとは思ってなかった。

学校の敷地内に入った今は、さきほどよりもさらに集まる視線が増えている。皆者珍しいのだろう、ちょっとした非日常を体験させられた者が。

もつとも、ダーシエンカがチラチラ見られることでその手の視線への耐性を付けていたイズミにとってはこの程度の視線など、どうということもなかったのだが。

それはイズミの隣を歩くダーシエンカと佐倉も同様らしく。

「しっかしよう、イズミもあつという間に有名人だな。ダーシエンカちゃん越えも夢じゃない、ってか？」

イズミの隣を歩いていた佐倉が、イズミの顔を覗き込みながら馬鹿にしたような笑みを浮かべた。

「あー、そうだな。理由が理由なので嬉しくもないがな」

「そう言うなよ。かの偉人も言っただろ？ 愛の反対は無関心である、と」

「何が言いたいんだよ？」

イズミはマザー・テレサの言葉を引用した佐倉に、この上ない軽蔑の視線を向ける。

佐倉はそんなことを意に介する様子もなく飄々と微笑み、続けた。

「気味悪がられるよりはマシ、ってことだよ。な、ダーシエンカちゃん？」

「ん？ ああ、そうだな。だが、下賤な興味は心地よくない」

不意に振られた話題に、ダーシエンカはどこか心ここにあらずと言った様子で答えた。

イズミはそんなダーシエンカを見やり苦笑する。

おそらく警戒しているのだろう、敵の襲撃を。イズミも警戒していない訳ではなかったが、さすがにエーテルは飛散させていなかった。それは、エーテルの飛散が著しく集中力を消費するというのもあったが、なにより敵が人混みの中で襲ってくるタイプとは思えな

かったからだ。

最初の襲撃は、人気の全くない場所で行われた。だからと言って二度目と同じとは限らないのだが、それでもイズミはなんとなく今は大丈夫だという確信があった。

（まあ、そんなことダーシエンカに言ったら怒られそうだけど……）イズミは自分に説教するダーシエンカの姿をありありと思い浮かべながら、苦笑を深めた。

「まあ、僕は気にならないから大丈夫だよ。だからダーシエンカもそんなにしかめっ面しないでさ」

イズミは苦笑のまま言い、歩調を速めた。

イズミはダーシエンカへの手前、気にならないとは言ったものの、出来ることならば見知らぬ人たちの視線からはお暇いとましたかった。

「なっ、私はしかめっ面など！」

「いや、かなり険しい表情だったね。昨日の朝俺に向けた殺気立った表情に次いで」

歩調を速めたイズミに、ダーシエンカと佐倉が続く。

佐倉の言葉が気になったイズミではあるが、深く突っ込む必要もないと思い、新たに始まった二人の言いあいいあいに耳を傾けながら教室を目指した。

人の視線を避けたくて目指した教室ではあったが、たどり着いてみればそこはそこでイズミにとって非常に大変な場だった。大変というだけで、先ほどよりは数倍居心地のいい空間ではあったのだが。

「もう学校来てダイジョブなの!？」

「本当に天罰が下りやがったな！」

「いやあ、ホントーに死ななくてよかったわ。イズミにやる香典はないもの」

「コレに懲りたらもう二度と悪さするんじゃないぞ、分かったな？」等々。遠慮もへったくれも無いような言葉が次々と、教室に入るなりイズミに浴びせられた。

イズミはその一つ一つに応じながら、自分の席に着く。

たった一日入院するだけでこうも心配してもらえるのも不思議な感覚だった。いや、この場合は事件の被害者として心配されている、と表した方が適切だろうが。

こんな状況でさえも、襲われるのが当然とばかりに言われた夏休みと比べれば、だいぶ幸せな状況だった。

イズミはそんなことを考えながら、自分の後ろの席に座っているダーシエンカに視線を向けた。

ダーシエンカは相変わらずどこか浮かない顔をしている。

「そんなに警戒しなくて大丈夫だよ。ヴェルナールの時とは違って、周りの人もみんないつも通りじゃないか」

イズミはダーシエンカが周囲を警戒し続けているということを感じ、囁くように言った。

「いや、だが……」

「大丈夫、さっきエーテル飛ばしたときに異常はなかったから。ダーシエンカはもっと楽にしてくれていいよ？」

イズミは肩をすくめながら苦笑した。

それでもダーシエンカはどこか落ち着かない様子で周囲の状況を窺い続けている。

イズミの能力をしてもなおダーシエンカが安心できないのにはそれなりの理由があった。

ナイフを使った襲撃から考えれば、敵が魔術を使ってこない可能性だって大いにありえるのだ。そうになると、イズミの能力はあまり役に立たない。何と言ってもイズミの能力は異常を感知することのみ特化しているのだから。

近くに凶器を忍ばせた人間がいようと、探知することはかなわない。

だからこそダーシエンカは、警戒を解けずにいるのだ。

もちろん、アレが本当にただの通り魔ならば今のダーシエンカの行為は徒労と消えるのだが、ダーシエンカがそんなことで気を緩め

られるはずもなかった。

イズミはそのことに思い至り、微苦笑する。

「無理は、しないでね？」

「保証はできないな」

念を押すように言ったイズミに、ダーシエンカはいたずらな微笑を返した。

イズミはその余裕を含んだ笑みに安堵し、前に向き直る。向き直ったイズミは鞆から教科書類を引っ張り出しながら、念のためにもう一度エーテルを飛散させて周囲の状況を確認した。

（うん、大丈夫。今のところ異状なしだ）

イズミは小さく頷き、担任が教室に入ってくるのを待った。

＊ ＊ ＊

騒がしい教室の片隅で、来栖は人知れず歯噛みしていた。

いつもならクラスメイトと談笑を交わしているはずのこの時間も、今の来栖にとっては苦痛でしかなかった。

極力平生を装ってはいるが、気を抜けば膝が震えだしてしまいそうだった。

（警戒、している）

来栖は周囲のエーテルの流れを読み取り、眉根を寄せた。

来栖の瞳には全てが映し出されていた。教室中の人間の思考、行動、雰囲気、感情、その他諸々の情報がエーテルというカタチをとって視覚化されている。

だがそんなものは来栖にとってどうでもいい情報だった。それらを極力意識から排し、空气中を漂うエーテル情報にのみ目を凝らす。そこには確かに、魔術の痕跡が漂っていた。

なかなか高度な探査魔術の痕跡。如月イズミは一流とまではいなくとも、中の上程度の能力は兼ね備えているように感ぜられた。それでも、来栖の心に畏れは生まれなかった。

今のところ不安要素は何もない。あるとすれば、来栖自身が人を殺すことができるか否かという点のみだった。

如月イズミを殺す状況の作成についても抜かりない。とはいっても、その準備をしているのはクレアだったから、来栖はクレアが何をしようとしているのかは詳しく知らない。

知らずとも、理解はしていた。エーテルの流れを読み取る限り、問題がないということだけは確実なのだから。

（あとは私が……）

来栖は眠ったままの兄の顔を思い浮かべながら、我知らず拳を白くなるまで握りしめた。

殺せると、昨日から何度も自分に言い聞かせてきた。

いかに相手が化け物じみた存在であろうと、自分にはこの眼がある。万に一つも間違いはないのだ。何も畏れることはない。

ハズ、なのに。

（どうして体が震えそうなんだ……！）

来栖はうつむき、唇を噛みしめた。

分かっている。怖いんだ。自分が負けることなく、人を殺すことが。法的に罪に問われる問われないの問題など、瑣末なこと。真に問題なのは、自分の心が罪の意識に押しつぶされないかどうかだ。

来栖は元来、生き物を殺すには適さぬ存在だった。虫一匹にすら慈悲をかけてしまうような、そんな人間。

だから、日常を生きてきた。魔なるモノを狩るのを生業とする一族に生まれながら、その甘さによって“異常”から遠ざけられた。その眼に大きな“異常”を内包しながらも。

だというのに来栖は、自ら異常に立ち帰らんとしている。

危機を退ける為などという大義もなく、ただ自分の願いのために善良な少年を殺そうとしている。

たとえネクロマンサーという存在が悪だとしても、如月イズミという少年の在り方は善だった。疑いようもなく。

（だとしたら……私は悪か）

来栖は分かり切っていたことを自嘲気味に呟いた。

それでも焦燥に似た気持は止まない。

だがなにより来栖を苦しめたのは、これだけ大きな焦燥が自分の中にあるというのに、如月イズミの死という結果が全く揺らいでいないということ。

来栖は、自分の中にある偽善を突き付けられた気がした。

（結局私は……殺せてしまうのか）

絶望の中で来栖は、どこか壊れたような笑みを浮かべる。

来栖はふと、視界の端に周囲のモノとは全く異なったエーテルを感じた。来栖の眼をしても僅かにしか捉えられないような微弱なエーテル。否、巧妙に周囲のエーテルと同調している恐ろしい技巧。

来栖は気配の漂う、教室の扉に視線を向ける。

そこには、朗らかな笑みを浮かべたクレア・ブリンズフィールドが立っていた。

＊ ＊ ＊

イズミは閉じそうになる瞼を根性で支えながら、六時限目の授業を受けていた。

昼食後に服用した鎮痛剤の副作用のせいでもあるのだろうが、それ以上に抑揚なく続く老教師の日本史の授業はこの上無い睡眠導入剤だった。

それでもイズミはなんとか意識を保ち続ける。普段ならばとうに心地よい眠りに堕ちているにも関わらず、だ。

ダーシエンカが警戒を怠っていないというのに、イズミがのうのうと眠れるはずがなかった。

だからイズミはシャーペンを手を刺しながらでも、意識を保ち続けた。もちろん定期的にエーテルを振りまくことも忘れない。もつとも、エーテルを振りまく疲労で眠くなっているというのもあった

のだが。

イズミがあまりの眠さに頬を思い切りつねろうとした瞬間、授業終了を告げるチャイムが鳴った。

「じゃあ今日はここまでです。それではみなさん、さようなら」  
老教師はチャイムと同時に教科書類をたたみ、教室から出ていった。

イズミはなんとか最難関の時間を乗り切った事に安堵し、溜息を洩らす。

何気なく周りを見渡してみれば、クラスの三分の一が撃沈していた。げに恐ろしきかな、老教師の睡眠導入剤。

「大丈夫か？」

周囲の光景に苦笑いを浮かべていたイズミに、後ろの席からダーシエンカが声を掛けた。

振り向いて見てみれば予想通り、ダーシエンカは平時と変わらぬ毅然とした表情を浮かべている。ダーシエンカの前では極上の睡眠導入剤も形無しらしい。

「うん、大丈夫だよ。敵の気配もなし」

「いや、それも勿論あるが、そういうことじゃなくて……て」「て？」

イズミが首を傾げると、ダーシエンカがゆっくりと何かを指さした。

その先には、イズミの手。

シャーペンで刺しすぎで、黒鉛、内出血、出血の入り混じったグロテスクなカンバスと化していた。

「……大丈夫じゃ、ないかも」

イズミはその惨状から目をそむけ、苦笑う。

半ば眠っていたせいで力の加減が上手く出来ていなかったらしい。見た目ほど痛みがないのがせめてもの救いだった。

そんなイズミにダーシエンカは呆れたように溜息を吐きだし、肩をすくめる。



「とりあえず水道で洗ってこい」

「……そうします」

イズミはダーシェンカの言葉に頷き、廊下にある水道に向かった。イズミが水道で手にこびりついた黒鉛を落としていると、誰かがイズミの肩を叩いた。

首だけでイズミが振り返ると、微笑を称えたクレアが立っていた。「ど、どうしたの？ クレアさん」

イズミは蛇口を閉め、ハンカチで手を拭いながらクレアに向き直る。

高等部の校舎に中等部の生徒がいるだけでも目立つというのに、それがとびきりの美少女とあっては人目を引かないはずがなかった。多くの生徒達が教室の中、廊下の片隅からチラチラとクレアに視線を向けている。

「いえ、来栖会長から言伝を預かっておりまして」

クレアは周囲の視線に委縮する様子も見せず、花のように微笑む。並の男ならこの笑顔だけで虜にしてしまうといっても過言ではないとさえ思える、そんな微笑。

イズミはクレアの言葉に首を傾げる。来栖からイズミへの言伝と言えば体育祭絡みなのだろうが、開催が危ぶまれている以上何か仕事があるとは思えなかった。

「とにかく、ホームルームが終わったら生徒会室に来て下さい」

「う、うん。分かった」

イズミは若干戸惑いながらもクレアの言葉に頷く。

クレアは「では、伝えましたから」と微笑み、踵を返した。

注目を一身に浴びているというのに、相も変わらず堂々とした足取りで歩いていくクレアの背中を、イズミは呆然と見送る。

クレアの姿が見えなくなったあと、自分に注目が集まっていることに気付いたイズミは、逃げるように教室に戻った。

それから帰りのホームルームを終え、イズミはクレアの言葉通りに生徒会室へと向かった。もちろん、ダーシェンカも一緒にだ。

生徒会室前に辿り着き、扉を軽くノックすると、クレアの「お入り下さい」という言葉が返ってきた。

「失礼します」

イズミは言いながら、生徒会室の扉を開ける。

西日差し込む生徒会室の中には、来栖とクレアの二人だけだった。

二人は長机に向い、書類や何やらの整理をしている。

「ああ、如月くん。ごめんね、いろいろ大変なのに呼び立てちゃって」

来栖は書類から顔を上げ、イズミに微笑を向ける。

イズミにとっての生徒会のイメージは、教師から与えられた仕事を流れ作業のようにこなしていくというものだったのだが、来栖の手元にある書類を見る限りそういうわけでもないらしい。

心なしか、来栖の顔に疲労が浮かんでいるようにも感じられた。

「いえ、幸い傷も大したことありませんでしたから」

イズミは来栖の苦労を思いやりながら微笑む。

「そうなの？ いやでも、ごめんなさい。本当なら他の人に仕事を回すべきだったんだけど……一年の取りまとめが如月くんだったから」

「あの……僕は何をすればいいんでしょうか？」

申し訳なさそうに目を伏せる来栖に、イズミは遠慮勝ちに問う。

来栖がイズミの問いに答えようとしたときだった。

クレアがすくと立ち上がり、書類を机でトントンとまとめながら言った。

「来栖先輩、書類の整理終わったので体育倉庫の片付けに行きます」

「え？ ああ、そうだったわね。でも一人で大丈夫なの？ 結構重い物もあるわよ？」

「大丈夫です。私こう見えて力ありますから」

心配げに言う来栖に、クレアは二の腕を叩きながら言った。  
力があると言う割にその腕は、ひどく華奢に見えた。

「あの……僕が手伝いましょうか？」

クレアの二の腕の頼りなさに、思わずイズミは手を挙げていた。傷が痛まない訳ではなかったが、鎮痛剤も効いているから少しぐらいの重みなら問題ないと判断した。

「そんな、悪いですよ。傷が開いたら大変ですから。大丈夫ですよ、一人で。あ、でも綱引きの綱って意外と重いんですよ……もしよかったら手伝ってくれませんか？　ダーシエンカ先輩。すぐに片付きますんで」

クレアはあごに人さし指をあてながら考え込む仕草を見ると、イズミの横で黙り込んでいたダーシエンカに視線を向けた。

「私か？　私は……」

「手伝ってあげてよ、ダーシエンカ。すぐに片付くっていうんだから」

言いよどむダーシエンカに、イズミは肩をすくめる。

「大丈夫、か？」

ダーシエンカは言外に『今異常はないのか？』という意味を込めてイズミを見つめた。

イズミは念のためにエーテルを飛散させ、周囲の状況を窺う。窺ってはみたものの、周囲に魔術師の気配は皆無だった。

「大丈夫だよ。僕はここで会長の要件を聞いているから、クレアさんの手伝いしてきて」

イズミは力強く頷き、ダーシエンカの肩を叩いた。

「なら……行ってくる」

「ありがとうございます！」

どこか渋る様子を見せたダーシエンカに怖気づく様子も見せず、クレアは満面の笑みを浮かべながらダーシエンカに歩み寄った。

「では、いきましょうか」

「あ、ああ……」

クレアは笑顔のままダーシエンカの腕を取り、戸惑うダーシエンカをよそに、半ば引きずるようにして生徒会室から出ていった。

その様はどこか、やんちゃな妹と面倒見のいい姉といったような感じで、微笑ましかった。

「あの……それで僕に用事って言うのは？」

イズミは二人の後ろ姿から視線を引きはがし、来栖に視線を戻す。「ああ、それは……」

来栖はクレアがまとめていった書類に目を通しながら、表情を陰しくした。

＊ ＊ ＊

ダーシエンカはクレアに腕を掴まれたまま校内を歩いていた。いや、引っ張り回されていると言った方が正しいのかもしれないが。時折すれ違う生徒や教職員からは怪訝な視線や好奇の視線が向けられたが、みんながみんなそんな目を向けるものだから、いつの間にやらダーシエンカは気にしなくなっていた。

「お、おい……クレア、と言ったか？ いったいつまで私を連れ回すつもりなんだ？」

ダーシエンカは呆れたように吐息を漏らし、ダーシエンカの腕を離すことなく歩き続けるクレアに言葉を投げた。

不意にクレアの足が止まり、ダーシエンカは危うくクレアにぶつかりそうになる。

「っ！ どうしたんだ？ 急に立ち止まったりして」

ダーシエンカは顔をしかめ、クレアを見つめた。

クレアの手がダーシエンカからゆっくりと離され、クレアがダーシエンカに向き直る。

その表情にはどこか、思いつめたモノが感じられた。

「どう、した？」

ダーシエンカはクレアの表情に首を傾げ、声のトーンを優しいものに変えて尋ねた。

「その、非常に言いづらいんですが……」

「ん？　なんだ？」

「高校の体育倉庫ってどこにあるんでしたっけ？」

クレアは申し訳なさそうに手を組み合わせ、ダーシエンカを上目がちに見上げた。

ダーシエンカは盛大な溜息を吐きだし、肩をすくめた。

文句の一つでも言ってるやろうかと思ったのだが、確かに中等部の生徒で、なおかつ転校したてのクレアが倉庫の場所を知らないのは無理からぬ話だった。

「高校の体育館の脇にあるプレハブがそうだ」

ダーシエンカは上目がちに見つめ続けるクレアに困ったような笑みを返し、体育倉庫に向かって歩きだした。

神代学園に体育館は二つあり、一つは高等部用で、もう一つは大学と中等部の共用のものだった。

そのいずれも、校舎から離れたところに設置されており、靴を履き替えなければ行くことが出来ない。

本来ならばいったんクレアとダーシエンカは靴を履きかえるために別れるべきなのだが、

それでは手間がかかるということで、クレアにはイズミの靴を貸りてもらったことにした。

「あの……一つ伺ってもよろしいでしょうか？」

「ん、何だ？」

体育倉庫へ向かう道の途中、クレアが口を開いた。

下校途中の生徒達の視線が集中しているというのに、それを気にしている素振りとは全くなかった。もっともそれは、クレアの隣に行くダーシエンカも同じなのだが。

「ダーシエンカ先輩は、如月先輩と付き合ってるんですか？」

クレアは小動物のように円らな瞳をダーシエンカに向け、さらりと言葉を紡いだ。

その言葉にダーシエンカの足が止まる。何か言葉を返そうとしているのか、口がパクパクと動いていた。

「先輩？ 顔が赤いですよ？」

「なっ、あっ、いや、これは……その、なんというか」

「フフ、いつも如月先輩にベッタリの割には初々しい反応なんですね」

上気した頬をペタペタと触るダーシエンカに、クレアはクスクスとからかうような笑みを向けた。

「ま、これ以上無粋なことは聞きませんよ」

クレアはニヤリと笑うと再び体育倉庫に向かい歩き出す。

ダーシエンカはそのあとを、どこか落ち着かない様子で追った。

ダーシエンカには分からなかったのだ。クレアの問いになんと答えればいいのか。

自分がイズミのことを好いているということは、考えるまでもなく明白なことだ。

そしてイズミもまた――。

ダーシエンカは浮かびかけた思考をかき消した。それは驕りでも何でもなく、確かな事実。それでもどうしてか思考するのははばかられた。

イズミとダーシエンカの関係に対して“付き合う”という言葉化が適切なモノとは思えなかったが、少なくとも日常の範疇ではそれがもっとも近いものなのだろう。

だが。

（私とイズミの、関係……）

ダーシエンカはどうにも形容しがたいそのカタチを模索しながら、クレアのあとを歩き続けた。

数十メートルほど歩き、二人は体育倉庫の前に辿り着く。

倉庫は教室二個分ほどの大きさのある、プレハブ作りだった。

クレアが来栖から預かっていたらしい鍵を取り出し、倉庫の扉に掛けられた南京錠を取り外す。扉を開くと、生暖かい空気と、カビのツンと鼻に来る匂いがダーシエンカとクレアを襲った。

「まったく、こんな仕事本当は男子がやればいいんですよ」

クレアは体育倉庫から漂う臭氣に顔をしかめながら、土足のまま中に入っていく。

ダーシェンカもクレアに続いて、埃舞う倉庫に足を踏み入れた。体育倉庫の中には様々な球技のボールや、ハードル、綱引きの綱、得点板などが乱雑に置かれており、本当に今も使用されているのかと疑いたくなるような様相をなしていた。

「それで、何をすればいいんだ？」

ダーシェンカは散らかった倉庫の中を見回しながら口を開く。

クレアは聞こえていないのかダーシェンカの問いかけに答えず、黙々とハードルの整理などを始めていた。

ダーシェンカは溜息を吐き、クレアの隣に立ってハードルの整理を手伝うことにする。クレアが綺麗に並べたところに、ダーシェンカもハードルを重ねていく。

ものの数分でハードルは片付き、あとは散らばったボール類を籠やケースにしまうなどで作業は終了した。

「これで終わりか？」

ダーシェンカは手に着いた埃を払い落とし、物品の位置を指さしながら確認しているクレアの背中に問いかける。

「ええ……終わりましたよ、きつと」

クレアは振り返り、ゾツとするほど冷たい笑みをダーシェンカに向けた。

「っ!？」

ダーシェンカは本能的にクレアから飛び退り、身構えた。

「そんなに警戒しないで下さい。何もしませんよ、少なくともあなたには、ね」

クレアは朗らかに微笑み、首をかしげた。その所作はまるで小動物のそれなのに、どこか猛禽類を感じさせる威圧があった。

「私には……？ まさか!？」

ダーシェンカの脳裏にすぐさまイズミの姿が思い浮かぶ。思い浮かんだ瞬間、ダーシェンカは地面を思い切り蹴っていた。

だが。

「おっと、行ってはいけませんよ？」

クレアがダーシエンカの行く手を阻み、諸手を広げる。

ダーシエンカはそれでも速度を緩めず、足首をひねってクレアの脇を通り抜ける。

「行ってはいけないと言ったのが聞こえなかったのか？ 小娘」  
「っ！」

ゾツとするほど冷たい声がダーシエンカに突き刺さったのも束の間。ダーシエンカの体は、倉庫の床に叩きつけられていた。何に触れたワケでも、ましてや何かにつまづいたワケでもなく、だ。

ダーシエンカは必死に体を起こそうとするのだが、体が上手く動かなかった。力が入らないというよりも、力の掛り方がおかしくなっているような感覚。

すぐさまそれが魔術によるものと判断したダーシエンカは、エーテルを体内に走らせて解除を試みるが、不可能だった。

そもそも、エーテルを操ることが出来なくなっている。

「まったく……恥ずかしくて見てられんな、オルリック家の娘」

クレアは地面ではいずり回るようになっていくダーシエンカに歩み寄り、一切の感情もこもらない視線を向けた。

「お前は、何者だ……！」

「何者？ ふむ。今は神代学園中等部三年のクレア・ブリンズフィールドだが……」

クレアは一息置くと口元に微笑を浮かべ、続ける。

「一方で、アクロマ機関総帥、クレア・アクロマ・ブリンズフィールドでもある」

クレアは口元の笑みを深くしながら、言った。

その言葉に、ダーシエンカは目を丸め、呆然とクレアを見つめた。「何を呆けている。アクロマ機関がいるのは不思議ではあるまい？ アクロマ機関は掟に背きし者を裁く機関なのだから」

「なっ！？ 私たちは、」



「ヴェルナールを退けた、か？　確かに退けたな。手痛い敗北のちに、だがな」

クレアは口元の笑みを消し、射殺さんばかりの視線をダーシェンカに向ける。

「そこに何の問題があるというのだ！　イズミの父は、」

「死んだよ、如月幸也は。私がこの手で葬った。造反者は処分するのが掟だ」

「な……そんな馬鹿なっ」

「あれほどの技量の者が負ける訳ない？　ではいったい今現在お前の体の自由を奪っているものは誰なんだろうな。仮にも名匠キリコの作であるお前の自由を奪っている偉大な魔術師は」

クレアは口許を歪める。

その言葉にダーシェンカは齒噛みし、無言のままクレアを睨みつけた。

実際、為す術が全くなかった。体は動くには動くが、地面から離れることはかなわないし、自分のエーテルの流れすら感じる事が出来なかった。

それでも、諦めるわけにはいかなかった。体中に、ありったけの力を込めて立ち上がろうと試みる。しかし、体を数センチ持ち上げるのが精一杯だった。

「おとなしく諦めろ、小娘。それとも如月のせがれに対する信頼はその程度なのか？　『私が守ってあげなきゃ彼は！』か？」

クレアは体をくねらせながら芝居がかった口調で言う。その顔には、人を小馬鹿にした軽笑が浮かんでいた。

ダーシェンカはその言葉に何も返すことはせず、無言のままクレアを睨みつけた。

クレアはそんなダーシェンカから興味を失ったようにふいと顔を背け、踵を返す。そのまま、近くにあった跳び箱の上に腰をおろした。

「まったく……嫌になるほどそっくりだな」

跳び箱の上で足をばたつかせながらクレアは、顔をしかめながら視線で一人ごちる。不思議とその表情は、何かを懐かしんでいるようだった。

＊ ＊ ＊

西日によって真っ赤に染まった生徒会室。

イズミは額に汗を滲ませていた。

ダーシエンカがクレアに引っ張られながら消えていったあと、イズミに待っていた仕事は膨大な資料の整理だった。

本来ならば、体育祭関係の書類にいくつかの事項を軽く記載するだけで済むはずの仕事だったのだが、それを済ませて手持無沙汰になったのが運の尽きだった。

イズミは耐えられなかったのだ。何もせずに椅子に座っている自分の脇で、来栖が黙々と書類整理をしていることに。だから声をかけてしまった。

手伝いましょうか、と。

無論はじめは来栖も断った。怪我人にこれ以上手数をかけるわけにはいかない、と。だがそこで引き下がるイズミでもなく、食い下がってしまった結果。

「じゃあ、願いまするわ」

という言葉と、少し困ったような来栖の笑顔とともに、ごく“少量”の資料がイズミの手に渡された。

ごく少量というのは客観的な、というよりは相対的に見て少量と言うだけで、紙束の厚さは二センチほどあった。

もっとも、来栖のそれは二掛ける三という恐ろしい厚さと化していたが。

「あの……生徒会っていつもこんなに仕事あるんですか？」

イズミは手元の資料を数種類に分類する作業に励みながら口を開いた。

「うーん、いつもはもつと簡単な仕事よ。今日のはちょっと特別ね……ほら、通り魔事件で先生方がいろいろ大変だから、その仕事が回ってきてるのよ。生徒で処理できる程度の仕事は、ね」

来栖は肩をすくめながら微笑む。その笑みにはどこか皮肉が込められているようだった。

イズミはその意図を汲み取り、来栖に苦笑を返す。

イズミの手元にある資料を見る限り、生徒で処理出来る程度の仕事というような代物では全くないのだ。どう考えても、一介の高校生に捌けるものではない。

それでも来栖は捌いている。時には資料に書き込みなどを加えながら、要領よく。

イズミの仕事は来栖が捌いたものを指示通りに分類するだけ。だけ、とは言っても、イズミはいまいち資料の種類の区別が付かず、いっぱいいっぱいになりかけているのだが。

そのように難しい作業だから他の生徒会役員は参加せず、来栖一人で作業していたのだろう。いや、ひょっとしたらクレアも作業していたのかもしれない。

そう考えるとイズミは、クレアの優秀さにそら寒いものを感じた。「あの……会長はクレアさんと仲いいんですか？　よく一緒にいるみたいですが」

「え？　ああ、仲がいいかは分からないけど、クレアに仕事を手伝ってもらうと速いから手伝ってもらうの。今日も本当は放課後の活動禁止だから普通の生徒は残っちゃいけないんだけど、無理を言って残ってもらったの。それを言うなら如月くんもだけどね」

来栖は資料整理の手を休め、申し訳なさそうにイズミを見つめた。「いえ、気にしないでください。どうせ僕はダーシエンカが帰ってくるまでの手伝いなんですから」

「いやいや本当にありがとう、如月くん。でも今日はここら辺で切り上げましょう。残りは明日の朝に片付けることにするから。途中でクレアとダーシエンカさんと合流して帰りましょうか」

来栖は立ち上がり、机の上に並んでいた資料をまとめ始める。イズミが分類していたものもその上に重ね、部屋の隅に置かれた木製の棚にしまった。

「さ、行きましょう」

来栖は微笑み、床に置かれていたクレアとダーシエンカのカバンを拾いあげる。

「あ、ダーシエンカの荷物は僕が持ちますよ」

「いいわよ、これくらい。手伝ってもらったお礼だと思って」

歩み寄るイズミを、来栖は両手の鞆を持ち上げて制した。

「そうですか？ いやでもやっぱり悪いですよ……」

「気にしないでいいわよ、大した荷物じゃないし。それに如月くん、怪我してるでしょ？」

来栖は苦笑い、肩をすくめた。

それでも申し訳なさそうな表情を浮かべるイズミの脇を、来栖はスルリと通り抜ける。

「さ、早く出て。鍵閉めちゃうから」

来栖は渋るイズミを急きたてるように、からかうような笑みを浮かべて部屋の外から手招いた。

「あっ、すみませんっ」

イズミは慌てて床に置いていた鞆を拾い上げ、急きたてられるままに部屋を出た。

あまりに慌てたせいで、腹の傷がズキリと痛んだが、すんでのとところで表情には出さなかった。

来栖は、イズミのどこか滑稽にも思える動きに、口元を押さえながらクスクスと笑みを洩らしていた。

「わ、笑わないで下さいよ、会長」

「フフ、ごめんなさい。如月くんがあまりにも素直なものだから。つい、ね」

来栖は口元に微笑を残したまま、制服のポケットから鍵を取り出した。

両手に鞆を携えたまま、来栖は器用に生徒会室の扉に施錠する。

「……なさい」

何かが、イズミの耳に響いた。

それは今にも消え入りそうで、どこか物悲しさを秘めていた。声とも音ともつかないような、その程度のもの。

それでもソレに込められていたものの重さは、計り知れないように感じられた。

「会、長？」

イズミはソレを発したであろう人物に声を掛ける。

表情は窺い知れない。来栖は扉の鍵に手を掛けたまま、イズミに背を向けていたから。

「え？ 何か言った？」

数瞬遅れて振り返った来栖の表情は、先ほどまでとなんら変わらないもの。

イズミは先ほどの声が空耳の類だったのかと考え、眉根を寄せた。  
「行きましょう、如月くん」

そんなイズミをよそに、来栖は軽い足取りで歩きだす。

イズミは首をにわかに傾げたものの、来栖の後に続こうと足を踏み出した。

瞬間、イズミの視界が反転した。さきほどまで当たり前のように見えていた景色が揺らぎ、ありえないはずの視界が映った。<sup>ビジョン</sup>視界どころか、ツンと鼻を刺すカビの臭いすら嗅いだ気がした。

（埃っぽい、床……？）

イズミは体のバランスを崩して地面に片膝を突くも、一瞬だけよぎった景色を明確に捉えていた。

それは奇しくも——あるいは当然ながら——ダーシエンカがクレア・アクロマ・ブリンズフィールドの前に屈服したときと同刻だった。

「だ、だいじょうぶ？」

なかなか立ち上がらないイズミに、来栖がゆっくりと歩み寄る。その声に、イズミは反応しなかった。いや、出来なかったのだ。不可解な幻覚から、意識を逸らすことが出来なかった。

(……考えろ)

イズミは自分に強く言い聞かせた。

あの景色が、ただの幻とは到底思えなかったのだ。幻にしては質感が生々しかったし、何より身に覚えのある感覚だった。

「っ！」

その感覚がなんであるか思い至ったイズミは、立ち上がり、地面を蹴っていた。

なぜすぐに思い至らなかったのか。その感覚は紛れもなく、遠くない夏の日に味わったものではないか。

感覚共有。

(ダーシェンカが危ない……！)

イズミは明確な理論立てをすることもなく、そう結論付けて走りだしていた。

腹に響く鈍痛など、気にも留めなかった。ましてや、背後で来栖が呟いた言葉など、耳に届くはずもなかった。

来栖は能面のような表情で、こう呟いていた。

「……ごめんなさい」と。

イズミは下駄箱に辿り着き、小さく舌打ちをした。自分の靴がなくなっていたのだ。

それが盗難であるか、はたまた別の理由であるのかなどということを考えるまでもなく、イズミは上履きのまま外へ駆け出た。

目指す場所は決まっている。体育倉庫だ。

先ほどイズミの脳裏に映った景色はおそらく、体育倉庫。だとすれば、それがダーシェンカの視覚と捉えてもなんら不思議はないだ

ろう。

無我夢中に動いていたイズミの足が、不意に止まった。

あと数十メートルで体育倉庫に辿り着く、そんな所に一つの影が現れたのだ。

完全下校時刻からだいぶ経った今、学園の敷地内にいるものは限られている。証拠に、今までイズミは誰に会うこともなかったのだから。

もっとも、誰かを見かけようとその足が止まることはなかっただろう。

それでも、目の前に現れた人物はイズミの足をとめた。その人物がイズミをとめた、というよりも、その人物が手に持っていたモノがイズミの足をとめたと言った方が正しかろう。

イズミの目に映るのは、抜き身の、青白い輝きを放つ日本刀。

「……来栖、会長？」

イズミは、目の前の人物の名を半ば放心気味に呟いた。

自分が置いてきた来栖が目の前にいるのは、なんら不思議なことではない。職員玄関や、

窓などから出れば、いくらでも先回りの方法はある。

だが、その手にしっかりと握られた日本刀は。

その顔に浮かぶ、悲しみとも怒りともとれるような、複雑な感情は。

「……ごめんなさい」

来栖はそれだけ呟くと、凄まじい勢いで地面を蹴り、一瞬でイズミとの間合いを詰めた。

「っ！」

だが日本刀を手にした人間を相手に、呆然と突っ立っているほどイズミも愚かではなく、腹に走る激痛に顔を歪ませながらも、後ろに跳躍する。

つい先ほどまでイズミが立っていた空間を、来栖の日本刀が切り裂いた。素人目に見ても、鋭いと分かる容赦のない一振り。

その一振りに背筋を凍らせながら、困惑の表情を浮かべる。

先ほどのビジョンを目にした瞬間から周囲にエーテルを振りまいているのに、なんら変わった事を捉えられていないのだ。

エーテルが伝えてくれる情報はただ一つ。

異状なし、だ。

目の前に日本刀を構えた少女が立っていても、その情報に変化はない。少なくとも、魔術的な意味においては、なんら異状がないのだ。

だとすれば、目の前の光景は、日常の範疇に位置する異常ということになる。

少女が日本刀を構え、少年を襲うという、極めて希有な、それでも日常に起こりうる出来事。

「どうしたんですか!？」

半ば無駄だとは理解しつつも、イズミは問わずにはいられなかった。

先ほどまで柔らかな表情を浮かべてイズミと接していた来栖が、何故襲いかかってきているのか、と。

魔術が関連していないとなればこそ。

「あなたを殺せば、私の大切な人が、帰ってくるの……」

来栖は振りかぶった日本刀を下段に構え直しながら、呟くように言った。それはどこか呆けた口調で、それでいて強い意思が籠っていた。

「帰って、くる……?」

イズミは来栖の言葉を反芻しながら、怪訝な表情を浮かべた。

自分を殺せば、来栖の大切な人が帰ってくる。そのような理屈が成り立つとは、到底思えなかった。

成り立つとしたら、それではまるで。

「あなたを殺せば、兄さんの封印を解いてくれるって……」

来栖の呟いた言葉がイズミに確信を持たせた。

この状況は間違いなく、魔術絡みであると。



イズミは覚悟を決め、エーテルの可視領域を限界まで引き上げる。イズミの物理的視界は一瞬にしてゼロになり、代わりに心眼ともとれるような、本質的視界が拓ける。

「何をしても無駄なのよ、如月くん」

来栖の言葉は、イズミに絶望を突き付ける内容であるというのに、言い知れぬ悲哀が漂っていた。

（何を、しても……？）

イズミは来栖の言葉に、自分の耳を疑った。

イズミが行ったことは可視領域の調節のみ。ともすれば、余人がそれを察知できるはずもない。

だというのに、来栖の口調はイズミがしたことを的確に捉えているようだった。

偶然の産物、とイズミが片付けようとしたとき。

「あなたは私との戦闘を避け、ダーシエンカさんと合流しようとしている。なるほど。確かに私はダーシエンカさん相手には歯が立たないわ。あなたの予想の上位に位置するものの通り、私に魔術は使えないもの」

来栖は無表情のままイズミを観察し、淡々と述べる。

その言葉に、イズミは思わず息を呑んだ。

来栖が述べたことは、聞くだけ聞けば、単なる、少しだけ精密な予想ともとれた。

だが、イズミの眼は捉えていた。その言葉の一つ一つが、僅かな当て推量もない、まったくの確信であるということ。

「なるほど……あなたの眼も私のものに限りなく近いのね。もつともあなたのそれは、ほんの少し先の未来しか視えてないみたいだけれど」

来栖はイズミの驚いた表情を見やり、雄弁に語り出す。

先ほどのまでの呟くような口調から一変し、聞く者を真綿で締め上げるような、一種の強迫観念を秘めた、そんな性質を滲ませ始めている。

「でも一ついい事を教えてあげる。あなたの私に対する勝率は、百パーセントよ。あなたが永久機関のエーテルを解放して私に流入させれば、私に勝ち目はないわ。その代り、私は死ぬけどね」

来栖はなんてことのないように言い切り、肩をすくめた。

来栖の言葉は何一つイズミに圧迫を与えるものではないというのに、イズミの頬を冷たい汗が伝っていた。

来栖の行動の一つ一つが、イズミの思考——視覚情報——を乱す。目に映るその全てが不可解だった。

来栖は魔術を使っていないし、魔術を使えないとさえ断言している。だというのに、来栖はイズミが行った魔術的動作を捉えているし、あまつさえイズミの戦術まで予期している。

魔術を使えないという言葉が嘘偽りならば、どれだけこの状況に救いがあったか。来栖には勝ち目が無いという言葉が虚言であったならば、どれだけ簡潔だったか。

だというのに、イズミの眼はその全てが真実であると伝えている。来栖は真に魔術を使えないし、イズミは優に来栖を殺せる。

だというのに、イズミの足はじりじりと後ろに下がり、来栖はゆっくりと前進していた。

「私は……キミの善意に付けこみ、キミを殺すわ」

来栖は刀の切っ先をイズミに突きつけ、宣言する。その表情に感情はなく、声もまた然りだった。

言い切ると同時に来栖は地面を蹴り、凄まじい勢いでイズミに迫る。

イズミはその速度に息を呑みながらも、飛び退ってなんとか刀の間合いから抜けた。だが、そこで攻撃の手を緩めてくれるほど来栖も甘くはなく、返す刀がイズミを襲った。

「くっ」

イズミは腹の鈍痛に顔をしかめながらも転がって何とか攻撃をかわし、再び来栖に視線を向ける。

イズミの瞳は、来栖が次を取る動作を明確に捕らえている。そこ

から計算すれば、おのずとイズミが取るべき回避行動も明確に打ち出される。

事実、イズミは安全な回避行動を打ち出せていた。

だというのに、背筋を走る悪寒が止まらない。

攻撃を回避し続ければ、この状況は終わるはずなのだ。なんと言ってもこの状況は“日常”なのだから。

人の意識操作が行われているわけではない。ただ単に、たまたま偶然この時間、この場所に、人がいないだけなのだ。

イズミの瞳が魔術的痕跡を辿れない理由はそのせいだった。

この空間は、魔術によって人が寄せ付けられないのではなく、ただ単に完全下校時刻が早まったせいで人がいないだけ。学校に残っているはずの教師も、臨時の職員会議でこんなところに来るはずがない。

少し考えればわかるはずだった。学校敷地内の情報を網羅できる来栖ならば、魔術が使えなくともこの状況を作り出せることを。

叫んで人を呼ぶ。

真っ先にその選択肢がイズミの頭をよぎった。叫び声の一つでもあげれば、この状況はすぐにでも終わりを告げるだろう。

人が来て、来栖は逃亡せざるをえない。

だがイズミにはそれが出来なかった。ダーシェンカの安否が確認できない以上、うかつな行動は取れないのだから。

だからイズミは、迫り来る凶刃をかわし続けること以外に出来ることがなかった。

「キミが私を殺さないというなら、キミが死ぬだけよ。もっとも、今私の瞳に映っている結果は、キミの死だけど」

来栖は刀を振り下ろし、無表情のまま言い放つ。

その一太刀一太刀に迷いはなく、明確な殺意が込められている。だが不思議なのは、その一太刀一太刀に『仕留める』という気負いは籠っておらず、機械的に刀が振るわれていることだった。

そして何より、斬撃の一振り一振りに身を裂かんばかりの悲しみ

が詰まっているのが、イズミには不思議でならなかった。

(そうか……！)

イズミは来栖の悲哀をその眼に捉え、一つの結論を導き出す。

ようは同じなのだ、来栖とイズミは。

ありとあらゆる抽象的なモノを、その眼に映すことが出来る。

きっと来栖にもみえているに違いない。イズミと同じモノが。いや、来栖の言動から察するに、それ以上のモノが。

それならばイズミが来栖に魔術的なものを感じ取ることが出来ないのも説明がつく。

だがそんなことがわかった所で、なんの解決策が浮かぶワケもなく。

イズミに出来ることは、来栖の放つ攻撃を避け続けることだけだった。

反撃、という言葉は不思議と浮かばなかった。

イズミの攻撃の手段が、相手のエーテルを上書きして死に至らしめるという、覚悟を強いるものしかないというのも理由の一つではあったのだが、それ以上に。

来栖の一撃一撃に籠る悲しみがイズミの思考を乱した。

刀が生み出す風がイズミの体を撫でる度に殺意とともに伝わってくる『殺したくない』という矛盾した来栖の叫び。それは一方で大切な人を『取り戻したい』という切実な叫びでもあったのだが、それが表裏一体である以上、その感情にどう接すればいいのか、イズミには判断がつかなかった。

「っ！」

イズミは来栖の刃を紙一重のところかわし、口元を歪めた。

来栖を殺せるはずもなく、ましてやのうのうと殺されてやる気もない。ともすればやはり、イズミにとれる行動は現状維持しかない。だがそれも、限界が来ようとしていた。

腹の傷が開き始めている。ワイシャツにうつすらと紅いモノが滲み始めていた。

痛みに耐えることは出来ても、血を失いすぎては動くことが出来ない。事実、イズミの足は徐々に力を失いつつあった。それでも何とか、ふらつく反動すらも利用しながら来栖の攻撃を捌き続ける。

「そろそろ限界みたいね、如月くん」

来栖は感情を表に出すこともなく呟き、イズミを睥睨する。

感情を表に出さなくとも、それを視認できるイズミの前では無駄なことだった。

来栖の、イズミに対する痛々しい殺意が伝わってくる。

来栖は分かっているのだ。イズミを殺す、その行為が自分にいか

に重い十字架を背負わせるのかということ。それを承知の上でイズミに刃を向け、今まさにイズミの生命を断ち切ろうとしている。

大切な者のために。

「限界って言うのは、動けなくなってから、ですよ？」

イズミは顔いっぱい脂汗を浮かべながら、来栖に苦笑を向けた。来栖が大切な者のためにイズミの生命を奪おうというのなら、イズミも大切な者のために生きなければならない。

イズミは霞み始めた視界をなんとか気合で繋ぎ留め、来栖の動きに集中する。

来栖の動きは相変わらず容赦なく、イズミの体を切り裂こうと迫りくる。

イズミはその全てを紙一重でかわしていく。最小限の動きをもつて紙一重ではなく、最大限の動きをもって紙一重というあたりが、イズミの状態を物語っていた。

「先輩のお兄さんはどんな、人、なん、ですか？」

イズミは来栖の繰り出す刃をかわしながら、虚ろな視線で呟いた。時間稼ぎとか、そういった考えを浮かべるほどの余裕はすでにイズミにはなく、ただ本心から問わずには居られなかった。

来栖にここまでの悲痛な覚悟を背負わせる、その人物について。朦朧とした意識の中そのようなことを尋ねるイズミに、来栖は一

瞬目を丸めたがすぐに元の無表情に、いや、幾許かの優しさを称えた表情に戻った。

そして攻撃の手を止めることもなく、口を開いた。

「優しい、とても優しい人だった。両親を亡くしてからは、兄さんが私の全てだった。なのにある日突然っ」

来栖はそこで言葉に詰まり、嗚咽のようなものを漏らした。

同時に、嵐のように繰り出されていた攻撃が、止んだ。

来栖は構えていた日本刀をダラリと下げると、俯き、ジッと地面を見つめ始めた。

「なのに突然っ、動かなくなった。死んだでもなく、植物状態でもなく……兄さんは人以外の何かのような存在になってしまった。どこか遠い、遠いところへ行ってしまった！」

来栖の瞳からはボロボロ涙が零れていた。

ポツポツと、地面に小さなシミが作られていく。

その様をイズミはただ眺めていた。隙について逃げるでもなく、反撃の手を出そうとするでもなく、ただ呆然と、来栖を眺めていた。

「でもっ！ 君を殺せば、兄さんを、兄さんに掛けられた封印を解いてくれるって！」

来栖はキッと顔を上げ、イズミを見据えた。その瞳からはまだとどまることなく涙が溢れ出続けている。

イズミはなおも呆然と立ち尽くした。腹からドクドクと脈打ちながら流れ出る血もそのままに、どこか悲しげな瞳で来栖を見つめる。イズミの眼は捉えていた。来栖の中に迷いが生まれ始めていることを。同時に、深い絶望が生まれ始めていることを。

その絶望がなんであるかは窺い知れなかったが、その感情は、イズミの心をあまりにも深く抉った。

「キミはもうすぐ死ぬ。私が手を下さなくても、その開いた傷口によって。私の眼には、あなたの死という結果がハッキリと映っている」

来栖は、その悲願が今まさに叶おうとしているのに、この上なく

哀しげな表情で吐き捨てた。

その言葉に嘘はないのだろう、イズミはボンヤリとそう思う。

視界はより酷く霞み始め、エーテルが指し示す情報を全く処理できない。来栖の感情のうねりを感じ取ることは出来ても、それがなんなのか理解できなくなっていく。

呼吸は荒くなり、体を垂直に保つことすら出来なくなり、頼りなくフラフラと揺れ始める。

——もう、ダメ、だ。

イズミの唇がそのように動き、イズミの体は糸の切れた操り人形のように、地面に倒れ込んだ。

イズミの記憶は、そこで途切れた。

力を失ったイズミの体が、地面に叩きつけられることはなかった。固い地面の代わりにイズミの体を迎えたのは、柔らかい、人の温もりだった。

イズミが倒れかかったその刹那。来栖が手にしていた日本刀を捨て、イズミに駆け寄ったのだ。

男にしては華奢なイズミの体を、来栖は軽く支えあげる。

半ば夢中でイズミを支えた来栖は、自分のとった行動に驚きを感じた。自分自身に突き離されたといっても過言ではないほどに。

来栖は自分の腕の中で、弱く短い呼吸を繰り返すイズミを見やつた。

死ぬ。このままなら間違いなく如月イズミという存在は、この世から消え去る。

事実、来栖の瞳はイズミの命が長くないことを伝えていた。あと一時間ほどでイズミは死に至る。普通に考えれば、一時間という時間は命を救うには十分すぎる時間だ。

だが、イズミは死ぬ。

来栖が止めを刺そうが刺すまいが、適切な治療を受けさせなければそれで終わりだ。

——これで、兄さんは帰ってくる。

そのために来栖は忌み嫌っていた能力を解放したのだ。たいして関わりのない少年の命と、愛しい者の命を秤にかけ、選択した。

たった、たったそれだけのことだ。

——だけど。

本当にこれでいいのだろうか。

来栖が見てきた如月イズミという少年は、善良な存在だった。

それは、来栖が武器を向けたあとも変わることはなく、彼は一貫して優しい存在だった。身を守る手段があるにも関わらず、それを行使しなかった。

馬鹿げた行為、と片付けてしまえばそれで終わる。実際、馬鹿げた行為以外の何物でもないのだろう。

だがその行為は、来栖の中にひどく重く残留していた。

「わた、しは……」

気づけば、来栖の瞳からは涙が溢れ出ていた。

先ほどの兄を想う涙とはまた別の種類の、悔恨し、許しを乞う、そんな涙。

来栖は再びイズミを見やる。

今度はその表情を窺うためでなく、そこから派生する幾多もの結果を導き出すために。

来栖の能力の本質は視覚そのものでなく、その先にある演算能力にある。

来栖はイズミの出血量や脈拍などをエーテルによって視認し、それを元に脳が様々な過程と結果を紡いでいく。

先ほどまでは、どうやって死に至らしめるかが最重要の過程と結果だった。

来栖はそれを、どうすれば助けられるかに切り替える。

結果が出るのに、一秒も掛らなかった。だがその結果は同時に、来栖の破滅を意味していた。

それでも来栖は迷うことなくその手段を実行に移す。



携帯で救急車を呼ぶという、余りに凡百な対処。だがそれ以外に方法はなかった。

無論、来栖は自分の日常を守り、なおかつイズミを救う道も模索してみた。だがそんな都合のいいものはどこにもなかった。

少なくとも、来栖の“視認”できる世界には。

「案ずるな」

携帯を取り出し、ダイヤルを押そうとした来栖の背後から、声が上がった。

その声に来栖は肩をビクリと震わせる。この場を誰かに見られた、ということよりも先に、その気配を察せなかったことに恐怖を覚えた。眼の能力を解放している限り、人の接近に気付かない筈がないのだ。

だというのに、声の主は来栖の真後ろに悠然と佇んでいた。その姿は、罪人を裁く王を思わせるほどに大きく見えた。

実際には年端のいかぬ少女の姿をしているというのに。

「クレア、さま」

来栖は声の主を見、呆然と呟いた。

イズミを殺せと命じた者に、その命を救おうとしている場面を見られることはかんばしくないことだ。だがそれ以上に来栖を呆然とさせたのは。

眼がクレアの姿を捉えていないことだった。

クレアの姿は確かに“肉眼”では視えている。だが“霊視”の観点からいえば、来栖の眼はクレアのエーテルを捉えていない。そこには何も存在しないことになっている。

そんな来栖の驚愕をよそに、クレアは口元をにわかに緩ませながら肩をすくめた。

「学校では“さま”はやめて下さいと言いませんでしたか？ 先輩」

クレアは平時の口調と変わることなく、軽く来栖に語りかける。

来栖はその言葉になんと返せばいいのか分からなかった。さらに言うと、思考が停止してしまっていた。

より良い結果を生み出すために機能する来栖の瞳も、存在を捉えられないクレアの前では普通の眼と変わらなかった。

「そんな呆然としないで下さいよ、先輩。助けたいんでしょ？ 如月先輩を」

いっこうに言葉を発しない来栖にクレアはやれやれと頭を振り苦笑する。

来栖はその言葉にさらに困惑する。クレアにどう対処すればいいのか分からない。

クレアはイズミを殺しに来たのか。あるいはイズミを殺し損ねた自分を殺しに来たのか。はたまたそのどちらでもないのか。

全く分からない。もつとも、そのどれであるか解明できたとしても、来栖の力ではクレアに抗いようがない。力の差は戦車と竹やり、いや、空母と縫い針と言っても足りないほどの力の差があるのだから。

それでも来栖は、無意識のうちにイズミを背に庇っていた。

頭の中は真っ白で何も考えられないし、体もクレアを前に情けなく震え始めている。だというのに来栖はその場から逃げようとは考えもしなかった。

クレアはそんな来栖を見やり、小さく息を吐いた。

「……安心していいですよ。私は先輩方を殺しません。残念ながら“及第点”ですから」

クレアは困ったような苦笑を浮かべながら、そう言った。

＊ ＊ ＊

「……今度こそ本当に終わった、か」

埃をかぶった跳び箱の上で足をプラプラと遊ばせていたクレアがポツリと呟く。その表情には微かな安堵と緊張が滲んでいるようだ。

涼しげに佇むクレアとは対照的に、その足元ではダーシェンカが

体の自由を取り戻そうと、のたうつように床を這いずり回っていた。  
「っ！ 何が終わったというのだ!？」

ダーシエンカは顔を上げ、クレアを思い切り睨みつける。ここ数分のやり取りで、クレアが自分の敵う相手ではないことは否応なく理解させられたが、それでも恭順するかどうかというのは全く別問題だった。

こと相手がイズミに害をなそうとしている以上、ダーシエンカが取るべき態度は一つだ。

「終わったと言えば一つしかないだろ。お前の愛しい人の命」

クレアはダーシエンカを見下ろしながら、口元に酷薄な笑みを浮かべる。

「なっ、貴様っ！」

ダーシエンカは表情をより険しくし、体を動かそうと試みる。

が、ダーシエンカの強い意志とは裏腹に、体の自由は一向に戻らない。何か強い負荷を感じているワケでも、苦痛を感じているワケでもないというのに、体は思うように動かない。

クレアはそんなダーシエンカに嗜虐的な一瞥をくれ、にっこりとほほ笑んだ。それまでの言動を感じさせないほど、それはそれは温かな笑み。

もっともクレアの言動を見てきたダーシエンカにとってはいやらしい笑み以外の何物でもなかった。

「ああ、言葉をつけ忘れしました。正確には『お前の愛しい人の命“の危機が終わった”』でした」

クレアは跳び箱からヒョイと飛び降りると、鋭い視線を意に介することもなく、ダーシエンカの顔を覗き込む。

「な……それは、どういう」

「どうもこうも言葉通り如月先輩の命の危機が去ったということですよ。ダーシエンカ先輩」

クレアは口調をいつも通りのものに変じさせると、その白く細い手をダーシエンカの頭にそっと乗せた。

同時に、ダーシエンカは体の自由を取り戻した。取り戻したらすぐに駆けだす心づもりだったダーシエンカではあるが、その意志とは裏腹に足は体育倉庫に踏みとどまっていた。

目の前の少女に聞かなければならないことがある。

その一点がダーシエンカの足を抑えつけていた。

「ほう……すぐに駆けだすと踏んでいたが、少しはまともな思考を取り戻したらいいな」

クレアはダーシエンカの仏頂面を愉しそうに眺めながら顎を軽くさする。

「お前の目的は、なんだ？」

ダーシエンカは問うべき言葉を模索し、口を開いた。他にも聞きたいことはあったのだが、まずは目の前の異質な存在の立ち位置について知っておきたかった。

敵なのか、味方なのか、そのどちらでもないのか、それだけでも。

「私の目的は如月イズミの実力を試す、それだけのハズだった」

「ハズ、だった？」

「本来なら適当に如月イズミに攻撃を仕掛けて、それに対する対処を見て処遇を決める予定だった。だが、偶然面白いものを見つけてな、趣向を変えたのさ」

クレアの言葉にダーシエンカは小さく首を傾げる。

察するに、クレアの目的はイズミの命を奪うことではなく、イズミに自己防衛能力があるか否かを試すことだったのだろう。それについては理解できた。

だが、そのあとの言葉の意味は分からない。推察しようにも情報が少なすぎる。

「まあ、それは如月イズミも交えて話すことにしましょう。場合によっては、大変なモノが出てくるかもしれないしな」

クレアは心底愉しそうに微笑み、ゆっくりと踵を返した。

「な、ちょっと待て」

「ついてこい。愛しい人の元へ案内してやる」

慌てて横に並んだダーシエンカに、クレアは悪戯な微笑を向けた。  
「あ、それから。何があってもおとなしくしてたほうがいいぞ？  
でないと後悔することになるから、きつと」

クレアはクツクツと喉を鳴らしながら笑った。

ダーシエンカはクレアの言葉の意図をやはり理解出来ず、怪訝な表情をより深くした。

校舎へ引き返す道を数十メートルいった場所、いつもならば学園の生徒が登下校に使う、たったそれだけのために存在する道。その道の真中に、イズミの姿はあった。

ダーシエンカはその光景に一瞬言葉を失い、次にクレアの発した言葉を思い出した。思い出したというだけでその真意を理解できたわけではないのだが。

ダーシエンカの視線の先には、腹から血を流して地面に横たわっているイズミの姿と、その脇にへたり込むように座り込んでいる来栖の姿があった。来栖の白いブラウスは、イズミの血によってだろ  
う、赤く染まっていた。

しかし何よりも不可解だったことは、地面に血一つ付いていない抜き身の日本刀が横たわっていることだった。

「どういう、ことだ……？」

眼前の光景に、ダーシエンカは呆然と呟いた。呟きながら、地面に横たわるイズミにゆっくりと歩み寄る。

腹が小さく上下している様子から、死んではいないようだ。だが安心できる状態、という訳ではないことも見てとれる。

「ダーシエンカ、さん……」

呆然とした表情を浮かべていた来栖が、そのままの表情でダーシエンカを見上げた。

来栖の口が何かを呟こうとしたとき。

「待たせたわね！」

けたたましい四輪駆動車のエンジン音とともに、白衣をまと

った女性が現れた。

ダーシェンカの記憶が正しければ、イズミの担当医。  
松崎あかね、その人だった。

### 第3章 崩壊した物語は、偶発的に再生する(1)

ゆっくりと、しかし一瞬で、イズミは意識を取り戻した。

自分を包むかすかな重みが布団の重みであるということに気付くのに三秒。自分が目になっている天井が見覚えのある、しかし自分の部屋のモノではないことに気付くのにさらに五秒。

そして、自分を見つめる亜麻色の瞳が二つあることに気付くのにもう二秒。

「ダー、シェンカ？」

イズミはかすれが擦れの声で瞳の持ち主の名を呼んだ。乾燥してささくれ立った唇が立てた音の方が大きいのではないか、と思えるほどに消え入りそうな声だった。

「ああ、私だ」

それでもダーシェンカはその声を聞き取り、慈しむような声をイズミに返した。

イズミはその声に安堵し、体を起こそうと試みる。だが体は思うように動いてはくれない。

金属のきしむ音が、イズミがベッドに横たわっていることを伝えるだけだった。

——そういえば腹の傷が。

イズミはベッドのきしむ音を聞きながら思い、途中で気がついた。腹部には何の痛みもない。ましてや感覚すらない。

どうにか体の状態を確かめようと身じろぐイズミの肩を、ダーシェンカが優しく抑えた。

「麻酔が効いてるからしばらくは動けない。麻酔が抜けるまではゆっくりと眠ったほうがいい」

ダーシェンカは首を傾げながら優しく微笑み、イズミの額を軽く撫でた。

「そ、う」

イズミはダーシェンカの手のヒンヤリとした感覚に安堵し、ゆっくりと瞼をおろした。

鮮明に覚醒したはずの意識が、信じられないほど呆気なく、まどろみのうちに沈んでいく。

ものの数分でイズミは穏やかな寝息を立て始めた。

「さて、話の続きを聞かせてもらおうか」

ダーシェンカはイズミが眠りに落ちたことを確認すると、穏やかな表情を消し去り、部屋の壁際に立っている二人に炯眼をむけた。

そこには、不遜な表情を浮かべているクレア・ブリンズフィールドと、クレアとは対照的に憔悴しきった表情を浮かべている来栖千澄の姿があった。

来栖との戦いで傷口が開いてしまったイズミは、駆け付けた松崎の手によって、夏休みにも使用した幸也の非合法医院に運び込まれた。

松崎はイズミを運び込むなり迅速な処置を行い、今いる病室にイズミを移すと「正規の仕事があるから」と言って勤務する病院に戻っていった。

現状を要約するならば、松崎の登場のおかげで全てが丸く収まったという訳だ。

だが、とダーシェンカは思う。ダーシェンカにとって円満な問題の解決とは、敵が目の前から——できることならばこの世から——消え去ることを指す。

だというのに目の前には敵がのうのと存在している。しかも解せないことに、敵の一人がイズミの命を救う算段を整えたのだ。

イズミの両親が所属するする組織の総帥と名乗った、クレア・アクロマ・ブリンズフィールド。

クレアの言動には不可解な点多すぎた。クレアが病室でダーシェンカに聞かせた話の大筋はこうだ。

イズミの能力を試すために日本にやって来て、たまたま見つけた面白い境遇に置かれた来栖をけしかけてイズミを襲った。



それだけならばまだダーシエンカとしても困惑しない。感情のやり場に困りこそすれ、状況を甘んじて受け入れるほかなかっただろう。

イズミは——ついでに述べれば来栖も——クレアの言うところの試験に合格したのだから。

それで一連の物騒な諸問題にカタがつくのならそれで良かった。おそらくそれはイズミが望んでやまない形だろうから。

それでも、ダーシエンカはクレアに問わねばならないことが多く存在した。

「結局お前は私達の敵なのか？ イズミの父を殺したというのは……本当、なのか？」

ダーシエンカは、圧倒的な實力差があると理解しながらも、威圧的な声音でクレアに問うた。

もつともクレアの目には子犬が怯えながら唸っている程度にしか映らなかったらしく、その口元は相変わらず不敵な笑みが浮かんでいた。

「私は敵でも味方でもない。その名が示すとおり、言わば審判だ。それ以上でも、それ以下でもない。基本的には、な」

「イズミの父の件は」

「幸也なら確かに殺したさ。もつとも、あの程度の殺し方で死ぬようなタマじゃないだろうがね」

クレアは円らな瞳を残酷に細めながら、クツクツと喉を鳴らした。その言葉にダーシエンカは首を傾げ、隣で聞いていた来栖は肩を小さく震わせた。

クレアの不可解な言葉にダーシエンカが質問を重ねようとすると、それを遮るようにクレアが続けた。

「ともかく、だ。十中八九幸也は“生き返って”いるから心配するな。なんならインターネットとやらで幸也について検索してみたらどうだ。高名な医師であらせられるあの輩のことだ。今現在の活躍が載ってるんじゃないか？」

「む……分かった」

ダーシエンカはクレアの言葉にとりあえず頷いてみせたが、正直なところその意図をくみ取ることとは出来なかった。

（生き返って……？）

ダーシエンカは眉根を寄せながらクレアの言葉について黙考する。常識の範疇で考えれば、クレアが事実を誇張して述べているだけと捉えるのだろうが、相手は超のつく一流魔術師だ。非現実的な内容も現実にしうる存在がそう言っている以上、事実と捉えてもなんら不思議はない。

クレアと同様に幸也もまた、超一流の魔術師なのだから。

「それで……試験が無事済んだというのなら、お前は私達の前から消えてくれるのか？」

「あら、可愛い後輩に向かってその言いぐさはないんじゃないですか？ それに私はまだ重要なことを伝えてませんから」

クレアはやれやれと頭をふると、呆れたような笑みをダーシエンカに向けた。そしてチラと来栖に一瞥をくれ、続けた。

「私は来栖千澄が魔術に囚われた兄を助けたいと心底願っていることを知り、如月イズミ暗殺の見返りに兄を助けるという話を持ち駆けた。だがそれはイズミを殺すことが目的ではなく、来栖の人格を試すためだ。それで人を殺してしまうようなら今後禁忌に近づきかねんからな。その点で言えば来栖はギリギリとはいえ踏みとどまったから合格だ」

「その話と私達になんの関係がある」

滔々と語るクレアに、ダーシエンカは苛立ちを隠さずに口を挟む。クレアの話している内容は来栖にのみ関連する話で、イズミとダーシエンカに関係のあることとは到底思えない。そのような無駄な話をするぐらいなら、要点だけ話して一刻も早く病室から消えて欲しい、というのがダーシエンカの考えだった。

不遜に構えているクレアは勿論のこと、所在なさげに佇んでいる来栖もダーシエンカにとっては目障りに感じられた。

踏みとどまったとはいえ、イズミを殺そうとしたことに変わりはないのだから。

「関係ない、とは言い切れない程度に関係のある話だ。いいか？ 私はこれから来栖の兄に掛けられた魔術を解く。私はもとより来栖が如月イズミを殺さなくとも封印を解いてやる心積もりだったワケだからな」

じゃあ来栖がイズミを殺していたらどうするつもりだったのだ、とダーシエンカが心のうちで呟くと、クレアがそれを読み取ったかのように。

「もし殺してしまった場合は、来栖千澄を処分した後封印を解いてやったさ。約束通りに、な」

と、こともなげにクレアは断言した。口元に淡い微笑すら滲ませながら。

ダーシエンカはその微笑に背筋を凍らせた。目の前にいる少女がうちに秘めているドス黒い、いや、善悪など無い、底を感じさせない深遠な感情が恐ろしかった。

クレアはダーシエンカがそのような感情を抱き始めつつあるのを知ってか知らでか、口元の微笑を消さなかった。

「兎も角、だ。私は来栖の兄の封印を解いてやる」

「だからそんなこと私たちには関係な、」

「関係ないな。ああ、まったく関係ないだろうな。たとえば来栖の兄を封印した輩がこの街にやって来てもまったく関係ないだろうな」

「それは、どういうことですか？」

疑問を投げかけようとしたダーシエンカよりも先に来栖が口を開いた。相も変わらずビクついてはいたが、言葉の端にはちよつとした芯が見受けられた。

来栖にとって兄の存在は、ダーシエンカにとってのイズミに近しいものがあるのだろう。

ダーシエンカはなんとなくそのように感じ、喉元まで来ていた疑問の言葉をグツと飲み込んだ。

来栖のことは決して許す気にはなれないが、自分が逆の立場だったらと考えると理解できない訳ではなかった。

「これは限りなく正解に近い推論だが、来栖家の異能が、どこかの異端審問機関で禁忌と捉えられたのだろう」

クレアはおもむろにピースサインを作り、その指先で来栖の両の眼を指し示した。

来栖はその指先を呆然と見つめながら、クレアが言葉が続けるのを待つ。とても不安そうに、今にも恐怖で押しつぶされそうな表情で。

「封印が呪詛的なモノだとすれば、封印を解けば施術者に呪詛返しが起こる。気づかないはずはない。つまり、術を解いてももう一度敵と対峙せねばなるまいな」

「……そんな。兄さんはただ、人に害為すモノを退治してただけなんですよ？　それがどうして禁忌なんか……兄さんは、悪いやつに負けたとばかり思っていたのに」

来栖はクレアの言葉に目を見開くと、力を失ったように床にへたり込んだ。

「無論その線もゼロではない、だがな、お前の兄に掛けられた封印は極めて高度な術式だ。お前の兄が所属していた組織の規模からすればそんな強敵と対峙する訳がない。もし仮に強敵と対峙してしまったとしても、そいつはお前の兄を躊躇なく殺していただろう。封印するより殺してしまう方が圧倒的に容易いからな」

クレアは淡々と現状について述べると、小さく呆れたような溜息を洩らした。

クレアは少し困ったような表情を床にへたり込んでいる来栖に向ける。来栖の耳にクレアの言葉はすでに届いていなかったらしく、その視線は宙を彷徨っていた。

「つまりお前はこう言いたいわけか？　禁忌を裁く者が近くに来る以上イズミも危ない、と」

ダーシェンカはへたり込んでいる来栖に一瞥をくれ、固い表情を

クレアに向ける。

異端審問機関は何も世界にアクロマ機関一つではない。いやむしろ、アクロマ機関という組織はどちらかと言えば無いに等しい規模の組織だろう。都市伝説のように伝えられる過去の実績がアクロマ機関の存在感を高めているに過ぎない。

そして、その百歩譲って権威あるアクロマ機関に認められようとも、他の機関が認めるとは限らないのだ。

魔術世界に絶対的法は存在しない。その殆どが慣習法であり、小さなコミュニティでのみ通用するものである——もともと、ネクロマンサーというものは全世界を通じて禁忌に最も近い存在と認知されてしまっているが。

だが、来栖の場合はイズミとは勝手が違う。アジア、あるいは日本、はたまたさらに小さいコミュニティかも知れない範囲で禁忌と認定されてしまった。

悪行を行っていないにも関わらず禁忌に認定されたことに、ダーシェンカは若干の同情を覚えはしたものの、それはイズミとて同じこと。

強すぎる力はこの世界でも危険視され、可能ならば排除されるのだ。

来栖の持つ異能も、あまりに強すぎたのだ。いや、力が過ぎたというよりも、それが一代限りの異能ではなく、脈々と受け継がれていくものということの方が禁忌と認定されるに値したのだろう。

おそらく来栖はその異能を自ら封じていたために難を逃れることができた、というのはクレアの推論。

「端的に言っていしまえばお前の推量であっているよ、ダーシェンカ。だが私がお前たちに警告しているのはそんなことじゃない」

「じゃあなんだというのだ。敵として迫ってくる可能性がある、それだけじゃないのか？」

眉を寄せながら言ったダーシェンカに、クレアはやれやれと呆れたように頭を振った。

「もう少し思慮深いヤツだと踏んでいたのだが、買い被りすぎだったか……まあいい。封印という術式はいかに簡略化しようと難解だ。それが今回の件は難解も難解。さて、ここで問題だ。禁忌を排除するとき、殺すのと封印するののどちらが容易いんだったかね？」

「そんなもの殺してしまう方が容易いに決まっている。その点で言えば来栖の兄の件はおかしいとは思う」

「そこまで気付いているのに何故想像できない。封印した者に何か別の思惑があるということを」

クレアの言葉に首を傾げたダーシエンカは思索する。

なるほど確かに来栖の兄の件は奇妙な点が多い。禁忌を排するならば殺すより最上の手段はない。だというのに封印というまどろっこしい手段をとったのはなぜか。

粗雑な仮説を立てるとするならば二つ。

一つはクレアの仮定するように何か思惑があつてのこと。その思惑は想像するよりほかはないが、ダーシエンカの考えついた説としては、高度な封印を解く者、すなわち禁忌を犯している可能性を持つ者をおびき寄せるための餌。だがこの説には決定的な欠点がある。封印を施した者がどうあつても後手後手に回ってしまうということだ。ましてや呪詛返しというハンデを負ってまで餌を撒くとは考え難い。

そして二つ目。来栖の兄を封印した者が来栖の兄と対峙した時、殺害を試みたものの上手いはず、封印という面倒な手段を選ばざるを得なかったという説。ダーシエンカとしてはこちらの説の方が濃厚に思えるのだが、クレアの口振りからするにこちらの方が可能性としては薄いのだろう。

「餌……ということなのか？」

ダーシエンカは腑に落ちないものの、その推論を口にした。

クレアはダーシエンカの答えに深く頷くと、ニヤリと不敵な笑みを浮かべた。

「おおかたその予想だろうな。あのレベルの術式を解けるものは禁

忌か異常さ。この私のように、な」

「じゃあお前がその敵を排除したらどうだ？　というより、敵の狙いはお前のようなヤツだろ」

ダーシエンカはクレアの威圧に負けることなく棘のある言葉を返す。

ダーシエンカはどうにも、クレアが状況を愉しんでいるようにしか思えなかった。クレアのはっきりとした魔術を目の当たりにしたことはないが、体育倉庫での一件を考えれば相当な手練だ。それこそ、どんな状況も力技でねじ伏せられそうまでの。

「確かに敵の狙いは私のような魔術師だろうな。もっとも私に敵うヤツなどそうそう存在しないがな」

クレアは心底楽しそうな笑いを洩らしながら言ったかと思うと、不意に凍てつくほどの冷たい視線をダーシエンカに向けた。

「先ほど私はお前たちに合格と言ったがな、正直気に食わないんだよ」

クレアはなんの感情も籠っていない、どこか作り物染みた声で言う。

ダーシエンカはその言葉に、その表情に返すべき反応が見当たらなかった。

何一つ通じない。何一つ変えられない。そんな雰囲気、目の前にいる、自分とそう歳の変わらないように思える少女から漂っているのだ。

先ほどまでダーシエンカが虚勢を張れたのは、クレアが遊んでいたからに過ぎない。こんな表情を見せられては、迂闊な言葉は吐けるわけもない。

だからダーシエンカは、悲鳴にも似た、短い息を洩らすのが精一杯だった。

「イズミが通り魔に遭っただろ？　アレは私の仕業だ。きちんと自己防衛できるか試すための“最低限”の試験だ。まあ、もっとも？　通り魔の強さの程度は一流の暗殺者レベルに設定してあったがな」

クレアの口から淡々と語られる言葉に、ダーシエンカは怒りを覚えずにはいられなかった。だがそれも、クレアの一睨みで掻き消される。

「なにか文句があるのか？ それとも何か？ 魔術師というものは一般規格内の暗殺者にも劣る存在だからそれでは厳しすぎると言うのではあるまいな。え？ イズミ愛しいばかりに何も見えていないクソガキが」

「異論は……ない」

ダーシエンカは拳をキツく握りしめながら、やっとそれだけの言葉を絞り出した。

——返す言葉もない。

それ以外に浮かぶ言葉など無かった。自分は何も見えていなかった。イズミよりは周囲に警戒を張り巡らせていると思っていたが、その実普通の生活を満喫してしまっていた。

慢心など全くなかった、と言えば嘘になる。

「それでいい。まあ、ともかくだ。お前たちは結局のところ何の力も示していない。示してくれたのはその仲睦まじさぶりと、自分を殺しに来た者すら殺せない甘さだけだ。言ってしまうとだな、イズミが雪の息子でなかったらとつくに殺している」

クレアはありありと殺気の籠った視線を、ベッドの上で穏やかな寝息を立てているイズミに向けた。

その視線が否応なく理解させる。クレアは本気でイズミを殺していた、と。いや、本気も何も殺すのが当然と思っているような視線だった。

「だから証明して見せろ。自分達が存在するに足る、何者にも利用されない力を持っていることを。そうすれば私はお前たちを殺さずに済む」

「私達に何をしろと？」

「私が封印を解いたら、術者、あるいは他の魔術師が来栖兄妹を狙ってくるだろう。その魔術師を退けて見せろ」



「それはつまり、イズミを殺そうとした人間を守れ、ということかな？」

「そうだ。だが忘れるな。来栖はイズミの命を救った者でもある。何せ私は、来栖がイズミを殺そうが、止めるつもりはなかったからな」

クレアは心底嬉しそうに微笑んだ。

クレアの表情は、数分前のダーシエンカなら間違いなく掴みかかっていたようなものだったが、今はそれが出来なかった。

迂闊に攻撃染みた行動をとれば、適当な理由をつけて処分されかねない。そんな剣呑な雰囲気はクレアの周りには漂っている。

「……分かった。言う通りにしよう」

ダーシエンカは呻くように言い、地面にへたり込んだままの来栖に目をやった。

来栖の視線は未だに宙を彷徨っており、クレアとダーシエンカの会話など、確実に耳に入っていない様子だった。

「それで、封印はいつ解くんのだ？」

「今日にでも」

ダーシエンカの問いに、クレアはニンマリと笑いながら答えた。予想していた答えではあったが、ダーシエンカは思わず歯噛みする。

今日封印が解かれるとすれば、遅くとも一週間以内には敵がこの街にやってくるだろう。禁忌を狩る者がのんびりしてくれるとは到底考えられないのだから。

そうになると、イズミは満身創痍のまま敵と対峙しなければならぬ。ヴェルナールとの戦いのときもそうではあったが、今回はそれよりも酷い。

来栖との戦いで傷口が一度開いてしまっている以上、次に開いてしまえば最悪の状況にすら陥りかねない。

それを知っていてなお、目の前にいる悪魔は今日にでも封印を解こうというのだ。

「……分かった。好きにするがいいさ。私一人でも何とかしてみせる」

ダーシエンカはクレアの鋭い視線を真正面から見据え、宣言した。ダーシエンカの言葉にクレアは満足そうに頷き、何かを言おうとした。そのとき、消え入りそうな声が病室に響いた。

「わた、しも……」

ダーシエンカとクレアが声のした方に視線を向ける。そこには、へたり込んだまま二人を見上げている来栖の姿があった。

「私も、手伝います。ダーシエンカさんが私達を守ってくれるというのなら、私もダーシエンカさん達を守ります。力不足かも知れませんが、やらせて、下さい」

来栖は潤んだ瞳でダーシエンカを見つめながら、深々と頭を下げた。へたり込んだ状態から頭を下げたため、凶らずも土下座のような形になる。

いや、どの道士下座するつもりだったのだろう。来栖はそれほどまでに自分の行いを悔いていた。

「それは……無理だ」

ダーシエンカはいつまで経っても頭を上げない来栖の脇にしゃがみ、穏やかな声で言った。

それでも来栖は一向に頭を上げようとはしない。

「ネクロマンサーは、他の魔術師との共闘が認められていない。そうだろ？」

ダーシエンカは確認するような視線をクレアに送る。

クレアはその視線に頷き、口を開いた。

「ネクロマンサーとの共闘は認められていない。だがそれはあくまで脆弱なネクロマンサーを助けてはいけないというだけで、ネクロマンサーが他の者を助けようとすることは禁じられていない。それがどういふことか分かるか？」

クレアの言葉に、ダーシエンカは思わず驚きの表情を漏らした。クレアはこう言っているのだ。

今回は来栖兄妹を守る戦いだから共闘しても構わない、と。

「……分かった」

ダーシエンカは驚きに目を見開いたままそれだけを口にする。

「利口で助かる。それでは私は来栖の兄に掛けられた封印を解いてくるから、お前たちはここで待っている。しばらくしたら来栖の兄を連れて戻ってくる」

クレアはそれだけ言うと、無表情のまま病室を出ていった。

「あの……どうということ、なんですか？」

取り残された来栖は、呆然とした表情をダーシエンカに向ける。

「協力してもいい、ということだ」

ダーシエンカは来栖以上に呆然とした表情で、クレアが出ていったドアを見つめていた。

——どうにも考えが読めないヤツ。

ダーシエンカはクレアという少女について、それ以外の表現が思いつかなかった。

病室の扉を閉め、クレアは小さな溜息を洩らした。

——まったく、嫌になるな。

クレアは扉に一瞥をくれながら胸中に呟く。注意深く見れば、クレアの表情にはどこか困ったような微笑が浮かんでいた。

クレアはそのわずかな表情を一瞬で消し去り、歩きだした。リノリウム張りの廊下に、よどみないリズムの足音が響き渡る。

クレアはその音に意識を傾けながら、頭の片隅では自らの行動を省みていた。

甘すぎる、とは我ながらに思う。本来ならばイズミ達だけでなく、来栖兄弟も処分することが正解なのだろう。そうすれば間違いなく、後顧の憂いを断つことができる。

だが、クレアにはそれが出来なかった。口では、態度では、厳しいことを示せても、心の底では甘い決断を下してしまう。

それもこれも、イズミ達が日常に寄り添って生きているからなの

だろう。イズミ達が純粹な魔術師だったならば、クレアも容赦なく処分することができた。

いや、その考えは言い訳にするには弱すぎる。望もうが望むまいが、魔術世界に片足を突っ込んでしまっている者に情けなど無用なのだ。その程度のことではいちいち情けを掛けていては、機関の存在意義自体が揺らいでしまう。

——では、なぜ？

クレアは自問する。どうして自分がイズミ達に情けを掛けてしまったのかを。

答えは簡単には出てくれそうにない。いや、すでにどこかしらで答えが導き出されているような感覚はあった。それでもクレアはそれを思考することを拒否した。

答えを導き出してしまえば、この先の判断、行動に支障をきたしてしまう。だから導き出すわけにはいかなかった。

「……どうでもいい」

クレアは無表情にひとりごち、思考の渦に蓋をした。

これ以上こんな下らない事にかかずらっていたら、ロクなことになる。そんなことはクレアの永い人生経験上明らかだった。

そしてこんな事に少しでもかかずらってしまったときは、必ずロクでもないことが起こる。少しでも思考してしまった以上、今回もロクなことにならないのだろう。

クレアはそんな予感を胸に苦笑を浮かべた。

——そう言えば、いつか同じようなことがあったな。

クレアは過去の感傷を一瞬胸によぎらせながら、ビルの玄関をくぐり抜けた。自動ドア一枚を抜けただけで、クレアをあまたの音が包み込む。

人の話す声。歩く音。車の通る音。鳥が飛びまわる音。工事現場の音。

その全てがクレアには遠く感じられた。自分とは違う世界の出来事のように。実際、違う世界の出来事なのだろう。

クレア・アクロマ・プリンズフィールドという少女の存在は、すでに一般世界と隔絶してしまっている。活動出来ているという点以外では、来栖の兄と違いないと言ってしまってもいいくらいに。

クレアはどこか冷めた瞳を眼前に向けながら歩き始めた。九月も終わりに近づこうというのに、残暑は依然厳しかった。

もともとクレアには暑さよりも、沸き上がる思考を抑えることが苦痛だった。

自分がイズミ達のことを愛おしく思う理由が、日常を感じさせてくれる数少ない人間だということ。それに気付かないただけに、クレアは思考を集中させた。

集中することがより答えを明確にしようという矛盾に気づきながらも、クレアにはそれ以外に方法が思い付かなかった。

一方で、自分にもまだ分からないことがある、そのことがどうしようもなく嬉しかった。

自分にもまだ人間の欠片が残っていると錯覚できるから。

「私は……すべきことをすればそれでいいのだ」

クレアはどこか寂しげな表情で呟くと、街の喧騒の中から姿を消した。一瞬で、幻のように。

そして、そのことに気付くものは一人としていなかった。クレアという少女の存在は、その美しさをして、陽炎よりもあやふやな存在だったから。

＊ ＊ ＊

奇妙な沈黙が病屋を支配していた。

クレアが病室から去り、取り残されたダーシェンカと来栖は、椅子に腰をおろしてイズミの寝顔をぼんやりと眺めていた。

イズミは穏やかな寝息を立てていた。麻酔が効いているとは言え、割と深い傷を負ってもこの程度で済んでいるということは、華奢な見た目に反してタフらしい。

「お前の兄は、どんなヤツなんだ？」

沈黙に耐えかねたダーシエンカは、イズミの顔を見つめたまま呟いた。

本当は来栖の兄が所属していた組織や、来栖家の異能について質問する方が、正しいのだろう。だがダーシエンカはそうしなかった。精神的に混乱している今の来栖にそのようなことを尋ねるのは適切ではない、という考えも勿論あった。だがそれ以上に、異能を持つてはいても日常を生きていた来栖に、ここまでの行動を取らせた存在に興味湧いたという方が大きかった。

来栖にとって兄という存在は、自分にとってのイズミのようなものなのだろうか、という興味が生まれたのだ。

「わ、私の兄は……とても優しい人、です。私達兄弟は、小さい頃に両親を失ったんですが、兄は来栖家の異能を活かして生計を立て、私を育ててくれました。自分の平穏な日常を犠牲にしてまで」

来栖は握りしめていたスカートの裾をさらにきつく握りしめながら、震える声で語った。

それが精一杯絞り出した声だったのだろう。

「……そうか。よかったな、大好きな兄が帰ってきて」

ダーシエンカは来栖のキツク握りしめられた拳を見つめながら、そう言った。

その言葉に来栖は肩をビクつかせると、怯えた瞳でダーシエンカを伏し目がちに見つめる。

「違う、怯えるな。別に皮肉で言ったんじゃない。私はお前のことを許す気にはなれないが、イズミならばそう言っただろうと思って言っただけだ」

ダーシエンカは不安げな表情を浮かべる来栖に、努めて穏やかな表情で言い、嘆息を漏らした。

どうにも調子が狂って仕方がない。ダーシエンカはそう思わずにはいられなかった。

目の前にいる少女はもうイズミに害をなさないだろう。断定する

のは危険なのだが、騙しているという可能性の方が低いということは直感的に判断出来た。

だからこそ来栖との接し方に戸惑ってしまう。元は排すべき敵、今は協力するべき存在。そう考えて事務的な会話をいくつか交わし、来るべき事態に備える。それが一番正しい接し方なのだろう。

だというのにダーシエンカがそう出来ずにいるのは、来栖の日常を見知っているからなのだろう。そちらが仮初の姿だったならともかく、来栖にとっては日常が本来の在るべき場所だ。そんなことは今の怯えきった来栖を見ていれば嫌でも分かってしまう。

「……ありがとうございます」

来栖は目の端に涙を滲ませ、消え入りそうな声で呟いた。

そんな来栖にダーシエンカは困ったような微笑を返し、眠っているイズミに視線を移す。

イズミは相変わらず穏やかな寝息を立てていた。その安らかな表情を眺めていると、今起きている出来事が悪夢か何かではないかと、ダーシエンカには思えてしまう。

目が覚めたら、つい先日まで続いていた日常が続いているのではないか。そんな淡い期待が生まれてしまう。

（これではまるでイズミではないか……）

ダーシエンカは頭を振り、浮かびかけた甘い思考を掻き消した。

イズミに影響されているということは、嫌なことではない。嫌なことではないのだが、その影響がイズミを危険に晒すとなれば話は変わってくる。

——やはり自分は道具として在る方が。

「……似ているんです」

「え？」

イズミが聞いたなら間違いなく怒るであろう思考をダーシエンカが描き始めた瞬間、来栖が控えめに口を開いた。

「似ているって……何が？」

ダーシエンカは来栖の唐突な言動に首を傾げながら問うた。

「兄さんと如月くんが、似ているんです。自分のことは二の次で、人のことばかり考えてしまうところとか」

来栖はイズミの寝顔を見つめ、呟きはじめる。その表情には微かな怯えも浮かんでいたが、どこかしら慈しむような、そんな穏やかな雰囲気も漂っていた。

おそらくその慈しみはイズミに向けられたものではなく、兄に向けるソレをイズミに重ねているのだろう。

ダーシエンカはそのような推測を頭に浮かべながら、黙して来栖の言葉の先を待った。

「私が如月くんを殺そうとしたとき、如月くんは反撃しようとしなかったんです」

来栖はするように話を切り出し、そのとき起きたことをつぶさに語りはじめた。

クレアから大まかな内容を聞かされていたダーシエンカではあったが、来栖の口から直接語られた内容は、それはそれで諦念を伴った驚きをダーシエンカにもたらした。

来栖が殺気を伴った攻撃を繰り出しても、イズミはそれに応じることなく防戦に徹した。来栖を葬り去る手段があるにも関わらず、だ。

もちろん、そんな状況が繰り広げられることは来栖の瞳が予想していたし、予想していたからこそ来栖たちはダーシエンカをその状況から遠ざけたのだ。来栖の瞳はダーシエンカの繰り出す攻撃を寸分の誤差も出さずに算出できるが、その常識を超えた攻撃に対する回避能力を持たない来栖にとって、ダーシエンカは邪魔だったのだ。クレアの助力によってダーシエンカという障壁を取り除いた来栖は、予定通りイズミの甘さに付けこんでイズミを殺す、ハズだった。だが出来なかった。イズミの信じられない甘さを目の当たりにし、日常を生きていた来栖は我に返ってしまったのだ。

「今にして思えば、如月くんの甘さに、兄を見たのかもしれない」  
来栖はそう呟いて話を締めくくり、再び俯いてしまった。



——なんともイズミらしいな。

ダーシエンカは来栖の独白を聞き終え、苦笑を漏らす。

苦笑が漏れたことはダーシエンカ自身にとっても驚きだったが、それでもそれ以外に浮かべるべき表情が思い浮かばなかった。

「まったく……しょうのないヤツだ」

ダーシエンカは呆れたようにため息を吐いた。

向かってくる敵は討ち滅ぼす。それ以外に常識などないと思っていた自分がイズミの甘い考えを受け入れようとしている。

それはダーシエンカにとって信じられないことだし、信じたくないことだった。

今回はイズミの甘さが功を奏したが、そんなことは万が一の偶然に過ぎない。その甘さはこれから先、イズミを危険にさらす可能性の方が高いのだ。

それだというのに、イズミだけでなく自分の中にもその甘さが芽生え始めている。そのことがダーシエンカにはどうしようもなく耐えられなかった。

イズミに害なす敵は、どんな事情があろうと容赦なく葬らなければならぬ。少なくとも、自分だけはそうように在らねばならない。ダーシエンカは苦笑を消し去り、張りつめた表情で己に誓った。

自分の中に甘さが生じていることを自覚しながらも、イズミの剣としてある以外に自分の立ち位置を固定できる場所がなかったから。

ダーシエンカは思考を強制的に切り替え、これから先のことについて思いを巡らす。

クレアが来栖の兄に掛けられた封印を解いたら、すぐに警戒を始めた方がいい。それは考えるまでもないことだ。

だが問題は、どのように来栖兄妹を守るか、という点だ。

来栖の口から聞いた限り、その身に内包されている異能はかなり役に立つ。むしろ最大限に発揮できればすんなりと敵を排することができるだろう。

そう。最大限に発揮できれば、の話だ。

「お前の能力は、どの程度役に立つんだ？」

ダーシエンカは自分の不安が現実のものであることを確かめるために、嫌々ながらも口を開いた。

「あまり、役には立たないと思います。私の異能はせいぜい、相手の繰り出す攻撃の軌道を読み取るくらいで……読み取れたとしても、避けられるだけの能力がなければ意味がないですし」

来栖は顔を俯けながらも、芯の通った声で語った。声の調子から察するに、だいぶ落ち着いてきたと見ていいだろう。

(……やはり、か)

ダーシエンカは自分の予想が的中したことに眉根を寄せ、顔を俯ける。

クレアと来栖の話を総合すると、クレアの存在なくしてはイズミへの襲撃はうまくいかなかっただろう。

来栖は確かに卓越した能力を持つてはいるが、その能力は余りに受動的過ぎる。周りの状況を的確に掴めても、それを自分に都合のいいものに改編するためには、来栖の能力が明らかに不足しているのだ。

「となるとやはり、こちらが不利と考えるべきか……」

ダーシエンカは顎を軽く擦り、呻くように言った。

来栖の能力は、先制攻撃においてこそ最大限の能力を発揮する。それがダーシエンカの考えだった。

膨大な情報を的確に捌き、捌き終わった頃には戦わずして勝利を確固たるものに行っている。それが来栖の能力の最も有効な使い方。実際、イズミとの戦いではこのパターンが用いられたのだ。

だが、今度の戦いにその戦法は取れない。何せこちらは相手の情報など何一つ持っていない。ばかりか、相手はこちらのおおよその居場所、さらには来栖家の異能についても知っているだろう。

先制攻撃など仕掛けようもない。

黙々と思案に耽るダーシエンカを不安げに窺っていた来栖が、控え目に口を開く。

「ダーシエンカさんの考えは確かに正しいと思います」

「っ！？ お前の異能は、心も読めるのか？」

「そんな大層な能力じゃありません。ただ、表情や息使いから表層の思考を読み解いただけです。少なくとも私では、心の底までは読み解けません」

来栖は若干の狼狽を見せたダーシエンカに静かに答え、続けた。

「ご想像の通り、私の能力は場当たりに使うのには向きません。私程度の戦況予測など、一流の魔術師なら難なくこなせるでしょうからね。実際、如月くんにもやられましたから。だから、事前に状況を組み立てる以外にはお役に立てません。ただ……」

「ただ、なんだ？」

言い淀む来栖に、ダーシエンカが先を促す。ダーシエンカは無表情を装ってはいたが、内心来栖の異能に驚愕していた。

表情と息使いだけから思考を読み解くなど、人のなせる技ではない。そう思わずにはいられなかった。

おそらくそんな思考すら、今の来栖には筒抜けなのだろうが。

「ただ……私を囷にして、相手の情報を引き出すことができれば、二段構えで敵を撃退することは可能かと」

来栖は真正面からダーシエンカを見据え、ハッキリとした口調で言い切った。

ダーシエンカは、そう言い切った来栖の瞳に圧倒されていた。その瞳には、つい先ほどまで怯えていたとは思えないほどの、強い意思が宿っていたから。

強い意志だけならば、ダーシエンカもすぐに言葉を返すことが出来ただろう。だが、来栖の口から語られた言葉の重みが、ダーシエンカにそれを躊躇させた。

「……ダーシエンカさん。あなた“も”優しいんですね。漂ってる雰囲気如月くんとそっくりですよ？」

言葉を返せずに呆然としているダーシエンカに、来栖は優しく微笑みかける。

ダーシエンカはしばらく来栖を見つめたのち、ゆっくりと頭を振った。

「その選択肢は無し、だ。お前が今も異能を発動しているなら私の考えはおおよそ分かるだろ？」

「ええ。あなた達が課された試練は私達兄妹を守りきること。それなのに私を囚にしては本末転倒だ。そう思ってるんですよね？」

「そうだ。だからお前の案は却下、」

「それぐらいしなければ、私が如月くんにしたことは償えません」

来栖はダーシエンカの言葉を遮る。そう言った来栖の表情には、固い決意が滲んでいた。

「分かって言っているのか！？ 得体の知れない魔術師相手に囚になるということはな、死に行くようなものだ！ 幸運な場合を考えても、何か大切なモノを失うぞ。それは手足かもしれないし、五感のいずれかかもしれない。もっと酷い場合だって……」

来栖は一気にまくし立てるダーシエンカを穏やかな表情で見つめていたが、不意に小さく頷き口を開いた。

「分かっています。ですが私にはこの眼があります。普通の囚よりは早く情報を引き出せます。もし仮に私が死んだとしても、敵の情報だけは必ずあなた方に伝えます」

「だからそれが本末転倒だと言っているんだ！ お前が死んだら私達もクレアに殺されるんだ！ お前の案は馬鹿げている！」

「でも……私がこの案を告げたとき、あなたはすぐに否定しなかった。それはあなたもそれ以外に方法がないと思ったからではないですか？」

来栖は射抜くような視線をダーシエンカに向けた。その瞳はすでに答えを導き出しているのだろう。それでも口に出したのは、ダーシエンカをやりこめるため。

自身を守るために使う異能で自身を死地に追いやろうという、なんとも言えない皮肉。

案の定、来栖の指摘にダーシエンカは言葉を詰まらせた。

実際、ダーシェンカもそれ以外に有効な手段が思い当らなかったのだ。相手が来栖家の異能を刈り取りに来るならば、来栖を囚にして相手の情報を掴むのが最上。もっとも、警護対象を危険に晒すという意味では愚の骨頂でもある。

だからこそ、思い浮かべてすぐに否定した。だというのに、囚、いや、この場合は捨て駒と言った方が正しいのだろう。捨て駒の方からその案を提示してきた。

並々ならぬ決意のもとに。

それでもダーシェンカはそれを否定しなければならない。たとえばクレアがこの案を容認しようとも、この案だけは絶対に受け入れることはできない。

なぜなら、今傍らで深い眠りに落ちている少年は、この案を良しとしないからだ。絶対に。

「分かった……そんなに囚になりたいならば好きにするがいいさ。ただし、私が第一の囚になる」

ダーシェンカはイズミの顔をチラと見やり、言った。

そこから先のことは口に出さない。口に出さずとも、来栖には察せているだろうから。

案の定、来栖は呆けた表情でダーシェンカを見つめていた。来栖が読み解いたダーシェンカの思考は、ロリポップのように甘ったるく、どんな辛酸よりも苦かった。

「分かって、言ってるんですか……？」

来栖は呆けた表情のまま、半ば独り言のように呟いた。

ダーシェンカは来栖の言葉に、黙って頷いて見せる。異能を発動させている来栖には、言葉などほとんど不要だから。

「そんなの……ダーシェンカさんの思考じゃないですよ。不合理すぎます」

「当たり前だ。これは私の思考ではない。イズミならどうするかと、イズミの思考をトレースしたのちの思考だ」

呆然と呟いた来栖に、ダーシェンカはさも当然のように言った。

「そんな、そんなこと如月くんが考えるはずがないでしょ！　ダーシェンカさんを一番の囃にして、私にそれを観察させるなんてっ！」  
「考えるさ、イズミなら。何せ私は首を落とされでもしない限り、死ぬことはほぼない。強度の上で、私はお前よりも囃向きだ」  
「でも！　そんな危険な役を如月くんがあなたにやらせるなどあり得ない！」

来栖は目を見開き、ベッドの上で寝息を立てるイズミを見据えた。  
ありえない。そう、ありえないのだ。目の前で眠る少年がそんな策を立てるなどということは。

眠っている者の思考は読み解けないから、絶対にはいとは言えない。それでも、来栖が見てきた如月イズミという少年の人となりから察するに、イズミがダーシェンカを危険に晒すような策を取るなどとは、どうしても考えられなかった。

なぜなら、イズミの思考の最上位には、常にダーシェンカがいたのだから。

もっとも、ダーシェンカの思考の最上位もイズミであるから、ダーシェンカがトレースしたというイズミの思考もあながち外れているとは思えない。

「嘘だと思うなら、イズミが起きてからイズミに策を立てさせてみればいいさ。きっとイズミは“二番目”に私が言った策を上げるハズだ」

思案を続ける来栖に、ダーシェンカは肩をすくめながら微笑んだ。  
まるで、出来の悪い弟子が答えに辿り着くのを辛抱強く待つ師匠のように。

＊ ＊ ＊

クレアが気だるげに瞼を持ち上げると、そこは見覚えのある扉の前だった。

年季の入った二階建てアパートの一室。何度か訪れたことのある、

来栖千澄・久弥兄妹の住処だった。

先ほど幸也の非合法病院の前で瞼を閉じ、開いてみればこの扉の前に立っていた。

それはときたま都市伝説の一つとして耳にする“妖精の悪戯”の類に似ている。

いつの間にか知らない場所にいたり、自宅に帰りついていてというアレだ。

もっとも、クレアは意図的にその現象を起こした訳だから、戸惑うはずもない。代わりにその口元には、自嘲的な笑みが浮かんでいた。

クレアが行ったのは自身の肉体をエーテル化し、光速に限りなく近い速さで移動するというもの。空間を跳躍する訳ではないためワープの類とは異なっていたが、結果だけ見ればなんら相違ないモノだった。およそ人には、ばかりか一流の魔術師にも為せない技。

クレアは数瞬目の前の扉を見つめ、おもむろにポケットから鍵を取り出した。

それは来栖から一応、と預けられたこの家の鍵だった。

クレアは鍵など無くても家の中に入ることは出来たが、なぜか扉の前で移動を止めてしまった。

——自分が普通じゃないことを再認識するためにこの移動法を使ったのにな。

クレアは手の中で微かに輝く鍵を見つめながら、寂しげに微笑んだ。そんな表情のまま鍵穴に鍵を差し込み、捻る。

ここで鍵を使ってしまうのは“普通”という概念への執着か。と小さな感傷がクレアの胸で疼いたが、一瞬で排した。

感傷を排すと同時に、ガチャリという音とともに扉が解錠される。クレアはその音をぼんやりと聞き流しながら、扉を開けて中に入った。

質素にまとめられた室内を通り抜け、来栖の兄・久弥の眠る和室のふすまを開いた。

部屋はクレアが初めてここを訪れたときとなんら変わっていないかった。まるで部屋の主と同じように、時間が停止しているかのよう

に。  
もっともそんな見方はロマンチシズム溢れた見方で、実際には来栖がそうしているに過ぎない。自分が暮らす場所よりも念入りに掃除している、ということは塵一つ落ちていない室内から容易に想像できる。

「助けに来てやった、というのは少々驕りが過ぎるかね？ 若人<sup>わこうど</sup>」

クレアは眠る久弥にシニカルな笑みを向け、傍らに腰を降ろした。そっと、久弥の頬に手を添え、慈しむ様に撫でる。

クレアは久弥との面識など全くなかったが、久弥という男のことが好きだった。恋心とかそのようなモノでは勿論なく、単純に好感を覚えているというだけだった。

自らの身を異常に染めながら、妹の日常を守る。

久弥のそのような在り方が、クレアにはどうしようもなく愛おしかった。

「お前の妹を利用したことは素直に詫びよう。もっとも、お前が目を覚ましてからまた謝る気はサラサラないがな」

クレアはクスリと小さく笑い、目を閉じた。

目を閉じ、精神を集中する。久弥に掛けられた術式にのみ、意識を傾ける。

片手間に封印を解くことも出来ないではなかった。それでもクレアは、妹の“日常”を必死に守っていたのであろう久弥に敬意を払い、全身全霊を掛けて封印を解かんとする。

術式を解明してみればなんと言うことはない。体系化された封印魔術の一端に過ぎない術式だ。何一つ特別なモノなどない、既存の術式。

固定化の魔術を応用した、ごくごく“難解”な封印。

ありとあらゆる流れ——血液、はては時まで——を固定化し、延々と同じところを巡らせる。



停滞に似て非なるもの。

それが久弥に掛けられた封印を端的に表すものだった。

要するに、電圧が永遠に減ることのない電気回路のようなものだ。久弥という電流は、そのカタチを崩すことなく、同じ輪の中を延々と巡り続ける。

「確かに、並の魔術師では解けるハズもない術式だな」

クレアは目を開き、小さく笑う。

そして、久弥に掛けられた術式に静かに介入する。

久弥の頬にそっと触れ、そこから自らのエーテルを送り込む。本来なら、他者の肉体にエーテルを送り込むということは攻撃に当たる。イズミのソレがダーシエンカ以外には武器と化すように。

だが、クレアのソレは違った。自身のエーテルを久弥と完全に同化させながら送り込むという、離れ業をやったのける。それは言わば、自身の臓器などを他者のそれと同一化させるようなことだ。

だが、それでもまだ足りない。送りこんだエーテルを使って術式を破らなければいけないのだから。

クレアは延々と巡り続ける輪を思い浮かべ、自身もその中を巡る。巡りながら、自身を囲む檻、輪をなす外郭をイメージする。

実際の檻は内からも外からも破りがたいが、魔術は違う。大抵は内か外のどちらかが弱い。たとえば身を守る魔導障壁なら外の衝撃に強く内の衝撃に弱い。何かを捕えておく魔術ならば、内からの衝撃に強く、外からの衝撃に弱い。もつとも、後者の術式は反転させた障壁をその上に被せるから、内にも外にも強くなるのだが。

では、久弥の場合は？

答えは簡単。

内からの衝撃にのみ弱い、だ。

何せこの封印は、久弥を“守るために”施されているのだから。

久弥に施された封印は、言ってしまうえば核シェルターにも匹敵する究極の防御魔術。何せほとんどの攻撃を受け付けなくさせるのだから。

高位の魔術師ならば、止むにやまれぬ事情において自身に、あるいは他者にこの魔術を掛けるだろう。何らかの攻撃から身を守るために。

だがそれは、術を自身の手で内側から解くことができるという前提条件付きだ。おそらく久弥にはそんな技量はなかっただろうし、何より、この手の術式に在ってはならないプログラムが組み込まれている。

封印の内側の者の自我を封じる、呪詛。

自我を封じられては、いかに技量あるものでもこの封印を破れるはずがない。ましてや、もともと技量のない久弥ならなおさら。

だからクレアは久弥の内に入り込んで完全に同化し、久弥として封印を破るのだ。囚われた久弥の自我の代わりに。

自我を解き放つのは封印を解いてからで構わない。

クレアは微笑を浮かべたまま、久弥の内でエーテルを高速回転させた。久弥を囲む魔術の檻をジリジリと削り、ものの数秒で封印を解いた。

解ける技量を持つ者でも、数カ月は下準備をしなければいけない術式を、だ。

「我ながら本当に化け物染みているな」

クレアはどこか寂しげに呟き、ふと、視線を部屋の中に彷徨させた。

なんの変哲もない、どちらかといえば古ぼけた和室。天井や壁の所々にもシミなどが目立っている。

その一つ一つには来栖兄妹の思い出が詰まっているのだろうし、そのシミ達は来栖兄妹の“日常”を見守ってきたのだろう。

——私は、それを壊した。

クレアはシミの一つをぼんやりと見つめながら、胸中に呟いた。後悔しているわけではない。良心の呵責に苦しんでいるわけではない。

ただ漠然と、自分が起こした行動の結果を呟いただけだ。

どだい無理な話なのだ。クレアに日常の重みを理解することなど。クレアがこの世に存在してから“数百年”。クレアがまっとうな人間でいられた年月など、僅か十数年だ。

そう、ちょうどイズミ達の歳と同じくらいの年月。

イズミ達にとっては十数年とは全てだ。だが、数十年も生きれば話は変わる。老人にとって、若き日の思い出が擦り減り、小さな――それでいて大切な――ものと化してしまうように。

それが数百年ともなればなおのこと。数十年という時間は、クレアにとってごく小さなものになってしまった。

そして悲しいことに、膨大な年月はその大切さすらも忘れさせた。だから今のクレアは、日常というものを「大切なものなのだろう」程度にしか認識出来ない。

愛おしいとは思えても、それは空想の中に向ける羨望に過ぎない。そのことが、クレアにはどうしようもなくやるせなかった。

「どうでもいい」

クレアは自分自身に言い聞かせるように呟くと、小さく息を吸い、そして深く吐き出した。まるで思考した内容をすべて吐き出すかのように。

息を吐いた後のクレアの行動にはよどみがなかった。蒲団に横たわった久弥を、その華奢な体のどこにそんな力があるのかという軽やかな動作で抱えあげ、ゆっくりと瞼を閉じる。

イメージすべきは目的地の位置。そこに堆積する、縁ともいえる自身の記憶。その場所に繋がる路。

クレアはそれらのイメージを一瞬のうちに点として思い浮かべ。すぐさま線に昇華する。

イメージが確固たるものとなるのと同時に、クレアの体は、ばかりか久弥の体までエーテル体と化していた。

それを感覚する間もなく、二人のエーテル体は古ぼけた和室から消え去った。常人には決して捉えられぬ、ほのかにエメラルドグリーンに輝くエーテルの残滓を残して。

クレアが目を開けると、イズミの眠る病室の前だった。先ほどの部屋を後にしてから、十分と時間が経っていない。

そんな短時間で久弥の封印を解き、戻ってきたと知れば、部屋の中にいる二人の少女はどのような顔をするのだろうか。

一方は無表情を取り繕い、もう一方は啞然とした表情を浮かべながらも心の底から喜ぶのだろう。

クレアはなんの感慨も伴わない予想を立て、久弥をその腕に抱えたまま扉を開いた。

扉が開かれると同時に、二つの視線がクレアに突き刺さる。クレアの予想がほとんどの中した形で。

「……兄さん？」

来栖が呆然と呟き、クレアによりよると歩み寄る。来栖はクレアの腕に抱かれた久弥の頬に、恐る恐る手を伸ばした。まるで、触れればすぐに碎けてしまう薄氷をなぞるような手つきで。

「安心しろ。封印は解けている。お前の手でも触れることが出来る。温もりを感じることもできる」

クレアは来栖に向かって朗らかに微笑んだ。クレアが心の底からの笑みを来栖とダーシエンカに見せたのは、これが始めてだった。

その笑みは、身を削って妹の日常を守っていた久弥への、敬意と謝罪の表れでもあった。

「あ、ああ……うつ」

来栖は大粒の涙と嗚咽を漏らしながら、久弥の体に抱きついた。

確かにそこには、来栖が触れたくてたまらなかった、兄の温もりがあった。兄の息使いがあった。

ずっとそばに居たのに、決して触れられなかったモノが、そこに確かに存在していた。

クレアとダーシエンカは来栖が落ち着くまで、穏やかな表情で見守っていた。

来栖の嗚咽が小さくなり、やがて止まった。それを確認したクレ

アが見計らったように口を開く。

「封印は解いているが、仕上げはまだなんだ。ついてこい。隣の部屋で仕上げをする。兄妹の再会は水入らずの方がいいだろう？」

クレアは悪戯な微笑を浮かべ、来栖を伴って隣の部屋に移る。

退室の際に深々と頭を頭を下げた来栖に、ダーシエンカは微笑を返した。

隣の部屋に移ったクレアは、ベッドの上に久弥の体をそっと横たえる。その様子を心配そうに見つめている来栖に向き直り、真剣な表情を向けた。

「これからお前の兄の自我を解放する。そうすればお前の兄は意識を取り戻すだろう。だが、封印魔術の影響もあるから、最初は意識を保てて一、二分だろう。そのことを知ったうえで再会してもらう。かまわないな？」

クレアの言葉に来栖は深々と頷いた。最初に一、二分しか会えなくてもかまわない。意識が戻りさえすれば、これまで来栖の中に積もってきたモノを、ゆっくりと久弥に伝えていくことができる。長い時間をかけて。

そのときふと、来栖は気付いた。自分が生きようとしていることを。囹となって犠牲になる覚悟をしていたというのに、その覚悟が揺らいでいる。

それは、ダーシエンカが来栖を生かしてくれようとしたからでも勿論ある。だがそれ以上に、兄の存在が大きかった。

兄と生きていたいがために、自分のために、その決心が容易く揺らいでしまった。

来栖の胸の中に、激しい自己嫌悪が起こる。

まるでそれを見透かしたかのようにクレアが言った。

「生きようと望むことは悪いことではない。本当に悪いことは、自分の死を他人の生に押し付けることだ」

クレアはどこか遠い目で、それでいてまっすぐに来栖を見つめて

いた。

クレアの発した言葉に来栖は目を見開く。その言葉はまるで、来栖とダーシエンカの会話を聞いていたかのような言葉だったから。もったも、目の前にいる少女ならば、そのようなこと容易くやつのけそうだったが。

「その顔だと、今は能力を発動させていないらしいな」

クレアは来栖の表情を見やり、皮肉るような笑みを浮かべた。

「え、ええ。まあ」

「賢明な判断だな。来栖家の異能は肉体への負荷が高い。常時発動していたら体がもたない」

クレアは嘆息を吐き、ゆっくりと頭を振る。

体がもたない。そのことは来栖も重々承知していた。

能力を発揮したときにもたらされる情報は、周囲の状況を掴むだけでなく、己の状態を掴むことでもある。もたらされた情報をフィードバックし、己の行動を規定するのだから当然と言えば当然。

そこから導き出される解は、来栖の異能の連続発現時間は一時間が限界。それ以上は体に過負荷がかかってしまう。

試したことはないが、この眼が導き出したモノだから間違っているということはないだろう。

「ま、そんなことは本人が一番よく知っているか」

クレアは退屈そうに息を吐き、口元に笑みを浮かべた。

クレアは次の瞬間にはその笑みをサッと消し、引き締まった表情を来栖に向ける。

「では、解くぞ」

クレアの言葉に来栖は堅い唾を呑み込み、ゆっくりと頷いた。

クレアは来栖の返答を確認すると、ゆっくりと久弥の額に手をのせる。敬虔な洗礼者バプテスマのような表情で。

クレアはうつそりと久弥の顔を眺めた。

妹と同じく、綺麗な顔立ちをしていた。中性的で、陰のない顔つきだった。その表情と同じく、性格も穏やかなのだろう。

そのようなことをぼんやりと考えているうちに、久弥の自我の解放は終わった。普通の――言い換えれば一流の――魔術師ならば顔中に汗を浮かべて集中する解術を、クレアは片手間に終わらせてしまった。

もつとも、久弥の顔を眺める一方では、解術のために思考をめい一杯走らせていたが、そのようなことはクレアにとっては苦勞ですらなかった。

一般的な言い方をするならば、クレアは軍事レベルのCPUを何十個も積んだコンピュータなのだ。CPUの一個をフル稼働させたところで、クレアへの負荷は微々たるものに過ぎない。

皮肉なことに、クレアはそんな表現など思い浮かばない、極めてアナログな人物だったのだが。

「解けたぞ」

クレアは久弥の額から手を放すと、なんてことの無いように言い放ち、部屋を出ていった。

あまりの速さに来栖がお礼を言う暇も見つけられなかったほどだ。

「隣の病室にいる」

クレアは去り際にそう言い残し、部屋の扉をそっと閉じた。

部屋に残された来栖はすぐさま兄の傍らに歩み寄り、その表情を見つめる。

年にして五年もの間眺めつくしてきた、兄の寝顔。決して動くことのなかった人形のような寝顔。

その寝顔に、微かな変化が生まれる。

寝息とは違う、短い呻きが漏れ、久弥の顔がしかめられる。

「兄さんっ！」

来栖は思わず兄の手を取って叫んだ。

その声に、久弥がびくりと肩を震わせる。そうして、ゆっくりと、固く閉ざされていた瞼が持ちあがった。

トロンとした瞳が、来栖を見つめる。

「千、澄……？」

「はい、私です、兄さん」

来栖は再び大粒の涙と嗚咽を漏らしながら、声を震わせた。

「どう、したんだい……そんな顔を、して？」

久弥は口元に優しいげな微笑を称え、なだめるような声音で言った。  
消え入りそうな、かれがすれの声で。

「どうした、って……兄さんのせいですよ、全部」

来栖は握りしめた久弥の手を顔に押し当てながら、くしゃくしゃになった顔で言った。

久弥は来栖のそんな表情にふっと笑みを漏らし、

「なんだかよく分からないけど……ごめん」

と言って再び瞼を閉じた。

穏やかな久弥の寝息が、来栖の耳朶を静かに打つ。

来栖はその寝息を聞きながらその場にへたり込み、ひとしきり泣いた。声を殺して、呻くように嗚咽を漏らしながら。

求め続けていたものがその手に帰ってきた喜びを噛みしめながら、顔に満面の笑みを浮かべながら、泣き続けた。

「あっちは、終わったのか？」

静かな動作で病室に入ってきたクレアに、ダーシエンカが遠慮がちに言葉を投げた。

クレアはその問いに無表情のまま首肯し、病室の壁に寄り掛かった。

どこに視線を向けるでもなく、クレアはぼんやりと虚空を見つめている。

奇妙な沈黙が部屋に漂いはじめ、それに抵抗するような形で蟬の最期に差し掛かった切実な鳴き声が響いていた。

蟬の鳴き声に混じってどこからか人の泣き声も聞こえてきたが、ダーシエンカは努めてそれを意識の外に置いた。

「一つ聞きたかったんだ、お前に」

虚空を見つめていたクレアが、視線はそのままに呟く。



唐突に投げかけられた言葉に、ダーシエンカは怪訝な表情を浮かべたが、何も言わずにクレアの顔を見つめた。

「お前は、どこに立っている」

クレアはなおも虚空を見つめたまま呟いた。

その言葉に、ダーシエンカの表情は怪訝さを増す。

目の前の少女が何を言わんとしているのか理解できない。ひょっとしたら先ほどの言葉は自分へ向けられたものではなく、何か別のモノへ投げかけられたのではないかとさえ思えてくる。

実際、クレアならそのようなことが出来てもなんら不思議ではない。神魔の類と言葉を交わしてしようと、あまり驚きはしないだろう。そのような空気をクレアは纏っていた。

だが。

「お前に聞いているのだぞ？　ダーシエンカ」

その言葉がいよいよダーシエンカを困惑させた。

自分がどこに立っているか、などという質問にどう答えればいいというのだ。

「今、ここに立っている」

などという答えをクレアが求めていないことは自明の理だ。だとすればなんと答えればいいのか。この禅問答のような問いに。

「日常と非日常のどちらに立っているのか、と聞いている」

答えあぐねているダーシエンカに、クレアが言葉を付け加えた。

何故そんなことにも気付かない、と言いたげに眉間に皺を寄せながら。

なるほど。確かに質問の意図は理解できた。それでもダーシエンカは返答に窮する。

なんと答えるべきなのか。いや、どのような答えが自分の中にあるのかすら定かではない。

「……わか、らない」

だからダーシエンカは、誤魔化すことも出来ずに思うがままの言葉を吐いてしまった。

それがクレアに対して正解か不正解かなどということは考えないまま、言葉にしてしまっていた。

どこか怯えるような表情で呟いたダーシエンカを、クレアは無表情のまま眺め、呆れたような溜息を洩らしながら口を開いた。

「誤魔化さなかったことだけは褒めてやるべきかな？」

クレアは微苦笑を浮かべながら肩をすくめた。

その動作にダーシエンカは心の底から安堵する。先ほどの問いに込められていた意図がなんであれ、その問いに込められていたクレアの切実さがダーシエンカには恐ろしかったのだ。

「私はお前たちを見ているとイライラする。その存在自体は凡百の魔術師以上に異質な存在だというのに、日常を謳歌している。ネクロマンサーの如月イズミ、リビングデッドのダーシエンカ・オルリツク、身に余る異能を秘めた来栖千澄。どいつもこいつも日常という器に納まるにはあまりに歪だ」

クレアは険しい表情で、滔々と語る。

それは説教じみているというよりも、どちらかと言えば、己の中にあるわだかまりを言葉にし、再構築しようと試みているように感じられた。

だからダーシエンカは言葉を挟まず――挟むような言葉を持ち合わせていなかったというのも勿論ある――黙してクレアの独白じみた言葉に耳を傾け続けた。

「日常に慣れ親しんでいたイズミと来栖が日常にすぎるのはまだ理解できる。あいつらにとってはそこが当たり前の立ち位置なのだから。だがダーシエンカ、お前はどうか？ 明らかに“こちら側”の存在だろ」

クレアは鋭い視線でダーシエンカを射抜いた。

ダーシエンカはその視線に、というよりはその言葉に息を詰まらせた。自分自身で突きつけたことはあっても、他者から突き付けられることはなかった言葉に、心を揺さぶられる。

確かに、日常などというものはダーシエンカの中にはほとんど存

在しなかった。少なくともイズミと出会うまでは。

明らかに、異常に身を置いていた年数の方が多い。年数だけならまだしも、リビングデッドという在り方自体が異常の極致といっても差支えなかった。

ネクロマンサーなくしては、活動することすらできない、異常な存在。

「わたしは……少なくとも日常に在りたいと望んでいる」

「なるほど。それは如月イズミが望んでいるからか？」

「それも勿論、ある。だが、誰も無暗に危険に飛びこみたくないというのは当然だろ？」

「それは嘘、だな。ダーシエンカ・オルリック」

クレアは不意に、捉えたものを凍てつかせるような視線を向けた。そして続ける。

「お前は自分の家族を殺した存在、ネクロマンサーを狙う輩を無差別に殺したくてリビングデッドというカタチに納まったはずだ」

「それは……そうだな。確かに私はネクロマンサーを餌にして、そういう輩を殺してやろうと思っていた」

「思っていた、ということとは、今は違う、とでも？」

「違わない。そういう輩は殺してやるという私の考えに変わりはない。だが、そのためにイズミを餌にしようとは決して思わない。私がすべきことは、イズミを狙うやつを徹底的に排除することだ」

ダーシエンカはクレアの瞳をまっすぐに見つめ、力強い口調で言った。

「なるほど。お前はそこまで如月イズミに惚れこんでいるというわけか。だからイズミの望むとおりに日常に立とうとする訳か」

クレアの言葉に、ダーシエンカは黙って頷いた。

そんなダーシエンカをクレアはしばし見つめ、やがて視線をそらした。そのままあごに手をあて、何やら思考に耽り始める。

「……よくよく考えてみればお前も稀有な存在だったな。魔術の素養もないくせに異常に染まった存在なのだから。となると逆もまた

可能、ということなのか？」

しばらく黙考したのち、クレアは首を傾げながらダーシエンカを見つめた。

そこにあつたのは異端審問機関総帥としての威圧感ではなく、ただ純粹な好奇心から問うているとでも言いたげな、円らな少女の瞳だった。

「可能であると、私は信じている。そしてイズミも」

ダーシエンカはクレアの瞳をまっすぐに見つめ、言い切った。

その言葉に嘘はない。自分が今“日常”と“異常”のどちらに立っているかは分からなくても、どちらに立ちたいかは明白だ。

そして、そこに立つために、異常に踏み込まなければならぬ状況が目の前に迫っていることも理解できている。

だから、まずは。

「私が日常に立つためにやるべきことは、迫りくる敵を排除することだ」

ダーシエンカは視線に確かに殺気を込めて言った。

それだけで、自分の覚悟をクレアに伝えたつもりだった。

クレアはダーシエンカの言葉に満足そうに頷き、微かに微笑んだ。「よからう。その覚悟を証明してもらおうじゃないか。他の者達が当たり前のように謳歌している日常を必死に守る様を、私に見せてみる」

口元の微笑をどこか嗜虐的なものに変じさせ、クレアは言った。

ダーシエンカは背筋にそら寒いモノが奔るのを感じながらも、クレアを見据えたまま、深く頷いた。

### 第3章 崩壊した物語は、偶発的に再生する(2)

それから六時間ほどが立ち、日も暮れきった頃にイズミは目を覚ました。

イズミが目を覚ましたことにより、イズミの病室には再びダーシエンカ・来栖・クレアの三人が集まっていた。

目覚めたイズミにはダーシエンカからおおまかな現状が語られ、自分達がしなければならぬことと、できることについての意見が求められていた。

その様子をクレアは壁に寄りかかりながら眺めている。

「……そうだね。正直に言って現状は芳しくないね。僕はともに戦える状態じゃないし、来栖先輩の能力も今の状況に適しているとは言い難い」

イズミは口元に手をあてながら思考する。

作戦の立案などはイズミの得意とするところではないのだが、それも含めて試練となっている以上、立てないわけにはいかなかった。そして、すんなりと、それでいて苦渋の末に一つの戦術を思い浮かべた。

「……ダーシエンカを前面に押し立てた作戦で行こう」

イズミは思案に耽っていた顔を上げ、ダーシエンカを見据えながら言った。

その言葉に部屋の隅で傍観を決め込んでいたクレアが「ほう」と小さな感嘆の声を上げ、来栖は信じられないようなことを聞かされた表情を浮かべていた。

もつとも、とうのダーシエンカは驚くこともなく、それどころか口元に満足そうな微笑さえ浮かべてイズミを見ていた。

「本当は僕が第一の囷になるのがベストなんだけど……この体じゃ囷として満足に機能出来ないと思うんだ。ダーシエンカ、囷役を引き受けてくれるかな？」

「勿論だ。私はイズミの考えに従う」

ダーシエンカは深く頷き、今だに呆然としている来栖に視線を向けた。

「どうだ。言ったとおりだろ？ イズミは“二番目”の案として私を囿にする案をあげた」

ダーシエンカは肩をすくめ、来栖に微笑を向けた。

「な、なんでそんな態度でいられるんですか？ あなたは私に言ったじゃないですか！ この囿は死に行くようなものだ！ 如月くんはあなたに死んでこいと、」

「言ったはずだ。私は普通の人間じゃない。並大抵のことでは死なない」

「そして何より、死んでしまったとしても僕が生き返らせる。絶対に」

ダーシエンカが告げた言葉に、イズミは力強く付け足した。

「まあ、囿役が死ぬなんて決まってる訳じゃないですよ。要は敵を特定しさえすればいいんです」

イズミは肩をすくめながら苦笑する。

「特定しさえすればいいの？」

「ええ、そうです。僕たちにとっていま何が問題かと言えば、敵の姿が分からないということです。そりゃあ相手の能力や何やらが分からないのも大問題ですが、まずは敵がどのような者であるかを知ることが最優先です。欲張りすぎるのは正しくないと思うんです。少なくとも僕たちの実力を考えれば」

首を傾げながら問うた来栖に、イズミは淡々と告げた。

イズミの中での最優先目標は、誰もが無事にこの試練を乗り切ることである。そのためにはハイリスクハイリターンで一発逆転を狙うよりも、ローリスクローリターンを積み重ねて堅実に勝ちを取りに行く必要があった。

それは、イズミ、ダーシエンカ、来栖のうちの誰か一人の能力に頼り切る作戦は立てられないということであり、同時に各人が最大

限に能力を発揮しなければならぬということでもあった。

イズミは組み立てた作戦内容を頭の中で何度も反芻し、深く、ゆっくりと、息を吸った。

「僕の立てた作戦を説明します」

イズミはダーシエンカと来栖の顔を交互に見つめ、部屋の片隅にいるクレアのことも意識しながら口を開いた。

イズミが述べた戦術は非常に大雑把なものであった。事実、作戦と呼ぶにはあまりにお粗末で、聞くに堪えないものだった。

だが現状ではそれがもっとも正しい選択でもあった。何せ、敵が何だか分からない状況で、理路整然とした作戦を立てられるハズもないのだ。

だから、イズミがダーシエンカと来栖に告げた言葉は徹底的にシンプルなものだった。

『二人で協力して、魔術師のしっぽを掴んで下さい』

イズミの言葉を要約するならば、この一言に尽きた。

敵の魔術師は来栖家の異能を刈り取るために来るのだ。となれば当然最初に狙われるのは久弥である。

現状全く身動きの取れない久弥が狙われるような状況が訪れることは、なんとしても避けたい。そのための罠が、ダーシエンカと来栖なのである。

だが二人が漫然と生活しているだけでは罠としての役割は果たせないだろう。それでは敵の魔術師はおそらく、あつという間に久弥の元にたどり着いてしまう。

だから二人には積極的に動いて貰う必要があった。あたかも敵の魔術師に攻勢をかけるように見せながら、実際はジリジリと撤退するような姿勢で。

そこに敵が食いついてくる保証など無かったが、放っておくわけにもいかないだろう。

こちらが敵のことを何も知らないように、敵も久弥の封印を解いた存在に関しては何も知らない。

だからこそ、得体の知れないものを放っておくとは考えられなかった。

そこを突いて敵には尻尾を出してもらおう。しかし、こちらが尻尾を掴めば相手も掴み返してくる可能性が高い。

尻尾を掴まねなければ掴まれないに越したことはないのだが、もしも掴まれてしまった場合は、来栖の異能の出番だ。魔術師が攻勢に出てきたら、ダーシェンカが応戦する。そしてそれを来栖が観察し、情報を集めるというわけだ。

無論ダーシェンカに無理をさせるわけもなく、そこで行う戦闘は、ジャブを軽く刺し合うレベルに抑える。

そして情報を集めたら、あとはひたすら撤退し続け時間を稼ぐ。時間を稼ぎながら来栖の異能で策を立て、勝利を盤石のモノとしたら一気に攻めに転じる。

「以上が、僕の立てた作戦です」

イズミは途中に身振り手振りを混ぜながら説明し、一息に語った。自分で語っておいて言うのもアレだが、なんともお粗末な作戦。各人の能力を最大限に発揮しなければならぬとは分かりつつも、何度シュミレートしても来栖に頼るところが多くなってしまう。

（僕がもっと動ければ、他にも選択肢が……）

イズミは浮かびかけた淡い期待を打ち消し、小さく頭を振った。そんなことは想像しても仕方がない。現状で最善を導き出さなければならぬのだから。

「来栖先輩は……どうお考えですか？」

先ほどの淡々とした口調からは打って変わり、イズミは不安げな声音で来栖に訊いた。

訊かれた来栖は俯いて押し黙り、口元に手をあてながら何やら考え込んでいる。

——異能を使っている？

イズミがそんな予想を立てると同時に、来栖が顔をあげた。

「私の眼が導いた過程も、如月くんと同じです。ただ、一つ訊いて



もいいですか？」

「なんででしょうか？」

「如月君の役目は、なんなんでしょう？」

至極真剣な眼差しで問う来栖。

一方問われたイズミの口から洩れたのは「……あ」という間の抜けた言葉だった。

「すっ、すみません！　そこが抜けてましたね！　えっと、僕の役目は病院で待機していることです。表に出てもこの体じゃ、足手まといにしかありませんから」

イズミは頬を掻きながら、ちらと傷口を見た。  
そして続ける。

「で、でも、ただ休んでるだけじゃありませんよ？　久弥さんを守ることが僕の役目です。まあ……ことがうまく運べば、僕が一番楽な役回り、ってことになるんですがね」

イズミは苦笑を浮かべ、肩をすくめた。

「そう、ですか……分かりました。私が気になったのはそこだけです」

来栖はイズミの言葉にそれだけ返すと、再び黙り込んだ。

別にイズミの役割に憤慨したわけではない。そのどこかヘラヘラとした態度に怒りを覚えたわけでもない。

来栖の瞳には映ってしまっていたのだから。

イズミが淡々と語った「久弥を守る」という言葉に込められた「自分の命に代えても」という真摯にして堅牢な覚悟を。一番楽な役目と言いながらその実、自分が相手に止めを刺す確率をもっとも高いと予想し、また相手の命を奪う覚悟をしていることを。

態度と心理のあまりのチグハグさに、来栖は一瞬目まいを覚えそうになった。

それでも、何となく納得できた。

これが如月イズミという少年のカタチなのだと。

来栖はイズミのそんな在り方に、ダーシェンカがイズミに惚れこ

んだ理由を垣間見た気がした。

「あの……本当にいいですか？」

黙りこんでしまった来栖の顔を、イズミが不安げに覗き込んだ。  
不意に、来栖とイズミの目が合った。

「え、ええ、大丈夫です」

来栖は若干慌てながらも、なんとか平静を保った。少しでも気を  
抜けば声が裏返ってしまいそうだったが。

それほどまでに、イズミに対する新しい認識は衝撃だった。

これ以上衝撃を受けないために、来栖は小さな嘆息を漏らしなが  
ら、密かに異能を解いた。

「じゃあ、おおまかな案は決まったということでもいいのか？」

「そうだね。大体はこれでいいんじゃないかな」

しばらく黙考したのち、イズミはダーシエンカの言葉に頷いた。

「では今後私たちはこの病院に近づかない方がいいですね」

「はい、事が終わるまではその方がいいですね。連絡が必要とき  
は携帯で連絡を取るということで」

「分かりました。それではそろそろ私は家に戻ります」

「あ、来栖先輩！」

頭を下げて踵を返した来栖をイズミが呼びとめる。

来栖はゆっくりと振り返り、首を傾げながらイズミを見た。

「あの……事が終わるまでダーシエンカの面倒見てもらってもいい  
ですか？ 一人にしとくのは心配で」

微かに赤らんだ頬を掻きながら、イズミは言った。

「な！ 私は一人でも大丈夫、」

「いや、ほら、家事とかさ、いろいろ心配で……。それにどうせ協  
力するなら共同生活してた方が都合いいでしょ？ どうでしょうか、

来栖先輩」

イズミは慌てふためいているダーシエンカから来栖に視線を移し  
た。

「私は、構わないけど……ダーシエンカさんはいいの？ 私と一緒に

で」

来栖はどこか怯えるような瞳をダーシエンカに向けた。

イズミは来栖がしたことを気にする素振りをまったく見せていなかったが、ダーシエンカは違った。

幾分か心を許してはいたが、来栖に対する不信感や軽い嫌悪感のようなものは消えきっていなかった。もっとも来栖にとっては、ダーシエンカまで自分を許してしまったら罰する者がいなくなってしまうから、それはありがたい敵意だったのだが。

——大丈夫、ですか？

来栖は視線にそのような言葉を込め、ダーシエンカの様子をうかがった。

異能を発動させてしまえばそのような不安を抱く必要もなかったのだが、それを行うことは余りに不実に感じられた。だから来栖は微かな怯えを抱きながら、ダーシエンカの返事を待った。

ダーシエンカはしばらく難しい顔で考え込んだのち。

「……分かった。イズミが言うなら仕方ない。従おう」

呆れたような溜息を洩らしながら肩をすくめた。

その返事にイズミはホッと胸を撫で下ろし、来栖に微笑を向けた。「ということなので、ダーシエンカをよろしく願います、先輩」

「あ、はい。責任を持ってお預かりします」

来栖はイズミの微笑に思わず状況を忘れ、大切な娘を預かる保母さんのようなセリフを返していた。

来栖は気がつく、目の前の少年にだいぶ心を軽くしてもらっていた。

どこかそんなことに皮肉さを感じ取り、来栖はさびしげな笑みを口元に浮かべる。

「じゃあ、行きましようか。ダーシエンカさん」

来栖はどこか無然とした表情を浮かべているダーシエンカに言い、そっと部屋を出ていった。

「じゃあ、イズミも気を付けてな」

ダーシエンカは不安げな表情を浮かべながら言い、来栖に続いて部屋を出ていった。

取り残されたのはイズミとクレア。

二人きりになった瞬間、それまで置物よろしく壁に寄り掛かっていたクレアが、壁から背を放した。

そして、感情のこもらない瞳をイズミに向ける。

「まあまあ、選択だった、とまずは言っておこう」

クレアはするように口を開き、イズミのベッドに歩み寄った。

「まあ、お前の立てた作戦がうまくいくまいが正直な話どうでもいいんだがな」

クレアは口元に皮肉るような笑みを浮かべながらイズミに言った。

イズミはそんなクレアをどこか呆けた表情で見つめる。

ダーシエンカの口からクレアの立場を聞かされていたものの、こうも自分の知っていた態度と違うと、面白さすら感じてしまいそうだった。

「どうかしたか？」

そんなイズミの態度に気付いたのか、クレアは眉根を寄せながらイズミを見つめた。

「あ、いや、学校のクレアさんとはまったく違うから面白いなあ、と思って。いや、思いまして、の方が正しいのかな？ 立場を考えれば」

イズミは考え込むように宙を見つめた。

今度はクレアがそんなイズミに呆然とした表情を向ける。

「お前は……いや、なんでもない。それよりもお前は本当はどうするつもりなんだ？ お前の立てた作戦に私が満足するとは、思っていないんだろ？ いや、お前自身が満足しない、と言い換えるべきかな」

クレアは言いかけた言葉を飲み込み、表情を審判者としてのもの

に変じさせた。

微かにクレアの瞳に映った感情の揺らぎは掻き消え、冷え冷えとした視線がイズミに向けられる。

それでもイズミは口元に浮かべた微笑を消すことなく返す。

「そうですね。この作戦は確かに来栖先輩方を守るモノとしては最善ですが、僕たちの、いいえ、僕の力を示すための作戦としては最低です。たとえダーシエンカを僕の能力の一部と捉えたとしても」

「なら、お前は どうする。あらかじめ来栖とダーシエンカが危機に陥る状況を用意しておくか？ そんな面白い舞台なら私が作ってやってもいいぞ。そのかわり、お前が失敗したら来栖もダーシエンカも、勿論お前もあの世行きになるような、ハードな舞台だな」

クレアは意地の悪い笑みでイズミを見つめた。

「せっかくの申し出ですがお断りします」

イズミはなおも微笑を崩さなかった。来栖のように怯えることもなければ、ダーシエンカのように体を固くすることもなく、自然体でクレアの言葉を受け流す。

そのことに、少なからずクレアは驚いてた。

普通ならば、何らかの感情が浮かぶはずなのだ。多くは恐怖であったり警戒であり、また一方では不快や、クレアの提案になびく香りなどが漂うはずだ。

だというのに、如月イズミにはそれがなかった。まるで世間話でもするような体でクレアと言葉を交わしている。

そのことが、クレアにはどうしようもなく信じがたいことだった。しかしそんなことを表情に漏らすほどクレアもヤワではなく、鉄面皮はそのままに言葉を紡いだ。

「……ほう、断るのか。ではもしお前の活躍の場なくこの騒動が終わった場合、私はお前たちに再び難癖をつけてもいいんだな？ 例えば、来栖の能力に頼り過ぎだ、とか」

クレアの瞳は鋭利さを増し、イズミに向けられる。

それは、来栖がクレアに怯える原因になった視線であり、ダーシ

エンカが短い悲鳴を漏らした視線でもあった。  
それでもなお。

「ふふ。クレアさんは優しいですね」

イズミは言った。口元に手を当て、遊びまわる子供を眺めているような、そんな朗らかな微笑さえ浮かべながら。

「なっ！ お前は何を、」

一方クレアの鉄面皮には小さな亀裂が走った。

「だって、クレアさんは難癖をつけるって言ったんですよ？ 処分する、ではなくて。それはつまりさらにチャンスをくれるってことじゃないですか」

「そ、それは言葉のアヤというヤツで実際は」

「実際は処分でもいいですよ。口だけでもチャンスを与えろと言ってくれる。それだけでも充分優しいですよ」

イズミは軽く肩をすくめ、続けた。

「それに客観的に見て、僕はもう処分されてもおかしくない失敗を犯してますからね。それでも生かしてくれているんだから、やっぱりクレアさんは優しいです」

「それはお前が雪の子供だからだ！ 私は雪にだけは嫌われたくな……」

クレアはそこでハタと、自分が何を口走っているかに気が付き、小さく舌打ちをした。

「ほら。そういう可愛い所がある時点で優しいですよ」

イズミはそんなクレアを楽しげに眺めていた。

「……ともかく、僕は頑張るだけです。来栖先輩達を守って、僕たちの日常を守るために。あ、クレアさんが母さんに嫌われないためにも頑張らなければいけませんね」

イズミはほのかに殺気染みたものをさえ向けているクレアに微笑を向けた。

「……ろすからな」

「え？」

「お前が失敗したらみんな殺すからな！ お前も、ダーシエンカも、来栖兄妹も、幸也も！」

クレアは先ほどまでの鉄面皮が嘘のように、感情をむき出しで叫んでいた。そう大きい叫び声ではなかったが、言葉に込められている殺意が本気のもので、聞く者が聞けばすくみあがっただろう。

「母さんは、殺さないんですね」

それでもイズミはどこかにはかんでいるようにも見える、困ったような微笑を浮かべるだけだった。

「いいですよ。僕が失敗したら殺してしまっても。もっとも、失敗した頃には来栖先輩とダーシエンカと僕はすでに死んでいるでしょうがね。心残りなのは久弥さんだけが、まあ、あの世で来栖先輩と会えることを考えれば構わないでしょう」

イズミはサラリと酷いこと言っただけだった。

「……幸也はいいのか？」

「父さんは百回殺してもまだ足りないくらいです」

イズミは聖職者の笑みで即答する。

奇しくも、百回という数字はクレアが過去に幸也を“殺害”したのとはほぼ同じ回数だった。

もっともクレアがそんな“どうでもいいこと”の回数を数えているはずもなく。

「……そうか。まあ、いい。つまりお前は確信しているんだな。自分が魔術師と対峙することになると」

「ええ。こちらの手札で有効と思われる攻撃手段はダーシエンカと僕だけです。ですが、ダーシエンカを全面に出すと、必ず無茶をします。だから、そこは僕が踏ん張ります」

「それを聞いたらダーシエンカが憤慨しそうだがな」

「分かってます」

イズミは困ったように頬を掻いた。

「でもそれが一番確実です。まあ……来栖先輩が別の方向で作戦を組み上げてしまったら非常に困ったことになるんですが、確実性と

いう点から考えれば大丈夫だと思います」

「まあ、その点には私も同意しておこう」

「それから一つクレアさんに訊いておきたいことがあるんです」

イズミは口許に浮かんだ苦笑を消し、至極真剣な瞳をクレアに向けた。

それを受けクレアの瞳も冷やかなものに切り替えられる。先ほどまでの狼狽は演技であつたとさえ思えるような、完璧な切り替えだつた。

イズミはそのことに目の前の少女が只者でないことを再確認し、ゆっくりと息を吸い込んだ。自分を落ち着けるために。自分の吐く言葉の意味を心に沁み込ませるために。

「僕は相手の魔術師を殺しても構わないんですか？」

イズミは息を言葉に変えた。

その言葉に、クレアの口角が吊りあがる。口許に淫靡さと愉悦が入り混じった笑みが形作られる。

「着眼点は、実に素晴らしい。来栖でさえ深くは考慮しなかった点だな、ソレは」

「相手が禁忌を裁く者なら、殺してしまつては相手に追討の機会を与えるようなものです。それはあまり望ましいことじゃない。その点について僕は訊きたいんです」

イズミは腹の前で手を組み合わせ、思案顔で呟いた。

イズミがクレアに尋ねていることは当たり前前の質問ではあるのだが、返答如何によっては救いがなくなる。

要するにイズミは、犯罪者が自分の身を守るために警察を殺してもいいのか、という類の質問をしているのだ。あるいは、裏切り者が追手を殺してもいいのか、と言った方がニュアンスとしてはより正確かもしれない。

勿論、この二つの問いに関しては断じて否であろう。許されるわけがない行為だ。

だが魔術の世界ならば？ 悪行を犯していないものを処分するこ



とが正当でないという倫理観が通用するかどうかは別として、魔術世界には魔術世界なりの倫理観があるはずだ。そのことをイズミは問うているのだ。

クレアは幾許かの間の後に、その問いに答えた。

「別に殺しても構わない。魔術世界では基本的に強者が正しい。倫理観など力の前では無に等しい。まあそれでも？ 最近はいぶ一般社会に歩み寄った風潮ではある」

「つまり……殺してしまえば追討もあると？」

「あり得る。だがまあ、圧倒的实力差を見せたのちに情けをかければ追討の可能性は下がるだろう。もつとも、それはお前には無理な相談だろうがな」

クレアはワザとらしく溜息を吐きだし、皮肉るような視線をイズミに向ける。

その視線に、イズミは苦笑を返さざるをえなかった。

イズミの持つ攻撃手段は、永久機関を利用した一撃必殺の技のみ。それでは情けも何もあったものではない。手心を加えようにも、加えるだけの技量はイズミにはない。もし加えられたとしても、それは間違いなく相手の寿命を大幅に削ってしまう。

「だがまあ……なるようにしかならんだろ。相手がどのような輩かは未だ知れず。となれば手加減やその他諸々について考慮するなどバカバカしい以外の何物でもない。お前たちは出来ることだけすればいいんだ」

「それで追手が来ようと知ったことではない、と？」

イズミは苦笑しながら言う。

「まあ、そういうことだな。まあ、お前達の戦い方次第によっては追討はなくなる。そして何より、相手が異端審問機関の者とは限らない。逆に禁忌を犯している者という可能性だってある。そうなればお前は容赦なく戦えるだろ？ ヴェルナールのとくと同じように」

クレアは無表情に答える。

その無表情が言外に伝えていた。

異常の中に身を置くのならば、命のやり取りなど当然のこと。お前はそれを知っているではないか、と。

イズミはその無表情に若干気押され、固い唾を飲み下す。緊張のあまりか、食道を通る唾の流れが手に取るように感覚出来た。

「分かりました。僕たちは僕たちの出来る範囲で全力を尽くすだけです。というかそれ以外に選択肢はありませんからね。だから願わくば、その選択肢の中に最善のものがあらんことを、です」

イズミは胸の内に生まれた緊張を小さな溜息として吐き出し、弱々しく微笑んだ。

そんなイズミにクレアは小さく頷き、微笑した。これまで浮かべてきた威圧的な微笑みとは打って変わった、ごくごく普通の微笑。

「……あ」

イズミはクレアの微笑に思わず言葉を漏らした。

「どうした？ まだ聞きたいことがあるのか？」

「い、いえ、なんか少しだけ引かかるものがあって……でもソレがなんだか、思いたせないというか、思い浮かべられないというか」

イズミは考え込む様な仕草を取りながら呟いた。

そんなイズミにクレアは怪訝な表情を浮かべたのち、スツと踵を返した。

「あ、帰るんですか？ もう暗いですから気を付けて……ってのはダーシエンカ以上に要らない心配ですね」

イズミは自分の発した言葉の可笑しさに思わず苦笑う。

心配した相手はナリこそ可憐な少女であれ、中身は父以上に強大な力を持つ、魔術師という名の化け物。心配などというものは野暮を通り越して不敬にさえなってしまうだろう。

案の定。

「フン、全く要らぬ心配だな。この私を襲う馬鹿など世界に三人いるかいなかだ。まあ、そのうちの一人はお前の父親がな。それに……」

「それに……？」

「私はここに住んでいる。夜道は歩かん」

クレアは何食わぬ顔で言うと、ドアノブに手を掛けた。

「可愛い後輩が一つ屋根の下にいるからって夜這いに来ないで下さいよ？」 如月先輩。それじゃ、良い夢を」

クレアは退室際に学園での無邪気な表情をイズミに向け、部屋を出ていった。

「あ、うん。良い、夢を？」

イズミは閉ざされたドアに呆然と眩き、しばらく扉を見つめ続けた。

まるで多重人格者のようなクレアの変わり様。まあ、察するにクレアはそれを意図的にやってのけているのだろうが、それでもあの変わり様の鮮やかさは見るものを突き放す。

その変わり様に意図があるのかないのかということさえ考慮の外側に置かせるほどに。

だがイズミは思い至った。先ほどクレアが微かに見せた屈託ない微笑は、彼女が日常で垣間見せるものと同種であったということを。それが意図的なモノではなく、クレアの本心から出てきたモノではないか、と。それは僅かな懷疑でしかなく、持った所で何の意味もない問いだった。

それでも、イズミは何となくそのことを思案しながら、クレアが出ていった扉をしばらく眺めていた。

＊ ＊ ＊

「ど、どうぞ。狭いところではありますが……」

来栖は緊張を顔の端に浮かべながらダーシェンカを家の中に招き入れた。

病院から帰る途中でダーシェンカの荷物を一通り拾い、二人は来栖の家にやってきた。イズミの家に来栖が泊まるという選択肢もないではなかったが、相手の魔術師に位置を特定されている可能性が

高い来栖の家に泊まった方がメリットは多かった。

幸い、久弥が病院にいるから部屋も一つ余っている。結果、ダーシエンカが来栖の家に宿泊することになった。

「……お邪魔、します」

ダーシエンカは律儀に頭を軽く下げ、部屋の中に入った。

チラと見ただけでも分かる、来栖とこの部屋との不釣り合い。学校でのどこかお嬢様然とした来栖からは想像もつかない、こぢんまりとした内装の部屋。

どうしてもいなめない、チグハグな印象。

「意外でしたか？」

異能など使わなくともダーシエンカが受けた印象を察したのか、来栖は力ない笑みを浮かべながら言った。

「い、いや、まあ……少々」

「人を家に上げたことはありませんが、それが普通な反応だと思いますよ。あ、座布団に座って待っててください。今お茶入れますから」

来栖は大して気分を害した様子もなく言うと、ちゃぶ台の傍らにおかれた座布団を指さした。

ダーシエンカはその指示に大人しく従い、座布団に腰をおろす。そのままボンヤリと、やかんをガスコンロにかける来栖の背中を眺めた。

その姿を見ていると、やはり来栖は普通の少女にしか見えない。いや、ダーシエンカにも同じことが言えるといえば言える。だがダーシエンカの“普通の少女”という姿は、見るものが見ればすぐに仮初めのモノと看破されてしまう。

だが来栖はどうだろう。おそらく観察力に長けたものでも見逃してしまうだろう。来栖に潜む異能を。魔術の片鱗を。

一から十まで普通の少女だ。異能を発現させ、それを人に披露することで初めて、来栖の“普通の少女”という在り方は裏返る。内に秘めた、その身に似合わぬ“異常”という在り方に。

（兄さえあんなことにならなければ……来栖は普通の人生を送れたのだろうか）

ダーシエンカは来栖の背中に思わず思案する。

それは、自分にも返ってくる問い掛けだった。

家族さえあんなことにならなければ、自分は普通の人生を生き、そして死ねていたのではないかと。

分かっている。ifを考えることには、なんの意味も、価値もない。大切なことは今という分岐点で何を選んでいくかということだ。あるいは、どのような状況が次に訪れるか、ということだ。

ダーシエンカに訪れた状況は、控え目に言っても最高のものだ。形のまま言い表そうとするならば、筆舌し難い幸運。

イズミとの出会いは、ダーシエンカにとってそこまで大きなモノだった。

ならば来栖がこれから選ぶ選択は。これから訪れる状況は。彼女の未来をどのようなものにするのだろうか。

そんなことはダーシエンカが考えるまでもない。来栖が一度異能を発動させれば、彼女が辿る幾万もの未来の道筋が、ほかならぬ彼女自身の目に映されるのだから。

それでも思わずにはいられない。来栖が辿る未来がどのようなものになるのかを。何せその岐路に共に立ってしまったているのだ、ダーシエンカは。

イズミを襲った敵ではあるが、なんとなく来栖の身に不幸が訪れるのは嬉しくない。

おそらくダーシエンカは気付いてしまったのだ。過去の自分と今の来栖の状況が、極めて近いということに。

そのときふと、ダーシエンカの目にあるものが映った。それは、居間の角にちょこんと供えられた、小さな仏壇。最初はあまりの小ささに戸棚か何かかと思ったが、やはり仏壇に違いない。

「……ご両親の、仏壇か？」

「ええ。私が小学校に上がってしばらくして、交通事故で。笑っち

やうでしょ？ 来栖家の出じゃない母はともかく、未来を予知できる父が交通事故で死ぬなんてね。まあ、能力を常時発動させていないから当然と言えば当然なんですが」

来栖は火に掛けたやかんから目を離し、仏壇の前に腰を下ろし、遺影に手を合わせた。

「両親が亡くなってからは兄が私を育ててくれました。両親の保険金は全て私の養育費に充て、自分は高校も中退して退魔師として生計を立てて。私が働けるようになったら兄に楽させてあげようと思っていたのに、その兄も私が中学のときに魔術師の手に掛けて……」

「……そうか」

来栖の語ったものに、ダーシエンカは思わず目を伏せる。

聞けば聞くほど自分とこの少女は似ている。家族をすべて失い、自分一人取り残される。

違う点と言えば、ダーシエンカにはキリコという後見人がついて、来栖には兄を救えるだけの希望が示されたこと。

事実、来栖は手にしたのだ。わずかな可能性しかなかった兄を救うという光を。

その点についてダーシエンカは、僅かばかりの嫉妬を覚えもした。もっとも、のうのうと嫉妬をしていられる状況でないということも自覚していたが。

「……でも、兄は帰ってきました。クレア様のおかげで。そして私には兄と過ごせる時間の可能性が示されました。如月君のおかげで」

来栖は振り返り、まっすぐにダーシエンカを見つめていた。その瞳に強い光を宿して。

来栖は続けた。

「感謝しています。如月君にも、そしてダーシエンカさんにも」

「私にも……？ それはどうして」

ダーシエンカが眉根を寄せながら問うと、来栖は少しだけ悪戯な微笑を浮かべた。

「いえ、クレア様に『もし如月イズミを傷つけているところをダー

シエンカに見られたら即殺されるぞ』と忠告されていたので……本当は如月くんを助けたときにダーシエンカさんに殺される覚悟をしていたんです」

ダーシエンカはその言葉に、病院での来栖の態度を思い返していた。あのときはクレアに怯えているのだとばかり思ったが、どうも自分のことも恐れていたらしい、と。

「それは……確かに、殺していた、かもしれない」

「だから、殺さないでくれて感謝ということです」

バツ悪そうに言ったダーシエンカに、来栖は花のように笑う。

「まあ私としては、その辺もイズミに感謝すべきだと思うがな。イズミが甘いやつじゃなければ私はお前を殺していた……いや、甘いイズミだからこそ私もここにいるのかもしれないが」

「そうだとしても私はあなたに感謝します、ダーシエンカさん。だからその恩は必ず返します。この眼に宿る異能で」

来栖は力強い語り口で言った。

その言葉にダーシエンカは黙って頷く。

クレアから課された試練は生易しいモノではない。何せ相手は禁忌を裁く者である可能性が高く、魔術師としての実力も封印術式を為している時点で超一流。

そんな相手にダーシエンカ一人で勝つのは、かなり厳しいものがある。いや、魔術無効化を使用すれば十分に勝機はあるのだが、それはイズミの厳命で、よほどのピンチが訪れない限り使用不可なのだからどうしようもない。

あとはイズミのネクロマンサーとしての力を利用したゴリ押し、という手段もあるのだが、イズミが満身創痍とあってはこれも使えない。イズミの出番があるとすればここぞというときのみだろう。

となればやはり、来栖の異能がどうしても必要になってくる。情報を的確に捌き、少ない手段から最善の結果を導くためのその異能が。

「イズミを守る者としては非常に情けないが、今回はお前の能力が

頼りだ。だからと言って無茶はしないでくれ。そんなことはイズミが望まないし……私も望まない」

ダーシェンカは視線を落としながら言った。最後の言葉は口ごもるように呟いただけだったが。

そんなダーシェンカに来栖ははにかむ様な微笑を浮かべ、深く頷いた。

＊ ＊ ＊

暗闇には二種類ある。

視界の闇と、思考の闇だ。

愚鈍な者はまず視界の闇に恐怖する。目の前にあったものが闇に喰われ、五感のバランスが崩れることで自分自身を見失う。

だがそれは人間としてまっとうな反応だし、事実、いまよりも遙かに夜の支配が強かった時代は、それが通常の反応だった。大人子供、愚鈍利発、関係なしに。

だが時代など関係なしな闇への恐怖が、思考の闇への恐怖だ。

真に愚鈍な者は思考の闇へ恐怖することなど無い。思考の闇がどのようなものかすら、理解できないのだから。

しかし賢しい、いいや、小賢しい者は理解する。

真に恐怖すべきは思考の闇であると。

思考の闇は何も見えないことだけではない。見えすぎることもときとして暗闇を生み出す。それは視界の闇のように外から訪れるものではなく、往々にして自分の中から沸き出でる。

思考が停止する闇。思考し過ぎて処理できなくなる闇。どちらも恐るべき存在だ。何せそんなモノが訪れようものなら、人は生きていられない。

こと、命のやり取りをしている瞬間においては。だから、本当に良かった。

「今この瞬間の相手が塵芥にも劣る存在であることに感謝します、



アーメン」

オレは胸の前で、形式を知りもしない十字を切り、天を仰いだ。空が、狭い。別に都会の空だからという訳ではない。何せ夜空には溢れ落ちんばかりの星々が輝いている。

空が狭いのは高層建築の類のせいではない。

ただ単に片目の機能が停止した。それだけのこと。視野の狭まり方からして見えなくなったのは右目のほうだろう。

いや、視野の問題云々ではない。“未来が視えなくなっている”時点で右目を失ったと容易に判断できる。

「チッ！ どこぞのクソヤローが“次元置換”の術式を解きやがったのか……厄介なことをしてくれる」

オレは舌打ちを一つ打ち、地面を軽く踏みつけた。

ここは何もない草原の只中だというのに、地面からはグチュリと嫌な音が上がった。

「あーあ。ここんところ未来予測の能力で遊びすぎてたからなあ……失くなるとかなりキチーなあ……なあ、あんたもそう思うだろう？」

オレは先ほどの嫌な音を立てたモノに声をかけた。

それは、月明かりを受け、赤黒く輝いていた。その輝きはまるで、かつては生を謳歌していたのだ、と主張するかのようにもあつた。

事実、生きていたのだ。数分前までは。

流れるような金髪に、透き通るような蒼い切れ長の瞳をもった、なかなか男前な奴だったと思う。多分。

もつとも、禁忌を犯したという割には魔術師としてあまりに脆弱で、戦い甲斐のない屑野郎だったが。

「ま、もつとも、てめえが屑野郎だったから戦闘中に呪詛返しが来てもどうってことなかったんだがな。その点は感謝するよ、雑魚」

オレは嗜虐的な笑みを、草原に転がる肉片に向けた。

本来なら肉片の処理も仕事のうちなのだが、これだけ人気のない場所なら放置しても問題ないだろう。もし仮に誰かがコレを見つけたとしても、よもや人の死骸だとは思うまい。

「祈ろう。キミの冥福を。心をこめ、」

心のこもらない言葉を並べている最中に、コートに突っ込んでいた携帯のバイブが鳴った。

「はいもしもし、こちらリイガ・ハインリヒ。え？ ああ、はい。禁忌の処分なら先ほど終了しましたよ。いつも通り、つつがなく。で、この後は？ あ、そうですか。特に仕事はない。それは丁度よかった。いえ、こちらの話です。お構いなく。ええ、それでは失礼します」

オレは携帯をポケットに突っ込みなおし、口許を歪めた。

このあと、どうやらオレはしばらく暇があるらしい。丁度よかった。オレの“次元置換”の術式を解いた者の顔を拝んでみたい。

いや、それよりもまずはあの弱っちいジャパニーズが持っていた異能を“取り戻す”のが先かもしれない。

あれは恐ろしいほどに面白い能力だからな。失うのは正直惜しすぎる。

オレは口許を歪めたまま、踵を返した。

そういえば、何かが途中だったような気がするが……まあ、いいか。忘れるようなことは、どうでもいいことだ。

オレは思い出そうとすることすらやめ、さわやかな風が吹きすさぶ草原を歩き始めた。

ツンと、死臭が鼻をついた。

＊ ＊ ＊

ダーシェンカと来栖の奇妙な共同生活が始まってから三日が経過しようとしていた。

初めは互いに戸惑いながら、どこかぎこちない生活を送っていたが、三日目に入って二人のやり取りもだいぶ柔らかくなっていった。

それでも、学園きっての美少女二人が並んで登下校をするさまは、三日という時間が経過しても周囲の話題としては熱いものであった。

そんな中を。

「どうだ、何か異変はあるか……?」

「だめです。何もありません、昨日までと同じです」

街中を散策するような足取りで歩きながら、ダーシェンかと来栖の瞳は切実だった。

学校が終わり、二人は街中を遊び歩くかのように装い、その実魔術師の痕跡を探し求めている。

今日も、周囲の人々から集まる視線を意に介さず、切々と魔術師につながる糸を手繰り寄せようとしていた。

が、そんな二人の、来栖の瞳に映る情報は、平素と変わることはないモノのみだった。

それはある意味でいいことなのかもしれない。今の状態がずっと続けば、今までどおりの日常が帰ってくるということなのだから。だがそんなことが愚かしい願望であることは、ダーシェンかも来栖も痛いほど理解している。

敵は来る。必ず来る。そう予期していたほうが明らかに次の一步を踏み出しやすいのだから。

「たとえ相手が魔術を使わなくても、魔術師なら必ず痕跡が残るはずなんです……」

しばらく歩いたのちに、来栖が申し訳なさそうに口を開いた。

ダーシェンカは微苦笑を浮かべる。

「仕方ないさ。魔術師はまだこの街に到達していない、そう考えていいということだろ? お前が気に病んでも仕方ない。私たちは今やっтерることを続けるだけだ」

「そう、ですよ……」

来栖は力ない笑みを浮かべながら返した。

「それより大丈夫なのか? もう一時間近く能力を発動させてるだろ? そろそろ限界じゃないのか……?」

「あ、いやでもまだ頭痛は来てませんし、まだ大丈夫です」

「いや、もう全部見て回ったから大丈夫だ。能力を解除しろ。本当

なら余力を残しておくぐらいがベストなんだから」

ダーシェンカは来栖の相変わらざるの態度に頭を振った。

生来がまじめな性格なのだろう、来栖は。

探査を始めた初日など、限界を超えて異能を発動し続け、街中で気を失ってしまった。二日目も、前日からの疲労を引きずりながら、顔が白くなるまで探査を続けていた。

来栖が止めても聞かない人間であるということは二日目でもよく理解した。それでもさすがに今日は止めなければならない。ダーシェンカはそう心に決めていた。

「でも、まだいけま」

「だめだ。それで敵が襲ってきたときに使い物にならないのでは話にならないんだ。今日はもう諦めて帰るぞ。もしもう一度倒れようものなら今度はおんぶではなく、お前の足を掴んで引きずって帰るからな」

ダーシェンカは有無を言わさぬ口調で告げ、踵を返した。

そんなダーシェンカの後ろに、来栖がどこかシュンとした様子で追従する。

学校では来栖のほうが先輩だ。が、ことこのような異常に関して、はダーシェンカのほうが圧倒的に秀でているのだから、このような光景は当然と言えば当然だ。

それでも、学校での凜とした来栖を知っているダーシェンカは、やはりどこか違和感を覚えてしまう。

シュンとした格好で自分のあとを歩く来栖をちらと見やりながらダーシェンカは考える。

イズミもこのように自分のことを心配していたのだろうか、と。

イズミにかけるのとは異なった来栖への心配を思いやり、ダーシェンカはそのようなことを考えずにはいられなかった。

「しかし……」

ダーシェンカはよどみなく歩きながら、ぼつりと呟く。

その横顔を、隣に並んだ来栖が窺うように見つめた。

「お前は どうして そんなに 無茶をするんだ？ お前の 異能の 特性か  
ら いえば、どこら 辺まで 能力を 駆使すれば いいかも 分るはず だろ？  
私に 対する 負い目 から 無茶を している という わけでも ないよう だ  
し……」

ダー シェンカ は 思案 顔で 来栖 に 問う。 問うて はいる のだが、 その  
さまは 自分で 答えを 探り 当てよう として いる ようにも 見受け られた。  
しばし の間の のち、 来栖 が 口を 開く。

「確かに、自分の限界はわかります。でもその一方で、能力を発動  
させ続けたほうがより多くの情報を集められるという結果も予測で  
きるんです。だから、つい欲張っちゃうんです……」

心底 申し 訳なさ そうに 弁明 する 来栖 に、 ダー シェンカ は 小さな 嘆  
息を 漏らし 苦笑 する。

「……つまりは自分が倒れても私が担ぐという未来も予測できてい  
たワケか？」

「そ、それは……はい、そうですね。予測できていました。未来の  
一つとしては」

からかうような笑みを向けるダーシェンカに、来栖は語尾を弱く  
しながら答える。

そんな来栖にダーシェンカは再び嘆息。

別に来栖を打算的な人間だと蔑む気はない。むしろ来栖は打算的  
な選択肢を忌避しようとする性格だ。

打算的な未来を抜きにしても、愚直と言っていいほどの来栖なら  
ば、自分の体のことは無視して同じ結果を招いていただろう。

ダーシェンカが漏らした嘆息は、そんな来栖を愛おしんでのもの  
だった。

異能を発動させていない来栖はそんなことが理解できるはずもな  
く、ただ不安げにダーシェンカの顔色を窺っている。

（少しは仲良くなれたと思ったんだがな……）

ダーシェンカは来栖を横目で見やりながら微苦笑。

実際、来栖とダーシェンカの距離は縮まってはいる。一瞬のよう

な敵対関係を経たものの、今は間違いなく友好関係寄りだ。

もつとも“寄り”というだけあって、決して友人とは呼べそうもないのが二人の距離感なのだが。

そこに思い至り、ダーシエンカは一つ頷く。

「なあ、来栖。いや、来栖だと都合が悪いか？　なあ、千澄」

「は、ハイ、なんでしょうか、ダーシエンカさん？」

ダーシエンカの口から洩れた自分の名前に、来栖は戸惑いを見せた。

ダーシエンカが来栖のことを名前で呼ぶことは、これまでなかった。大抵は「なあ」だとか「おい」だとか、良くて「お前」だった。普通なら不満に思うような待遇かもしれないが、来栖がダーシエンカ達にしたことをかんがみれば、妥当な扱いだった。

だからこそ、これといって改めてもらうつもりも、ましてや不満に思うこともなかった。

人前では怪しまれないように「来栖先輩」とだけ呼んでくれる。それだけで十分だった。

「なあ、千澄。別に“さん”付けはいらないし、敬語も必要ない。私よりお前のほうが歳上だろ？　もつとも、私は学校以外で敬語を使う気は毛頭ないがな」

「……は、はあ。でもダーシエンカさん、いえ、ダ、ダーシエンカ？　どうして急にそんなことを？」

「なんとなく、だ。いちいちビクつかれるのは気分のいいものじゃないし、有事の際はお前が私に指示を出さなければいけないんだ。万が一そのときに遠慮などで戸惑われたのでは私の身が危ない。そういう意味でもある」

ダーシエンカはそっぽを向き、どこか唇をとがらせながら言った。そんなダーシエンカの横顔に、来栖は思わず誘惑に駆られる。

この愛くるしい少女の本心を異能を使って確かめてみたい、と。だがそんなことはおそらく徒労だろう。異能を使わずとも、ダーシエンカの考えは読み取れる。

ようはこの少女は氣遣ってくれているのだ、来栖のことを。

来栖はそのことが妙に嬉しく、そしておかしかったので、小さく笑った。

「ありがとう、ダーシエンカ」

その言葉に、遠慮はもう含まれていなかった。先ほどまでは少しあった、怯えも。

「……？ 別に礼を言われる筋合いはないが」

「それでもありがとう、なの。お礼に今日はダーシエンカの食べた物を作ってあげるわ」

来栖は母親のような微笑みをダーシエンカに向けた。事実、言葉の中身自体も母親のようなものであった。

「そ、そうか？ なら私はハンバーグが食べたい」

ダーシエンカは軽く頬を掻きながら告げる。

来栖は笑顔でうなずき、進路を近所のスーパーに変えた。

その後ろにダーシエンカが続く。夕暮れの中に二人の影が伸びている。

今はまだ、平和な時間。でも次の瞬間はわからない。そんな二人だというのに不思議と、実に穏やかな空気を纏っていた。

＊ ＊ ＊

日も暮れきった頃。イズミは病室で携帯のディスプレイをボンヤリと眺めていた。

何かあった際、ダーシエンカたちとの連絡は、直接ではなく携帯を通して行う予定。何もなかった場合も、互いの無事を確認するために連絡を取るということが決められていた。

定時に、というワケではないにせよ、連絡を待つほうとしては気がでないというのも事実。

——気にしたところで仕方ない。

イズミは結局いつもの結論にたどり着き、小さくため息をつく。

「心配かい？ 彼女のことか」

不意に、落ち着いた声がドアの隅間から発せられた。

「……久弥さん。いい加減ノックぐらいしてくださいよ」

イズミは声のしたほうに遠慮のないジト目を向けた。

視線の先には、ゆったりとしたスウェットに身を包んだ来栖久弥が、少しだけ開いた扉から顔を覗かせていた。

久弥は口許に笑みを浮かべながら、病室にスルリと入り込む。

「ノックはしたさ。キミが気付かなかったただけで」

「その嘘はもう通じませんよ？」

悪びれる様子もなく肩をすくめる久弥に、イズミは呆れるように溜息を漏らした。

イズミにとっての久弥の印象は、来栖の話から想像していたものとはまるで違っていた。

マジメな人なのだろうという想像は、小さな悪戯で何度もイズミをからかうという行動で覆された。また、退魔師という職業から想像していた外見ともまるで違う。

病的なまでの白い肌、それでいて不思議と病弱さは感じさせない凜とした佇まい。男だというのに、妹の千澄にきわめて近い女性的な顔立ち。

神秘的という言葉がよく似合う。それがイズミにとっての、来栖久弥に対する印象だった。

「通じない、か。そりゃさすがに日に何回もやってれば通じないか」

久弥はポリポリと頬を掻き、イズミのベッドの傍らに置かれた椅子に腰を下ろした。

「そりゃ通じませんよ。まあ、気づかれずに入り続けてくるのは流石というほかありませんがね」

イズミは苦笑を浮かべて肩をすくめた。

そうなのだ。久弥という男は、イズミに気づかれることなくいつの間にか扉を開けている。ばかりかベッドの傍らに近付いていることすら多々あった。



イズミがエーテルを張り巡らせているときでさえ、だ。  
いぶかしんでいたイズミであったが、蓋を開けてみれば答えは簡単。

来栖家の異能を使ってイズミの隙をついた。ただそれだけのこと、らしい。

久弥曰く。どんなに周りの情報を把握としようと、結局はそれを捌ける量には限界がある。目視しているからといってそのすべてを的確に把握できているわけではないというのと同じように。

もっともその能力を悪戯ごときに使っているという点で、大層な講釈の威厳は半減してしまうのだが、本人が言うところによるとリハビリのための悪戯、ということらしい。

「もういい加減リハビリはいいんじゃないですか？　　というか、五年間眠り続けてたって自覚ないんでしょ？　　だったらブランクないも同じじゃないですか」

「まあ、ね。確かに目覚めたときには多少違和感があつたけど、今じゃすっかり元通り」

「なら無駄に能力使うのはやめてくださいよ」

「いいじゃないか、別に。あつちじゃ千澄がダーシェンカさんのサポートをしてるんだし、こっちも僕がキミのサポートってことで」

そう言って久弥は微笑み、肩をすくめる。

「まあ、それを言われると何も言い返せないといえれば言い返せないのですが……」

イズミはうつむき、携帯のディスプレイに視線を移した。

相変わらず連絡はなし。けれどもダーシェンカ達は無事だろう。

なんとなくではあるが、イズミには分るのだ。ダーシェンカの安否が。

それは、二人が存在の奥底でつながっているからなのか。そんなことはイズミに分るはずもなく。

確固たる証拠がなければ不安になってしまう。それが現状だった。試しに一つ聞いてみることにした。

「久弥さんは不安じゃないんですか？ 来栖先輩のこと」

イズミの言葉に久弥はうつむけていた顔をヒョイとあげる。

「そりゃあ心配さ、とても。目覚めてから千澄ときちんと直接話せてないというのも辛いしね」

久弥は力なく笑い、頬を掻いた。

その言葉に、イズミは再び顔を俯ける。

久弥が目覚めたのは来栖たちと今後の行動予定を決めた次の日の昼だった。当然そのことは来栖に知らせたし、久弥と来栖は電話越しだが毎日会話も交わしている。

だが、直接は会えない。それが当初の行動予定だったし、直接会えば久弥に危険が及ぶ可能性も上がってしまう。結局、来栖兄妹は顔を突き合わせて会話することができないのだ。

少なくとも、ことが片付くまでは。

「やっぱり……つらい、ですよね」

イズミは久弥の心情を思い、握りしめた自分の手をぼんやりと眺め、つぶやいた。

だが意外なことにイズミを見つめる久弥は、ニンマリとほくそ笑んでいた。

「フフフフ……その“つらい”っていうのはキミ自身のことかな？」

「なっ！ 違いますよ！ そりゃ僕も辛いですけど久弥さんは五年も来栖先輩と離れ離れに」

「……違うよ」

イズミの言葉を遮り、久弥が呟いた。水を打ったような静けさが病室を支配する。一瞬のうちに。

「え？」

「五年も離れ離れだったのは僕じゃない。千澄のほうだ。僕の認識では千澄と離れてから一週間経っていないんだ。本当につらいのは千澄。僕はその辛さを想像して辛いと思っているだけだ。ま、妹がいきなり五年分成長していたのにはさすがに驚いたけどね」

久弥は力ない笑みを浮かべながら頬を掻く。

「そういえば、そうでしたね。でも、辛いのに変わりはないじゃないですか。大切な人の辛さは、自分にもものしかかるものだ、僕は思ってます」

イズミは言葉を選びながらゆっくりと、丁寧に語った。

それでもそれが久弥に対してふさわしい言葉なのかは分からず、伏し目がちに、どこか自信なさげな表情を浮かべてしまっていた。

久弥はそんなイズミを見ながら小さく息を吐き、肩をすくめながら小さく笑った。

「キミは優しいな、まったく。僕が女だったら惚れていたよ」

「優しくは、ないですよ。優しくしたら来栖先輩にあんな役目を頼みはしませんから……」

「でも千澄はキミを殺そうとしたんだろ？ それを許しているんだからすごいよ。ま、今は何を心配しても仕方ないんだ。敵が来たらそのときこそ色々と考えなきゃね。僕もそれなりに協力できると思うからさ」

久弥は微笑し、イズミの頭を軽く撫でた。

その手から伝わる久弥の優しさは、とても温かく、柔らかなものであった。それはきつと、若いながらに妹を支えてきた久弥だからこそ持てる、特別なモノなのだろう。

イズミは少しだけ、その優しさに救われた気がした。

不意に、イズミの手の中のケータイが振動した。

イズミは若干あわてながらディスプレイに表示されたダーシエンカという名前を確認し、通話ボタンを押す。

それが、日常から非日常へのスイッチだということになど、気づけるはずもなく。

＊ ＊ ＊

穏やかな時間が流れていた。和やかに夕食を作り、食し、片づける。ささやかな、それでいてそのありがたみが分かる二人にとって

は、何事にも代えがたい時間。

しかしそれは、唐突に破られた。よりもよって、日常の真正面から、騒がしい音を立てることもなく。

ダーシエンカと来栖は、食後のお茶を楽しんでいた。

優雅な見目の二人には釣り合わない、安物の番茶ではあったが、それはそれでのどかな時間を演出してくれていた。

「そろそろ如月くんに電話したら？ 向こうも電話を待ってるだろうし」

来栖は番茶を一口すすり、からかうような笑みをダーシエンカに向けた。

平素ダーシエンカには隙というものがない。常に凜としていて、その在り方はどこか、言外に私とお前は違う存在だと告げているように感じてしまうのだ。それはもちろん、リビングデッドという在り方から滲み出てしまうものなのだろうが、来栖にはそれが悲しく感じられた。

だから、イズミと電話越しに接するダーシエンカがどうしようもなく愛おしかった。年相応の恥じらいや照れを見せる彼女を見ることが嬉しかった。

もっとも同時に、その機微を感じ取れない鈍感な如月イズミにやきもきもしていたのだが。

「あ、いや、まあ……そうだな。千澄も久弥さんと話したいだろうしな」

ダーシエンカはどこかしどろもどろとしながらポケットからケータイを取り出す。

久弥の名前を言い訳として出すあたりが、どうしようもなくいいらしい。

千澄はそんなダーシエンカを目を細めながら眺め、彼女が電話をかけるのを待った。自分としても久弥と話したくてたまらないのは事実だ。

もったも、電話越しに伝えきれるほど来栖の中に堆積したものは軽くなかったが、兄と会話することはこの状況下では数少ない楽しみの一つだった。

ダーシエンカがいよいよ通話ボタンを押そうとしたとき、扉がノックされた。コツコツと、控えめな音量で。

その音にダーシエンカと来栖は眉根を寄せ、互いに顔を見合わせる。

来栖はすぐには返事をせず、念のために異能を発動させた。元がセールス以外に来客のない家なのだ。ましてやこんな時間に訪ねてくる者があやしくないはずがない。

たえソレが堂々とノックしていたとしても。

異能を発動させた来栖の瞳に、周囲のありとあらゆる情報がエーテルによって表示される。情報は次々と浮かび上がり、そして消えていく。それらの情報がもたらした結果はやはり、というよりほかないモノだった。

来栖は我知らず表情を険しくし、頭のスイッチを日常から非日常に切り替えた。一瞬でそんな切り替えができたことは自分でも驚きだったが、ここ数日間の異能のオンオフで身に付いた、いわば副産物だった。

次いで、ポケットからケータイを取り出し、何かを打ち始める。

（外にいるのは魔術師です。窓から逃げるので、準備を）

来栖はメール送信画面に打ち込んだ文章をダーシエンカに見せた。ダーシエンカは黙って頷き、足音を立てないように玄関に向かい、自分の靴を履いた。来栖もそれに続き靴を履く。二人はそのまま窓に向かい、そっと窓を開ける。

大した高さではないとはいえここは二階。来栖が飛び降りるのに少しばかりキツかった。

来栖は迷うことなくダーシエンカの背中におぶさる。それもあらかじめ様々な状況を想定して決めてあったことだった。

ダーシエンカの背に乗った来栖は、敵がいるであろう扉を睨みつ

け、瞳が見出したこの場での最良の一言を言い放つ。

「はーい。少し待って下さいね、今お風呂入ってたんで」

険しい表情には似つかわしくない伸びやかな声で言い、静かにダーシエンカの肩を叩いた。

「行きましょう」

来栖はダーシエンカの耳元で囁く。

ダーシエンカは返事の代わりに窓枠に足をかけ、音もなく跳躍した。

ダーシエンカはゆっくりと飛び上がり、住宅街の家々の屋根を足場に次々と跳躍していく。

昼間ならば目立つことこの上ない移動法だが、夜はこちらのほうが高速で移動するには都合がいい。大抵の人間は上など見ていないし、見ていたとしてもそれはほとんどの場合、夜空だ。高く跳びあがらなければ屋根伝いに進んでもまず目にとめられることはない。

「この程度距離を取れば大丈夫か？」

ダーシエンカは跳躍を続けながら背中の来栖に向かって訊ねた。

「ええ、大丈夫だと思うわ。時間稼ぎの一言も多少は効いてると思うから。とりあず街中に出ましよう。そのほうが敵も手を出しづらい」

「そうだな」

ダーシエンカは無表情に呟き、付近に人がいないのを確かめてから路上に降りた。

「……しかし、まさか真正面から来るとは意外だったわ」

来栖はダーシエンカの背中から降りながらひとりごちる。

「確かにそうだな。こっちの探索の苦労を返してもらいたいくらいだ……とまあ冗談はさておき、あの接敵だけだとどれくらい情報を掴めた？」

「残念だけど、さしたる情報は何も掴めなかったわ。敵は魔術師であるということと、それから……」

「それから？」

「相手に殺意のようなものは感じられなかったの。禁忌を捌くのを生業としている者なら殺意ではなく使命感や義務感というのも意識の在り方としてはあり得るんでしょけど……アレにあったのは物欲に近い、ううん、ほとんどソレだったわ」

来栖はあごに手を当てながら思案顔で言った。

「直視しなくてもそこまで分るのか……いや、ところでそれは戦闘に役立つのか？」

「一応。相手の攻撃が命を狙わない攻撃である“可能性”が考慮できる」

来栖は至極真剣な顔で述べる。

ダーシエンカは来栖の“可能性”という言葉に齒噛みした。それは、来栖家の異能の強みでもあり、また弱点でもある部分だった。

来栖家の異能は厳密には未来視ではない。より確率の高い未来を予測するものにすぎない。

そしてその確率を上げるには。

「相手の土俵で戦ってみるしかない、か……」

ダーシエンカは苦々しい表情で呟いた。

相手との戦闘により多くの情報を集めるという方針は、当初から決まっていた。それに異論を唱えるつもりはないし、自分が戦うことに恐怖などあるわけがない。

恐怖などというものは人として死んだときに捨ててきた。

いや、恐怖に近いものはある。それは、来栖が未来を予測するのではなく、変ええぬ未来、つまりは確率でいうところの百パーセントの未来を視てしまうことにある。

それが百パーセントの勝利ならばいい。

だがもし百パーセントの敗北だったなら……？

来栖のすさまじい能力を目の当たりにしているだけに、ダーシエンカは背筋が凍りつきそうになる。

ダーシエンカはその思いから逃れようとするかのように、太もも

のバンドに挟んであるアーミーナイフに自然と手を伸ばしていた。先の戦いではあまり役に立たなかった、いや、魔術師との戦いはほとんど役にたちえない得物でも、触れていれば心が落ち着いた。それに、ナイフはリビングデッドの特性の“隠れ蓑”としては役に立つ。

ダーシエンカは薄暗い思考を必死にかき消しながら、心を落ちつけ続けた。

「とりあえず兄さんと如月くんに連絡しておきましょう。今を逃すと落ち着いて連絡できなくなるかも知れないから」

「ん、そうだな、連絡するか……伝えるべきことは？」

「とりあえずは接敵したことと、これから戦闘に向けた下準備をするということだけで大丈夫かと。あとはきちんとした予定を組めそうにないから」

来栖はあごに手を当てて考え込みながら告げる。

ダーシエンカは黙って頷き、ケータイの通話ボタンを押した。ワンコールののちに電話が繋がる。

（もしもし、ダーシエンカ？ 今日は何があった？）

電話口から聞こえてくるイズミの声はまだのどかなもので、ダーシエンカはこれから告げなければならぬモノを思い、心が重くなった。だが同時に、イズミならばしっかりと受け止めてくれるという安心感も心のうちにあった。

だからこそ無駄な前置きをするようなことはしなかった。

「あのな、イズミ。実はさっき敵が来栖の家に来てきた。姿を見る前にこちらが逃げてしまったから容姿などは分らないが、私たちはこれから戦闘の準備に入る」

（そっか……分った。こっちがするべきことはあるかな？ 久弥さんも動けるって言うてくれてるけど）

電話口から返ってきたイズミの声音にはさしたる動揺もなく、まるであらかじめ内容を知らされていたかのような落ち着きぶりだった。



それはきつと、いつこの状況が訪れてもいい覚悟がイズミの中にはあったということなのだろう。

ダーシエンカはそのことを頼もしく思いながら、横で話を聞いていた来栖に視線をやった。

何か指示はあるか？ と。

来栖は静かに首を横に振り「一時間後にまた連絡するとだけ伝えて」だけ言った。

ダーシエンカはその指示をイズミに伝え、再び来栖に向きなおる。「千澄は久弥さんと話さなくていいのか？」

若干の遠慮が入り混じった視線が来栖にそそがれる。

「私は……いいわ。これをとっと片づけてから、ゆっくり話すことにするから」

来栖は苦笑いを浮かべながら肩をすくめた。

軽い動作ではあったが、来栖の瞳には強い意志が見て取れた。

ダーシエンカは強い意志を宿した瞳に少しだけ見惚れながら「そうか」とだけ呟き、イズミに「またな」とだけ告げて電話を切った。日常を生きていた少女が覚悟を決めているのだ。自分が確率云々に臆している場合ではない。

ダーシエンカは心を決め、来栖とともに繁華街へ向かって歩き始めた。

＊ ＊ ＊

小さな歯車がかチリかチリと小さな音を立てて噛み合い始めたころ、松崎あかねは如月イズミのカルテを眺めながら眉根を寄せていた。

時刻は午後十時を回ったばかり。松崎の周りには誰もいない。何せそこは幸也の所有する非合法なプライベートホスピタルの一室なのだから。

オフィスとしての機能のみを追求した殺風景な部屋の片隅で、松

崎は小さな唸り声をあげていた。

「これは……やっぱりおかしいわよね」

松崎の視線はイズミのカルテに注がれていたが、もはや中身など見てはいなかった。ばかりか、カルテに記されていること自体は当たり障りのないことなのである。

問題があるとするなら、松崎が治療の過程で目にしたもの数々。松崎はそれらの現象を頭の中で反芻しながら、部屋の中をくるくると歩き回った。落ち着きなく、自分の尻尾を追い回す子犬のように。

「何がおかしいのですか？」

突如、部屋の中からしとやかな少女の声が上がる。

同性の松崎でさえ感じ入ってしまうような艶っぽい声だった。

「……クレアさん。入ってくるときはノックしてくださいよ、毎回びっくりさせられるこっちの身にもなってください」

松崎はいつの間にか現れていた少女の姿を視界に収め、肩をすくめた。

見かけは自分よりも一回り幼い少女だが、その中身が幸也や雪の上司であるということはあらかじめ雪から聞いていた。

だからといってここまで中身と外見が違う存在の相手をするのは、日常をもっぱらの立ち位置とする松崎には重労働だった。

「今回はそれほどびっくりしていないように見受けられましたけど？」

相も変わらず慇懃なクレアに、松崎は苦笑をかえす。

「外には出なかっただけで心臓は跳ね上がりましたよ。新米のころの当直でさえそんなことはなかったのに」

「それはそれは。悪いことをしてしまいましたね」

クレアは悪びれる様子もなくクスクスと笑い、続けた。

「それで、松崎さんは何がおかしいと思ってるんでしょうか？」

「いつからこの部屋にいたかを考えると恐ろしいわね……まあ、いいわ。おかしいって言うのはイズミくんの体のことよ」

「ああ、そんなことでしたか」

松崎の言葉にクレアは退屈そうに肩を落とした。

「そんなことって……いや、あなた達からしたらそんなことで済むのかもね」

「ようはアレでしょ？　如月イズミの傷の回復速度が異常というハナシでしょ？」

眉間をおさえながら頭を振った松崎に、クレアはこともなげに言い放つ。

「な、どうしてそれを……！　まさかあなたが魔術で？」

「フフ、私はそんなに甘い人間じゃないですよ。まあ、そうですね。強いて言うなら傷の治りの速さは彼の“家系”の特性、といったところですね」

クレアは楽しそうに笑いながら言った。

松崎はその言葉に首をかしげる。

幸也の家が代々魔術師の家系という話なら以前に聞いたことがあるが、傷の治り云々の話は初耳だった。

クレアは戸惑う松崎を楽しそうに眺めながら言う。

「まあ、あなたが気にすることじゃないわよ。いいえ、気にしないほうがいい、と言うべきかしら。まあ、ともかく、その体質があるから雪はあなたにイズミの治療を任せたのよ。あの回復速度がバレたら割と騒がしいでしょ？」

クレアはまるでバレた方が楽しいとでも言わんばかりの笑みを浮かべていた。

松崎はクレアの表情にそら寒いものを感じながらも「ええ、まあ」と覇気のない返事を返した。

実際、松崎が一般の患者として如月イズミと相対していたならば、自分の見たものを疑ってかかり、検証を重ねたうえで見たものを信じ、その上でイズミをしかるべき研究機関に送りつけていたかもしれない。

それほどまでにイズミの治癒力は異常だった。

「それで、あの傷はどれくらいで塞がりそうなんですか？」

「……経過を見るに、二三日で塞がるでしょう。内部組織が完治するまでにさらに三四日というところでしょうか。もし傷が再び開いてなければもう完治していた可能性すらありますから」

「そうですか。まあ、今はそんなモノでしょうね」

クレアは思案顔で口許に手をあてる。

今は、ということはさらに速くなることもあるのだろうか。そんなことが松崎の頭に浮かんだが、考え始めると頭が痛くなりそうなので無理矢理に思考をかき消した。

「ありがとうございます、松崎さん。それでは私はこれで」

クレアは淑女のようにスカートの裾を軽く持ち上げて頭を下げると、その場から消えた。

松崎の見間違いでも何でもなく、本当に、幽霊のように、消失してしまった。

松崎はその光景に呆然としながらも、取り乱すようなことはなかった。何があっても不思議ではない。自分たちがいる場所とは真逆の、魔術という彼岸では。

少なくとも、松崎は痛いほどに知っているのだから。それらの世界を。

「さて、と。こっちでの仕事を終わらせたら戻らなきゃ。あっちに」  
松崎は軽い溜息を吐き、カルテ諸々の資料整理に取り掛かった。

＊ ＊ ＊

ところ変わって非合法ホスピタル屋上。少しだけ風が肌寒いその場所に、彼女はいた。

黒のパンツスーツに身を包んだ、夜の闇によく映える白い肌の婦人。如月イズミの母、雪。その人だった。

「松崎さんはなんと言っていましたか？ 総帥」

雪はどこか憂いを帯びた瞳で眼下に広がる街の明かりを見つめて

いた。

彼女の周りに人の影はない。だというのに彼女は続けた。

「黙ってないで何か言ったらどうです？　そこにいるのは分ってますよ？」

その言葉を合図に、雪のとなりに少女の姿が現れた。

少女は困ったような笑みを浮かべながら肩をすくめる。

「まったく。雪には敵わないな。気配を消した私に気付けるのはお前たち夫婦ぐらいだよ」

「フフ、ホントは気付いてほしくて少し手を抜いていたでしょ？」

「まあ……ほんの少し」

クレアは照れ臭そうに笑った。その笑みはクレアが見せる数少ない、というよりは雪の前でしか見せないであろう“普通の”笑みだった。

「まったく、困ったものです。それで、イズミの体はどうなってますか？」

雪の言葉に、クレアの顔は真剣なものへと変じる。

「……すでにエーテルの浸食が始まっている。松崎の見立てから判断すると、真人間でいられるのはあと一年強。そのあとは……どうだろうな。才能からいえば幸也と同等かそれ以上だから“生きられる”可能性も高いが、エーテルに“喰われる”可能性も低くはないな。他の如月一族と同じように」

「……そう、ですか。まあ、私たちにできることはありませんから、見守るしかないですね」

「まあ、それしかないだろうな。それで、だ。雪はやっぱり心配で見に来たのか？」

クレアは努めて明るい表情に戻し、雪を見つめた。

その視線を受けた雪の表情も至って柔らかなモノで、先ほどまで交わっていた会話などなかったかのようだった。

「それならまだよかったんですけど、仕事です。それも幸也のじゃなくて私の」

雪は肩をすくめて言うと、困ったような微笑を浮かべた。

「仕事、ってまさか……アクロマ機関のほうの？」

「ええ、そっちです」

「もしかしくなくてもひょっとして……来栖兄妹を狙ってるヤツが雪のターゲットだったりするわけか？」

クレアは“恐る恐る”雪を見つめた。

すると雪は満面の笑みで答える。

「ええ、そのまさかです。イズミ達の敵は私の標的でした。そうと知っていればここまで“泳がせる”ようなことはせずに殺しておいたのに。生まれてきたことを後悔するような方法で」

「ハ、ハハハハハ。そ、そうか。でも大丈夫だろ、何せこっちの戦力だって低くはない」

クレアは乾いた笑い声をあげながら、自分の口から出た言葉を呪った。

確かに嘘は言っていない。イズミたちの戦力は低くはない。ばかりか、並の魔術師なら手も足も出ない精鋭——というよりはイレギュラーな存在といったほうが正しいか——揃いだ。

だが問題は相手。アクロマ機関の、それも雪の標的に指定されるような魔術師はケタが違う。正直言って一流の魔術師でも手が出ないのがほとんどだろう。

確かに久弥にかけられていた術式からも只者ではないと分ってはいたが、それほどまでとは思わなかった。

そしてよもや、禁忌を裁く者ではなく、禁忌を犯した者だったとは。

いや、クレアの予想はあながち間違っていない。

クレアは雪が追っていた者のデータを記憶の片隅から引っ張り起こした。

確か雪のターゲットは異端審問機関に属しながら、その陰で禁忌の研究に身を染めた者。

名前は……どうでもいい情報すぎて思い出せなかった。が、それ

を“歳”の所為だなどとは、クレアは死んでも認めたくなかった。

「で、雪から見た勝率は？」

クレアは思考を整え、雪を見つめた。

雪が敵に手を出していないのは、今ここで自分が手を出したら当初の『手を出さない』という約束を破ることになるからだ。

自分の任務だった、と言って片づけてしまわない辺りが不器用なまでの律義さとも取れそうだが、そうかというところでもない。

雪は分っているのだ。如月家に生まれたものは修羅場を踏まなければ生きてはいけないことを。安穏と生きていたのでは、自分のうちに棲む怪物に喰われてしまうということを。

かつての幸也がそうであったように。

だから、それこそ断腸の思いで標的を殺そうとする自分を押し殺している。全ては愛してやまない息子のために。

たとえ、その息子が殺されるようなことになるうとも。

「勝率、ですか。低く見積もって三割、高く見積もって五割です」

雪はあごに手を当てて熟考しながら答える。

雪の返答にクレアは目を見開いた。

「意外に高めだな」

それがクレアの率直な印象だった。

大方の予想では勝率一割が関の山だと踏んでいたのだが、そうでもないらしい。かといって雪の標的がそう生易しいものとも思えないのだが。

雪はクレアの考えを察したのか、苦笑を浮かべて付け足した。

「私の当初の見立てなら勝率は五分から一割でした。でもあの久弥という青年を見て変わりました」

「久弥を……？」

「ええ。あの子、イズミの病室に居た私に気付いたんですよ？ 完全気配を消していたというのに。それもそのあと慌てることもなく、全てを察したようにイズミと何気ない会話を始めて」

「な……久弥“も”そこまでの能力だったのか？ 私は能力を落と

して接していたからどの程度かは計れなかったが、よもやそこまでとは」

「も、ってことは……まさか彼の妹さんも凄いですか？ 私は妹さんの能力は知らないんで計算に入れてないんですが」

「と、いうことはそれで三割から五割なのか？」

クレアの問いに雪は真顔で首肯。

不意にクレアの口から笑いが漏れた。

「フ、フフ、フハハハハハ！ そうかそうか！ これは面白いことになったぞ！」

急に狂ったように笑い始めるクレアに、雪は怪訝な視線を向ける。クレアはそのことに気付き、バツが悪そうに咳を一つ吐き、言った。

「なあ、雪。お前が感心した久弥の妹はな、一目“視”ただけ私の“本質”を見切ったんだよ。まあ、そのショックで気を失ってしまったがな。だからそのあたりの記憶は私が適当に書き換えさせてもらった。本質を見抜かれるのはいい気がしないんでな」

クレアは自嘲的な笑みを浮かべて肩をすくめる。

雪は呆然とした表情でその言葉を聞いた。いや、聞いたというには余りに臆気だった。なにせ言葉は頭の中で何度も反芻するのだが、イマイチ中身が理解できない。

クレアの“本質”を一目で見抜くなど、並の魔術師にはできない。出来たところでその存在を直視すれば、廃人になること請け合いだ。雪にしたって理解できないからクレアを見ることができない。

クレアを理解できる存在。詰まるところ、理解するという能力に秀でた魔眼の持ち主たちにとっては、クレアという存在はそれ自体が凶器以外の何物でもない。

では来栖兄妹にとっては何？

雪の頭の中で、来栖家の異能は少しだけ優れた霊視という位置付けだった。魔眼と呼ぶにはあまりに脆弱だったから。

ならばクレアの言ったことはどうなるのか。それはまさしく来栖



千澄の能力が魔眼に値するということだ。

だがただの魔眼ならば、クレアの性質を理解した時点で廃人と化しているはずだ。その情報量、存在の異質さに押し潰されて。

では来栖家の異能とは一体……？

雪の頭の中に駆け巡る疑問に気付いたのか、クレアが口許を悪戯に歪めながら言った。

「あれは魔眼の類ではない。むしろほぼ魔術の類ですらない。アレはな……」

——共感覚だよ。

雪の見間違いでなければクレアの口はそう動いていたし、聞き違いでなければ確かにそう言っていた。

クレアの言ったことがにわかには信じられなかった。長く“異常”に身を置いてきた雪でさえ。

それでも、歯車は噛み合い、状況は始まった。無機質に輝く街の明かりのもとで、着実に状況は動き始めている。そしてそう時間を掛けずに終わるだろう。

雪とクレアは、どこか諦観を含んだ眼差しで街の明かりを眺めていた。

街の明かりを眺めながら、クレアがさらにとんでもないことを雪に告げたが、雪はそれを聞かなかったことにした。

優れすぎた来栖千澄の能力にリミッターを掛けたなど、今の雪にとっては聞きたくない言葉以外の何物でもなかったから。

## 第4章 再生した物語は、メビウスの輪のように（1）

どこかで聞いたことのある、しかし名前までは分らないクラシックが流れるファミレス内には、若者の集団がいくつかと、コーヒースタンプを吸いながらテーブルに広げたファイルと睨めっこをしている中年女性がいた。

その中に、ダーシエンカと来栖も紛れていた。特に目立ちもしない、ありとあらゆる席の死角となっている席に。

「おい、大丈夫か？」

ダーシエンカはテーブルに突っ伏したまま動かない来栖に声を掛けた。

この店に入ってからこれ三十分、来栖はこの状態だった。瞬発的にとはいえ、限界を超えた能力の使用は来栖に多大な負担を与えていた。一晚眠ればどうにかなるのだが、この状況下ではそんなこと望むべくもない。

「ええ、頭痛は引いたわ。でも能力は使えてあと五分から十分ね。そのあとはおそらく、また気絶してしまうでしょうね」

来栖は顔をあげながらも、目にタオルを押しあてていた。

「……そうか。敵がここを探り当てられないなら休むこともできるんだが、確証はないの？」

「ええ。相手がどんな能力を持っているかは未知数。索敵能力に秀でているかどうかは、これからの流れで決まるわ。とりあえず今は見張っていて。さっき私が言った特徴の男を」

来栖はそう言うと、再びテーブルに突っ伏した。

「分かった。白人で長身の男だな」

ダーシエンカは来栖に向かって、というよりは自分に確認するように言い、辺りに気を配った。

幸いこの席は周りからは死角だが、周囲を見渡す分には都合がいい。それに来栖が告げた敵の特徴も、他の国ならなんの助けにもな

らないが、ことこの国では役に立つ。

アジア系以外が目立つというのは、ダーシエンカはその身をもつて経験済みだ。もっとも、相手がその容姿を偽装できるというなら話は変わってくるが、来栖の見立てではそれはないということだった。

敵がここに乗り込んでくる可能性は極めて低い、と思いたいのだがその確証はダーシエンカにはなかった。

確かに人気の多い場所で騒ぎを起こす、ばかりか魔術を使うようなことは本来あり得ない。だがもし、もし敵がヴェルナールのように街の人間すべてを操作しうる能力を有していたら。ダーシエンカたちに休息の場所はない。休む唯一の方法は、逃げ続けることに他ならない。

「……大丈夫よ」

テーブルに置かれたコップを我知らず握りしめたダーシエンカに、来栖が囁いた。

「何が、大丈夫なんだ？」

おしぼりで目を押さえたままの来栖に、ダーシエンカは首を傾げた。

「私たちがいますべきことは、情報の収集。敵の姿・能力を見極め、しかるのちに逃げればいいのよ。そんなに深く考え込まなくても大丈夫」

来栖はおしぼりを取り、ダーシエンカに笑みを向けた。疲労で白んだ顔に浮かぶ笑みは弱々しく、儚げだった。

その笑みにダーシエンカは息を呑み、同時に恥じた。実戦経験ならダーシエンカのほうが明らかに上だというのに、来栖のほうが落ち着きはらっている。本来ならば自分が気を使わなければならないというのに、逆に使われてしまった。

それは、来栖が有する異能の特質故でもあるのだろう。だがそれ以上に、ダーシエンカにとっても、今置かれている状況が想定していなかったものである、ということが大きかった。

本来ならばネクロマンサーをのみ守ればいい存在のリビングデッドが、このような複雑な状況下にある。イズミのことだけを考えると、いればよかったハズが、ほかのことも考えなければならぬのだ。

それはダーシエンカにとって、本当に想定しなかった事態だ。

それでも。

「……すまない。そうだな、落ち着こう」

ダーシエンカは来栖に精一杯の笑みを返した。

自分はお世辞にも基礎能力の高いリビングデッドではない。それでも、出来ることはある。それをすればいい。イズミと同じように、出来ることを精一杯。

そう考えると、肩が急に軽くなった。

ダーシエンカは強張っていた表情をいくらか和らげ、再び周囲に警戒を向けた。

そんなダーシエンカに来栖は微笑を向け、再びおしぼりを目に当てて机に突っ伏した。

警戒を続けること二時間。その間にイズミ達に連絡すること二回。それでも、敵らしき人物がイズミやダーシエンカ達の前に現れることはなかった。

ただただ、平坦な時間が流れていく。周りにいた客層も入れ替わり始め、しだいにまばらになっていった。

店内にはダーシエンカと来栖、それからパソコンとにらみ合っているサラリーマンとは思えない、くたびれた格好をした中年男性だけだった。

「だいぶ、楽になったわ」

テーブルの上で仮眠を取り続けていた来栖が顔をあげた。

確かにその言葉通り、血色もだいぶ良くなっていた。そのことにダーシエンカはいくらか氣を楽にする。

「それは良かった。で、これからどうする？ 敵が襲ってこないようならこのまま休んでいてもいいんじゃないか？」

「そうしたいところではあるけど、そうもいかないわ。敵が現れた

以上、悠長なことはしてられない」

来栖は小さく笑いながら肩をすくめ、続けた。

「次は人気のない所に移動しましょう。人目に付く場所だから攻撃してこないのか、単に見失っているだけなのか分らないから。でもそうね、出来るだけ大通りに近い場所のほうがいいかしら。もしものときにすぐ逃げられるし」

来栖はあごに手を当てながら言うと、伝票を取って立ち上がった。「分かった。それじゃあ行こうか」

ダーシエンカも来栖に習い立ち上がる。

レジで会計を済ませ、外に歩み出ると、ひんやりとした夜の空気が二人を包みこんだ。普段ならば秋の到来を感じさせるそんな空気も、今の二人にとってはこれから来る“異常”を思わせる冷たさに違いなかった。

「そうだ、イズミに連絡を、っ！」

辺りを見渡し、ダーシエンカがおもむろにケータイを取りだそうとした瞬間。

視界に不可解なモノが映り込んだ。いくら冷やかな空気が流れ始めたとはいえ、それはせいぜい涼しいという程度のもの。だというのに、ダーシエンカの視界に入りこんだ男の姿はあまりに不可解だった。

闇夜に紛れるような黒い細身のロングコート。そして、蛍光灯の光を受けて輝く赤みがかった黒の頭髮。極めつけに、夜にそれでは何も見えないのではないかというほどに色の濃いサングラス。

そんな姿で、その男は街頭に立っていた。立っていた、というよりは置かれていたと表現したほうがしっくりくるような、そんな佇まいで。

その男の存在全てが、周囲の景色から浮いていた。道行く人々も時折チラと怪訝な視線を向けては、その男の前を通り過ぎていた。

「千澄……白人で、長身の男だ」

ダーシエンカはその男に視線を奪われたまま、呆然と呟いた。

明らかに怪しい男。それなのに何故だろう。目を逸らした瞬間にその存在を忘れてしまいそうな、そんな稀薄な雰囲気も男には漂っていたのだ。

だから目を逸らせない。その場から動けない。

そんなダーシエンカをよそに来栖は異能を発動させた。瞬間、来栖の表情が凍りつく。その表情が眼に映った結果を示しているのだが、ダーシエンカは男から目を逸らせないがゆえにそれに気付けない。

「あの……男、よ」

来栖もダーシエンカと同じ状態に陥ったのか、男を呆然と見つめたまま呟いた。

そんな二人に、男がゆっくりと歩み寄ってくる。コートのポケットに手を突っこんだまま、超然とした足取りで。

すぐに身構えなければいけない。あるいは逃げなければいけない。だというのに、二人の足はいっこうに動こうとはしなかった。

「その表情を見る限り、君たちじゃないみたいだね」

男は二人に歩み寄ると、親しげに流暢な日本語で言った。

「なんの、ことですか？」

「いやね、オレはね、探しているわけよ」

男は首をかしげながら、言う。

そんな男にダーシエンカと来栖は怪訝な表情を浮かべる。心の中では『逃げる！』と警戒心が叫んでいるのに、体は怪訝な表情を浮かべるのが精一杯なのだ。

「探してるんだ。オレが仕掛けた術式を解いた魔術師を、さ」

怪訝な表情を浮かべ続ける二人に、男は言い放った。さわやかな微笑すら浮かべて。

もともと整った顔をしている男だ。その笑みも非常に魅力的なものである。だというのに、ダーシエンカと来栖の背筋には悪寒が走っていた。それは、蛇にまわりつかれるような、ヌルリとした感覚。その感覚が二人の呼吸を浅くする。次第に、息苦しさ募っていく。

る。このままでは窒息する、そう思いかけた矢先。

ダーシエンカが動いた。

常人には捉えられない速度で拳を突き出し、男を“殴り”つける。男は文字通り吹き飛び、路上に設置されたごみ箱に叩きつけられた。男とともに倒れたごみ箱から空き缶が散らばり、どこか滑稽なけたましい音を上げていた。

「行くぞ！」

周囲の通行人が何事かと怪訝な視線を向ける中、ダーシエンカは来栖の手を取って走りだした。

どこに、などという考えはなかった。ただ、ここにいてはいけないという考えだけが脳内を駆け巡り、ダーシエンカを動かしていた。来栖もダーシエンカに腕を引かれるまま前のめりになりながら走りだす。

だがその視線は未だに男に注がれていた。いや、違う。男の周りに一瞬だけ現れた“変化”を注視していた。

来栖は呆然とした表情のままボソリと呟いた。

「……次元が“ズレ”た？」

その言葉にダーシエンカが眉をひそめたのもつかの間。

二人は注がれる好奇の視線も気にせず走り続け、人混みを抜けた。

＊ ＊ ＊

「……あの、大丈夫ですか？」

少女に殴り飛ばされ、ゴミにまみれたオレに、通行人の一人が声を掛ける。

見上げてみれば、くたびれたスーツに身を包んだ中年のサラリーマンだ。

自分でいうのもなんだが、こんな状況で、こんな格好のオレに声を掛けてくるなんて相当なモノ好きもいたもんだ。

ああ。そう言えばこの国は国自体が馬鹿がつくほどのお人よしだったな。

「ええ、大丈夫です。少し道を尋ねただけだったんですが、こんな格好なのであらぬ誤解を受けてしまったようです」

オレは仕事用の笑顔を顔に張り付け、差し出された中年男の腕を取って立ち上がった。

それから中年男に知る必要もない道を尋ねて丁寧に礼を言い、再び歩き始めた。初めは周りの者たちも怪訝な視線を向けていたが、それも徐々に薄れていく。

まったく、この国は本当に不思議だ。義理と人情と無関心がこうも一緒くたに存在する国は本当に面白い。

いや、それ以上に面白いのは――。

「あの女、何者だ？」

オレはまだジンジン疼く鼻を触りながら呟いた。

本来ならダメージを喰らうはずはなかった。並大抵の打撃ならエネルギーをすべて“散らす”ことができたはずだ。だというのに痛みさえも与えられてしまった。

もし術式を起動させていなかったら間違はなく頭と胴体がサヨナラしていただろう。

俺はその様を思い浮かべ、武者震いにも似た震えをもよおす。

ほんの暇つぶしにと訪れたこの場所だが、予想以上に面白いものが待っていたようだ。

まったく。この前この街を訪れた時も思わぬ収穫を得たが、今回もわりかし楽しめそうだ。

俺は気付かないうちに口許をニヤつかせていた。

気付いてもそれを消そうとは思えなかった。いや、消せそうになかった。

気味の悪い面もそのままに、俺は可愛らしく逃げ出した二匹の野兎を追い始めた。

ゆっくりと、いたぶるような速度で。



＊ ＊ ＊

怪しい男のもとから走り去り、ダーシエンカと来栖は町はずれの廃工場に逃げ込んでいた。いや、逃げ込んだという表現は適切ではないかもしれない。何せ二人は相手が攻撃を仕掛けやすい場所にわざわざ足を進めたのだから。

夏の湿気を帯びた風が、うっすらと汗の滲んだ二人の肌を撫でた。その風に乗って、廃工場独特の錆びた鉄の匂いも二人の鼻をついた。鉄錆の匂いに顔をしかめるでもなく、ダーシエンカは切迫した表情で口を開いた。

「千澄、あの男に関して何か分ったか？」

言葉を投げかけられた来栖は、肩を荒く揺らしながらもなんとか呼吸を整え、額に浮かんだ汗をぬぐった。

「あの男、というかあの男の使った能力なら少しだけ“視”えたわ」「確か次元がズレたとか言っていたが……それと関係あるのか？」

ダーシエンカは眉根を寄せて訊ねた。

その問いに来栖は黙って頷くものの、言葉を紡ぎだすことはなかった。それはおそらく、来栖の中でも答えがハッキリとは出ていないということなのだろう。

ダーシエンカはそう考え、自分でもあのときの状況を振り返ってみることにした。確かに奇妙な感覚はあった。生身の人間がリビングデッドの攻撃で無事という結果以上に気味の悪い違和感。

それはおそらく、ダーシエンカの拳があの男に触れた瞬間に生じていた。

リビングデッドには痛覚を含めて感覚がない。だから触れた感覚がおかしいというのは少し違う。しかし、視覚・聴覚によってあの一撃を判断する限り、奇妙というほかない。

振り切ったはずの拳から得た感覚は、ほんの数センチの間合いで突き出したのと同程度のものだったのだから。

あときは無我夢中だったため、それが自分の動揺によるものと判断した。だがだからこそ奇妙なのだ。無我夢中だからこそ、手加減のない一撃を繰り出していたはずなのだから。

「光の屈折による錯覚、とは違うだろうな……」

ダーシエンカは男を殴りつけた拳を握ったり開いたりしながら呟く。

「それは違うわね。もしそうならそもそも攻撃が当たっていないはずだもの」

「まあ……そうだな。すまない、忘れてくれ」

「でも、感覚としては近いのかもしれない。物体そのものがズレるんじゃない、そこまでの過程がズレるとしたら……うん、それから説明がつくかもしれない」

「どういう、ことだ？」

「つまり、あいつの能力は対象に届くまでの空間を歪めるのよ。光の屈折は物体の位置を誤認させるけど、ヤツの能力は対象そのものに対する距離感はそのままに、そこに届くまでの過程を歪めるの。」

たとえば一センチの距離を十センチにしたり、その逆をしたり」

「ということは……相手の攻撃をいなしたり、自分の攻撃を素早く且つ威力を落とすことなく繰り出すこともできるというわけか」

ダーシエンカはあごに手を当てながら呟いた。

「おそらくは。でもあときはダーシエンカの外見に惑わされて伸ばす空間の距離を見誤ったんでしょね。ギリギリのところでは受けとめようとしたことを考えれば、エーテルの消費量も少なくはない術式でしょうね」

来栖は言い、錆ついたコンテナにそっと背を預けた。

口には出していないが、来栖の佇まいには疲労がありありと見て取れた。

ダーシエンカはそのことに気付きながらも労うような言葉はかけない。そんな言葉を掛ける余裕は今の自分にはないし、何より来栖がその言葉を望んでいないのも知っているから。

なによりも今すべきことは目前に差し迫った脅威の排除だ。

ダーシエンカは自分にそう言い聞かせ、静かに息を吐いた。

「アレだけから判断するなら、ダーシエンカと相性の悪くない相手だわ。何せこちらが手数を出すだけで相手は勝手にエーテルを消費してくれるんだから」

「それは確かにそうだが……」

「当然それだけじゃないでしょうね。兄さんに封印を施したことから考えても相手の手札はまだあると見るのが定石」

来栖は口許を歪めながら吐き捨てるように呟いた。その言葉の端には異能を使ってもなお掴めない相手の全貌に募る焦りと苛立ちが見て取れた。

確かに来栖の能力からすれば現状は本当に芳しくないのだろう。だがダーシエンカにとっては、いや、他の魔術師にしてみても同じ。一目見ただけで相手の能力を限りなく断定に近い形で判断できるのはかなりのアドバンテージだ。

あとは出たとこ勝負でも構わない。

不思議と、ダーシエンカの中にはそのような心構えが出来始めていた。

だからこそ動じなかった。

「……ああ、やっぱり俺の判断は正しかったようだね」

頭上から唐突に響いた声にも委縮することなく、身を固くした来栖を抱えて瞬時に飛び退ることができた。

「な、な、なんで……」

ダーシエンカの腕の中で来栖が言葉にならない言葉を繰り出そうと口をパクつかせる。

なるほど。確かにこうも気配なく現れられては背筋がそら寒くなる。

だが。ダーシエンカはこの男の能力の片鱗を掴みかけていた。異能などなくとも、いや、異能がないからこそヤツの尻尾を捉える事が出来たのかもしれない。

ダーシエンカは抱きかかえていた来栖をそっと背に回し、いつの間にかコンテナの上にたたずんでいた男を睨みつけた。

黒のロングコートに赤黒い髪、色の濃いサングラス、相も変わらず一度見たら忘れられない格好をしているというのに、やはり存在感が希薄だ。

「なるほど……次元がズレる、目を逸らしたら記憶から消えてしまいうような影の薄さ。なんとなくカラクリが分った」

ダーシエンカはニヤリと笑い、太ももに括りつけてあったアーミ―ナイフを抜きとった。

ダーシエンカの一撃と比べたら玩具のようなそれも、ダーシエンカが何者であるか分らない者にはいい目くらましになる。

それこそ、ダーシエンカの攻撃を素手で防ぎかねないほどに。

「ふうむ……キミが何者かも興味あるんだけど、今はそれよりも後ろの女の子のほうが興味あるかなあ。ね、キミ、見えるんでしょ？ 演算された未来がさ」

男はさわやかな口調で言った。だというのにその表情はこの上ないほど歪で、泣いているのか笑っているのか判断に困るような様相をなしていた。

たぶん、笑っているのだろう。

ダーシエンカは自分の背で委縮する来栖を知覚しながら、眼前の男に細心の注意を払った。この男は気を抜けばいともたやすく見失ってしまう。それこそ、始めからそこに存在しない幻のように。

「キミはあれでしょ、来栖久弥の妹なんでしょ？」

男は泣き笑いのような表情を崩すことなく言う。

男の口から漏れた言葉は、さして驚愕に値することではない。来栖の家にやってきていた時点で、来栖家の家族構成など割れていて当然だ。

来栖が委縮したのはそこではない。男が口にした“演算された未来”という言葉に反応したのだ。

来栖が久弥と同じ能力を持っていることに、男は気付いている。

だからこそ、男は今もある術式を展開している。

ダーシェンカのなかで不確かだった予感が、確信に変わった瞬間だった。

「千澄、無理しない範囲で能力を使ってくれ。私が攻撃を仕掛けたら、何か新しい情報が掴めるかもしれない」

ダーシェンカは男を見据えたまま呟く。自分の中にある確信めいたものを来栖に伝えるようなことはしなかった。それはひよっとしたら来栖を誘導してしまうかもしれないから。だからダーシェンカは何も言わずに、来栖自身が導き出す答えが最良と信じて沈黙を通した。

その言葉に来栖は、短くどこか詰まったような声で「分かった」とだけ返した。

ダーシェンカはその返事を聞くなり、目をスッと細め、地面を軽く蹴った。

重力を無視しているかのごとく、軽々と、優雅に、ダーシェンカの体が宙を舞う。舞う、とはいってもそんな生易しい速度ではない。一直線に男の眼前まで迫り、アーミーナイフを男の喉元めがけて横薙ぎに払う。男はさして慌てる様子もなく軽くスウェーして刃をかわす。

案の定、魔術だけでなく体術にも秀でているらしい。もっともそれほど驚くようなことでもない。魔術という武器に頼っているだけの魔術師など、結局は二流なのだから。もっとも、その魔術のスペックが桁外れに高いというなら体術など必要ないが。

いや、いま重要なのはそこではない。真に重要なのは。

攻撃を避けたということ。

ダーシェンカは頭のうちにいくつかの仮説を組み立てながら、間髪開けずに攻撃を仕掛けていく。

三メートル四方ほどのコンテナの上で、二つの影が躍る。影が動くたびに軽やかな金属音が廃工場に響き渡る。

「うん、確かにすごい破壊力だね。並の魔術師なら初撃でお陀仏だ

よ」

男は口許に薄ら笑いを浮かべながらヒョイと飛び下がり、ダーシエンカと距離をとった。

ダーシエンカもあえて追うようなことはせず、広がった間合いはそのままにナイフを構えなおす。

「で、オレの情報は収集できたのかな？ 来栖妹さん」

男はダーシエンカから目を離すことなく声を張り上げた。

その問いに、答えが返ってくるはずもなく、代わりに電車が線路を踏みしめる音が遠く響いた。

「あーあ、ダンマリ決め込むってワケね？ まあ、いいや。ダンマリ決め込まれようがオレのやることは変わらない訳だし」

男は大袈裟な身振りで肩をすくめ、深々と溜息を吐いた。

そんな男を眺めながら、どうしたものかとダーシエンカは思案する。このまま攻勢に出続けてもいい。今は五割程度しか出していない力を一気に全力にすれば、一撃で相手を葬れるかもしれない。

もっとも、失敗したときはこちらの手の内のほとんどを晒すという結果が待っているのだが。

ならば、とダーシエンカはナイフを握る手に力を込め、目を凝らした。

元来、霊視に関する視力はゼロに近いダーシエンカだが、目——というよりは脳の回路を——凝らせばある程度までなら魔術無効化の術式を発動させなくとも見ることが出来た。イズミや来栖のソレと比べたらあってないような脆弱な霊視ではあったが。

(とりあえずは自分の出来ることを……)

ダーシエンカは来栖に頼りすぎないように、と自戒の念も込めながら胸中に呟く。

同時に、暗闇に淡い光が映り始めた。映っているのは赤褐色の、火の粉のような、あるいは鉄錆のような色のエーテルだった。

魔術を発動させていないダーシエンカのものではなく、ましてや魔術の使えない来栖のものでもない。

紛れもなく、眼前の男が放出している魔術の光だった。

ダーシェンカの瞳に映ったのはそれだけではなかった。男が身につけている鎧の輪郭が、薄ボンヤリと見える。

おそらくは来栖も既にその形を捉えているであろうソレは、ダーシェンカの予想そのままの形だった。

男の周囲だけが、奇妙に歪んでいる。陽炎のようなものが、男を包みこんでいる。だというのに不思議と、男の姿だけははっきりと見えるのだ。

ひよっとしたらいま見ている男は蜃気楼か何かなのではないかとさえ思えてくる、奇妙な光景だった。

だが、それで幾通りかあった仮説は一つに絞り込まれた。この男が纏っているのは来栖の能力を阻害するための迷彩であり、同時にダーシェンカの攻撃を防ぐ鎧でもある。

ただおそらく、男の術式が後者として発動すると、それはエーテルを消費してしまうといった所だろう。

だから男はダーシェンカの攻撃を避けた。

となればダーシェンカが取るべき行動は攻撃を当て、相手のエーテルを消費させることなのだが……まだ情報が足りない。

男の攻撃手段は何一つ解析できていないのだ。ばかりか男はこちらに手を出す素振りすら見せはしない。それがダーシェンカにとって、この上なく警戒心を駆り立てた。

それでもダーシェンカは地面を蹴っていた。攻めないことには相手の情報は引き出せない。来栖の、いや、イズミの役には立てない。ダーシェンカはただそれだけの思いで地面を蹴り、再び男に刃を向けた。先ほどよりもいくらか速度と威力を増して。

それでも男は薄ら笑いを消すことなくダーシェンカの攻撃を捌き続ける。詰めようにも男が巧妙に立ち位置をズラしていくので思うように攻めきれない。

いつしか、男がこの状況を楽しんでいるのではないかという考えさえ浮かび始めていた。体力勝負で行けば、リビングデッドである

自分が負けるはずはないというのに、それでも仄暗い予感が、ダーシエンカの背中にとわりつき始めた。

そんなとき。

「ダーシエンカっ！」

コンテナの下で一進一退の攻防を眺めていた来栖が声をあげた。ダーシエンカはその声に反応し、すぐさま飛び退って男と距離を取る。

「落ち着いて。大丈夫、自分を見失わないで」

来栖は脂汗の浮かんだ顔に弱々しい微笑みを浮かべながら告げた。その表情から見てとれるのは、限界すれすれの能力の発動。そして、体力の限界を今にも迎えようとしていること。

それでもなお、強靱な意志で意識を繋ぎ止め、立ち、懸命に自分のするべきことを淡々と行っている。

ダーシエンカは来栖の背後に漂う覚悟を感じ取り、深く頷いた。再び男に飛びかかる。攻めきれなかりうが焦ることはない。ただ淡々と、自分のすべきことをすればいい。

ダーシエンカは頭の中が空っぽになっていくのを自覚しながら、徐々に攻撃のギアを上げていった。

自分の中に芽生えた仄暗い不安が、あの夏とは違う“生きたい”という意志から生まれているということには気付くはずもなく。

＊ ＊ ＊

呼吸が荒くなるのを感じながらも、来栖は懸命に目を凝らしていた。運動した訳でもないのにこうも息が上がるのは兄が封印されたあの日以来かもしれない。

正確には、あのときは息が上がったのではない。呼吸が止まったのだ。喉に異物が詰まったかのようになり、あっという間にブラックアウト。

意識を取り戻してみれば、病院のベッドで横になっていた。記憶



に残っているのは病院独特の消毒薬のにおいと、来栖が意識を取り戻したことに安堵の涙を浮かべた兄の仲間の顔だった。

あのときの、そう、あのときの息苦しさに比べたらどうということはない。この程度の呼吸困難など、どうしても乗り越えて見せる兄を、大切な兄を取り戻すそのためならば。

来栖は我知らず胸元を抑えながら呟き、状況を見据える。

来栖が声を掛けてから、ダーシエンカの動きには淀みがなくなった。迷いや不安も消えている。まるで機械のように冷え冷えとした攻撃を次々と男に放っている。

対する男も流石に只者ではない。巧妙に立ち位置をズラしながらダーシエンカの攻めをいなし、なおかつコンテナというエリアから抜け出そうともしない。

その意図が読めなかった。

来栖の眼には全てが映っている。男が身にまとう迷彩も、ダーシエンカが攻める攻撃の行く末も、男がかわすコースも。

そして、どうすればダーシエンカの攻撃が男の命を刈り取ることが出来るのかさえも。

男が身にまとう術式も、来栖はものの数十秒で解析し終えた。空間を歪め、来栖の能力を阻害するその魔術も、来栖が歪んだ空間を独自に補正してしまえば何の意味もなしえなかった。

つまるところ、男に残された未来は“死”のみのはずなのだ。

だというのに、来栖はそこまでの道筋をダーシエンカに告げることが出来ない。そもそも目の前の男の本当に厄介なところは、感情が読めないことなのだ。

来栖の瞳は感情すらも映す。希望や不安、興奮や落胆、そのような不確かなものさえも映し、情報が多ければ言語化だって可能だ。

先ほどのダーシエンカの気持ちを言語化するならば「こいつは何かを隠しているかも知れない。自分はどう攻めても勝てないのでは？」といったところだ。

だからそれを打ち消すために来栖は最良の一言と表情を向けた。

結果ダーシエンカは落ち着きを取り戻し、感情の揺らぎが“小さく”なった。そう小さくなっただけで消えたわけではないのだ。

だが、男にはそれがまるでない。感情などはなから持ち合わせていないかのよう淡々と行動する。

あらかじめ組まれたプログラムのようにダーシエンカの攻撃をかわしていく。そこには何の恐怖も、ましてや思考もない。

見て取れるのはまるで反射のみで動いているかのような全身の筋肉の動きのみ。

だからこそ不気味なのだ。それこそ来栖だってダーシエンカが考えたことと同じ結果にたどり着きかけている。それでもこの異能を使い、男の命を絶つためのプロセスを懸命に編み出しているのだ。

視認して足りない部分は自分で補い、誤差が出ればまたそれを修正し、ダーシエンカが男からかすめ取るように暴く男の僅かな情報を積み上げながら。

望む未来のためにひたすら演算、誤差、修正、演算、誤差、修正、演算、誤差、修正と繰り返していく。

いちいち言語化などしない。ただひたすら望む未来を脊髓反射のように紡いでいく。

だが未来が高く積み上がれば積み上がるほど、来栖の呼吸は荒くなっていく。瞳も、徐々に光を失っていく。

それでもなお、脳の回転は上がっていく。

脳の回転が限界に達しようとしたそのとき、来栖は遠くにまるで光がはじけるような、甲高い音を幻“視”した。

真っ白な闇が自分を包み込む。そこは一切の影のない、光のみで構成された世界のようなだった。

そんな世界に来栖は一人佇んでいる。

総ての事象が、手に取るように理解できる。物事の本質が思考するより速く自分の内側に雪崩れ込んでくる。思考する必要などない。なぜなら答えは始めからソコに用意されているのだから。

幾万通りも。

来栖がするべきことはそこから自分が望む終局を選びとる、ただそれだけだ。なんてことはない。自分が今まで必死に編み出そうとしていた結果はこんなにも容易に掴みとることが出来たのではないか。

今まで自分は何を必死に探していたのだろう。

来栖はどこか自嘲的な笑みを浮かべながら、自分が望む終局に手を伸ばした。

光の世界の中でより鮮烈な光を放つ、その未来に。

\*\*\*

イズミはいつこうに鳴る気配のない携帯電話を握りしめながら、自分が取るべき行動を思索していた。

定時の連絡がないということは、何らかの状況変化があったということに他ならない。最悪の状況を想定するならば、二人が既に敗北しているということもあり得る。

だが、とイズミは携帯をより一層強く握りしめる。

今はまだ最悪を想定するときではない。想定すべきは二人が交戦状態にあるということだ。最悪の状況を想定するのは敵が眼の前に現れてからでも遅くはない。

なにせその状況を想定したところで出来ることなど何一つないのだから。

いま、自分にできること。

ただそれだけを思索する。腹の傷は痛みこそあるものの、動けないほどではない。エーテルの散布に関してもなんの不調もない。もっとも、敵に勘付かれることを想定してごく至近にしか散布していなかったが。

動ける。

イズミは判断し、ベッドから降りる。ハンガーにかけてあったシ

ヤツを羽織り、パジャマ替わりのハーフパンツからジーンズに履き替える。

「行くのかい？」

イズミが病室から抜け出ようとした矢先に扉が開き、久弥が姿を現した。こちらもいつ間にやらスウェット姿からイズミと同じような姿に切り替わっている。

「はい。僕にも出来ることがあると思うので。それに、相手が異端審問機関ならネクロマンサーという餌に少しは食いつくでしょうし」

イズミは微苦笑し、久弥の脇を通り抜ける。

「僕に頼らないのかい？ サポートするって言ったじゃないか」

「頼りたいのはヤマヤマなんですが、いいですよ。これは僕の問題ですし、何より、久弥さんが本当に来栖先輩を助けたのなら自ずから協力してくれるはずですしね」

イズミは足を止めて、柔らかな表情を久弥に向けた。

その表情に久弥はポカンと口を開けたのち、クスクスと笑った。

「……やっぱ、久弥さんは何かを“隠して” いるんですね」

得体の知れない笑いを漏らした久弥に驚くでもなく、イズミは困ったような笑みを浮かべた。

「あ、いや、すまない。まあ、その通りだよ。その秘密が君たちに、いや、僕たちに不利なモノではないことを僕は祈っているよ」

「その言葉の意味は計りかねますが……僕もそう祈っています」

イズミは怪訝な表情を浮かべたのちに苦笑し「じゃ、いつてきます」といつて再び歩き始めた。

「あ、千澄たちの居場所だけでも視ようか？」

久弥はどことなく後ろ暗い表情を浮かべ、イズミの背に言葉を掛けた。

だが返ってきたのは「大丈夫ですよ。今のケータイにはGPS機能がついてるんですから」という、どこかからかうようなイズミの声音だった。

そんな言葉を最後に視界から消えたイズミを見送り、久弥は困っ

たように頭を掻いた。

「たった五年寝てただけで世界ってこうも変わるんですね」

久弥はまんざら独り言でもないように暗闇に呟いた。

「変わるさ。五年だろうが一日だろうが」

そんな言葉とともに暗闇からヌツと姿を現したのは黒のシックなワンピースに身を包んだクレアだった。

「あなたが言うともた重みが違いますよね」

久弥は暗闇から現れた美しき乙女に苦笑を向ける。

そんな久弥にクレアもどこか嗜虐的な微笑を返す。

「だろ？ 何せ私はGPSとやらが何かもよく分らんのだからな。

国内総生産のことか？」

「……それはGDPですよ、総帥」

再び暗闇から別の声上がり、今度は雪が姿を現した。

そのことにも久弥は驚くような素振りを全く見せない。

「こちらは……声を聞くのは初めてですね。イズミくんのお母さん、  
でいいんですね？」

久弥は首をかしげながら雪を見つめた。

「ええ、そうよ。まったく、あなた達の瞳には世界がどう映っているのか気になってしょうがないわね」

「あんまり変わりませんよ？ ただ見てる分には」

「そうなの？ まあ、いいわ。それにしてもイズミはよくあなたの協力を断れたわね。我が息子ながら信じられない勘の良さだわ」

雪は嘆息を一つ吐き、イズミが消えていった先に視線を向ける。

「それはまあ、確かに。でもずっと僕を疑ってる気配はありましたからね。土壇場で断られたことには驚きましたが、断られたこと自体に関しては特になんとも」

久弥はやれやれと肩をすくめ、続ける。

「でも凄いことですよ？ 来栖家の便利な能力を前に自分の思考を失わないのは」

「まあでもそれはお前たちが本当のことを伝えてくれるなら、とい

う大前提あつてのハナシだからな。イズミはお前を信用ならんと判断しただけだろ」

クレアがクツクツと喉を鳴らしながら久弥を見据える。

久弥はその視線に困ったような表情を浮かべ、頬を掻いた。

「まあ、確かに妹の危機に平然と隠れ潜むことを選択するような人間は信用ならないですね、イズミくんみたいな人間からしたら」

「まあ……あの子ならダーシェンカの危機には瀕死だろうがなんだろうが助けに行きそうなものね、冗談抜きで」

雪はまんざらでもない表情で言い、続けた。

「でも、仕方ないのでしょ？ おそらく久弥くんもこちら側の人間。より魔術の深淵を覗き、千澄ちゃんを見守る立場。だから今回は手を出せない。いいえ、出さないほうがいいと判断したのでしょ？」

雪が言い終わると同時に、雪とクレアの視線が久弥に注がれる。

久弥はその視線に逡巡し、やがて口を開いた。

「そうですね。来栖家の異能には、いいえ、千澄の異能には大きな秘密がありますから」

そう言った久弥の顔には、その言葉の内容とは裏腹に、どこか寂しげな微笑が浮かんでいた。

\*\*\*

軽い眩暈とともに、来栖は前のめりに倒れかけた。その刹那に微かに意識を繋ぎ止め、なんとか体を支える。

（意識が、飛んでいた……？）

だいぶ長い間気を失っていたような感覚があるが、目の前の状況から察するに意識が飛んでいたのは一秒に満たないわずかな間らしい。だというのに何故だろう。本当に長い間、別のナニかを見ていた気がする。

いや、おかしいのはそれだけではない。あれだけ限界を感じていた体が、嘘のように軽い。軽いだけではない。頭の中も恐ろしくク

リアになっている。

先ほどまでは答えを導くために数式を書きなぐっていたのに、いまはまるで――

答えが眼の前にぽつねんと記されているような……。

そこまで思い至り、来栖ははじかれたようにコンテナの上で激しい攻防を繰り広げるダーシエンカと男に視線を向ける。

分かる。そこに現れている事象の全てが手に取るように理解できる。ダーシエンカがどのように攻めんとし、男がどのようにそれを捌こうとしているのかが。

思考する必要などない。答えは始めからそこに記されているのだから。

天才はA点からC点までたどり着くのに、凡人が通過しなければいけないB点を飛ばすことが出来るという例えがあるが、来栖はまさにその状態にあった。

否。AからZにすらたどり着きかねない状態だった。

ただ一つ違うのは、用意された答えが一つではないということ。

来栖のサジ加減一つで、未来という答えは容易に変容しえた。

「ダーシエンカっ！ 理詰めはいらない。力任せな一撃を！ テレフォンパンチでも構わない」

来栖は叫びながら、自分の口から出た耳慣れない言葉に少しだけ驚く。

テレフォンパンチ、たしかボクシング用語で馬鹿みたいに大振りで相手にかわされやすいパンチのことだ。

それだけなら、どこかで聞きかじったのが咄嗟に出てきたのだらうと納得できた。

だというのに、来栖の口はまだ止まらない。頭との接続回路が焼き切れた口が、一方的にまくし立て始めたかのような感覚。自分に馴染みのない言葉がうちから湧きあがってくる。

「その男が展開してるのはごく僅かな空間歪曲魔術。それも男が纏っているんじゃない、そのコンテナの上に展開されているわ。男の

周りだけ歪んで見えるのはむしろダミーよ。だからまずはコンテナから払い落して」

来栖は静かに、それでいてよく通る声で言った。

ダーシェンカが僅かな驚きの表情のちに大振りな蹴りを放つ。男はさして慌てるでもなく、むしろ感嘆の口笛など鳴らしながら、タンツと軽快な足取りで蹴りをかわしコンテナから飛び降りた。

それに合わせてダーシェンカもコンテナの上から飛び降り、来栖を庇う位置取りに着地する。その動作に淀みはまったくない。

「いやあ、あれを見破れるってことはやっぱり来栖久弥の妹だよね？ まあ、並大抵じゃない魔術師、って線もなくはないけどキミの佇まいはそういう雰囲気じゃないし」

男はニヤついた笑みを浮かべながら語る。

今まで男が持っていた存在感の希薄さはすっかり消え失せていた。今はあるありと、男の粘ついた、空気感とでもいうようなものが見て取れた。

あの存在感の希薄さは、男の迷彩魔術の副産物のようなものだったのだろう。

「だったら……なんだというのですか？」

来栖は答えの分かりきった問いをぶつける。

相手の答えはおそらくこうだ。

『キミのその異能を貰いに来たよ』

来栖が思考するのと同時に男はまったく同じ内容を口にした。

ダーシェンカはいくらか驚いた表情を浮かべていたが、来栖からしたらなんということはない言葉だった。

記憶の中にある兄に掛けられた封印術式ならば、とうに解析が済んでいる。いや、とうにというのはおかしいかもしれない。ついさつき、あの眩暈から立ち直った瞬間にはいつの間にか解析が済んでいた、というのがより正しい表現か。

あの術式は封印に見えてその実、男お得意の次元歪曲魔術の一種、次元置換だったのだ。



自分に都合良く次元を置き換え、相手の能力を自分のモノとするにとすら可能とする魔術。

もっとも来栖が試算した過程によれば、それをなしえるのは魔術というよりは異能に近かった。限りなく。

つまりそれが、この男の能力の根源。

「なるほど。兄さんがダメなら私というわけですか？ 確かにその判断は正しいのでしょね。兄さんより私のほうが攻略も数段容易でしょうし」

来栖は言葉と視線に少なくない憎しみを込め、呻くように呟く。今日の前にいる男が全ての元凶。自分から兄を奪い、ささやかな平穩を踏みにじった忌むべき相手。

ならばその思いの丈を全てぶつけさせてもらう。この能力を使つて。

「あなたの能力は文句なしに高い。でも私にはこのチカラがありません」

「それからそのモンスターガールというファクターも大きいね」

男はダーシェンカを指差し、相も変わらずニヘラニヘラした笑みを浮かべている。それでいて身の回りに何の魔術も施していないのだから実力の底が計り知れない。

底は見えない。それでもある程度の値は算出できる。ならばあとはそれを確実なものとすればいい。

「一つだけ……聞きたいことがあります」

来栖は自分のうちから湧きだす憎しみを押さえながら、極めて冷淡な声で言った。

その言葉に男は首を微かに傾げる。

「兄さんを封じたのは……この異能が禁忌だったからですか？」

来栖は拳を白くなるほど握りしめながら問うた。

それは、本来ならイの一番に確認しなければならなかったことだったが、出来なかった。きっと心のどこかにこの異能は禁忌であるという負い目があったのかもしれない。禁忌に指定されるということ

は、その存在のほぼ全てを否定されるということだ。

それはどのようなことなのか、来栖には想像できなかった。イズミの例を聞く限り、生易しいものではないと思うし、そんな境遇で生きていくことの心境も計りようがなかった。

来栖の異能では視ることできない、心の奥底。

それでも、もし禁忌と指定されていたとしても、負けてやるつもりはなかった。

ただ、ただ男の口から聞いておきたかった。五年前のことの真相を。

「いいや、違うよ？　だってあのときは久弥はオレの協力者だったもの。他の禁忌を刈り取るための」

「なっ……！」

来栖はあっけらかんと紡がれたその言葉に目を見開く。

が、男はそんなこと意に介すようもなく。

「オレは自分の能力として役に立つモノを手に入れるために異端審問機関なんて七面倒な組織に入ってるんだけど、禁忌って案外代償デカイから手頃なのがなかなかなくて。でもまあたまに？　手頃なモノが転がってたりしてさ。そのうちの一つがキミのお兄さんだった、ってワケ」

「そんな、そんなことのために兄さんを封印したんですか？　そんな、自分本位な理由で。誰にも迷惑を掛けてない兄さんを……！」

「まあ、そういうことになるかなあ。けどさ、魔術師にとっては自分の能力の研鑽が全てだから、十分まっとうな理由よ？　ま、オレみたいな手法は禁忌の領域だけだね」

言い、男はケラケラと笑う。

ダーシエンカが呟いた「下衆め」という言葉が闇夜に吸い込まれていった。

対照的に来栖は言葉を、表情を失っていた。

日常を生きてきた来栖には、男の言葉はあまりにも理解しがたかった。いや、受容しがたかった。

異能のおかげで男の言っている内容は理解できるし、禁忌に手染める魔術師の思考回路も、また魔術師というものがいかにより高位の存在に近づくことを大切にしているのか、ということも理解できた。

それでも来栖の心がその理解を拒絶する。決して、決して理解してはいけないことなのだと警鐘を響かせる。

「わた、しは……」

来栖の口はそうのように動いていたが、声にはなっていなかった。唇だけが、何かを伝えようとむなしく動く。

が、次の瞬間にはその唇は真一文字に結ばれていた。目にも、凜とした光が戻っていた。

それは、何かを決意した者の瞳に他ならなかった。

憎しみに似て非なる感情。そのような何かが来栖の瞳には宿っていた。

「いける？　ダーシエンカ」

「無論だ」

視線鋭く問われたダーシエンカは、不敵な笑みを返す。

その笑みに来栖は似た笑みを返し、再び男に視線を向けた。

「私はあなたを、絶対に許さない……！」

来栖は呟き、次いでダーシエンカに囁くように指示を出した。

臨機応変に、などという生易しいものではない。A（始まり）からZ（終局）までを記した、男にとっては悪夢のようなシナリオを。

来栖の指示を受けたダーシエンカはすぐさま地面を蹴り、男との距離を詰める。見かけは先ほどまでのものと変わりのない攻撃。事実何一つ変わっていないのだ。

変わったことと言えば、その狙いが男を傷つけるためのものではなく、男を移動させるものになったということぐらいだ。

鋭く、素早い攻撃を続けながら、ダーシエンカは男の立ち位置を巧妙にずらしていく。先ほどまで男がコンテナの上から降りようとしなかったのは、降りる必要がなかったのではなく、あの中にこそ

いなければならなかったからだ。

今もコンテナの上にはその術式が残されており、イザというときはそこを隠れ蓑にされてしまう。

空間を歪める男の術式は、空間を歪めて情報の把握を阻害するだけではなく、その気になれば距離の操作もできるようになってしまう。短距離のみなら、瞬間移動のようなものすら可能としてしまう。ダーシエンカを手玉に取ることも容易だっただろう。

男がそれをしなかったのは単なる好奇心のため。

ダーシエンカがどのような存在なのか。来栖がどの程度のチカラを保有しているのか。

ただそれを知るためだけに自分の勝利を先送りした。

ならば今すべきことは立ち位置を固定させず、術式を展開させないことだ。もちろん、その先のシナリオもダーシエンカには伝えている。

——後悔させてやる。

来栖は眼前で繰り広げられるダーシエンカと男の攻防を眺めながら胸中に呟く。憎しみとは少し違う、むしろより冷え冷えとした、まるで義務をこなすかのような淡々とした心持ちで。

\*\*\*

冷房が程良く効いた非合法ホスピタルにあつらえられた応接間。

来客用に作られただけあって豪華に仕立てられたソファに腰かけ、久弥は雪とクレアと向かい合って座っていた。

両者の間に置かれたガラス天板のテーブルには、湯気の立ち上るコーヒーカップが置かれている。

久弥は雪とクレアに千澄の能力についておおまかに語り、湯気の立ち上るコーヒーを口に含んだ。貧乏舌の久弥にはよく分らないが、それなりの品を感じさせる味だった。

こういう品定めも異能を使えば一発なのに、などと久弥は場違い

なことを頭に思い浮かべる。

「未来視……？ それは本当なの？」

雪は怪訝な表情を浮かべて久弥が先ほど告げた言葉を反復した。未来視、来栖一族の異能はそのような印象を与えるが、厳密には違う。様々なファクターを積み上げ、未来を予測するのだ。そんなことは誰にでも出来る。精度の差はあれど、だが。

たとえば、テストの点数などを事前に予測する場合、必要なファクターは勉強時間の長さや密度、出題者の癖、その他諸々だ。普通の人でも、これらのファクターを含めてそれなりの精度をもった予測を立てることが出来るだろう。その程度の事柄なら。

来栖家の異能も結局はその延長線上だ。拾えるファクターの数の桁が違うだけで。

——だが、来栖千澄の能力はそれだけではなかった。

「ええ、本当です」

久弥は雪の驚きを察しながら、カップを静かに置いた。

「私でさえには信じがたいな……」

そう呟くクレアの表情は平素とまるで差がなかったが、声音から察するに、本当に驚いているようであった。

そんな二人を眺め、久弥は息を一つ吐く。

そう。魔術の奥の奥に達しているこの二人でさえ、信じられないのも無理はない。

未来視。その本来の意味するところは——。

「千澄は、変ええぬ未来を見ることが出来るんですよ」

久弥は先ほども二人に告げた言葉を繰り返し、さびしげに微笑んだ。

変ええぬ未来、それがどれほど悲しい意味合いを含んでいるか、久弥は知っていたから。

「変ええぬ未来、そんなモノが本当に存在するんですか？」

「知らんよ。私が知る変ええぬ未来はせいぜい、極めて変え“がた”い”未来だ」

雪に問われたクレアは、苦笑いながらソファの背もたれに体をうずめる。高級故の弾力を持ったソファに、華奢なクレアの体は半分ほど沈んだ。

変ええぬ未来と極めて変えがたい未来の差。それはいかほどのものなのか。

極めて変えがたい未来が確率で計れるモノとするならば、変ええぬ未来はそんな脆弱な物差しでは測ることが出来ないモノだろう。運命だとか、宿命だとか、そういった類の言葉で表現されるものがまさにソレ。

朝元氣に家を出ていった者が、外で通り魔に殺される。

それは大抵、その場所に行きさえしなければ助かったのだということが考えられる。だがもし、どうあっても死ぬ“運命”だったら？ 外に出ようが、家にいようが死ぬのだとしたら？

千澄の視る未来とは、そう言った“結果”だった。積み重ねられた過程など関係なしに訪れる、理不尽極まりない未来をすら視ることが出来るのだ。

「……千澄は小さい頃によく奇妙なことを言っただけですよ。街で見かけた人にいきなり、あなた今日死んじゃうよ、だとか、幼稚園の同級生にあなたとあなたは結婚するわね、とか」

久弥はどこか遠い目をして言った。

前者なら、久弥にも予測できるかも知れない。だが後者は、おそらく不可能だろう。生まれたての赤子が将来何になるか予測するのと同じくらい、不確定な要素が多すぎる。

久弥が予測できるのはほんの少し先の未来までだ。

「それは、また……」

久弥の言葉を聞いた雪が表情を暗くする。

子供を持つ者として想像したのだろう。そういう子供がどのような扱いを受けてしまうか、ということ。

「まあ、多少は気味悪がられましたけど、子供の戯言だと思われてましたよ、大抵は」

久弥は苦笑し、続ける。

「でもうちの両親はそう思わなかった。今はまだ偶発的にしか未来を視なくとも、いずれはより多くの視たくもない未来を視てしまうのではないか、と考えたんです」

「それで千澄の能力を封じたのか？」

「いえ、そんなたいしたことはしてませんよ。ただ霊視をするな、と言ってきかせただけですから」

クレアの言葉に久弥は小さく頭を振って答えた。

「来栖家の異能は共感覚を利用したものですからね」

久弥はするように切り出し、己が身の異能について語り始める。本来なら誰に語ることもない話。語る必要もない話。それでも久弥が口を開いたのは、妹がこれから歩む可能性のある未来を思っていること。

自分が下手を打ったせいで、妹が再び魔術に触れることになってしまった。せっかく、幼い頃の忌まわしい記憶を忘れていたというのに。もしかしたらそれすらも、遠くない未来に掘り起こされてしまふのかもしれない。

ならばせめて、せめて僅かながらでもその歩む道が平坦なものとなるように、愚兄としては尽力せねばなるまい。

そんな思いが、久弥の中にはあった。

久弥はそんな思いを胸に語る。

共感覚。それは、赤い色を見て暖かいと思ったり、風鈴の音を聞いて涼を感じる、といった類のもの。

しかしごく稀に、より優れた共感覚を保有した者が存在する。音に色を感じたり、表情に色を感じたり。物がすべて数字に見えるというものも似た部類かもしれない。

来栖家の異能は、その全てをエーテルで捉える共感覚。視覚、聴覚、味覚、嗅覚、触覚、聴覚、それら五感の全てと霊視という第六感を共有することで、極めて精度の高い未来予測を可能としているのだ。

「そんな、五感全てと霊視をリンクさせているなんて……信じられないわ」

久弥の説明を聞いた雪が眼を見開いて呟いた。冷静な雪にしては、わりかし珍しい反応といえよう。

そんな雪に久弥は肩をすくめながら苦笑する。

「まあ、我ながらそう思います。でも来栖家の人間は呼吸するようにそれができるんですよ。それに、僕からしたらネクロマンサーのほうがよく信じてほしいですよ」

「それを言われると……それもそうね」

雪は苦笑し、すっかりぬるくなってしまったコーヒーを口に含んだ。

「まあありがたいことに千澄は、それらの記憶をきれいさっぱり忘れてるんですがね……」

「それは、どういう？」

「千澄が最後に視た変ええぬ未来はですね……両親の死なんですよ」

久弥は言いながら、どこか疲れを感じさせる笑みを浮かべた。どうしようもない事柄にぶち当たったときに多くの人間が漏らす、諦観を含んだ笑みだった。

久弥の口から語られた言葉に、雪は息を呑み、おもむろにコーヒーを飲もうとしたクレアもその手を止める。

「それを視た瞬間に千澄は軽いショック症状を起こしましてね、気を失ってしまったんです。そして目覚めたときには両親はこの世の人ではなくなっていた」

「そんな……」

雪は口許に手をあて、言葉を詰まらせる。

幼い子供が、自分の愛する両親の死を視てしまう。それはどれほど心に傷を与えるだろうか。おそらく当時の千澄は、本能的にその視た出来事がどうしようもない未来だと察してしまったのだろう。

どのような出来事で死んでしまう未来を視たのかは想像するほかないが、たとえその未来を防いでも、他の未来で両親は死んでしま



う。

そんな残酷な結果に、幼い千澄が取った気絶という行為は、最大最善の防衛行動だったのだろう。

「でもまあ、そのおかげか、それ以来千澄は霊視を一切しなくなりましたし、変ええぬ未来を視ていたという記憶も失くしていました。脳の防衛機能が生きていく上で都合の悪いことを封じてくれたんでしょう。僕はそれが両親から千澄への最後のプレゼントだと考えているんですがね……」

そう言うと久弥は寂しげな微笑を浮かべ、首を小さく傾けた。

「……ふむ。まあ、おおよその事情は分った。それで？ お前は現状をどのように考え、またどうしたいのだ？」

クレアは同情の言葉も素振りも見せず、淡々と問う。クレアは痛いほど知っているのだ。過去に対する憐憫などはなんの益にもなりはしないと。それは所詮、自分を守るための行動に過ぎないのだと。「そうですね……おそらく千澄は今回の戦いで多くのモノを視ると思います。それはつまり、未来視とは別に、この異能自体も大きく成長してしまうでしょう」

「異能が成長する？」

「ええ。来栖家の異能は視た情報を脳で処理することで未来を予測します。しかしそれには様々な知識が必要になる。普通の知識と違い、僕たちは状況を視るだけで様々な知識を得られるんです。つまり、視れば視るほど知識は貯蓄され——」

「予測能力も高くなっていく、というワケか」

久弥の言葉をクレアが引き継いだ。

クレアの言葉に久弥は頷き、続ける。

「おそらく千澄の能力は今回の出来事でハネ上がります。何せ相手は超一流の魔術師ですからね。それがまた異能とは別に、未来視の力にどのような影響を及ぼすのか……それも不安なんです」

久弥は言い、顔を俯けた。

分っている。今はまだ、本当なら千澄を守ってやることが出来る。

千澄の代わりに矢面に立ち、戦ってやりさえすればいいのだ。

だが、久弥はあえてそれをしなかった。

今回のことは千澄にも責任があるし、千澄はそれを果たそうと頑張っている。それを兄が横からしゃしゃり出るのは過保護というものだし、何より、これから千澄を自分が守ってやれる保証はどこにもない。

普通に生きてきたとはいえ、千澄も結局は来栖家の、いやそれ以上の異能を抱えた存在なのだ。遅かれ早かれその歪みはどこかで生じてしまっただろう。それが今出てしまった、それだけの話。

いやむしろ、最良の形で生じたとも言えるかもしれない。何しろ千澄は一人ではないのだ。イズミやダーシェンカという在り方の似た存在がそばにおり、なおかつ斜に構えてはいるが基本的には心優しいクレアという存在もいる——もつとも、クレアには優しさと同じだけの厳しさも同居しているが。

ともかく、今において他にはないと思えないのだ。千澄が異能と向き合い、これからをどう生きていくのか判断するチャンスは。本当の意味でそれを決められる年齢に、千澄は達しているのだから。

「でも、総帥が千澄ちゃん的能力にリミッターを掛けたって……言ってますでしたか？」

久弥の不安を察してか、雪はクレアの顔を覗きこみ問うた。

その視線にクレアはムズ痒そうに顔を歪め、若干唇を尖らせる。

「それは、まあ、確かに掛けたが……」

「掛けたが？」

「それほど強力なモノではない。能力に過負荷が掛れば簡単に外れる代物だ」

「なっ！ それじゃありミッターの意味ないじゃないですかっ」

「いや、だってな、あまり強力すぎると来栖の能力が役に立たないし、私は能力を阻害することよりもむしろ、どの程度苦痛に耐える根性があるかを試そうと……」

「要するに、面白半分に掛けたリミッターだったってことですね？」  
雪の顔が、恐ろしいほどの笑みに変わる。

「あ、いや、だって、未来視とかそんなもの知らなかったし。それにほら！ リミッターが強力すぎると勝率が、」

「ご自分の悪癖の言い訳はいいですっ！」

「クスッ」

雪の叫び声と、久弥の笑いが漏れるのは同時だった。

その笑い声に、雪はポカンと口を開けて久弥を見つめる。

「あ、失礼しました。あまりにもおかしいものだからつい」

久弥は口許を押さえながら軽く頭を下げる。

「おかしいって……どこが？」

「いや、だって一流も一流の魔術師同士がじゃれあうように争っているんですから、おかしくてつい……」

「おかしいって、自分の妹のことなよ？」

雪は少しだけ語気を強める。

それでも久弥の態度は変わらない。いやむしろ、より笑いを堪えるような表情になっている。

「いや、分ってはいるんですがね。それでも、千澄はなんて恵まれてると思わずにはいられないんですよ。そうですよね、クレアさん？」

久弥は微笑みながら唐突にクレアに話を振る。

クレアは千澄を利用したように見えてその実、その身が内包した歪みを的確に見抜き、最善の——と言えるかは若干怪しいが——方法でそれを正そうとしていたのだ。

話を振られたクレアは気まずそうに頬を掻き、口許を歪に歪める。

「お前、素知らぬ顔して色々と情報を拾っていたな？ その目で」

「はて、なんのことでしょうか？」

睨みつけるクレアに久弥は平然とうそぶく。クレアがどのような存在であるかその目を通して理解しているというのに、イズミをからかうのと同じような態度で。

クレアはそんな久弥の態度に深々と溜息を洩らし、ソファに体を埋める。

「お前が視たことをみなまで言うなよ？　言ったらその時点で、私の全権限を用いてその異能を禁忌に指定してやる」

クレアはそっぽを向きながら唇を尖らせる。その首筋は、見る者が見れば微かに分かる程度に朱を帯びていた。

「はい、仰せのままに」

久弥は微笑し恭しく頭を下げる。

「まったく……この手の能力者はキライだ」

クレアは吐き捨てるように呟く。

「フッフ、総帥が手玉に取られるのを見るのは何年ぶりですかね？」

「たぶん百年ぶりぐらいじゃないのか？　私を手玉にとったのなんて雪くら、」

「ん？　何か言いましたか？　総帥」

雪はクレアの言葉を遮り、微笑む。

「……なんでもない」

クレアはおのずと降伏するように両手をあげていた。

雪は「ならいいんです」と微笑み、視線を久弥に移す。

「それで……久弥くんは知っているのでしょ？　千澄ちゃん達を狙う魔術師を」

雪は少しだけ身を乗り出し、久弥と向かい合った。

久弥は雪の言葉に深々と頷く。

「その魔術師が僕を封じた者だというなら、当然知っていますよ」

久弥は一息置いた。封印されたときを思い出しているのか、苦々しげな表情を浮かべている。

「……彼は、彼は唯一、僕の瞳を欺いた男ですからね」

久弥は苦悶の表情で呟き、その苦悶をかき消すように冷めきったコーヒーを一気に口に流し込んだ。

## 第4章 再生した物語は、メビウスの輪のように（2）

遠く聞こえていた街の喧騒もすっかり静まり返り、廃工場を支配していたのはひたすらの静寂。そんな静寂の中に遭って、二つの足音が小気味よく木霊していた。

あまりにも耳に心地よく、それなりの踊り手がタップでも踏んでいるのではないかと勘違いしてしまいそうになる。

だが――。

実際にそこで繰り広げられているのは死の舞踏。二人の踊り手のうちどちらかがリズムを取り間違えば、死神の手が足に絡みつく。だというのに何故だろう。そうと知ってもなお、その踊りは美しかった。いや、だからこそ、なのだろうか。

ともかく、呼吸も忘れさせるような芸術がそこには確かに存在していた。

「……うーん、やっぱり分らないなあ。キミは一体何者なんだい？ モンスターガール」

頬を寄せ踊る淑女に囁くかのような口調で、踊り手の一人である男が言った。

そんな男の言葉とは裏腹に、返されるのは殺気の籠ったナイフの一閃。無理もない。男が共に躍っているのは、見た目は淑女に相違ないが、中身は男の言葉通り、ある種モンスターなのだから。

「フウ、連れないねえ」

男は淡々と無言で攻撃を繰り出す少女――ダーシエンカに眉をひそめる。

ダーシエンカはそんなことはお構いなしに、再びナイフを振るい、間髪開けずに回し蹴りを叩き込んだ。

それもこれも全てかわされる。だがダーシエンカは先ほどまでは異なり、なんの不安も抱かない。

何せ全て“予定通り”なのだから。

ダーシエンカは頭の中に、来栖から指定された行動を絶えず思い返しながらい動していた。

まず、実力の半分までしか発揮しないこと。それは、ダーシエンカの本質を相手に悟らせないため。そして第二に、相手を絶えず移動させ、術式を展開させない、ひいては相手の体力を奪う。

いまダーシエンカが実行しているのはまさにこの段階。だが相手も無能ではない。当然体力に陰りが見えるよりはるかに早く手変わりしてくる。

ダーシエンカはひたすらそのときを待っていた。感覚からすればそう遠くないとも感じている。

案の定、ソレは訪れた。

最小限の動きでダーシエンカの攻撃を捌いていた男が大きく跳び退り、彼我の距離を取る。その行為はあらかじめ、来栖からダーシエンカに告げられていたモノだった。

だからダーシエンカはすぐには追わず、相手の出方を窺う。来栖が言うには、男はここから攻撃に転じるということだった。

「まったく、このままじゃ埒が明かないね。いや、このままいったらオレの負けて感じなのかな？」

男はクツクツと笑い、人差し指を突き立てた。

瞬間、周囲で燦っていた男のエネルギーが赤みを増す。その様は火種が爆ぜる瞬間を連想させた。

(……ッ！)

ダーシエンカは思わず息を呑む。

男のエネルギーがざわついたと思ったその刹那。周囲の状況は一変していた。そう、まさしく一変。優れた霊視を持たぬダーシエンカをしても、次元の歪みがハッキリと見て取れる。

「

」

男の口がもぞもぞと動き、何かを唱えていた。声は聞こえない。口の動きから察するに日本語ではないだろう。

おそらく術式のイメージを補強するための喚起言語。

それが囁かれている故にダーシエンカに届かないのか、それとも唇の動きだけでイメージを補強しているのか、はたまた第三のナニかかは判断がつかなかったが、ダーシエンカは特にそれを問題にしなかった。

——あとはあなたの判断で間違いないわ。

脳裏に、来栖の言葉が響く。来栖は、算出された未来をダーシエンカに語り、最後にそう告げた。戦闘の展開については説明されたが、自分の行動に関しては何一つ口出しされていない。

来栖曰く、ダーシエンカの判断に狂いは生じない、とのことだった。

(……なんとも頼りない、いや、頼られているからこそ、か)

ダーシエンカは来栖の言葉を思い返し、口許を淡くほころばせる。が、すぐに表情を引き締め、男の一挙手一等足に注意を払った。

大丈夫、次の一手は“知って”いる。

「フフフ……」

ダーシエンカの耳元で、男の悪趣味な笑い声が響いた。男は前方にいるというのに、だ。

だがダーシエンカは動じない。黙して、眼前の男を見つめている。なんてことはない。これは既知の一手だったのだから。

相手が空間を自在に操れるなら、自分の望むところから音を伝えることも容易。空間の至る所にスピーカーを作り出すようなものだ。どうしようもなく矮小な術だが、初手としては効果的、といったところだろうか。

「……アレ？ コレ効かないの？ 大抵の魔術師は眉の一つくらいは動かしてくれるんだけどね」

男はさして衝撃を受ける様子もなく肩をすくめた。そして続ける。「まあ、いいや。あんな猫騙しみたいな手で潰れられたら堪らないからね」

男はニヤリと笑う。

男のいやらしい笑みをダーシエンカが捉えた瞬間、男はダーシエ

ンカの視界から消えていた。

ダーシエンカはすぐさま振り返り、自分の背後に現れた男の姿を捉える。

男は少し驚いたような表情を浮かべながら、小型の拳銃の引き金に指を掛けていた。

ダーシエンカはさして表情を変じさせることもなく、体をずらし、弾道から身をズラす。

サプレッサー付きでもないのに“音もなく”撃ち出された弾丸は、ダーシエンカの体を撃ち抜くことはなく、しかし廃倉庫の壁を穿った。

次いでダーシエンカは小うるさいハエでも払うような動作で、男の拳銃を叩き落した。

地面に転がった拳銃は、ものの見事にひしゃげている。

それらの事象が繰り返り広げられたのは、ものの一秒強のこと。

本来銃弾などというものはリビングデッドにとってさしたる脅威でもないのだが、正体を見破られることはよろしくない。だからダーシエンカは銃弾をかわした。

あらかじめ来栖が算出していた男の攻撃パターンに合わせて。

「驚いたね、かわすのかい。今の攻撃を」

男はもとの立ち位置に帰り、呆然とした表情を浮かべていた。

男が驚くのもムリはない。今の攻撃は、普通ならば絶対に読むことが出来ないだろう。何せ空間置換による瞬間移動に、同じく音の響く次元をズラしての完全なサイレントキルだ。

加えて、多くの矜持ある魔術師ならば絶対に用いない、拳銃という攻撃手段。

これらの組み合わせられた攻撃をかわせる魔術師など、まずマトモとは呼べない。ダーシエンカも弾丸では傷を負わないとはいえ、間違はなく回避出来ていなかっただろう。

来栖の予言がなければ。

「こっちだって驚いたさ。拳銃なんて手段を用いる誇り高い魔術師



がいるなんて」

ダーシエンカは吐き捨てるように皮肉る。

元々ダーシエンカにしても魔術に誇りを感じている存在ではない。だが、おおよそ全ての魔術師が魔術というものに捧げている信仰なら痛いほど知っている。

彼らは文字通り、魂を切り売りして自分の存在をより高位へと押し上げようとするのだ。

それは自分にヤスリを掛け、身を削り、鋭く研ぎ澄ましていく彫像といっても過言ではないだろう。

だから嫌う。科学というものを。文明というものを。大衆というものを。

全体の進歩を重視するそれらの存在と、個としての進歩を重視する魔術ではそもそも、思想が反発するのだ。

一から十の文明を拒絶する魔術師などほぼゼロに等しいだろうが、逆に受け入れてる者のほうがゼロに等しいモノだって存在する。

それが、近代兵器。

自分はなんの対価も払わずに、相手の命を無遠慮に奪う厚顔無恥なそれらの存在を、魔術師は嫌悪する。魔術師同士で殺しあうことが珍しくないとしても、そこには矜持が存在する。

騎士道や武士道とも微かに通ずるかも知れない矜持。

それは、相手の命を奪うのに、エーテルという自分の魂の一部を払うということ。それをして、死者への最低限の弔いとするのだ。

たえそこに弔う意志が、一欠片として存在しなかったとしても、それを、それさえもダーシエンカの眼前でニヘラニヘラ笑っている男は否定しているのだ。

正真正銘の外道。魔術師の根源的欲求にのみ従う、魔物。

そんなヤツと戦うのに、一片の情けも必要あるまい――。

ダーシエンカがそのような考えを浮かべたそのとき、男の姿が再び視界から消えていた。

(……問題ない。男が“消え”さえすれば全て予定通り)

ダーシエンカは冷え冷えと思考しながら振り返りざま、来栖の立っている場所に向けてアーミーナイフを投げる。

放たれたアーミーナイフは弓矢のような風切り音を持って来栖に襲いかかる。否、来栖の眼前に現れた男目掛けて。

「……グッ」

ナイフを肩口に喰らった男は短く呻き声を上げる。

男は、先ほどと同じように拳銃のトリガーを引絞っていた。肩口に傷を負いながらも、淀みない動作で銃弾を放つ。銃弾の向かう先は来栖。

それも結局無駄なこと。

来栖は表情一つ変えずに、男が現れた瞬間には立ち位置をズラしていた。いや、それよりもわずかに早く、男が消えた瞬間には立ち位置を変えていた。

男が放った弾丸も、ダーシエンカが放ったナイフも当たりはしない位置へ。

予期せず弾丸をかわされ、あまつさえ傷を負った男は、それでも怯みはしなかった。手を伸ばせば届く距離に立つ来栖に、もう一度銃口を向ける。

来栖が動かないことを確認し、男は口許を歪めながらトリガーに掛けた指に力をこめた。

相も変わらず来栖に動く気配はない。

動いたのは、男のほうだった。

あばら骨のひしゃげる鈍い音が男の頭を突き抜け、体は吹き飛び、廃工場の壁に叩きつけられる。衝撃で工場の壁に立てかけられていたトタン板が倒れ、けたたましい音をあげた。

殴り飛ばされたのだ。ナイフを放った次の瞬間には男に迫っていたダーシエンカに。

来栖の横に仁王立つダーシエンカの手にはご丁寧にも、男を殴り飛ばす瞬間に引き抜いたアーミーナイフが握られていた。

もちろん、ナイフからは男の赤黒い血が滴っている。

「……ったく、全くなんなんだ、テメエらは」

男は壁から重そうに体を引き剥がし、呻く。その口元には、一筋の血が伝っていた。

「奇襲はまるで効かない、ただの打撃が魔術で威力を弱めても骨を持っていく……まったく、規格外の存在だな、お前ら」

男は手を額に押しあてながらぐぐもった笑いをこぼす。

「あなたの攻撃が単調すぎるんです。イノシシのような向こう見ずな攻撃、勢い任せすぎて状況変化に咄嗟の反応が出来ない。もっとも、普通ならあなたの攻撃は不可避な域ですがね」

来栖は平素の柔和な表情を消し去り、厳然とした口調で言う。このような口調で話すことが状況にふさわしいからそうしているのか、それとも怒りに震えてこのようになっていのかは、来栖本人以外には推し量ることはできなかった。

「ああ、普通なら避けられないはずだ、オレの知る限り。たとえその瞳の未来演算を用いても、オレの迷彩の解明・転移位置の予測を弾き出すのには時間が少し足りないはずなんだよな」

男は顎を伝う血をうるさそうに拭い、口許を挑発的に歪める。

「さすが、兄さんの能力を行使してただけあって理解がありますね。でもそんなこと考えてどうするんです？ 無意味です。確かにあなたの能力には爆発力がある。でも先読みしてしまえば対処も容易い。つまり、あなたは私たちには勝てません」

「フフフフ、確かにその通りだ。これを破られちまうとどうしようもないよな、オレは。ま、オレ“だけ”ならってハナシなんだがね」

男の声が一段低くなり、ドスの効いたものとなる。

同時に、にわかには信じられない現象が起こった。

周囲の色が変わったのだ。夜が明けた、というワケではない。鉄錆色だったはずの男のエーテルが藍色となり、周囲を奇妙な灯りで照らしていく。

エーテルの色の変容自体はそう珍しいものではない。基本的にエ

ーテルは術者特有の色を持つが、術式特性によってはわずかに色を変えたりする。

だが、それは精々明るくなったり暗くなったり、濃くなったり薄くなったりとその程度のモノ。

だというのにこの男は、まったく別色のエーテルを発現させているではないか。

「なんだ、これは……」

来栖から聞かされていない展開に、ダーシエンカは目を見開いた。予定では、あのあと男がもう一度空間転位術式を使った所を仕留めるはずだった。それで、全てが終わるはずだった。

予定とは違う、普通ならば、普通ならば容易に起こり得るそのことに、ダーシエンカはいつになく動揺を覚えていた。

なんとなく、隣に佇む来栖に目をやってしまう。

来栖は、さして表情を変えるでもなく、険しい視線を男に向けていた。

「そういう、ことですか……！」

何かを“視た”来栖が、絞り出すような声を出す。

「そ。そういうことさ」

男は軽薄な笑みで来栖とダーシエンカと交互に睥睨した。

「忘れたわけじゃないだろ？ オレは他人の能力を自分に取りこむことが出来る。それはつまり、来栖久弥のような人間が他にも居る、ってことさ。この意味、分るよな？」

男は言い、諸手を広げる。それはまさに、大衆に己が力を誇示する権力者のような立居振舞。

その動作、その言葉にダーシエンカと来栖は息を呑む。背中を、冷たい汗が伝っていく。

「いや、まだこれだけじゃ本当の意味で分ったとは言えないか……」

男は不意にあごをさすり、ニヤリと笑う。

次の瞬間、ダーシエンカと来栖は再び息を呑むことになる。

エーテルの色がまた変わっている。それも何に変わったというワ

ケではない。明滅するように、目まぐるしくその色を変えていつて  
いるのだ。

「イルミネーションみたいで綺麗だろ？ 女の子はこういうの好き  
だよな。ま、これを能天気綺麗と言えるほどお嬢ちゃんたちは馬  
鹿じゃないだろうが」

男は小さく笑い肩をすくめる。

エーテルの色は術者の個性。それがこれだけ目まぐるしく変化す  
るということは、一体いかほどの魔術師を自分のために利用してい  
るのか。いったいいかほどの能力をその身に有しているというのか。  
それを瞬時に切り替えられては来栖の処理が追いつかない。よし  
んば追いついたとしても、ダーシェンカに伝える余裕はまずないだ  
ろう。

つまり、二人が男を撃破するには、個人の力のみで男に打ち勝た  
なければならぬ。そのためには来栖には攻撃力が足りない、ダー  
シェンカには能力に対する対応力が足りない。

結果的に、一気に劣勢に立たされたことになる。

それでも、二人の目から闘志が消えることはなかった。ダーシェ  
ンカは険しい面持ちでナイフを構えなおし、来栖は――

「……使える能力はおよそ三種類。他はブラフ。能力の種類は？  
ダメ、エーテルの色からだけじゃ割り出せない。せめて一挙動あれ  
ば……」

男を見据えながら、ブツブツと口に出しながら男の能力について  
解析している。

その様を横目に、ダーシェンカは思案する。

もとより魔術戦など、決闘でもない限り出たところ勝負なのだ。な  
らば自分の全てをぶつければいい。

今ばかりは、自分が踏ん張らなければなるまい。

ダーシェンカはそうのように考え、口を開いた。

「さすがに全力を出すべきだよな、今は」

「……ええ、お願い」

「了解した」

そう呟いたダーシエンカの口は、我知らず微笑みを浮かべていた。余裕の笑みなどではもちろんあるまい。どちらかと言えば武者震いなどとニュアンスの似た笑み。

強者と戦えることを喜ぶのではなく、来栖の支えとなれることにダーシエンカは笑みを漏らしたのかも知れない。これまでは、来栖の能力に頼っていた。いや、今も頼っている。

だが、今は来栖を守る立場にある。それは、リビングデッドとしてもっとも正しい在り方。守るのがネクロマンサーではないにせよ、守るという在り方がダーシエンカには心地よかった。

（最初は攻めるほうが心地よかったはずなのにな……）

自分の在り方を変容せしめた少年を思い、ダーシエンカは決意を新たにす。

眼光鋭く男を見据える。容赦も、油断も必要ない。必要なのは冷徹なまでの、反射に等しい判断の連続。

相手がどのようなカードを切ってくるのかは分らない。だが、自分はそのような輩と相対するために存在しているのではないか。

なにも、なにも恐れることはない。

ダーシエンカはナイフを握る手に力を込め、相手が動くのを待った。

迂闊に飛び込むよりは、後手に回るがここは上策。そうすれば少なくとも、相手の手札が一つ暴ける。

「さて、そろそろ行こうか。この能力はエーテルを切り替えるだけでオレのエーテルを喰うからね。燃費悪いんだ、戦車並に」

男は浮かんでいた薄ら笑いを消し去り、能面染みた表情を浮かべた。

瞬間、周囲で明滅していたエーテルが最初の藍色のモノに切り替わる。

「説明しようがしまいがその瞳の前には関係ないんだろうが、ただ

能力を暴かれるのも癪だから教えてやるよ。これは中国の山奥で狩った密僧の能力。人智を越えた力を得る術式」

言い、周囲に散らばっていたエーテルが男の体に吸収される。

周囲からエーテルが消え、その変化は訪れた。

線の細い男のからだは、ミシミシと音を立て膨れ上がる。黒皮のコートが盛り上がり、月明かりが隆起した筋肉を映し出した。体の大きさ、というよりは質量が増したような様相だった。

その術式は本来、男に扱えるような代物ではない。深い信仰と、血のにじむような修験を経て体得しうる、魔術というよりは一種の悟りなのだ。

男はそれを密僧から奪った。信仰を単純な思考回路に置き換え、修験すらも単なる肉体的経験に置き換え、自分の体にトレースしておそらくかつての久弥と同じように、生きも死にもしない人間が世界に点在しているのだろう。この男に能力を搾取されるためだけに。

「心配ないわ。あれはあなたから受けた傷をカバーし、またあなたの身体能力に対応するための術式」

来栖は淡々と語る。だがその瞳はそれだけでなく、男が他人の術式をトレースした所から、なんらかの癖を見出そうとしていた。

過去の情報と照合、予測、誤差、補正、算出、そのプロセスを幾度となく脳内で繰り返す。だが、未だにダーシエンカに伝える価値のある結果は見いだせなかった。

分ったのは、いま目の前にいる男がダーシエンカと同等のスペックを持った肉体であるということのみ。

「そっちこそ心配するな。私も少しはお前の役に立って見せる」

ダーシエンカは男を見据えながらいい、鼻で笑った。

状況には合わない、さらにはダーシエンカらしからぬ、何かを得意げに自慢する少年のような笑みだった。

いや、これも来栖が知らないダーシエンカの一側面なのだろう。

来栖はダーシエンカの態度に淡い笑みを漏らし「なら、任せるわ」

と返した。もちろん任せっきりにするつもりはサラサラない。

ただここは、こう返すのが一番だと異能が、否、心が告げたのだ。  
「フン、任せておけ」

ダーシエンカは言い、猛然と迫って来た男の懷に飛び込んでいく。  
この上なく勇猛な様にも関わらず、来栖がそれに重ねたのは飼主のために敵に向かっていく子犬の姿だった。それはきつと、平素ダーシエンカがイズミに向けている淡い少女の表情が見せた幻想なのだろう。

その幻想は、肉と肉がぶつかり合う音で掻き消される。

男の鋭い掌底を、ダーシエンカが腕をクロスさせ防いでいた。男は構わず二撃三撃と繰り出し、ダーシエンカはそれを巧みに受け流し、衝撃を殺していく。

だが、まだ足りない。防ぐだけでは。攻めなければ。

ダーシエンカは男の掌底を受け流した勢いを利用し、男の鳩尾に回し蹴りを叩きこむ。

常人の肉体ならば、碎け散るほどの威力。だというのに男は苦悶の息一つ漏らさず、間髪開けずにダーシエンカの顔面に掌底を叩きこむ。

「クッ！」

ダーシエンカの顔が僅かにのけぞったのを男が見逃すはずもなく、容赦のない回し蹴りがダーシエンカのわき腹に突き刺さる。

弾き飛ばされたダーシエンカはたたらを踏みながらもなんとか体勢を立て直した。

「いやあ、やっぱり恐ろしいな、モンスターガール。この術式の攻撃を受けたやつは大抵一発でお陀仏なんだけどな。ホントに何者だ？  
見かけによらずあの密僧と同じで敬虔なブッティストなのかい？」

男はくるくると肩を回しながら、ゆっくりとダーシエンカに歩を進める。

すぐに来栖をどうこうしようとしていないのは有難かったが、こ



れだけ派手な挙動を取っても来栖が満足な情報を拾えないというのは、やはり芳しくない。

「お前みたいに無駄口を叩くのは私の性に、合わないっ！」

ダーシエンカは男から受けたダメージを確認し、地面を蹴った。

男の懷に瞬時に潜り込み、先ほど押し折ったあばらにもう一度打撃を叩きこむ。しかし、

感覚として伝わって来たのは、骨の上を覆う筋肉よりもさらに重厚なナニかだった。

（これでは満足にダメージを与えられない……！）

ダーシエンカは小さく舌打ちし、横に飛び退る。懷に居さえすれば強力な打撃を喰らうことはないが、代わりに抱きかかえられて殺される危険性があった。

だから基本的にはヒットアンドアウェイを繰り返す他ない。

「まったく、連れないねえ……」

男が軽薄な笑みを浮かべる。

ダーシエンカが次の瞬間目にしたのは、再び周囲に展開する赤褐色のエーテルと、盛り上がった筋肉がなくなり、萎んだ——ように感じられる——男の肉体だった。

男の防御が甘くなったこの瞬間をダーシエンカが見逃すはずもなく、勢いよく男に飛びかかる。

が、それを制したのはやはり来栖の声だった。

「いけないっ！」

来栖の悲痛染みた叫びにダーシエンカは若干前のめりになりながら足を止め、問うような視線を向けた。

「フフ、さすがに来栖のお御嬢さんは察しいい」

男はダーシエンカが飛び込んでこなかったことを気にする様子もなく、クツクツと喉を鳴らした。

「……でも、同じことだよ」

言うと同時に、赤褐色だけだったエーテルが、その色数を増していく。二色、四色、八色、かろうじて目で追えたのはそこまでで、

そこから先は玉虫色としてしか捉えられない様相をなしていた。

さきほどまでの一色ずつ切り替えていくのはとどのつまり四。本来は同時に能力を展開できることを隠すための。

ではなぜ、なぜ来栖の瞳はそれを見抜けなかったのか。今の問題は男の能力のスペックよりも、むしろそちらだった。

「これがオレの全力。見る者は滅多にいない。三流は一発目のサイレントキルでアウト、二流は二発目のブッディストパワーでアウト、そして一流でもこの、数多色持つ弾奏の前ではなす術もない。いや、一流は少しくらい抗ってたかな？ さて、お嬢ちゃんたちは……どうかなっ！」

男は咆哮にも似た叫びを上げた。

それは、来栖の瞳が問題の答えを算出したのと同じだった。

だがそんな答えは――

男が放った力の奔流の前では、為す術もなかった。

\*\*\*

嫌な予感がする。

イズミはケータイのディスプレイに表示されたダーシエンカの現在地を示した記号を見つめながら、足早に歩を進めていた。

足が地面につくたびに鈍痛がイズミを苛んだが、耐えられないほどではなく、脂汗を浮かべながらひたすらに目的地を目指す。

すっかり人も消え失せた街はどこか不気味で、それもイズミの不安を煽るには十分な情景だった。もともと、今のイズミにそんな感慨に浸る余裕はなく、ひたすらエーテルを展開させ、周囲に気を配り続けている。

さすがに目的地までまだ距離があるせいか、魔術的な気配は皆無だったが、代わりに非行少年を補導せんとする警察官には二度ほど出くわしそうになり、物陰に隠れてやり過ぎす羽目にはなった。

（急がなきゃ……！）

イズミの中にあるのは根拠のない不安。もとより、想定された事態からズレているわけではない。戦闘が始まれば連絡が途絶えることなどあらかじめ分っていた。

だというのに、妙に引かかる。久弥の態度はもとより、相手の出方も奇妙ではないか。魔術師ならばそれなりの探査魔術を使用してくるはずなのに、初手が行儀よく玄関からお宅訪問。そのあとダーシェンカ達は難なくファミレスに隠れ潜み、次の一手を案じていた。

ここまでがイズミの知る範囲。

そこからが問題だ。ケータイに示されたダーシェンカの移動経路及び移動時間からして、ファミレスもしくはその近辺で異常事態が発生している。でなければファミレスから現在地への移動時間の異常な短さが説明できない。

もつとも、そのウラならば先ほど件のファミレスを訪れた際にとっている。

店員曰く、店の外で外国人のやけに綺麗な女の子が、同じく外国人の男を殴り飛ばすいざこざがあり、その場から女の子二人が走り去った、とのことだ。

十中八九その女の子二人はダーシェンカと来栖とみて間違いないだろう。時間帶的にも符合している。ならばその次は？

おそらく魔術師と出くわした二人はそこから逃げたのだろう。いや、逃げたというのは正しくないかもしれない。迎え撃つために現在地へ誘い込んだ、というのが正しいのだろう。何せ今ダーシェンカ達が居るであろう場所は人気のない廃工場なのだから。

ならば今、そこで戦いが繰り広げられているはず。終わっていれば連絡が入っているはずで、最悪の形で終結していれば――

いや、それはいま考慮に入れる必要はない。

考えるべきは、今なおそこで戦闘が続けられている可能性と“なぜそこで”続いているのかということ。

元々の作戦ならば、逃げながら情報を拾い、迎え撃つ準備が確実

に整ったら腰を据える予定だったハズだ。それが、一カ所で長期戦が繰り広げられているとするならば、考えられることは大別して二つ。

長期戦でしか勝ちえないか、逃走できない状況で、やむなく長期戦に持ち込んでいるか。無論、最悪の三通り目は考えない。少なくとも今は考慮に入れる価値すらない。否、これからも考慮に入れる価値はない。

イズミに出来ることはただ、二人の無事を祈り、一刻も早く二人のもとへとたどり着くことだった。距離はもうそう遠くない。

そんなことを考えてるうちに、廃工場の陰鬱なシルエットがイズミの瞳に映り込んできた。

廃工場に近づくにつれ徐々に範囲を狭めていたエーテルの索敵範囲をさらに狭め、相手に気付かれぬように廃工場に足を踏み入れる。

エーテルによる索敵に頼れない今、イズミは耳と目を凝らす。周囲の些細な変化すら逃すまいと感覚を研ぎ澄ます。時折、腹部の鈍痛がノイズのように感覚を乱しはしたが、慣れてしまえばそんなノイズなど気にならなくなった。

それにしても、おかしい。

イズミはゆっくりと歩を進めながら思う。ケータイが示す現在地は間違いなくここ。だというのに、周囲からは物音一つ聞こえてこない。

(ケータイをここに落した……?)

イズミは考えられる選択肢のうち最も可能性の高いものを思い浮かべる。

しかし所詮はケータイにおまけ程度についたGPS機能。大まかな現在地は表示できても、細かな位置は表示できない。もう少し高性能だったならば、拡大されたより正確な位置を示し、イズミの杞憂を迅速に払拭してくれるのだろうか……。

いや、その必要はもはやなかった。廃工場の角から潜むように覗きこんだそこには、イズミのよく知る少女達の姿があったのだから。

黒いコートに身を包んだ男が、ダーシエンカと来栖と相對している。イズミの見間違いでなければ、ダーシエンカ達が居る空間が奇妙に歪み、また男の周辺には複数色のエーテルがかなりの高濃度で展開されている。

客観的に状況を断じるなら、明らかにダーシエンカ達の不利だった。男の得体の知れない攻撃を、ダーシエンカがなんとか防いでいる、というような状態。肉と肉がぶつかり合う打撃戦だというのに、やはり物音一つイズミの耳には届いてこない。

やはり得体が知れない。奇妙というほかに言葉が浮かばない。あのダーシエンカをして男の攻撃一辺倒の打撃戦が繰り広げられ、かつ頼りの来栖は苦痛に顔を歪めながらも必死に情報を拾おうとしている様子だった。

明らかに、加勢したほうがいい気色。

だがイズミはすんでの所で踏みとどまる。

まだまだ、まだ尚早。いや、あるいは手遅れなのかもしれない。それでもまだはやる足を進めるわけにはいかなかった。状況を満足に把握せずに飛び込むなど愚の骨頂。下手を打てば加勢しないより酷くなる可能性だってある。

視ろ。まずは目の前の状況をじっくりと。残酷なまでに。

イズミはエーテルの可視領域を限界まで引き上げ、目を凝らす。瞬間、頭に電流が奔ったような衝撃がイズミを襲った。あまりの衝撃にイズミはのけぞり、エーテルを視るどころか視界が数瞬ブラックアウトする。

(な、んだ、これ……)

イズミはかろうじて意識を繋ぎ止め、こめかみに手を押しあてた。先ほどの衝撃が嘘のように、今はなんの痛みもなかった。イズミは気を取り直し、もう一度可視領域を引き上げる。今度は一気に限界までではなく、徐々に、ラジオのチャンネルをチューニングするよな慎重さで。

それでもすぐに異変に気づくことになる。可視領域を少し上げた

ただだというのに、頭にジジッ、ジジッ、と電撃殺虫器に虫が飛び込んだときのようなノイズが頭に響き渡る。

それでもあと少し、と可視領域を引き上げてみれば、今度は砂嵐の中に飛び込んだかのようなノイズが頭の中に響き渡った。とてもじゃないが、正気を保てるレベルではない。

イズミは堪らず可視領域を引き下げる。が、収穫はあった。男の発動している術式の尻尾は掴んだ。

やることは頭の中で決まった。むしろ、それは自分にしか出来ないこと。出来る出来ない以前に、自分以外はまずやる者が居ないだろう。

ネクロマンサーである、自分以外には。

イズミは小さく息を吐き、体に力を込めた。腹がジュクと痛んだが、関係ない。今はそんなことよりも、気にしなければならぬことがある。

イズミは額に浮かび出した汗を拭い、男の攻撃を防いでいるダーシエンカを暫時見つめた。

——ダーシエンカ。

愛おしげに、大切そうに、イズミは少女の名を呟いた。

大丈夫。彼女なら信じられる。自分がやることに、瞬時に反応してくれる。

だから……！

イズミは身の回りに燦らせていたエーテルを一気に拡散させた。

否、エーテルの密度を増し“拡大”させたのだ。

当然その状況変化に男が反応しない訳もなく、男はイズミの気配を狂犬染みた感覚で嗅ぎつけ、思考するよりも早くイズミに飛びかかってくる。

エーテルの可視領域を下げたイズミにとっては、目視することすら敵わぬ速度。

だが、いや、やはり、男の拳がイズミに届くその寸前に、イズミと男の間にダーシエンカが割って入っていた。

「イズミ……!」

ダーシエンカは男の拳を両腕で受けきり、若干の驚きを含んだ視線をイズミに向けた。

「や、やあ」

イズミは場違いにも気弱な笑みを浮かべ、片手を上げる。同時に、周囲に拡大させたエーテルを引っ込める。なりを潜めていたときよりもさらにエーテルを弱々しい有様に切り替える。

いまは、いまはまだこれだけでいい。予感が確信に変わったときに行動を起こせば、それでいい。

「ん？　なんだ、お前」

ダーシエンカに攻撃を防がれた男は飛び退り、怪訝極まりない表情をイズミに向ける。

「とんでもないエーテル量からしてオレの封印術式を解いたヤツかと思ったが……違うな、雰囲気がヤワすぎる」

男はイズミを舐めまわすように見つめ、顎をさする。

「ああ、やっぱりあなたが久弥さんを封じた人だったんですね」

イズミは呑気な口調で言い、ダーシエンカ同様驚いた表情を浮かべている来栖のもとに歩み寄る。

男はそれを妨げるでもなく、興が冷めたような視線をイズミに向けるだけだった。

「先輩、助けに来ました。もう安心です。でも、あと少しだけ頑張ってください」

イズミは苦しそうに喘ぐ来栖に微笑を向ける。

おそらく来栖はずっと立ち続けていたのだろう。あの気が狂いかねない砂嵐の中に。無数に飛び交うエーテルの、思考の渦の中に。

なまじ目が――脳が――いいばかりに人が拾えない情報すら脳内に細々と取りこんでしまう。処理しようと試みてしまう。人が面としてしか捉えられないソレを、点で捉えてしまう。

だから思考がオーバーロードを起こす。いや、あの情報量から察するにメルトダウンすら起こしかねなかっただろう。つまり、いつ

廃人になってもおかしくない状態。

それでも来栖は情報を処理し続けた。いつでもシャットダウンできるというのに、愚直に処理し続けた。

それもすべて自分の望む未来のため、犯してしまった罪のために。イズミは来栖にされたことなど、もはや気にしてはいなかったが、本来罪とは周囲が与えるものではなく、自分から生み出されるものなのだろう。罰とは異なり。

イズミは来栖のそんな清廉さを思いながら言葉を紡ぐ。

「少し異能を閉じてください。僕が状況をゼロに戻しますから」  
そっと、来栖の両肩に手を添えた。

「で、でも……」

「大丈夫、僕を、いいえ、ダーシエンカを信じてください」  
不安げな視線を寄せる来栖に、イズミは優しく告げる。

正気を保つことすらやっとの砂嵐の中でさえ、来栖はダーシエンカをサポートしていたのだろう。

先ほどイズミがエーテルを拡大したとき、微かに聞こえたのだ。来栖が絞り出すように「四時、十六歩、防御」と言っていたのが。そのときはなんのことか分らなかったが、あれはおそらくダーシエンカにイズミを守るように告げた指示。ほかにも、必要があればダーシエンカに指示を出していたのだろう。

男が撒き散らしている情報量の衝撃を知っているだけに、イズミは来栖に脱帽せざるを得ない。

だからこそ、もう一度強く言った。

「大丈夫です」

イズミの言葉に来栖はおずおずと頷き、ゆっくりと目を閉じる。しばしののち、来栖はもう一度目を開ける。今度こそ異能を解いたようだった。来栖の表情に浮かんでいた険がいくらか和らいでいる。

イズミは少しではあるが安堵し、小さく息を吐く。  
どうせすぐに能力を発動させてもらう羽目になるのだろうか、少



なくとも今は休んでもらおう。自分がこれからすることが来栖の異能にどう映るのかは分らないが、疲弊した来栖にはいささか辛い景色になるかも知れないのだから。

イズミは、こちらの様子を邪魔するでもなく傍観している男に炯眼を向けた。

おそらく、男の中ではもう勝ち揺らいでいないのだろう。どんな者が出てこようが勝ちうる布陣を敷いた。だからイズミというイレギュラーが出てきても、特に何かを仕掛けようとはしないのだ。

それだけの、圧倒的技量。力に裏打ちされた比類なき自信。

そして自信から生じる――傲慢。

そこを、突く。

「もう気付いているでしょうけど、あの男の展開させている術式はジャミング。多数のエーテルを混在させてまともに情報を拾わせてくれない。そして、その隠れ蓑を利用した複数種術式の超高速展開。私でもまともに攻撃予測できなかったわ。攻撃を受けるのがダーシエンカでなかったらとつくに死んでいる」

来栖は目頭を揉みながら、イズミに現状を伝えた。来栖はそのほかにこれまでの展開をかいつまんで的確に説明する。

なるほど、おおよその状況は分った。思ったよりも状況は悪くない。何せ相手はダーシエンカにまともにダメージを与えられていないらしい。

たしかにそれは来栖の援護に寄るところも大きいのだろうが、リビングデッドの並はずれた防御力が功を奏しているのがより大きいだろう。

ならば、勝機は十二分にある。あると信じなければ先には進めない。

「分かりました。僕もやれるだけやってみます。ここからは少し僕達”の戦いを見ていてください」

イズミは言い、視線を男からダーシエンカに移す。

「ダーシエンカ、行こう。僕たちの戦い方で」

イズミは言い、深く息を吐きだす。

ダーシェンカは黙って頷き、イズミの前に控えた。

命を掛けた戦いは初めてではない。だが、たった一度しか経験していないのもまた事実。魔術師の戦いにルールはない。制限時間もない。反則行為も基本的には事後審判。

だからこそ、持つべきは生への欲求。自分の判断に対する客観的自信。共に戦う者への信頼。

そして何より、迷わぬこと。

イズミがヴェルナールとの戦いで学んだことは、そこに集約されていた。迷うのは戦う前と後だけでいい。少なくとも戦いの最中に迷うなど、もっとも犯してはならぬ愚。

だからイズミは男と戦うその前に、迷わぬ覚悟を、決めた。

「……いくよ」

イズミは静かに告げる。何をする、などということを告げる必要はない。いや、告げてはいる。僕たちの戦い方、という言葉で。

もとよりイズミとダーシェンカには、いざというときには言葉など必要なかった。

想像するは道。道というには余りに細く、か弱いエーテルの道。

しかしそれは確かにある。

イズミとダーシェンカの間に、繋がりとして、絆として。

イズミとダーシェンカは瞬時にそれを知覚し、互いをより強く結ぶ。五感、さらには思考さえも共有する。

次の瞬間、二人の前に拓けた世界は先ほどよりもさらに広がった。それはそうだろう。一人ではなく、二人で見る世界なのだから。

最初に動いたのはダーシェンカだった。地面を蹴り、男に飛びかかる。同時にイズミとダーシェンカの視界は主観と客観を得る。

もとより来栖のような能力者を味方に戦える機会のほうが希有なのだ。ならばいないならいなくて、そこは視界の広さで補うしかない。

「おや、相談事は終わったのかい？」

男はダーシエンカの繰り出した拳を軽いバックステップでかわしながら笑う。

そんな戯言にダーシエンカが付き合うはずもなく、さしたる反応も示さず、無機質に攻撃を繰り出し続けた。

ダーシエンカと男の攻防を眺めながら、イズミは次の一手を思案する。男の形成しているジャミングはさしたる問題ではない。解決のメドは立っている。

問題はいつその解決策を打ち出すか、だ。ジャミングを解かないことには来栖の異能が満足に機能しないとなれば、最適なタイミングはイズミが割り出すほかない。ほかないのだが、いかんせん情報が足りない。

これまでの流れや、相手が繰り出した攻撃、現状を見る限り、男は状況を読む能力においてはそれほど秀でていないようだ。

来栖の異能についてはともかく、イズミやダーシエンカが何者か掴めていない時点でそれは明らか。いや、掴もうとすらしていないと見るのが正しいのかもしれない。

何者であろうが、負ける気がないという男の傲慢。事実それは正しいのだろう。並の魔術師なら太刀打ち出来ぬ技量を男は有している。

だが結局は規格内。力任せに押し切れば、イズミならば容易に勝ち切れる相手。何せ馬力の規格どころか、次元が違う。

有限と無限、その差は圧倒的。

だが同時に、その圧倒的な差は技量という場では裏返る。魔術師としての技量は、相手のほうが格段に上。いま一番の問題はそこだった。

永久機関の解放というジョーカーに、男がなすすべなく敗れてくれるならそれでいい。だが、もしそのときに封殺の手を講じられてしまったら？

いま大事なのは勝ち急ぐことよりも、男の引き出しを開けきることであった。

乱暴に、強奪者のような容赦のない手段で。

そっと、イズミはジーンズのポケットに手を伸ばす。指先に、人肌で微かに暖められた硬いモノが触れる。

(……モノは試し、か)

イズミはポケットの中から三つのビーダマ大の球体を取り出した。月明かりを映して冷やりと光るソレは、その道のプロによって磨きあげられ、鍛えあげられた水晶玉だった。

それは、イズミが扱える数少ない魔術らしい魔術の媒体。

夏の騒動ののちに“本当の”誕生日プレゼントとして両親から渡されたその水晶玉は、一般人が見ればそらのガラス玉と見分けがつかないが、見る者が見ればすぐにかんりの逸品と気付く代物だった。

事実、エーテルの伝導率はヴェルナルが使っていた水晶の五倍近いし、強度においても魔術による強化で、本来水晶としてはあり得ないダイヤモンドレベルと来ている。もっともその類まれな強度を説明するために幸也が使ったのは「ゾウが踏んでも壊れない」というありきたりな文句だった。

さらに付け加えるなら、この水晶玉は三つでウン百万という、一介の高校生には何ともお手軽親切な値段設定だった。

ともかく、イズミはその水晶にエーテルを込める。この術式——術式というにはやや脆弱なのだが——でもっとも警戒すべきは敵によるエーテルの上書きなのだが、ことこの水晶に関してはその心配はない。

何せ、膨大なエーテルを込めなければ力のベクトルを与えることすら困難な特別製、まさに永久機関を持つネクロマンサー専用の魔術媒体なのだから。

イズミは水晶に描くべき軌道をプログラミングする。描くべき軌道は、ただの円。ひたすらに男とダーシエンカの周りをグルグルと周回する。惑星のように。

もとよりイズミは男に攻撃を仕掛けるつもりなど、毛ほどもなか

った。仕掛けようにも霊視を駆使できない今のイズミには男の動きなどまるで捉えられない。ダーシエンカと男の戦いなど、ボクシングの乱打戦を倍速にして見せられているようなもの。

そんな状況で攻撃を仕掛ければ、良くて男に当たり、悪ければダーシエンカに当たるだろう。一番高い可能性はどちらにも当たらない、なのだろうが。

だからイズミはさして気負うことなく水晶玉を放り投げる。宙に舞い上がった水晶玉はすぐさまプログラム通りに、ダーシエンカと男の周りで回転し始める。

「んあ？　なんだ、コレ」

男は自分の周りに現れた物体に、怪訝な視線を向ける。実際男にとっては小うるさいハエが飛び回っているのと同じような感覚なのだろう。

案の定、さしたる警戒心も見せることはない。高慢に限りなく等しい余裕、その根幹をなすものこそがイズミのもっとも欲しい情報だった。

「さあ、なんででしょう……？」

イズミは軽く肩をすくめ笑う。

魔術とは、エーテル・媒体・術者のイメージによって成り立っている。とくに最後のイメージは重要で、高度な術式を扱おうとすればするほどイメージの精度は高いものが要求される。だからその簡略化のために魔術師は思考の外でイメージ補強を行う。呪文と解される言語や、魔法陣と解される図を用いて。

イズミが仕掛けたのはまさにソレ。一見無意味に回る水晶玉も、イメージの補強のために行われているとすれば？　円という魔法陣・回転数・三という水晶玉の個数、その全てに意味があるとすれば？　無論、そんな魔術はイズミに扱えるわけもなく、全てブラフなのだが。

男はそこにどう出てくるのか。それが何よりも重要だった。

答えは単純な、至極単純な行動だった。

「ッ！ うるせえな！」

男は舌打ちをしながら次元置換を発動し、無動作で拳銃を手に握る。握ると同時に高速回転する水晶玉にもの見事に着弾させた。ほぼ一挙動で。男の射撃の腕前が人間離れしている証明であった。無論それで碎けるヤワな水晶であるはずがなく、水晶は男を嘲笑うかのように回転を続けた。

男は再び舌打ちをし、飛び退って輪の中から抜け出んと試みる。が、結局はイズミがベクトルを巧妙に上書きし、水晶は男にまともな続けた。

ダーシエンカは男を追わない。距離をとり、あたかも今から何かが発動すると思わせるように、イズミの横に舞い戻る。

余裕に満ちていた男の表情が徐々に怒りと焦りを帯びたものになり、それは咆哮として発散された。

獣のような男の咆哮が、辺りに響き渡る。いや、廃工場の外には響いてはいないだろう。男は周囲に音が漏れないように次元をズラしているのだから。

（情報は……拾えるだけ、拾った）

イズミは男の咆哮に怯むことなく、淡々と思考を積み上げ、その思考はやがて頂上に達した。

次元をズラしたり、人を封じたりするという繊細な術式が、男のイメージを覆い隠していた。

あたかも巧妙にいくつもの罠を重ね、こちらを絡め捕るような性格、いや、戦術だと考えていた。だが蓋を開けてみればどうだ。

入りは繊細だが、中身はパワープレイと呼ぶことすら憚られるラフプレイの連続。普通の魔術師なら対応できない術式を防がれてしまえば何もない。せいぜい虎の子のジャミングがある程度。

薄い。なんと薄いことか。粗野で傲慢。それがこの男の全て。

それが本当に男の全てならば、という前置きはつくものの、イズミには男がこれから取るであろう行動が見えていた。異能などなくとも。そしてそれが引鉄。状況はゼロに戻り、戦いはおそらく最終

局面を迎える。

男はまだ何か隠しているかもしれないし、もう何もないかもしれない。どちらにせよ、その何かを探す手段は今のイズミ達にはなかった。次に進む、それ以外に選択肢はない。

「死ねよっ！ クソガキ！」

案の定、男はイズミが思い描いた通りの行動を取って来た。

媒体が潰せないなら術者を。至極単純な動機をもとに一直線にイズミのもとへ向かってくる。拳銃を乱射しながら。

同時にイズミは永久機関を完全に解放する。

想像するは巨大な門。イズミはその門の前に立つ。煉獄を思わせる神々しくも禍々しい彫刻の施されたその門に、そっと触れる。

門はその巨大さを感じさせないほど静かに、迅速に開かれる。

門戸から現れるのは無数の亡者、ではなく純粋なチカラ。およそ人間には扱うことのできない、巨大な奔流。

イズミはそれを制することもなく、無遠慮にぶつけた。ぶつけるべき存在に、そうすべくして。

イズミが数瞬イメージに気を取られていたのちに、状況のほとんどは終了していた。

放たれた弾丸をダーシエンカがその身で防ぎ、男の突進も難なく食い止める。そして、場を覆っていたエーテルのジャミングも、すっかり消え失せていた。おまけに、次元の歪みすらも。

全て、イズミの放ったエーテルが洗い流していた。  
華奢なイズミの体に似合わぬ豪快な手段、イズミの最大最強の武器、エーテルの上書き。

「んだよ、コレ……」

ダーシエンカの掌に収められていた男の拳が力を失う。拳だけではない。その表情も、だらしなく弛緩していた。

「おまえ、まさか……」

男の視線がダーシエンカ越しにイズミに向けられる。サン格拉斯越しでは分らなかったが、声音から察するに今にも泣き出しそうな瞳なのだろう。

「ご想像の通り、僕はネクロマンサーです」

イズミは浮かべていた水晶玉を掌に戻しながら告げた。

「じゃ、じゃあこのモンスターガールはリビングデッドだったのか！？　なんで、なんでだよ！　どうして覚醒済みのネクロマンサーがリビングデッドなんかと一緒に居るんだよ！　どうしてこんなところ！」

男は後退りながら喚く。

イズミはなおも容赦しなかった。

「ダーシエンカ、僕の後方」

たったそれだけを不意に呟く。

瞬間、廃倉庫にこれまでは響かなかった銃声が響き渡る。

だが――。

「んで、なんでだよ、どうして今のが読めるんだよ！　来栖の異能は封じてたじゃねえか！　実はここまで読んでたってのか！？　これさえも！」

銃声ののちに響いたのは、イズミの後方に瞬間移動していた男の情けない叫び。

視線の先には男が放った弾丸を握りしめたダーシエンカと、ゆっくりと振り向くイズミ。

「聞いてなかったんですか？　指示を出したのは僕、ですよ」

迷わぬこと。イズミは自分に言い聞かせながら冷静に男を追い詰めていく。油断は許されない。完全に、反撃の芽を摘むまで。たとえそれが、男の命を奪うということと同義であろうと。

「来栖先輩、一応異能でサポートお願いします」

「え、あ、はい」

状況の掴みきれない来栖がおずおずと頷き、異能を展開させる。来栖の表情が、呆然としたものに切り替わる。それはそうだろう。



あれほど騒がしかった男のエーテルが消え去り、代わりに周囲には高濃度な淡い青色のエーテルが展開されていたのだから。

だが不思議と、邪魔ではなかった。むしろ通常以上に情報を細かく伝えてきてくれた。少し遅れて――異能を展開させているというのに――ソレが眼の前の少年のエーテルであるということに気付く。

「……綺麗」

我知らず、来栖の口からはそんな言葉が漏れ響いていた。

イズミはその言葉に照れ臭そうに笑い、男に視線を向ける。

「あなたの思考は単純です。何かあれば不意打ち。来栖先輩でなくとも読めますよ、エーテルの可視領域がそれなりに高ければ。あなたは後退りながらも次元置換の術式を起動させていた。となれば考えられるのは僕から来栖先輩への強襲。まあ、空間の歪んだ先が僕の背後でしたから絞り込むのは容易でした。ダミーを用意していれば分らなかったかもしれませんがね」

イズミはそこでいったん言葉を区切る。

「でもまあ、もう無駄なこと。来栖先輩が異能を発動しましたし、何より、本当なら僕がエーテルを上書きするだけでも事足りそうですから」

イズミは残酷に言い切った。

同時に言外に告げている。次元置換を駆使して逃げようとしても無駄だ、と。

「……クッ！　ならとつとと殺せよ！」

男は忌々しげに歯噛みし、皮肉るように両手を上げた。

「……殺しません」

イズミは能面のような表情で告げる。

その言葉にダーシエンカは弾かれたようにイズミを見つめ、異能でイズミの真意を見抜いた来栖は黙してイズミを見つめていた。

男もその言葉には耳を疑ったようだった。ポカンと口を開け、イズミを見つめている。

「あなたのあのジャミング、ザッと百人分くらいのエーテルでしたよね？ それを周囲に同時展開していた。つまりそれぐらいあなたの魔術の犠牲者はいるんですね？ 久弥さんのような」

「あ？ ああ……でもそんなオレを殺せば解放、」

「あなたが自分でその人たちを解放してください。そうすれば僕はあなたを見逃します。もちろん二度と満足な魔術が扱えないほどにエーテルを削らせてもらいますが」

イズミは少しだけ言葉を詰まらせながら言った。

分っている。自分の考えが間違っていることを。こんな男を見逃してはいけなないと。そして何より――それは自身への免罪符に過ぎないと。

「ハッ！ 笑っちゃうな！ そんな条件オレが呑むとも思ったのか？ オレはただ生きていたいんじゃない！ 魔術師として高みに登りたいんだ！ どんな手を使ってでもな！ 最初に感じたヤワな雰囲気は間違ってたかったわけだ！ あんだけ化け物染みた力見せつけといて」

男はイズミの襟首を掴みあげた。

ダーシエンカが止めに入ろうとしたが、イズミが手で制す。

「侮辱するのも大概にしろよ、クソガキ」

男は限界までイズミに顔を近づけ、告げる。濃い色のサングラスから微かに、怒りと悲哀の籠った男の瞳が覗いていた。

「きつとそう言う、思っていました」

イズミは男の腕を引き剥がし、襟元を正す。

「それでも……残念です」

イズミは無表情に告げる。

その言葉は命を奪われる男に向けたものなのか、それとも命を奪う自分に向けたものなのか。イズミ本人にも分かりはしなかった。

意識を集中し、男のエーテルを掻き消そうと力を傾ける。

「まあ、待て」

その声は不意に、身近で上がった。

男のものでなく、来栖やダーシエンカ、ましてやイズミのものは当然ない、凜とした少女の声。

いつの間にか場の中央、というよりは中心に、喪服を思わせるような黒いシックなワンピースに身を包んだ、クレア・アクロマ・ブリンズフィールドが立っていた。

イズミや来栖をしても、クレアがいつ現れたのかは判別がつかなかった。本当にいつの間にかそこに居た。今にしても耳と目というモノを使わなければ、その存在が捉えられない――むしろそれこそが、人として正常なものの捉え方ではあるが。

驚く周囲をよそに、おもしろい玩具を見つめるような視線で、クレアは周囲の人間を順々に眺めていく。

「まあ、合格だ。イズミ、ダーシエンカ」

クレアは嗜虐的な笑みでイズミとダーシエンカをじつくりと眺めたのちに告げる。

イズミとダーシエンカは突然の言葉に戸惑いながらも、やや間をおいて意味を理解し、胸をなでおろした。とうに合格の判を貰っていた来栖も、クレアの言葉に同じような態度を見せている。

そして、本当の問題は。

「さて、お前についてだが――」

クレアは一切感情の籠らない瞳と表情を男に向ける。

それを受ける男は、ハナからクレアという存在には敵わないと悟ったのか、呆然とした表情を浮かべているだけだった。

「お迎えが来てるぞ？ リイガ・ハインリヒ」

「は？」

「お前の所属する機関がお前の身柄を拘束したいそうだぞ？ よかつたな、魔術師のまま永らえられて」

クレアはニンマリと笑いながら、リイガ・ハインリヒという名であるらしい男に顔を近づける。

リイガが助かるという内容とは裏腹に、クレアのその笑顔はイズミ達が見てきた中で、一番恐ろしい笑顔だった。

リイガの場合はその言葉が恐ろしかったようで、顔から色という色が消え失せていた。顔面蒼白とはまさにこのことを言うのだろうという、そんな有様。

「おいイズミ、エーテルの散布を解け。あちらさんはそのせいでここに来れないんだ。もしもの場合を警戒してな」

「え？ あ、は、はい」

イズミは言われるがままにエーテルの散布を解く。

と同時に、目の前に修道服に身を包んだ三人の女性が現れる。リイガの空間置換の術式を知っているからか、イズミ達はもはや驚きはしなかった。

現れた女性たちの服装から判断するにシスター、なのだろうが、その表情には慈愛やそれに類するものは見受けられなかった。あるのはコキュートスのように寒々しい蒼眼と、騎士のように凜とした顔立ちだった。

イズミの気のせいではなければ、全員同じ顔のように見受けられた。「クレア様、並びに如月イズミ様。このたびはまことにご迷惑をおかけしました。この非礼はどうあっても償わせていただく所存です」女性の一人がいい、三人同時に深々と頭を下げる。

「あー、いいよ、そういうの。こっちも仕事でやっただけだし、そっちも人間だ。ミスくらいあるさ」

呆然とするイズミをよそに、クレアはうるさそうにシッシと手を払う。

「そう言っていたけると助かります。それではこの男はこちらで責任をもって“処分”させていただきます」

女性達は軽く一礼すると、リイガに向き直る。

「あ、あの！ 処分って……？」

「お言葉ですが如月様。世の中には知らないほうがいいことも多く存在します。あなたはお優しい方とお見受けするので、なおのこと」女性の一人が振り返り、無表情に言う。

今度こそイズミは言葉を失った。

女性たちはそんなイズミに構うことなく、血の氣と生氣を失い呆然としているリイガに対して、三人同時に何かを唱える。

綺麗な、とても綺麗な、どこか牧歌的な響きをもった言葉だった。そんなのどかな響きとは裏腹に、リイガの体は唐突にビクリと痙攣し、それきり動かなくなる。

死んだ、のだろうか……。

イズミはそんなことを考えながらことの成行きを眺めていた。もとよりこういう世界なのだ、魔術の世界とは。人の生き死にがこちらの価値観とはまるで違う。自分だって先ほどまではリイガの命を奪おうとしていた。リイガの死を嘆く資格など、ない。

それでも、どこか釈然としないものが胸の内にはあった。

そんなイズミの思いを読み取ったのであろうか。

女性の一人が言う。

「ご安心を。死んではおりません、氣を失っているだけです」

「あ、なんだ、そうなんですか」

胸をなでおろしかけたイズミに、女性は続けた。

「ただ覚えておいてください。世の中には死よりも辛いことがあまたあるということを。いいえ、死はどちらかといえば安らかなものであるということを。あなたはそれについて、もう少し考える必要があると思います。恐れながら忠告させていただきますと」

女性は言い切るとイズミなど最初からいなかったかのような表情でクレアに向き直る。

「それでは私たちはこれで失礼させていただきます。この非礼はいずれ必ず償いますので」

慇懃に告げる女性に、クレアは先ほどと同じように苦笑いながら手を払った。

そんなクレアの態度に表情を変えることもなく女性は深々と一礼し、消えた。

リイガともども、始めからそこに存在しなかったかのように。

呆然とするイズミとダーシェンカ。異能で何かを読み取ってしま

ったのだろう、苦々しげな表情を浮かべている来栖。

クレアはそんな面々を見渡しながら告げる。

「さあ、これで本当に終わりだ。よかったな、お前達」

終わり。その言葉の意味を理解するのに、イズミとダーシエンカは若干の時間を要した。

異能を展開していた来栖でさえも、それを心に沁み渡らせるのには、時間が必要だった。

そして、誰がというワケでもなく三人の口から洩れたのは、歓喜の喜びでも、徒労の溜息でもなく。

『終わった……？』

という上ずった安堵の言葉だった。

＊ ＊ ＊

「終わった、みたいです」

非合法ホスピタルの屋上から廃工場を眺めていた久弥は、馬鹿みたいに巨大なエーテルの光が消えたことを確認し呟いた。

久弥の隣に佇んでいた雪も小さく息を漏らし、肩をなでおろす。

「ええ、そうみたい。どうやら今回は無事に乗り越えられたらしいわね、あの子たち」

「まあ、来栖家の能力とネクロマンサーの能力さえあれば並大抵の輩は敵じゃないんでしょうがね」

久弥は肩をすくめながら自嘲的な笑みを浮かべる。

「まあ、そうね。でも今回はダーシエンカちゃんがいなきゃ勝てなかったでしょうね……イズミも千澄ちゃんも人並の身体能力だし、最初のサイレントキルで死んでいたでしょう」

雪はまるでその現場を見ていたかのように語り、眉をひそめる。

魔の道の先に行く雪としては今回の戦い方は及第点とは言えなかったらしい。もっとも、魔術師とは異なったネクロマンサーという存在であるイズミに、スマートな戦い方を求めるのは酷なことだ。

その点に関して言えば、来栖のほうが能力の特性からしても遥かにスマートに戦いうるだろう。

だが、まあ。

「今回は大目に見てあげたらいいじゃないですか。クレアさんがせっかく合格にしてくれるっていうんですから」

「それは、そうなんだけど……」

久弥が人のいい笑みを浮かべるも、雪の顔はやはり優れなかった。「まあ、確かに今回の出来じゃあ一介の魔術師には勝っても“自分”には勝てないでしょうね……千澄も、そしてイズミくんも」

人のいい久弥の笑みが、弱々しい笑みに変わる。

そう、そうなのだ。類まれな異能を持つイズミと千澄の本来の敵は、他者ではなく己。第一に己の能力に溺れぬ精神、これに関しては二人ともなんの問題もないだろう。問題は第二の異能に押し潰されない、ということ。

強大な力は、容易く術者を押し潰す。永久機関然り、未来視然り、未来予測ですらそうだ。

イズミと千澄はそれを完璧に己のモノにしているとは、まだ到底言えない。イズミの能力は力任せに過ぎるし、千澄の未来視にいたってはその能力が自分の意志とは別に発動してしまうときている。

今回は運よく発動せずに済んだようだが、次は分らない。

「私たちがあの子たちにしてあげられることなんて、もうほとんどないのよね……本当に自分で何とかするしかない、そういう問題」

雪は愛息がいるであろう方向に視線をやりながら、もどかしそうに屋上の金網に指をからませた。

「でもない訳じゃありません。僕は一応千澄に能力の扱い方について指導するつもりです。前に所属していたトコに協力してもらって」

「あら、過保護な教育方針はやめるの？」

雪は不意に悪戯な視線を向ける。

久弥はその視線に少しだけどぎまぎしながら頭を掻いた。

「いや、まあ、もう過保護にはしてられないですし……一度やり方を思い出させてしまった以上ある程度は、ですね」

「その教育にイズミも混ぜてもらえたらいいのに」

雪は溜息を洩らしながら肩をすくめる。

「それは……無理でしょうね。うちの組織は弱小ですから滅多にイズミくんが出張するような仕事はありませんよ。そんなことしたらもう、原子力で湯呑み一杯のお湯を沸かすようなもんです」

久弥は申し訳なさそうに口を歪める。

「フフ、分ってるわよ。あの子にふさわしい場はそうそうないわ。もうきつと、リイガでは足りない。いいえ、ダーシエンカちゃんがいなければリイガ“程度”でまだ丁度いいのかもしれない。けどダーシエンカちゃん込みで考えるなら、もっと強い相手が必要」

雪は表情を陰しくしながら呟き、そして続ける。

——今のままじゃ確実に、イズミは壊れる。

雪のその言葉に久弥が目を見開いたのもつかの間。雪の表情はあつという間に元の柔和なモノに戻っていた。

「さ、それじゃあ私たちもイズミ達を迎えに行きましょうか。総帥たちだけで歩いていたら補導されちゃうわ。さすがに私も警察に息子を迎えに行きたくはないもの」

雪はくすぐったそうにほほ笑む。先ほどまで息子の生き死にについて語っていたとは到底思えないほど、柔らかな笑み。

久弥がなんと返そうか迷っているうちに、雪は踵を返していた。結局久弥は掛ける言葉を見つけれず、複雑な表情のまま雪に続いた。

そして本当に、波乱の夜が、終わった。



## エピローグ

耳をつんざくような歓声が、体育館中から湧き起こる。

歓声の向かう先は、一人の少女。亜麻色の髪を一つに結い上げ、しなやかな肢体を伸ばし、その頭よりいくらか大きいバスケットボールを、ゴールポスト目掛けて放っていた。

素人の女子にしてはかなり珍しいワンハンドシュート。それも、スリーポイントシュートだった。

少女――ダーシエンカ・オルリックの手から放たれたボールは吸い寄せられるようにゴールリングを通過した。ボールが網を通過するときにおこる小気味いい音が周囲に響く。

同時に、ただでさえ大きかった歓声が、さらに膨れ上がる。

イズミはその歓声に少し顔をしかめながら、得点板をめくる。これで得点板に示された数字は七十四対六十八。素人の、それもお遊戯に等しい高校の体育祭で、こんな熱戦が繰り広げられようと、誰が予想しただろうか。

いや、予想しうる者なら一人だけいた。コート上でダーシエンカと同等の存在感を放っている、腰まで伸びた黒髪を一つに結んだ少女――来栖千澄だ。

「派手にやってるな、あの二人」

不意にイズミの横から声上がる。

声の主はコートの外に居ながら二人の少女同様、あるいはそれ以上の存在感を放つ、緩やかにウェーブのかかった金色の髪を揺らす少女――クレア・プリンスフィールドだった。

学校では無駄に丁寧な口調のクレアも、この歓声の中では他人に聞かれる心配はないだろうと、平素の喋り方だった。

「やってますね、それはもう心配になるくらい」

イズミは苦笑いながら言う。

「まったく、もう少し加減というものを覚えろというのだ」

クレアはまんざらでもないような笑みを浮かべながらダーシェンカと来栖に視線を向けていた。

「あの二人、この決勝戦にたどり着くまでに優勝候補を二回破ってるんですよね……うちの女バスって県ベスト8なのに」

「それは……やりすぎだな」

クレアはげんなりとした表情をイズミに向ける。

確かに、とイズミはクレアに返し、再びコートに視線を戻す。

不思議な、とても不思議な感覚だった。つい二週間前にリィガを破り、今はこうして体育祭に興じている。

通り魔事件で開催が危ぶまれた体育祭も、通り魔事件が“ない”ことになったのだから当然このように開催されている。

捻じ曲げたのだ。イズミの隣で何気なく佇んでいる少女が。

なんでも人の意識に介入し、記憶の奥底に押し込めたということらしいが、警察機関やらマスコミやらもそんな催眠術的なもので騙しおおせられることは、イズミにとって少なからず驚くべきことだった。

いや、そうでもないか。世間ではいろんな事件が毎日起こっている。クレアが何かをしなくても、そう時間を経ずに忘れ去られる程度の事件だったのだろう。

イズミが垣間見た魔術の世界は驚くべきことだらけだが、日常も腰を据えてみてみれば本当に不思議なことだらけなのかもしれない。人が忘れていくという何気ない事象もその一つ。

「でも、驚きましたよ」

「ん？ 何がだ？ 今日の前で繰り広げられている光景以上にか？」

って、千澄のやつ今異能使ってダーシェンカからカットしたな」

「え、そうなんですか？ それは……って、僕が言いたいのはそれじゃなくて、クレアさんがこうして学校に残ってることですよ。僕はてっきり人の記憶操作した後に消えちゃうもんだと思ってましたから」

イズミが言うと、クレアはどこか恥ずかしそうに顔をうつむける。

「いや、まあ、そのつもりだったんだがな、雪がその……私の制服姿を可愛いというものだからな、もう少しいてもいいかなあ、と」

「クレアさんはホントに母さんが好きなんですね」

「いや、まあ、もちろんお前達のお目付け役も兼ねてるぞ？ お前達は本当に危険因子だからな」

「危険因子って……まあ、そうなんでしょうね。でもそれならそれで良かったですよ」

「良かった……？ 何がだ？」

微笑むイズミにクレアは怪訝な視線を向ける。

「だって会ってすぐサヨナラなんてさみしいじゃないですか。それに悪くないでしょ？ 日常だって」

イズミは屈託なく笑う。

クレアはその言葉と表情に、しばし呆然とした。重なったのだ、イズミが。遠い日に、クレアに同じ言葉を向けた少女――雪に。

親子だから顔つきが似ているのは当然。だが、その言葉は？ 漂う雰囲気は？

次々と大挙して押し寄せてくる、泣きたくなくなるような過去の記憶の数々を胸に押し込め、クレアは嗜虐的な笑みを浮かべた。

「ははあん？ さてはダーシエンカだけでは飽き足らず、私も手籠めにしようというのだな？ この人でなしめ」

クレアはそう言うとき唐突に、イズミの腕に体を絡ませてきた。

お世辞にも大きいとはいえない、ささやかなふくらみがイズミの腕に押しあてられる。

「なっ、何を……！」

しているんですか、と言おうとした瞬間。イズミは全身に悪寒が走るのを感じた。

これは……殺気。明らかに自分に向けられている、明確な、害意。あまりの激しさに、イズミは思わずエーテルを解放して周囲の様子を探りそうになった。

だがすんでの所で思いとどまる。殺気のもととは、エーテルで探る

までもない。二階のギャラリーから血走った目をイズミに向けている野郎どもだ。

「これが……狙いですか？」

イズミは深々と嘆息を漏らす。

「安いもんだろ？ 私の胸の感覚と引き換えにたったこれだけの殺意なら」

クレアは密着していた体を離し、屈託のない笑みを浮かべた。

「安くは、ないですよ……月のない夜が歩けなくなります」

「ははっ！ ならエーテルを展開させればいいじゃないか。丁度いい訓練だ。それじゃあな、如月“先輩”」

クレアはペコリと頭を下げ、離れてクレアの様子を窺っていたらしいクラスメイトの所に舞い戻っていく。

イズミは教室に帰ってからクラスメイト（主に男子）から受ける迫害を思い、ゲンナリと肩を落とした。

同時に、試合終了を告げるブザーが鳴り響く。

試合は、百二対九十八で、来栖が率いる二年生のチームの勝利だった。

辺りから惜しみのない拍手が送られ、選手たちはそれに軽く手を振って応じていた。

悔しそうな表情をしているダーシエンカと視線が重なり、イズミは「惜しかったね」と呟きながら手を振った。

が、ダーシエンカは唇を尖らせてそっぽを向いてしまう。

「あ、あれ……？ 僕なにか……あ」

イズミはすぐさまクレアが取った行動を思い返し、頬を掻いた。どうやら真っ先に気にしなければならぬことはクラスメイトの迫害よりも、ダーシエンカの誤解を解くことらしい。

だが、まあ。

「これはこれで素晴らしい日常かな」  
イズミは微笑みながら独りごちた。

このあとイズミが半日かけてダーシェンカの誤解を解いたのと、  
クラスメイト達から陶片追放オストラシズムを受けそうになったのは、また別の話  
である。

f i n

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9370/>

---

NecRomance 2

2010年10月8日12時24分発行